

茨城県教育財団文化財調査報告第162集

総合流通センター整備事業
地内埋蔵文化財調査報告書

仲丸遺跡 久保塚群 五万堀古道
向原遺跡・向原塚群 前原塚 仲丸塚
(下 卷)

平成 12 年 3 月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

2/10.23
To 61
2
(NK)

茨城県教育財団文化財調査報告第162集

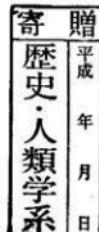
総合流通センター整備事業
地内埋蔵文化財調査報告書

なかまる 遺跡 久保塚群 ごまんぱり 道
仲丸遺跡 久保塚群 五万堀古道

むかいはら 遺跡・むかいはら 塚群 まえはら 塚 なかまる
向原遺跡・向原塚群 前原塚 仲丸塚

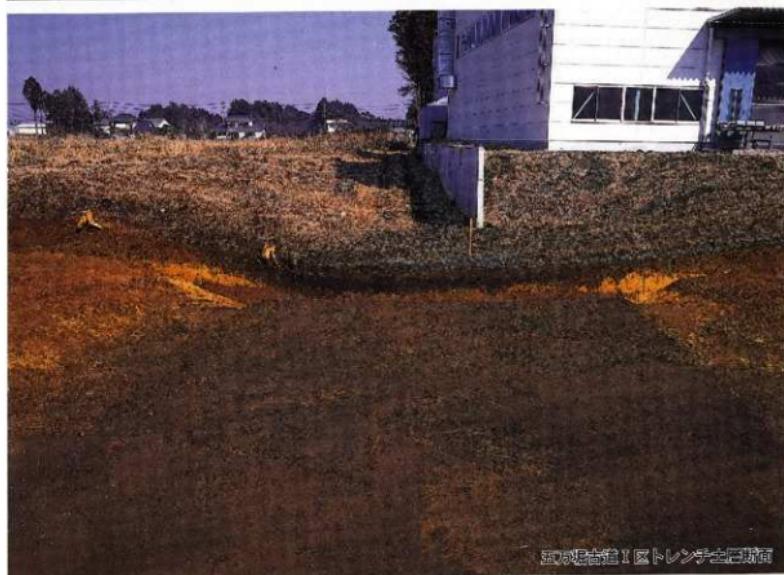
(下 卷)

平成 12 年 3 月



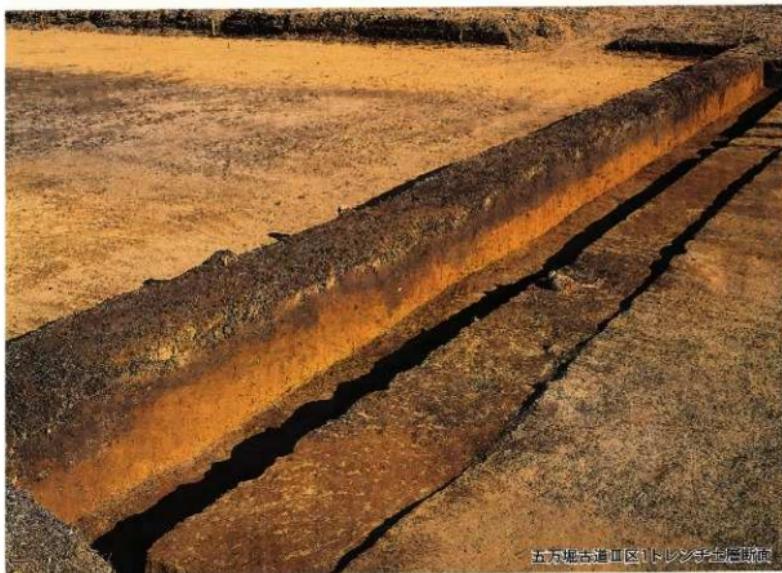
茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

00609337





五万堀古道Ⅱ区トレンチ土層断面



五万堀古道Ⅱ区トレンチ土層断面

目 次

- 下 卷 -

第5章 五万堀古道.....	229
第1節 遺跡の概要.....	229
第2節 基本層序の検討.....	229
第3節 造構と遺物.....	231
1 道路跡.....	231
2 土坑.....	258
3 井戸跡.....	259
4 清.....	260
5 造構外出土遺物.....	262
造構一覧表.....	267
第4節 まとめ.....	268
第6章 向原遺跡・向原塚群.....	273
第1節 遺跡の概要.....	273
第2節 基本層序の検討.....	273
第3節 造構と遺物.....	274
1 積穴住居跡.....	274
2 積穴状造構.....	301
3 塚.....	308
4 土坑.....	313
5 遺物包含層.....	342
6 造構外出土遺物.....	348
造構一覧表.....	354
第4節 まとめ.....	359
第7章 前原塚.....	361
第1節 遺跡の概要.....	361
第2節 造構と遺物.....	362
1 塚.....	362
2 土坑.....	365
3 造構外出土遺物.....	373
造構一覧表.....	374
第3節 まとめ.....	376
第8章 仲丸塚.....	377
第1節 遺跡の概要.....	377

第2節 遺構と遺物	378
1 壁穴住居跡	378
2 塚	380
3 土坑	384
4 道路跡	389
5 遺構外出土遺物	390
遺構一覧表	393
第3節まとめ	395
付 章 五万堀古道の土壤の自然科学分析	397
写真図版	

挿図目次

-下巻-

五万堀古道

第163図 調査区土層模式図	230
第164図 第1号道路跡側溝平面図	233
第165図 第1号道路跡I区実測図	236
第166図 第1号道路跡II区実測図	237
第167図 第1号道路跡III区実測図	238
第168図 第1号道路跡土層断面図	239
第169図 第1号道路跡I区土層断面図	242
第170図 第1号道路跡II区土層断面図	243
第171図 第1号道路跡III区土層断面図	244
第172図 第1号道路跡路面状況図	248
第173図 第1号道路跡波板状凹凸部土層断面図	249
第174図 第1号道路跡補修痕実測図	250
第175図 第1号道路跡遺物出土地点実測図	251
第176図 第1号道路跡出土遺物実測図(1)	253
第177図 第1号道路跡出土遺物実測図(2)	254
第178図 第2号道路跡・出土遺物実測図	257
第179図 第1号土坑実測図	258
第180図 第2号土坑実測図	258
第181図 第3号土坑実測図	259
第182図 第1号井戸跡実測図	260
第183図 第1～3号溝実測図	261
第184図 遺構外出土遺物実測図(1)	263
第185図 遺構外出土遺物実測図(2)	264
第186図 遺構外出土遺物実測図(3)	265

向原遺跡・向原塚群

第187図 基本土層図	273
第188図 第1号住居跡実測図	275
第189図 第1号住居跡出土遺物実測図	277
第190図 第2号住居跡実測図	278
第191図 第4号住居跡実測図	280
第192図 第5号住居跡実測図	281
第193図 第5号住居跡出土遺物実測図	282
第194図 第8号住居跡実測図	283
第195図 第8号住居跡出土遺物実測図	284
第196図 第9号住居跡実測図	284
第197図 第9号住居跡出土遺物実測図	285
第198図 第10号住居跡実測図	285
第199図 第10号住居跡出土遺物実測図	286
第200図 第11号住居跡実測図	287
第201図 第11号住居跡出土遺物実測図	288
第202図 第12号住居跡実測図	289
第203図 第12号住居跡出土遺物実測図	289
第204図 第15号住居跡実測図	290
第205図 第15号住居跡出土遺物実測図	290
第206図 第16号住居跡実測図	291
第207図 第16号住居跡出土遺物実測図	291
第208図 第17号住居跡実測図	292
第209図 第17号住居跡出土遺物実測図	293
第210図 第18号住居跡・出土遺物実測図	294
第211図 第19号住居跡実測図	294
第212図 第19号住居跡出土遺物実測図	295
第213図 第20号住居跡実測図	296
第214図 第21号住居跡実測図	297
第215図 第21号住居跡出土遺物実測図	298
第216図 第22号住居跡実測図	299
第217図 第22号住居跡出土遺物実測図	300
第218図 第1号堅穴状遺構実測図	301
第219図 第2号堅穴状遺構実測図	302
第220図 第2号堅穴状遺構出土遺物実測図	302
第221図 第3号堅穴状遺構実測図	303
第222図 第4号堅穴状遺構実測図	303
第223図 第4号堅穴状遺構出土遺物実測図	304
第224図 第5号堅穴状遺構実測図	304

第225図	第5号堅穴状遺構出土遺物実測図	304
第226図	第6号堅穴状遺構実測図	305
第227図	第6号堅穴状遺構出土遺物実測図	305
第228図	第7号堅穴状遺構実測図	306
第229図	第8号堅穴状遺構実測図	307
第230図	第1・2号地形測量図	309
第231図	第1号塚埋納坑、第1・2号塚 土層断面図	310
第232図	第1号塚出土遺物実測図(1)	311
第233図	第1号塚出土遺物実測図(2)	312
第234図	第6号土坑実測図	313
第235図	第6号土坑出土遺物実測図	314
第236図	第19号土坑実測図	314
第237図	第19号土坑出土遺物実測図	315
第238図	第58号土坑実測図	315
第239図	第58号土坑出土遺物実測図	315
第240図	第90号土坑実測図	316
第241図	第136号土坑実測図	317
第242図	第136号土坑出土遺物実測図	317
第243図	第137号土坑実測図	318
第244図	第137号土坑出土遺物実測図	318
第245図	第141号土坑実測図	318
第246図	第141号土坑出土遺物実測図	318
第247図	第145号土坑実測図	319
第248図	第145号土坑出土遺物実測図	319
第249図	第150号土坑実測図	320
第250図	第150号土坑出土遺物実測図	320
第251図	第153号土坑実測図	321
第252図	第153号土坑出土遺物実測図	321
第253図	第185号土坑実測図	321
第254図	第185号土坑出土遺物実測図	321
第255図	その他の土坑実測図(1)	324
第256図	その他の土坑実測図(2)	325
第257図	その他の土坑実測図(3)	326
第258図	その他の土坑実測図(4)	327
第259図	その他の土坑実測図(5)	328
第260図	その他の土坑実測図(6)	329
第261図	その他の土坑実測図(7)	330
第262図	その他の土坑実測図(8)	331
第263図	その他の土坑実測図(9)	332
第264図	その他の土坑実測図(10)	333
第265図	その他の土坑実測図(11)	334
第266図	その他の土坑実測図(12)	335
第267図	その他の土坑実測図(13)	336
第268図	その他の土坑実測図(14)	337
第269図	その他の土坑実測図(15)	338
第270図	その他の土坑実測図(16)	339
第271図	その他の土坑実測図(17)	340
第272図	その他の土坑実測図(18)	341
第273図	遺物包含層平面図・土層断面図	343
第274図	遺物包含層土層断面図・出土遺物 実測図	345
第275図	遺物包含層出土遺物実測図	347
第276図	遺構外出土遺物実測図(1)	350
第277図	遺構外出土遺物実測図(2)	351
第278図	遺構外出土遺物実測図(3)	352
第279図	遺構外出土遺物実測図(4)	353

前原塚

第280図	第1号塚土層断面図	362
第281図	第1号塚実測図	363
第282図	第1~8号土坑実測図	369
第283図	第9~16号土坑実測図	370
第284図	遺構外出土遺物実測図	373
第285図	前原塚遺構全体図	375

仲丸塚

第286図	第1号住居跡・出土遺物実測図	379
第287図	第1号塚出土遺物実測図	379
第288図	第1号塚土層断面図	380
第289図	第1号塚実測図	381

第290図 第1~10号土坑実測図	387	第293図 造構外出土遺物実測図(1)	391
第291図 第4・8・9号土坑出土遺物実測図	388	第294図 造構外出土遺物実測図(2)	392
第292図 第1号道路跡・出土遺物実測図	389	第295図 仲丸塚造構全体図	394

表 目 次

-下 卷 -

五万堀古道

表11 土坑一覧表	267	表12 溝一覧表	267
-----------	-----	----------	-----

向原遺跡・向原塚群

表13 住居跡一覧表	354	表15 塚一覧表	354
表14 壁穴状造構一覧表	354	表16 土坑一覧表	355

前原塚

表17 土坑一覧表	374	表18 土坑一覧表	393
-----------	-----	-----------	-----

写 真 図 版 目 次

-下 卷 -

五万堀古道

P L 47 調査前状況, 造構確認状況	(1), 波板状凹凸部土層断面(2), 波板状凹凸部土層断面(3), 波板状凹凸部土層断面(4), 波板状凹凸部土層断面(5), 波板状凹凸部完掘状況(1), 波板状凹凸部完掘状況(2)
P L 48 五万堀古道遺跡遠景(北方から望む), 五万堀古道遺跡遠景(南方から望む)	
P L 49 五万堀古道遺跡全景, I区全景	
P L 50 II区全景, III区全景	P L 55 III区補修痕確認状況, 補修痕土層断面(1), 補修痕確認状況(1), 補修痕土層断面(2), 補修痕確認状況(2), 補修痕土層断面(3), 補修痕確認状況(3), 補修痕土層断面(4)
P L 51 造構確認状況(1), 造構確認状況(2), 調査終了状況	
P L 52 I区北部造構確認状況, II区路面痕跡確認状況(1), I区第3時期面確認状況, II区路面痕跡確認状況(2), I区1トレンチ土層断面, II区路面痕跡確認状況(3), III区1トレンチ土層断面, II区路面痕跡確認状況(4)	P L 56 第1号土坑完掘状況, 第2号土坑完掘状況, 第3号土坑完掘状況, 第1号井戸跡完掘状況, 第1~3号溝完掘状況, 第1号道路跡遺物出土状況(1), 第1号道路跡遺物出土状況(2), 第1号道路跡遺物出土状況(3)
P L 53 西側溝土層断面(1), 東側溝土層断面(1), 西側溝土層断面(2), 東側溝土層断面(2), 西側溝土層断面(3), 東側溝土層断面(3), 西側溝土層断面(4), 東側溝土層断面(4)	P L 57 第1号道路跡出土遺物
P L 54 III区波板状凹凸部, 波板状凹凸部土層断面	P L 58 第1号道路跡, 造構外出土遺物
	P L 59 第1号道路跡, 造構外出土遺物
	P L 60 第1・2号道路跡, 造構外出土遺物

向原遺跡・向原塚群

- P L 61 向原遺跡・向原塚群全景、遺物包含層遺物出土狀況
- P L 62 遺構確認狀況(1)、遺構確認狀況(2)、調査終了狀況(1)、調査終了狀況(2)、第1号住居跡完掘狀況、第1号住居跡遺物出土狀況(1)、第1号住居跡遺物出土狀況(2)、第2号住居跡完掘狀況
- P L 63 第4号住居跡完掘狀況、第5号住居跡・第48号土坑完掘狀況、第8号住居跡遺物出土狀況、第9号住居跡完掘狀況、第11号住居跡完掘狀況、第11号住居跡遺物出土狀況(1)、第11号住居跡遺物出土狀況(2)、第12号住居跡完掘狀況
- P L 64 第15号住居跡完掘狀況、第16号住居跡・第57・58号土坑完掘狀況、第19号住居跡完掘狀況、第20号住居跡完掘狀況、第21号住居跡掘り方完掘狀況、第21号住居跡遺物出土狀況、第22号住居跡完掘狀況、第22号住居跡遺物出土狀況
- P L 65 第1号竪穴状遺構完掘狀況、第4号竪穴状遺構完掘狀況、第5号竪穴状遺構遺物出土狀況、第6号竪穴状遺構遺物出土狀況、第
- P L 66 6・7・8号土坑完掘狀況、第19号土坑遺物出土狀況、第90・91号土坑土層斷面、第185号土坑遺物出土狀況
- P L 67 第1・2号塚遺構確認狀況、第1号塚南北土層斷面、第1号塚遺物出土狀況(1)、第1号塚遺物出土狀況(2)、第1号塚甕内遺物出土狀況、第1号塚埋納孔完掘狀況、第2号塚南北・東西土層斷面、第2号塚南北土層斷面
- P L 68 第11・21号住居跡、第1号塚、第19号土坑、遺物包含層出土遺物
- P L 69 第5・9・10・15・16・18・19号住居跡、遺物包含層・遺構外出土遺物
- P L 70 第8・12・17・22号住居跡、第2・4~6号竪穴状遺構、第6・58・136・141・153号土坑、遺物包含層出土遺物
- P L 71 第145号土坑、遺物包含層、遺構外出土遺物
- P L 72 遺物包含層、遺構外出土遺物
- P L 73 第12号住居跡、第185号土坑、遺物包含層、遺構外出土遺物
- P L 74 第5・19号住居跡、第1号塚、第137・150号土坑、遺物包含層、遺構外出土遺物

前原塚

- P L 75 遺構確認狀況、調査終了狀況、第1号塚遺構確認狀況、第1号塚南北・東西土層斷面(1)、第1号塚南北・東西土層斷面(2)、第1号土坑完掘狀況、第3号土坑完掘狀況、第
- P L 76 4号土坑完掘狀況
- P L 77 第5号土坑完掘狀況、第7号土坑完掘狀況、第12号土坑完掘狀況、第13号土坑完掘狀況、遺構外出土遺物

仲丸塚

- P L 77 調査前狀況、第1号塚南北トレンチ土層斷面、第1号塚東西土層斷面
- P L 78 調査終了狀況、第1号住居跡完掘狀況、第1号塚遺物出土狀況
- P L 79 第1号土坑完掘狀況、第2号土坑完掘狀況、第3号土坑完掘狀況、第4号土坑完掘狀況、第5号土坑完掘狀況、第6号土坑完掘狀況、第8号土坑完掘狀況、第9号土坑遺物出土狀況
- P L 80 第1号住居跡、第1号塚、第1号土坑、第1号道路跡、遺構外出土遺物
- P L 81 第4・8・9号土坑、遺構外出土遺物
- P L 82 第1号塚、遺構外出土遺物

付 図

- 付図 1 仲丸遺跡遺構全体図
- 付図 2 五万堀古道遺構全体図
- 付図 3 向原遺跡・向原塚群遺構全体図

第5章 五万堀古道

第1節 遺跡の概要

五万堀古道は、友部町の南東部にあり、南側に沼沼川の沖積低地を望む標高25~30mの台地上に位置している。調査区域は、北東方向から南西方向に長さ約300m、幅20m、面積6,052m²であり、現況は畠地と山林である。今回の調査によって、道路跡2条、土坑3基、井戸跡1基、溝3条を確認した。

2条の道路跡の内、第1号道路跡とした遺構は古代の官道「東海道」と推定される道路跡である。遺構は、両側に溝を伴い、側溝の芯々距離8m及至10mで北東方向から南西方向にかけて一直線に延びている。これまでの常陸国における駅路の研究で、常陸國府から「安侯駅家（推定）」を経て「河内駅家（推定）」に達するルートは、直線道であることが推定されていた。今回の調査で、古代の官道が両側溝を持つ幅員約10mの「直線道路」であったことを確認することができた。また、路面の状況から、「3時期の変遷」が認められ、築造・修復を重ねながら長期にわたって道路としての機能を果たしていたことが確認された。

遺物は、道路という性格からであろうが非常に少なく、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に8箱出土している。土師器・須恵器・灰釉陶器、鐵鏃などが出土している。器種は多様であるが、いずれも破片が多く、個体として復元できたものは少ない。その他、縄文土器、弥生土器、土師質土器、切り出し状ナイフ形石器、石鏃、磨製石斧、磨石、砥石、鐵釘、「明道元寶か」・「寛永通寶」等が出土している。

第2節 基本層序の検討

当調査区は標高25.5~28.5mの間にあり、南端から緩やかな起伏を持ちながら北端に向かって徐々に高くなっている。調査区を3区に分け（付図2、第164図）、それぞれの地形に応じてI区1トレンチ（C 6j2区）、I区2トレンチ（B 5 g6区）、II区1トレンチ（C 4 g9区）、III区1トレンチ（E 3 e4区）、III区2トレンチ（E 3 j1区）、III区3トレンチ（F 2 e8区）、III区4トレンチ（G 2 c2区）の試掘トレンチを設定した。第163図に示すような土層堆積状況を確認した。

第I層は、10~40cmの厚さで、褐色をしたソフトローム層である。

第II層は、15~30cmの厚さで、褐色をしたローム層である。

第IIIa層は、22~45cmの厚さで、鹿沼バミス粒子を少量含む、締まりの強い褐色をしたハードローム層である。

第IIIb層は、8~10cmの厚さで、鹿沼バミス粒子を多量に含む、締まりの強い明褐色をしたハードロームと鹿沼バミスの混合土層である。

第IV層は、44~50cmの厚さで、明黄褐色をした鹿沼バミスの純粹層である。

第V層は、5~40cmの厚さで、褐色をしたローム層である。

第VI層は、16~20cmの厚さで、ローム小ブロックを中量、ローム粒子を少量、炭化粒子を微量含み、粘性・締まりとともに弱い暗褐色をした層への漸移層である。

第VII層は、28~42cmの厚さで、ローム粒子を少量、ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子を微量含み、粘性・締まりとともに弱い、黒褐色の黒ぼく土層である。

第VIII層は、18~26cmの厚さで、ローム粒子を少量、浅間Bテフラ（As-B）を少量含み、粘性が弱く、締ま

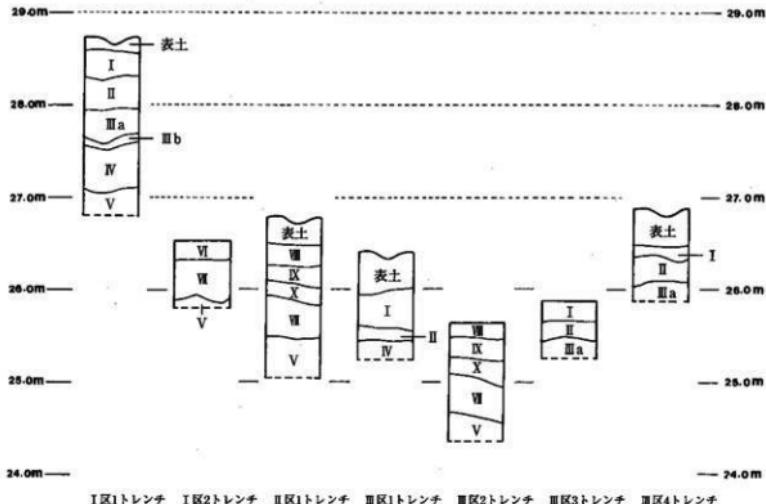
りの極めて強い黒ぼく土層である。

第IX層は、18~22cmの厚さで、砂粒を中量含む暗褐色の黒ぼく土層である。

第X層は、18~20cmの厚さで、白色微粒子・火山ガラスとともに少量含む黒褐色の黒ぼく土層である。

道路跡は、Ⅲ区1トレンチで第IV層（鹿沼バミス純層）を掘り抜き、第V層で第1時期目の路面を構築している。また、Ⅱ区1トレンチで浅間Bテフラを含む層の下層に盛り土をして構築した路面や側溝を確認することができた。Ⅲ区1・4トレンチにおいては、ハードローム層まで掘り込み、路面を構築していることを確認できた。

Ⅱ区1・Ⅲ区7トレンチ付近は、黒ぼく土の堆積した埋没谷であったと思われる。Ⅱ区1トレンチの火山灰分析では、IX層の軽石が、6世紀中葉に榛名山から噴出した、榛名ニツ岳伊香保テフラ（H r - F P）に由来する可能性が指摘できる。また、Ⅳ層と側溝の覆土上層等にみられる軽石は、A.D.1108年（天仁元年）に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（A s - B）に由来すると考えられる。



第163図 調査区土層模式図

第3節 遺構と遺物

1 道路跡

今回の調査で、道路跡2条が検出されている。第1号道路跡は、南西から北東方向へ向かう幅約10m、確認できた長さ約300mの道路跡である。第2号道路跡は、調査区Ⅰ区の北端東側に位置し、幅約2.4m、確認できた長さ約7mの道路跡である。以下、確認された道路跡について記載する。

(1) 第1号道路跡（付図2、第164～177図）

本跡は、両側に対応する側溝及び非常に硬く締まった硬化面を伴い、幅員約10mの南西から北東方向へ向かう一直線の道路跡である。対応する3条の側溝とそれに伴う硬化面の状況から、3時期の変遷が想定される。路面は構築時から順に第1時期面、第2時期面、第3時期面とした。また、波板状凹凸部、路面を補修したと思われる痕跡（以下、「補修痕」と呼ぶ。）も確認された。

位置 調査区の中央部、C 6 j2～G 2 h1区。調査区の中央部を北東方向から南西方向に検出され、調査区域外に延びている。調査区は、付図2にあるように約100mごとに北からⅠ・Ⅱ・Ⅲ区の三つの区に分割して調査した。

重複関係 本跡は、北端で第2号道路跡と重複し、第2号道路跡が上位に造られており、第2号道路跡より古い。Ⅰ区南部で第1～3号溝に東西方向に掘り込まれており、第1～3号溝より古い。

規模と形状 確認できた部分は全長280m、最大幅12.8mで、掘り込んで造られた部分は中央部に向かって浅く窪む状態を呈し、低地部に盛土をして造られた路面はカマボコ状を呈している。

方向 N-35°-E

(2) 第1時期面の道路跡（付図2、第164～172図）

第1時期面は、東側溝①・③・④と西側溝①・②・④・⑥・⑨・⑩を伴う幅8～12.5mで、両側溝間の芯々距離6.2～10.2mである。

Ⅰ区北端から南へ約35mまで（標高約27～28m）は、オープンカット工法により、鹿沼バシス純層を掘り抜き、切り通し状になっている。また、北端から南へ約16mの間は、東側の側溝が内側に設けられ、路面幅が約6mと狭くなっている。切り通しの法面上部では、幅約10mである。路面は、褐色のハードローム層を掘り込んで構築されており、中央部に向かって窪む状態を呈している。側溝は東および西の両側溝とも幅約80cm、深さ約30cmで、断面はU字形を呈している。また、東側溝①の北端から南へ7mの間では、2条の溝が確認され、外側の溝が新しい。

Ⅰ区からⅡ区にまたがる標高26.5m以下の低地部は、黒ぼく土が堆積した埋没谷と思われる付近で、路面幅約7mと広がる。路面は、黒ぼく土層の上に褐色土ブロックの入った黒ぼく土で突き固められ、カマボコ状を呈している。側溝の規模は拡大され、上面で最大幅約2.5m、深さ約1.0mになり、側溝間の芯々距離も最大約10.0mになる。側溝の断面は、U字形を呈している。西側溝①は北から36mで西側溝②となり、長さ約60mにわたって規模が拡大されている。東側溝①は、北端から38mの地点から東側溝③と平行して存在し、北端から約70mで東側溝③に合流する。東側溝③は、長さ約60mで、上幅約2.5m、底面幅約0.7mである。

道幅は、Ⅱ区北部の標高26.5mから標高27.0mと高くなるにつれて徐々に狭くなり、路面幅約7mでⅢ区北部

の標高26.0mの地点まで続いている。路面は、ローム層を掘り込んで構築し、中央部に向かって窪む状態を呈している。側溝は、東西両側溝とも途切れている部分が多く、ともに長さ約35mを確認することができた。規模は、幅約60cm、深さ約30cmで断面U字形を呈している。

Ⅲ区北部の標高26.0m以下の低地部は、Ⅰ区南部からⅡ区北部の標高26.5m以下の地点と同じく黒ばく土が堆積した埋没谷と思われる地点で、路面幅約7mである。路面は、黒ばく土層の上に褐色土ブロックの混じる黒ばく土と粘土ブロックを多量に含んだ黒ばく土の2層で硬く突き固められ、カマボコ状を呈している。側溝の規模も同じように拡大され、上面で最大幅2.5m、深さ1.5mであり、側溝間の芯々距離も最大約10.0mである。Ⅲ区2トレンチ(第168図)での東側溝の断面は、逆台形を呈している。また、西側溝は、逆台形に深さ約1.5m掘り込まれ、底面は凹凸である。側溝の下部には、白色粘土ブロック・褐色土ブロックを含む層が4層あり、その上面に締まりの強い厚さ約5cmの黒褐色土が中央部に向かって窪む状態で堆積している。

Ⅲ区の中央部から南端にかけて(標高26.0m~27.0m)は、褐色のハドローム層まで掘り込み、路面を構築し、中央部に向かって窪む状態を呈している。路面の西側に暗褐色土の硬化した部分があり、調査区を東西に横切る現道路を挟んで長さ約35mにわたって確認できた。西側溝の一部(付図2)で、底面が約3m間隔で凹凸を繰り返している部分が確認された。凹部の覆土は、ロームブロックを多量に含むザクザクした層であった。

(イ) 第2時期面の道路跡(付図2、第164~172図)

第2時期面は、東側溝②・③・⑤・⑦・⑨と西側溝①・②・③・⑤・⑫を伴う幅約9~12.5mで、両側溝の芯々距離6.4~10.0mである。

Ⅰ区1トレンチの土層断面で確認できた東側溝は、Ⅰ区北端から南へ約37mの間は確認することができず、それより南側で確認できた。北端から南へ39.0mの地点から東側溝③の路肩の部分を掘り込んで側溝が造られている。西側溝は、Ⅰ区北端から南端まで西側溝①・②を掘り込んで造られている。両側溝とも形状は、断面U字形を呈している。

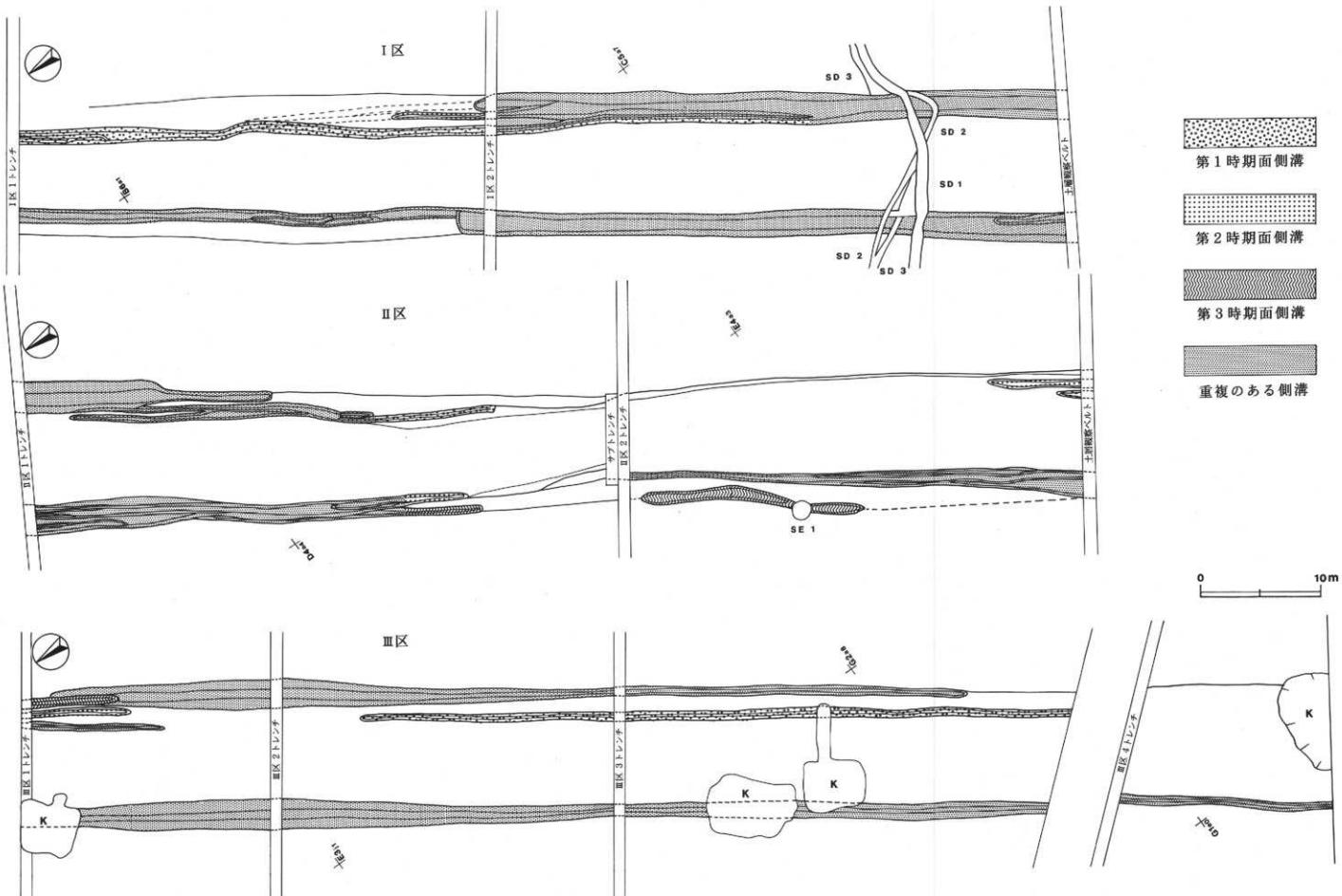
Ⅱ区においては、両側溝とも第3時期面に伴う側溝に掘り込まれていたり、路面の構築時に壊されていると思われる。そのため、形状は、土層断面において確認できる程度で浅いU字形であったと思われる。

Ⅲ区においては、東側溝⑦が約24mの長さで確認することができた。さらに南側では、東側溝⑨の覆土中に、西側溝では調査区の南端まで西側溝⑫の覆土中に痕跡が残る。側溝の形状は、断面U字形を呈している。

路面は、第1時期面と同様に黒ばく土の堆積している低地部ではカマボコ状を呈している。ローム層を掘り抜いている部分では、道路中央から西側に偏ってローム面の上に砂礫の混じる暗褐色土の極めて締まりの強い硬化面を確認することができた。

第2時期面においては、Ⅰ区南部からⅡ区北部にかけての標高26.5m以下の低地部とⅢ区北部の標高26.0m以下の低地部で波板状凹凸部を確認した。しかし、2時期に伴うものかどうかは、1・3時期面との重複及び同期の重複が混在していて困難であった。

補修痕と思われるものについては、砂粒・鉄分を含有した粘土質の土の入った直径約10cm~80cmの円形や不整精円形のもの、幅約8~10cm、深さ3~10cmの細長い溝状のものなどの補修痕を確認することができた。



(4) 第3時期面の道路跡（付図2、第164～172図）

第3時期面は、東側溝③・④・⑧・⑨・⑩と西側溝②・⑥・⑧・⑪・⑫を伴う幅約12～12.8mで、両側溝間の芯々距離約10.0mである。

I区北端から南へ約36mの間は両側溝とも確認されず、両側にわずかに段を持つ程度で幅約12mを保っている。路面は、暗褐色土の硬化した面で中央部に向かって窪む状態を呈している。

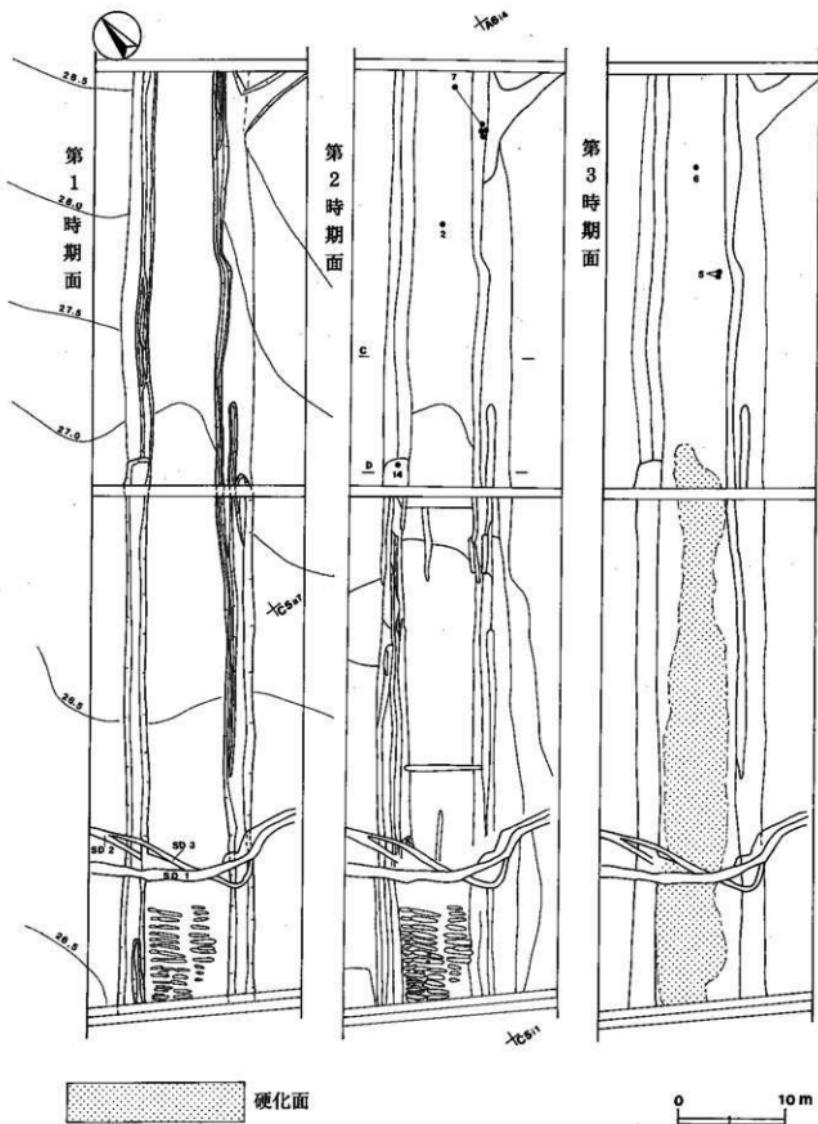
I区南部での側溝は、第169図のサブトレンチSPI-I'で、第2時期面の側溝に非常に硬く締まった暗褐色土が認められ、それより外側に向かって緩やかに窪む程度であった。I区南からII区トレンチまでの路面は、部分的に硬化面を確認できる程度で、一部で第2時期面と同時に確認される所もあった。

II区においては表土が浅く、耕作等による擾乱を受けていると思われる。そのため硬化面の確認状況は、部分的であり、一部で暗褐色土の硬化した面を確認した程度である。側溝は、東側溝③、西側溝⑥・⑧・⑪を部分的に確認できた程度である。側溝の形状は、断面が中央部に向かって窪む状態を呈している。

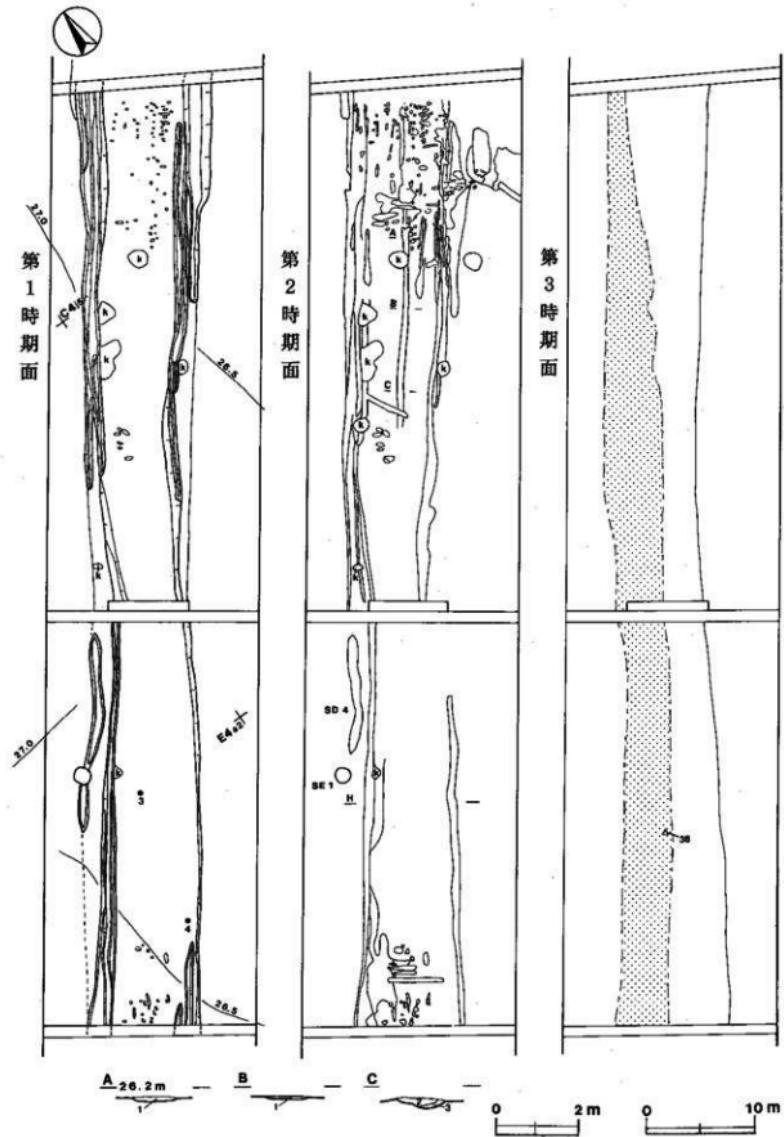
III区においても同様であり、III区1トレンチにおいて表土直下で硬化面が確認できたが、面的には部分的にしか確認することができなかった。側溝については、東側溝⑥が外側で確認でき、西側溝は、西側溝⑫の上層を掘り込んでいることが確認できた。両側溝とも掘り込みは浅く、U字状を呈しており、低地部に向かってやや幅広になる。西側溝は、西側溝⑫の上部を掘り込んで構築されている。東側溝は、東側溝⑨の上部を掘り込んで構築され、長さ約75mにわたって確認することができた。III区の南部では、I区と同様に路面の外側に段を持つ程度で、側溝は確認されていない。

第3時期面においては、I区南部からII区北部にかけての標高26.5m以下の低地部と、III区北部の標高26.0m以下の低地部で波板状凹凸部を確認した。同時期の重複があり、路肩より中央に向かって新しくなっていた。

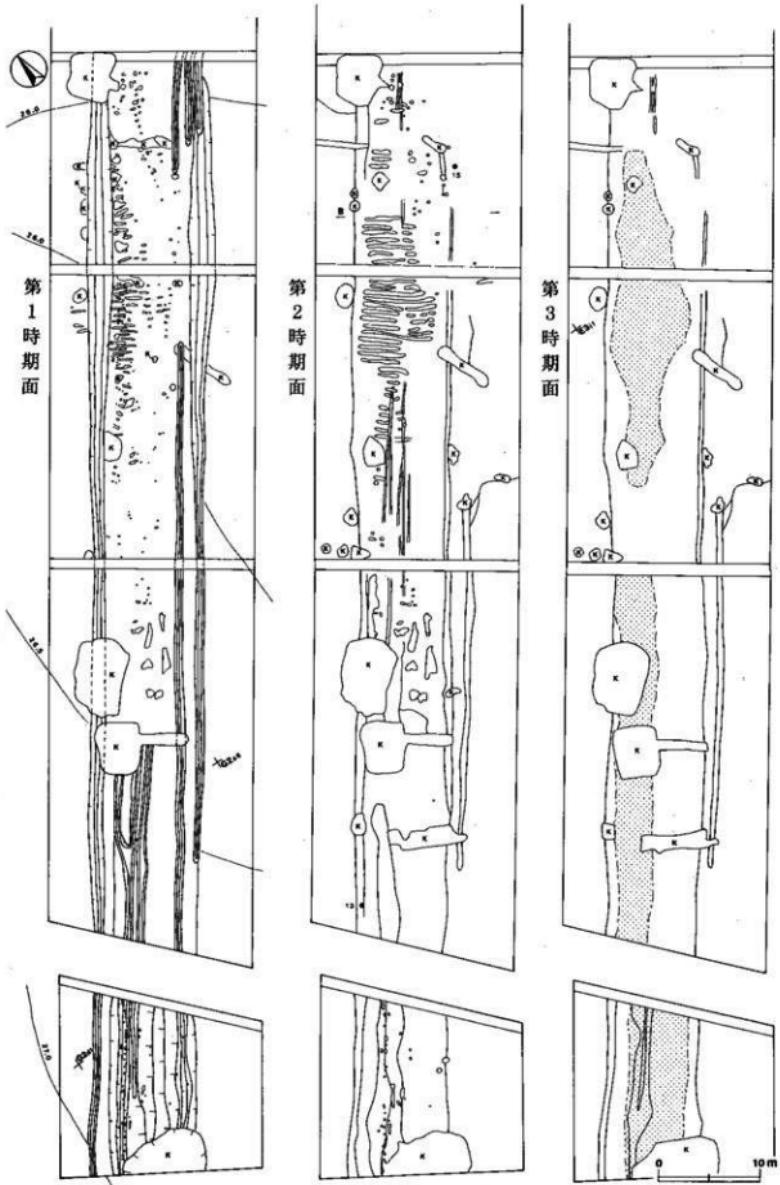
補修痕と思われるものについては、砂粒・鉄分を含有した粘土質の土の入った直径約10cm～80cmの円形や不整円形のもの、幅約8～10cm、深さ3～10cmの細長い溝状のものなどを確認することができた。



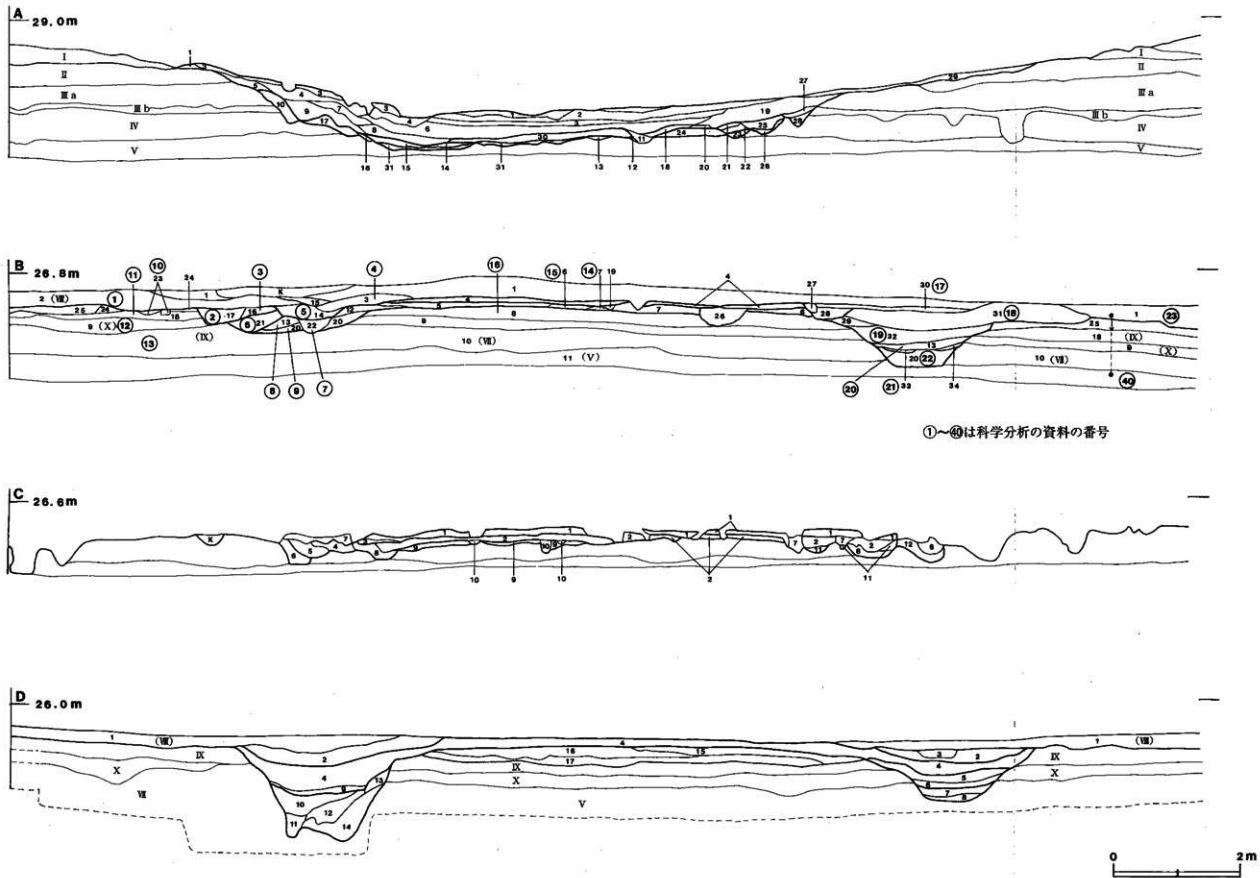
第165図 第1号道路跡I区実測図



第166図 第1号道路跡Ⅱ区実測図



第167図 第1号道路跡Ⅲ区実測図



第168図 第1号道路路土層断面図

I 区 1 トレント土層解説 (A)

- 1 黒褐色 ローム粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子微量
- 5 喜褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・焼土粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量
- 8 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量、鹿沼バミス粒子微量
- 9 喜褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、鹿沼バミス粒子微量
- 10 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
- 11 喜褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 12 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 13 黄褐色 ローム粒子・鹿沼バミス粒子中量、鹿沼バミス小ブロック・砂粒少量 (極めて締まり強い)
- 14 喜褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量 (極めて締まり強い)
- 15 喜褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 16 喜褐色 ローム粒子中量、鹿沼バミス粒子少量 (極めて締まり強い)
- 17 黄褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、鹿沼バミス粒子中量、鹿沼バミス小ブロック少量
- 18 黄褐色 ローム粒子・鹿沼バミス粒子中量
- 19 黑褐色 ローム粒子微量
- 20 喜褐色 ローム粒子・鹿沼バミス粒子少量
- 21 喜褐色 ローム粒子・鹿沼バミス粒子少量、ローム小ブロック微量
- 22 喜褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 23 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、鹿沼バミス粒子微量 (極めて締まり強い)
- 24 黄褐色 鹿沼バミス粒子多量、鹿沼バミス小ブロック中量、ローム粒子少量
- 25 喜褐色 ローム粒子多量、鹿沼バミス粒子微量
- 26 喜褐色 ローム粒子中量、鹿沼バミス粒子少量、鹿沼バミス小ブロック微量
- 27 喜褐色 ローム粒子中量、鹿沼バミス粒子少量
- 28 暗褐色 ローム粒子・鹿沼バミス粒子中量、ローム小ブロック・鹿沼バミス小ブロック少量
- 29 喜褐色 ローム粒子・鹿沼バミス小ブロック中量、鹿沼バミス粒子少量
- 30 喜褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 31 喜褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・砂粒少量、鹿沼バミス粒子微量 (極めて締まり強い)

II 区 1 トレント土層解説 (B)

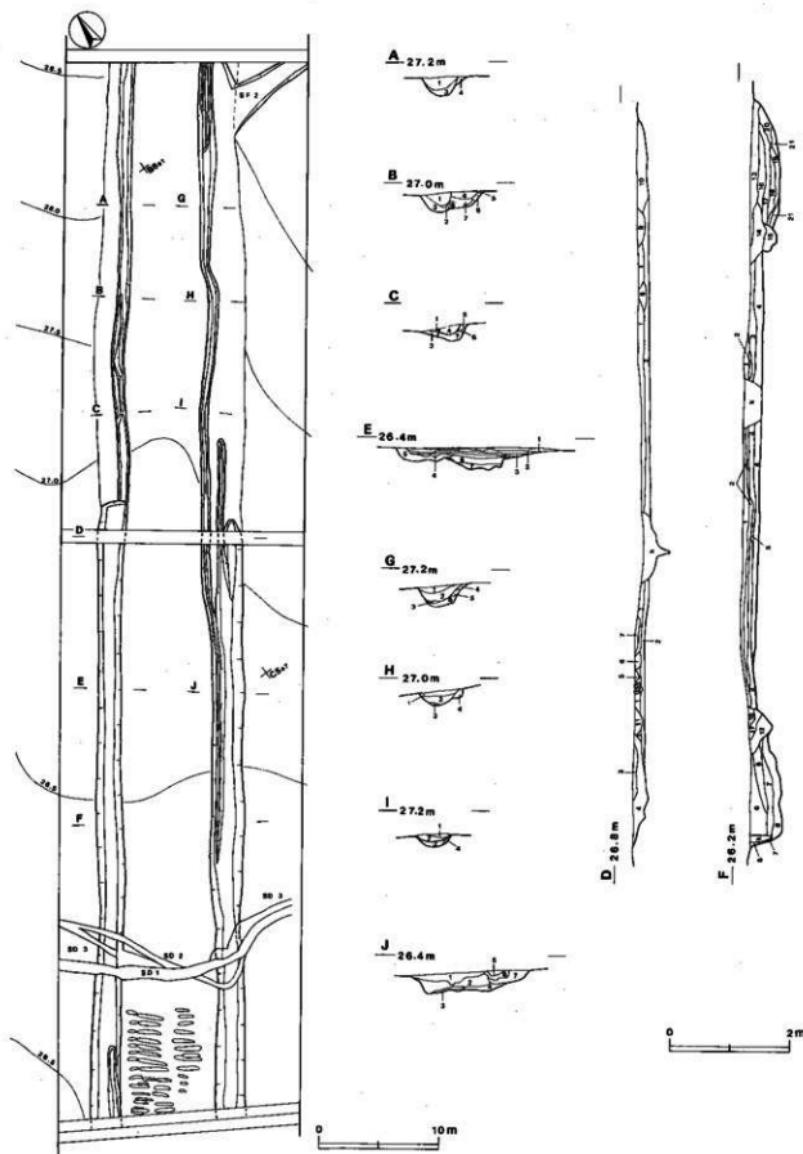
- 1 黒褐色 ローム粒子少量、黒色土粒子微量 (表土)
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、火山ガラス微量… [Ⅲ]
- 3 黒褐色 ローム粒子・黒色粒子中量
- 4 黒褐色 ローム粒子多量、砂砾中量 (極めて締まり強い)
- 5 黒褐色 砂粒中量、粘土粒子少量 (極めて締まり強い)
- 6 黒褐色 砂粒・粘土粒子中量 (極めて締まり強い)
- 7 黒褐色 ローム粒子・白色微粒子少量
- 8 黑褐色 砂粒中量、火山ガラス少量… [X]
- 9 黑褐色 白色微粒子少量、火山ガラス微量
- 10 黑褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量… [Ⅳ]
- 11 暗褐色 ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子多量… [V]
- 12 黑褐色 白色微粒子少量
- 13 黑褐色 黒色土粒子多量
- 14 喜褐色 ローム大ブロック多量、白色微粒子少量 (極めて締まり強い)
- 15 喜褐色 砂砾少量、ローム粒子微量
- 16 喜褐色 ローム粒子・砂粒少量 (極めて締まり強い)
- 17 喜褐色 ローム大ブロック多量、砂粒少量 (極めて締まり強い)
- 18 黑褐色 砂粒中量… [IX]
- 19 喜褐色 砂粒多量、粘土粒子中量 (極めて締まり強い)
- 20 黑褐色 ローム粒子・黒色土小ブロック少量
- 21 喜褐色 ローム粒子・白色微粒子少量 (極めて締まり強い)
- 22 喜褐色 ローム粒子少量、砂粒微量 (極めて締まり強い)
- 23 黑褐色 砂砾中量、ローム粒子微量
- 24 黑褐色 砂粒中量、ローム粒子微量
- 25 黑褐色 砂粒中量、ローム粒子微量
- 26 灰褐色 粘土粒子多量、砂粒中量 (極めて締まり強い)
- 27 喜褐色 ローム粒子・砂粒少量
- 28 暗褐色 砂粒少量 (極めて締まり強い)
- 29 喜褐色 ローム粒子・白色微粒子少量
- 30 喜褐色 砂粒中量
- 31 喜褐色 ローム粒子少量、砂粒微量
- 32 黑褐色 白色微粒子微量
- 33 黑褐色 ローム粒子中量 (極めて締まり強い)
- 34 黑褐色 ローム粒子微量

III 区 2 トレント土層解説 (D)

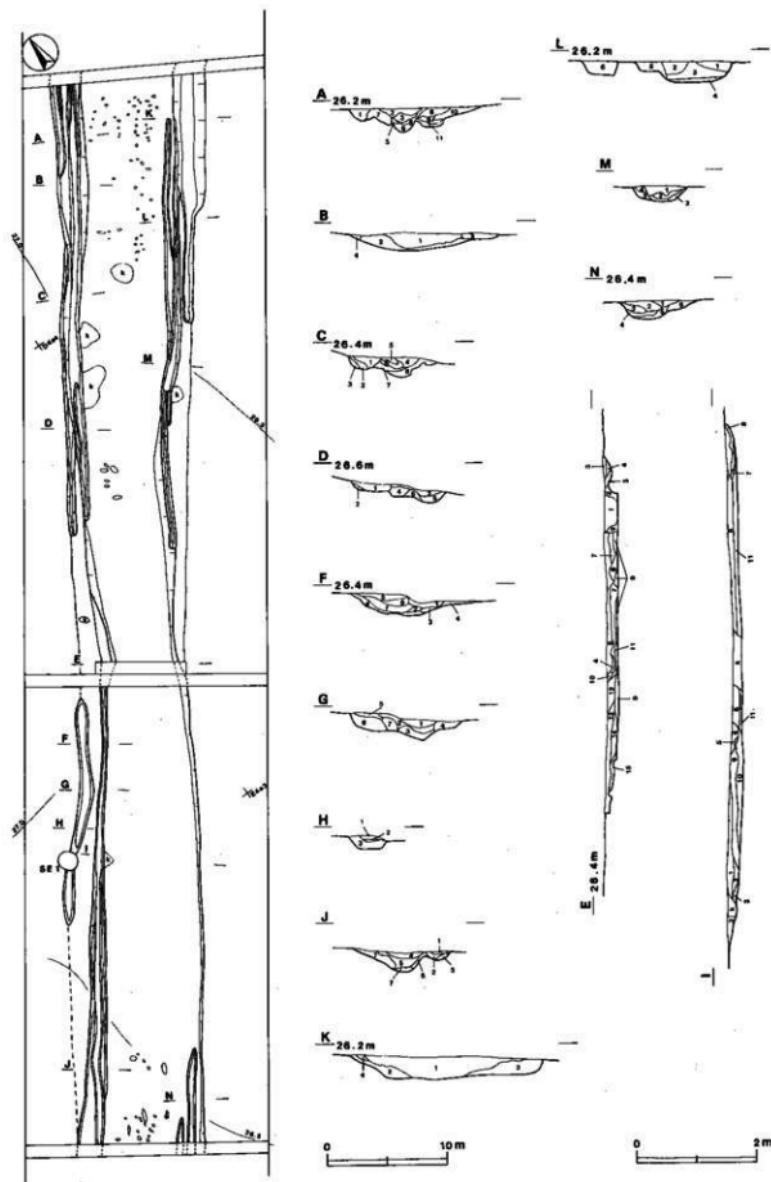
- 1 暗褐色 砂粒少量、ローム粒子微量
- 2 黑褐色 砂粒・粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 喜褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 4 黑褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量 (極めて締まり強い)
- 5 极暗褐色 砂粒中量、炭化粒子少量、焼土粒子・炭化物・黒色土粒子微量
- 6 极暗褐色 砂粒中量、ローム粒子・黒色土粒子少量、炭化粒子微量
- 7 黑褐色 炭化粒子・褐色土中ブロック少量
- 8 黑褐色 炭化物少量、褐色土中ブロック微量
- 9 黑褐色 炭化物中量、ローム粒子・焼土粒子・白色微粒子少量
- 10 极暗褐色 褐色土大ブロック中量、焼土粒子・粘土中ブロック少量
- 11 极暗褐色 褐色土大ブロック・粘土中ブロック中量
- 12 にじみ色 粘土大ブロック多量、炭化粒子微量
- 13 黑褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 14 黑褐色 ローム粒子・粘土大ブロック・褐色土大ブロック微量
- 15 黑褐色 褐色土大ブロック中量、ローム粒子少量、焼土粒子微量 (極めて締まり強い)
- 16 暗褐色 粘土大ブロック多量、炭化粒子中量、ローム小ブロック少量 (極めて締まり強い)
- 17 喜褐色 褐色土大ブロック中量、ローム粒子少量、焼土粒子・黒色土粒子微量 (極めて締まり強い)

III 区 1 トレント土層解説 (C)

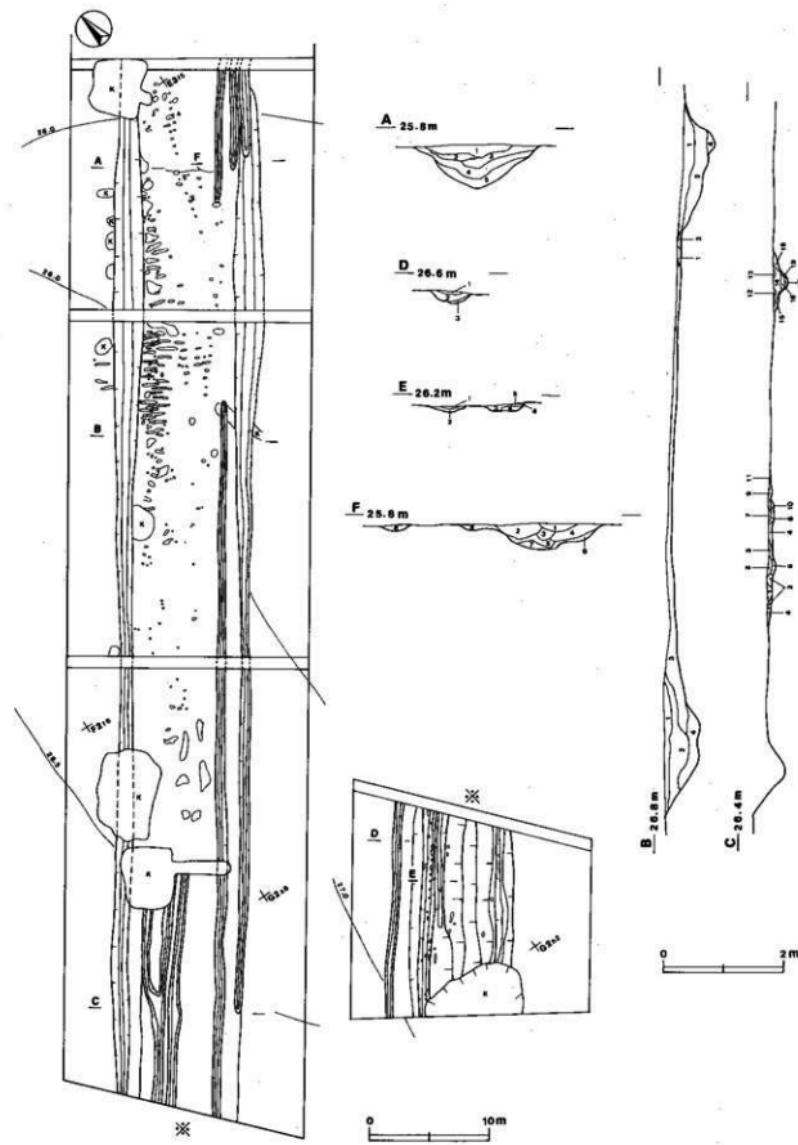
- 1 黒褐色 ローム粒子・砂粒少量
- 2 暗褐色 砂粒中量、ローム粒子・粘土粒子少量 (極めて締まり強い)
- 3 喜褐色 粘土粒子・砂粒微量、ローム粒子・黒色土粒子微量 (極めて締まり強い)
- 4 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・黒色土粒子少量、ローム小ブロック微量
- 6 喜褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量
- 7 喜褐色 ローム粒子中量
- 8 喜褐色 ローム小ブロック・粘土粒子中量、ローム粒子少量、砂粒微量 (極めて締まり強い)
- 9 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量 (極めて締まり強い)
- 10 灰褐色 粘土粒子中量、ローム粒子少量 (極めて締まり強い)
- 11 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量 (極めて締まり強い)
- 12 暗褐色 ローム小ブロック中量



第169図 第1号道路跡I区土層断面図



第170図 第1号道路跡Ⅱ区土層断面図



第171図 第1号道路跡Ⅲ区土層断面図

I 区側溝土層解説 (第169図)

土層解説 (A・B・C)

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、鹿沼バミス粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、鹿沼バミス粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子・鹿沼バミス小ブロック・鹿沼バミス粒子・砂粒微量
- 6 明褐色 鹿沼バミス小ブロック・鹿沼バミス粒子多量、ローム粒子微量
- 7 楊色 ローム粒子少量、鹿沼バミス小ブロック・鹿沼バミス粒子微量
- 8 褐色 ローム粒子少量、鹿沼バミス粒子微量

土層解説 (D)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量
- 5 黒褐色 砂粒少量、ローム粒子微量
- 6 暗褐色 砂粒少量、ローム粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量、砂粒微量
- 8 暗褐色 ローム粒子・砂粒少量
- 9 暗褐色 ローム粒子少量、砂粒微量
- 10 黑褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 11 黑褐色 ローム粒子・砂粒微量
- 12 暗褐色 ローム粒子・砂粒微量

土層解説 (E)

- 1 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 黑褐色 ローム小ブロック多量、ローム中ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック多量、ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 5 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 6 黑褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量

土層解説 (F)

- 1 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黑褐色 ローム小ブロック多量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック・ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量

II 区側溝土層解説 (第170図)

土層解説 (A)

- 1 黑褐色 ローム粒子少量、炭化粒子極微量
- 2 暗褐色 ローム粒子極微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 黑褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 5 黑褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 6 黑褐色 ローム粒子極微量
- 7 黑褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 8 黑褐色 ローム小ブロック微量、ローム粒子微量
- 9 黑褐色 ローム粒子極微量
- 10 黑褐色 ローム粒子微量
- 11 暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量

土層解説 (B)

- 1 黑褐色 黒色土小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・黑色土小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、黑色土小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、鹿沼バミス微量

土層解説 (C)

- 1 暗褐色 黑色土中ブロック多量、ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 4 黑褐色 ローム小ブロック少量
- 5 黑褐色 黑色土小ブロック中量
- 6 黑褐色 黑色土小ブロック多量、ローム粒子微量
- 7 黑褐色 ローム粒子中量

- 3 黑褐色 ローム大ブロック・中ブロック中量、小ブロック・ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量
- 4 黑褐色 ローム粒子少量
- 5 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 6 黑褐色 燒土粒子中量、燒土小ブロック少量、炭化粒子微量
- 7 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 8 暗褐色 燒土粒子中量、燒土中ブロック・ローム粒子少量
- 9 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 10 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 11 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 12 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 13 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 14 黑褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 15 黑褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 16 黑褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 17 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 18 黑褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 19 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 20 黑褐色 黑色土粒子多量、ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 21 黑褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量

土層解説 (G・H・I)

- 1 黑褐色 ローム粒子・炭化粒子・鹿沼バミス粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、鹿沼バミス粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・鹿沼バミス粒子微量
- 4 暗褐色 鹿沼バミス粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 鹿沼バミス粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 6 黑褐色 鹿沼バミス粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量

土層解説 (J)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 黑褐色 ローム粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
- 4 黑褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 黑褐色 ローム小ブロック多量、炭化粒子中量、ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 7 黑褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量

8 暗褐色 ローム小ブロック多量、ローム小ブロック少量

- 1 暗褐色 黑色土中ブロック多量、ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 3 黑褐色 ローム小ブロック少量
- 4 黑褐色 黑色土小ブロック中量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック多量、ローム小ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

土層解説 (E)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、砂粒少量、ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・鹿沼バミス中量
- 3 暗褐色 ローム粒子・砂粒少量
- 4 暗褐色 黑色土小ブロック中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量
- 6 暗褐色 ローム粒子・砂粒少量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量、砂粒微量
- 8 暗褐色 ローム粒子・砂粒微量
- 9 暗褐色 ローム中ブロック多量
- 10 黑褐色 砂粒微量
- 11 黑褐色 ローム小ブロック・砂粒中量
- 12 黑褐色 砂粒中量、ローム粒子微量
- 13 黑褐色 黑色土中ブロック・砂粒中量、ローム小ブロック少量
- 14 黑褐色 黑色土中ブロック・砂粒中量、ローム小ブロック・砂粒微量
- 15 暗褐色 ローム粒子少量

土層解説 (F)

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・黒色土小ブロック少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 黒色土小ブロック多量、ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 6 褐色 ローム小ブロック少量、黒色土小ブロック微量
- 7 暗褐色 ローム粒子・黒色土小ブロック少量

土層解説 (G)

- 1 黒褐色 黒色土小ブロック多量
 - 2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
 - 3 暗褐色 ローム中ブロック・黒色土小ブロック中量、ローム
粒子少量
 - 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
 - 5 黑褐色 ローム粒子少量
 - 6 黑褐色 ローム小ブロック・黒色土小ブロック多量
 - 7 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 8 暗褐色 ローム粒子少量
- 9 暗褐色 ローム粒子微量
- 10 暗褐色 ローム中ブロック・黒色土小ブロック中量

土層解説 (H)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック・黒色土小ブロック中量

土層解説 (I)

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量
- 4 黑褐色 ローム粒子中量
- 5 黑褐色 白色化粒子微量
- 6 黑褐色 ローム粒子微量
- 7 黑褐色 白色化粒子微量
- 8 暗褐色 ローム中粒子中量、ローム小ブロック少量
- 9 黑褐色 ローム粒子微量
- 10 暗褐色 ローム粒子少量
- 11 黑褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量

III 区隔溝土層解説 (第171図)

土層解説 (A)

- 1 灰褐色 砂粒少量、ローム粒子微量
- 2 黑褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 黑褐色 砂粒・粘土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 黑褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

土層解説 (F)

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・砂粒少量
- 2 灰褐色 砂粒少量、ローム粒子微量
- 3 黑褐色 ローム粒子・粘土粒子少量、砂粒少量、炭化粒子微量
- 4 黑褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 7 黑褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 8 暗褐色 ローム小ブロック・黒色土粒子少量

土層解説 (B)

- 1 黑褐色 ローム粒子・砂粒少量、炭化粒子微量
- 2 黑褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 3 黑褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 4 黑褐色 ローム小ブロック・黒色土中ブロック少量

土層解説 (C)

- 1 黑褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・砂粒微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 6 暗褐色 砂粒中量、ローム粒子少量
- 7 黑褐色 ローム粒子微量
- 8 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
- 9 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子微量

土層解説 (J)

- 1 暗褐色 黒色土小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・黒色土小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・黒色土小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・黒色土中ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック少量、黒色土小ブロック微量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量
- 7 黑褐色 黒色土小ブロック少量、ローム粒子微量

土層解説 (K)

- 1 黑褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 2 黑褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック多量
- 3 黑褐色 ローム中ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、鹿沼バシス微量

土層解説 (L)

- 1 暗褐色 ローム粒子・黒色土小ブロック微量
- 2 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・黒色土小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子・黒色土小ブロ
ック微量
- 6 褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量

土層解説 (M)

- 1 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 黑褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 4 黑褐色 ローム粒子少量
- 5 黑褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量

土層解説 (N)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、黒色土小ブロック微量
- 2 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・黒色土小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子・黒色土小ブロ
ック微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム小ブロック・ローム
粒子微量
- 6 褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量

土層解説 (D)

- 1 黑褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中
ブロック少量
- 11 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 12 黑褐色 ローム粒子微量
- 13 黑褐色 ローム粒子少量
- 14 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中
ブロック少量
- 15 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 16 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロ
ック少量
- 17 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中
ブロック少量
- 18 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
- 19 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量

土層解説 (E)

- 1 黑褐色 黒色土粒子中量、ローム粒子少量
- 2 黑褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

土層解説 (F)

- 1 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム大ブロ
ック・ローム中ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子
少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

(1) 波板状凹凸部（第167・172・173図）

波板状凹凸部は、Ⅰ区南部からⅡ区北部にかけての標高26.5m以下の低地部と、Ⅲ区北部の標高26.0m以下の地点で確認された。第172図は、Ⅲ区北部の第2時期面及び第3時期面路床の確認状況図、第1時期面の完掘平面図である。

第1・2時期面では、第3時期B面で確認されたもの以外の波板状凹凸部も部分的に確認できたが、第3時期の構築や修復に伴う擾乱により明瞭に時期区分できなかった。

波板状凹凸部が確認される前段階で、第167図の波線で示した硬化した範囲を確認することができた。硬化した範囲は、埋没谷の外側から徐々に広がり中央部で膨らんでいる。また、凸部には切り合いがあり、路肩より道路中央の方が新しい。以下、Ⅲ区北部の標高26.0m以下の地点の波板状凹凸部について掲載する。

第167図の波線で示した範囲の硬化面を剥がす過程で、砂礫混じりの暗褐色土の凸部が検出された。凸部は、道路上直行して幅25~35cm、長さ0.6~3.6m、幅50~60cm間隔で、道路中央より西側に約15mに確認された。砂と小石混じりの粘土質の黒褐色土で充填された凸部は、硬化面の下層より極めて硬く締まっていた。凸部は、第2時期面の下層から上部が確認され、第1時期面を掘り込んで構築されている。掘り方の形状は、緩やかに凹凸を持つものや、極端に一部だけが深くなるものなどが確認された。掘り方の下部は、非常に硬く1、(2)層を充填してから突き固めたように考えられる。2層は砂・小石が多く、非常に硬い。

波板状凹凸部土層解説 (A, B, C, E, F)

1	暗褐色	(砂粒・鉄分を含有した粘土質の土)	砂粒中量	ローム粒子少量	※基本的に1層と同じであるが、新旧が判断できるので分離した。
2	褐色	(砂粒・鉄分を含有した粘土質の土)	粘土質ブロック	8 黒褐色	(鉄分を含有した粘土質の土)
		タ・ローム粒子中量	9 黑褐色	(鉄分を多く含有した砂質の土)	
3	暗褐色	ローム粒子少量	10 褐色	(鉄分を少く含有した砂質の土)	
4	褐色	砂粒微量	11 暗褐色	ローム粒子微量	
5	黒褐色	(砂粒・鉄分を含有した粘土質の土)	12 黒褐色	黑色土粒子少量	
6	褐色	ローム小ブロック中量			
7	暗褐色	(砂粒・鉄分を含有した粘土質の土)	砂粒中量	ローム粒子少量	
		タ・ローム粒子少量			

波板状凹凸部土層解説 (D)

1	黒褐色土	砂と小石混じりの粘土質層、部分的に鉄分を含む。	2	暗褐色土	砂と小石が主体で部分的に鉄分を含む。(極めてしま り強い)
---	------	-------------------------	---	------	----------------------------------

(2) 補修痕（第174図）

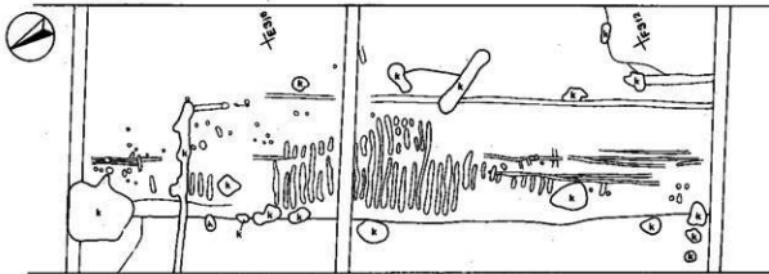
補修痕は、3時期にわたってⅠ区南部からⅡ区北部にかけての標高26.5m以下の低地部とⅢ区北部の標高26.0m以下の地点において多く確認することができた。規模や形態は不規則であるが、補修剤と考えられる土は、沼沢や湿地などで水成堆積した粘土のような若干青みがかった粘土質の土をベースに砂を混ぜて使用しているように見受けられる。

補修痕は、それらの規模や形態から三つに分類することができる。

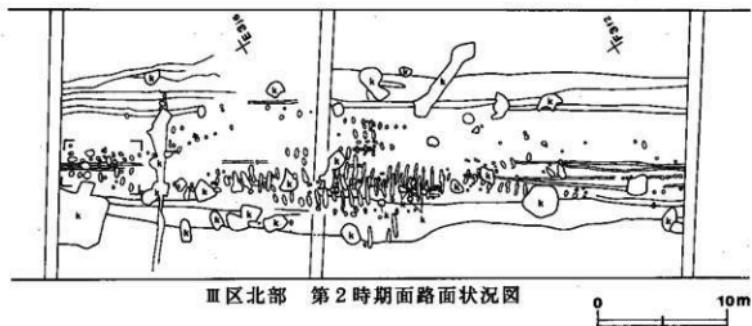
- 直径10~20cmの円形状のもの。
- 長軸30~50cmの不整規円形状のもの。
- 幅8~10cm、深さ3~10cmの細長い溝状のもの。

aとbは、底面が中央部に向かって窪む状態のものや凹凸のもの、一方だけが深いものなど様々な形態を持っていて、人为的に掘られたのではないと思われるが、詳細については不明である。底部は、非常に硬く締まっているが、工具痕等による圧痕または掘削の跡は確認できなかった。補修土を充填後、突き固められたと思われる。

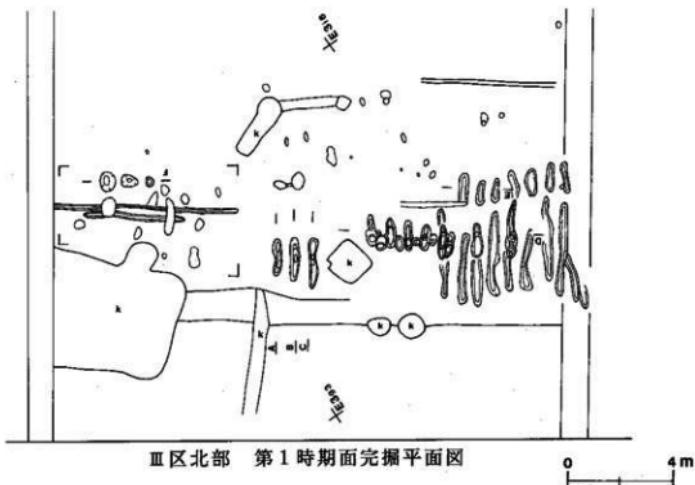
cは、Ⅰ区北部、Ⅱ区北部、Ⅲ区北部で確認することができた。その中でも顕著にその形体が確認できたⅢ



III区北部 第3時期面(路床)状況図

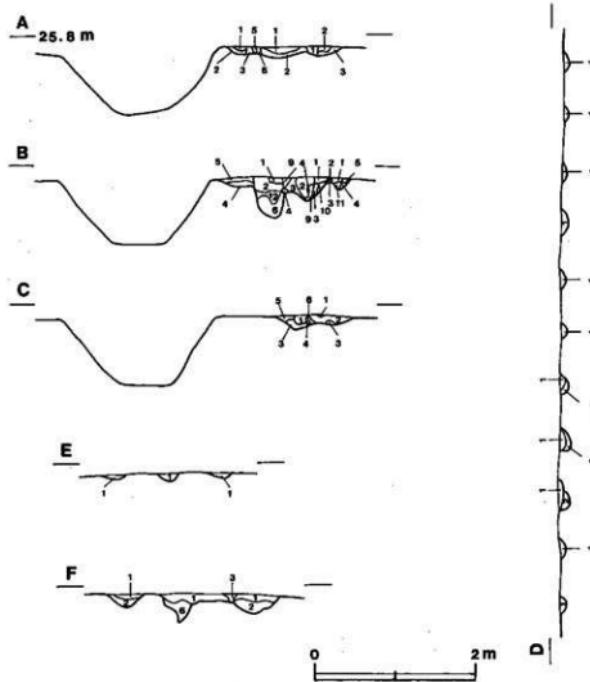


III区北部 第2時期路面面状況図



III区北部 第1時期路面完掘平面図

第172図 第1号道路跡路面状況図



第173図 第1号道路跡波板状凹凸部土層断面図

区北部の補修痕について記載する。

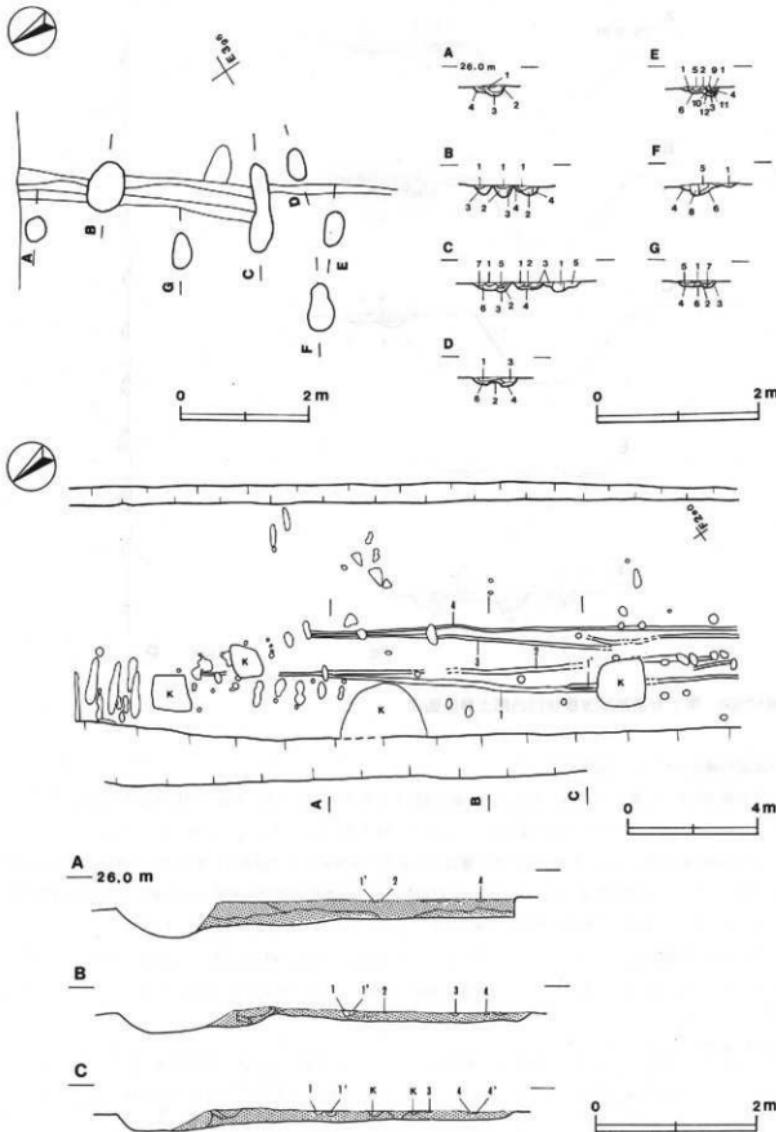
溝断面の形状は、幅6~10cm、深さ3~10cmで浅いU字形を呈している。平面上の長さはまちまちであるが、1条で確認されているものや5条が並列しているもの、切り合いのあるものなどを確認することができた。

第174図の確認図のように不整円形形状の補修痕と溝状の補修痕の重複関係は、確認面で不整円形形状の補修痕が新しく見えるもののが多かった。しかし、土層観察では、不整円形形状の補修痕より新しい溝状の補修痕を確認できるものもある。これは、補修工事が極めて均一化されたものであるためと考えられる。

第174図の確認図及びA~Cサブトレチでは、1から4'までの6条を確認した。それぞれの溝の芯々距離は、測定に多少の誤差はあると思われるが、2~4間の幅が1.21m、1~3間の幅が1.33~1.35mである。

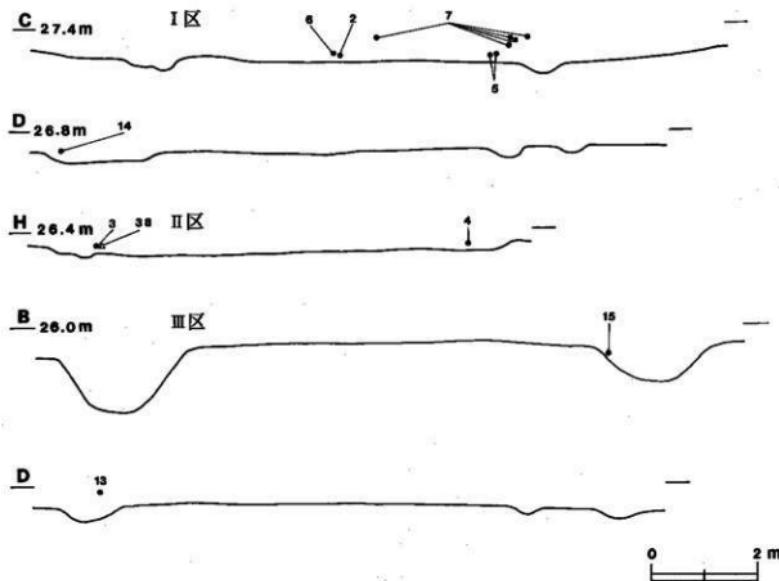
補修痕土層解説 (A~G)

1 暗褐色	(砂粒・鉄分を含有した粘土質の土)、砂粒中量、ローム粒子少量	7 暗褐色	(砂粒・鉄分を含有した粘土質の土)、砂粒中量、ローム粒子少量
2 紅褐色	(砂粒・鉄分を含有した粘土質の土)、粘土質プロック	8 黒褐色	(砂粒を含有した粘土質の土)、砂粒・ローム粒子微量
3 暗褐色	ローム粒子少量	9 紅褐色	(鉄分を多く含有した砂質の土)
4 紅褐色	砂粒微量	10 紅褐色	(鉄分を少く含有した砂質の土)
5 黑褐色	(砂粒・鉄分を含有した粘土質の土)、砂粒少量	11 暗褐色	ローム粒子微量
6 紅褐色	ローム小ブロック中量	12 黑褐色	黒色土粒子少量



第174図 第1号道路跡修痕実測図

遺物 出土遺物は、道路という性格上から非常に少なく、残存率も5~10%が28点、20~25%が4点であった。第176図1~4は、第1時期面の覆土中から出土している。土師器壺の口縁部片2点、底部片1点、須恵器長頸瓶の口縁部片1点である。5~15は、第2時期面の覆土中から出土している。土師器高台付坏片2点、土師器壺片3点、土師器壺、須恵器・蓋・高台付坏・横瓶、灰釉陶器碗の破片がそれぞれ1点である。6の灰釉陶器碗の口縁部片は、猿投窯折戸53号窯式併行の愛知県日進市尾北窯跡4'号窯式で、10世紀前葉に比定される。7の須恵器横瓶はやや粗製で、体部の閉鎖部が比較的平坦である。9の土師器壺は体部から底部にかけての破片で、底部に切り離しの回転糸切り痕が残っている。12の須恵器高台付坏と15の土師器壺片は東側溝⑤、13の須恵器長頸瓶の口縁部片と14の須恵器蓋片は、西側溝⑫から出土している。16~32は、第3時期面の覆土中から出土している。土師器は壺片3点、坏片1点、高台付坏片1点である。須恵器は坏片3点、蓋片1点、高台付坏片3点、盤片1点、壺片2点、長頸瓶片2点である。16の須恵器壺は底部から体部にかけての破片で、底部に切り離しの回転糸切り痕が残っている。第177図32~37は、須恵器壺の体部片拓影図である。33~35は、外面に格子目状の叩きが施され、内面に同心円状の當て具痕が認められる。36は、外面に格子目状の叩きが施される。37は、2本一組の櫛状工具による波状文が施されている。38の鉄鐵は、II区第3時期面上から出土している。



第175図 第1号道路跡遺物出土地点実測図

所見 今回の調査で確認された道路跡は、第1時期から第3時期にわたって、両側に側溝を持ち、両側溝間の芯々距離6.2~10.0mの計画的に構築された直線道路である。台地状の高いところでは、オープンカット工法による切り通しにし、低地の地盤の弱いところでは、波板状凹凸部を路床として地盤を固め、その上に路面を構築している。今回の調査区域内での第1時期面の最高点が標高26.976m、最低点が標高25.470mで、高低差は1.506mである。調査前の現況での高低差が約3mであるから、平坦でしかも直線的な道路を造るための技術が高かったことが窺われる。

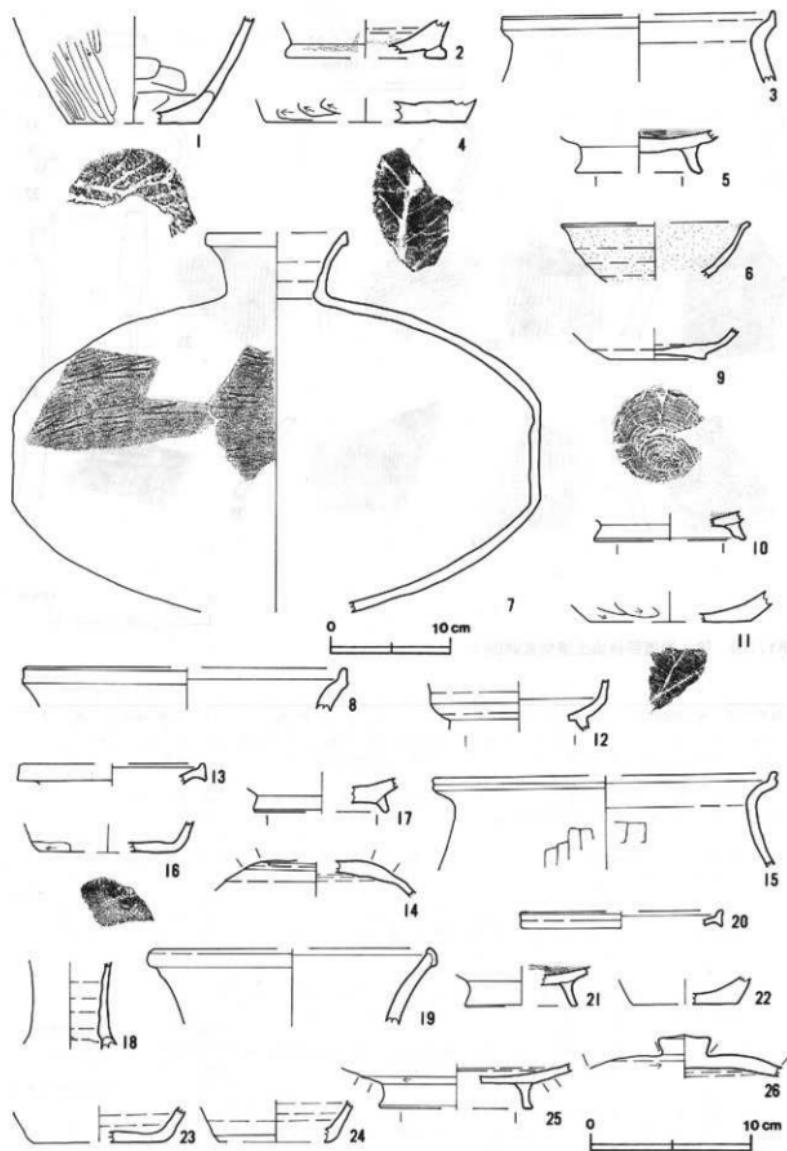
側溝は、第1時期が断面U字形及び逆台形、第2時期が浅い断面U字形を呈している。第3時期の側溝は、掘り込みが浅く、断面が浅いU字形でわずかに底がある程度である。第3時期になると道路として1・2時期にその基盤は十分に整い、構築時のような側溝の掘り込みは、必要ではないかと思われる。

両側溝間の芯々距離は、第1時期が6.2m~6.8m（低地部では最大10.2m）、第2時期が8.0m（低地部では10.0m）、第3時期が9.7~10.0mである。道幅は、1時期から3時期にかけて徐々に広がっていると考えられる。1・2時期に伴う3時期の内側にのこる側溝は、非常に硬く締まった覆土で埋まっていた。覆土は、自然堆積か人為堆積か判断に迷ったが、ある程度自然に埋没したところに、さらに人為的に土・砂利等を加えて突き固めたのではないかと思われる。

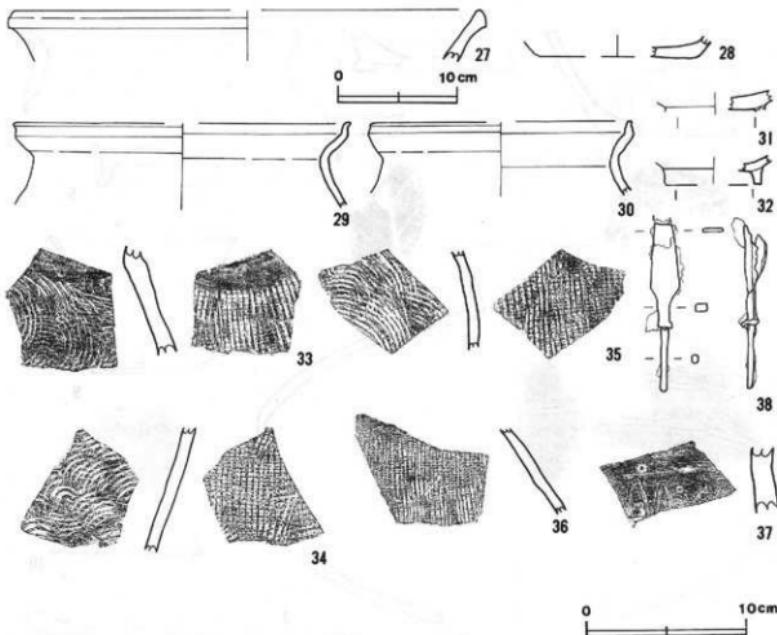
補修痕は、路面にできた陥没等を補修していたものと考えられる。補修及び波板状凹凸部に使われた土は、一定の基準に沿って混合され、人為的に埋められたものと思われる。道路の補修・管理については、ある一定の基準に沿って行われていたと思われる。本跡は、計画的に構築された直線道で、組織的に管理・運営されていた古代官道と考えられる。

第1号道路跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	治土・色調・焼成	備 考
第176図 1	甕 土 壷 器	B (6.5) C (8.0)	体部中位以上欠損。平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部外側縁位のヘラ磨き。内面輪削み痕を残す横位のヘラナダ。底部水素痕。	石英 雲母 砂粒 にぶい橙色 普通	P 2 10% P L57 I区第1時期覆土中
2	長 瓶 灰釉陶器	B (2.4) D [10.0] E 0.8	底部部。低い高台が付く。体部は外傾して立ち上がると思われる。	ロクロ整形。	繊砂 黒色粒子 胎土 灰白色 輪 刈一ヶ灰色 良好	P 4 5% P L57 I区第2時期覆土中
3	甕 土 壷 器	A [17.0] B (4.2)	体部から口縁部にかけての破片。裏部で屈曲して口縁部は外反する。端部は上方へつまみ上げられている。	口縫部内・外面横位のナダ。	石英 雲母 砂粒 にぶい橙色 普通	P 14 5% P L57 I区第1時期覆土中
4	甕 土 壷 器	B (1.5) C [12.4]	底部部。	体部下端ヘラ削り。底部本素痕。	長石 雲母 砂粒 明黄褐色 普通	P 15 5% P L57 I区第1時期覆土中
5	高台付坏 土 壷 器	B (2.6) D [8.0] E 1.7	高台部から体部にかけての破片。高台は「ノ」の字状に開き、端部は広がる。	ロクロ整形。内面磨き。底部粗削へラ削り後、高台貼り付け。内面黑色処理。	長石 雲母 砂粒 にぶい黄褐色 普通	P 1 20% P L57 I区第1時期覆土中
6	瓶 灰釉陶器	A [11.8] B (4.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内傾して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縫部、体部内・外面ロクロナダ。輪削は横け掛け。	白色粒子 胎土 にぶい黄褐色 輪 灰白色 良好	P 11 10% P L57 尾北朝鮮同4号式 I区第3時期覆土中
7	横 瓶 灰釉陶器	A [11.6] B (3.1)	体部及び口縁部一部欠損。体部は内側ながら立ち上がり、ラグビーボール状を呈し、中央部に口縁部が立ち上がり、外反して閉く。	口縫部内・外面ナダ。体部外側一部に平行タキ。体部内側片側に輪削み痕を残し、対面が粘土質で閉鎖されている。中央部に口縫部合せ。	長石 雲母 砂粒 灰色 普通	P 10 25% P L57 I区第2時期覆土中
8	甕 土 壷 器	A [20.0] B (2.6)	口縁部片。口縁部は外反し、端部は上方へつまみ上げられている。	口縫部内・外面ロクロナダ。	石英 雲母 砂粒 にぶい橙色 普通	P 13 5% P L57 I区第2時期覆土中



第176図 第1号道路跡出土遺物実測図(1)



第177図 第1号道路跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計画値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第176図 9	環土師器	B (1.9) C 6.0	底部から全体にかけての破片。平面。 全体は内縫しながら立ち上がる。	ロクロ整形。内面に強いロクロ目が残る。底部回転糸切り。	長石 雲母 砂粒 にぶい黄褐色 普通	P 24 25% P L 57 Ⅲ区第3時間面覆土中
10	高台付环上土師器	B (1.7) D [9.4] E 1.0	底部片。高台は「ハ」の字形に開き。 端部の内面に段を持つ。	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。 内面横位のヘラ磨き。内面黒色処理。	石英 雲母 砂粒 橙色 普通	P 27 5% P L 58 Ⅲ区第3時間面覆土中
11	夷土師器	B (1.9) C [10.0]	底部片。	体部下端ヘラ削り。底部木製板。	石英 雲母 砂粒 にぶい橙色 普通	P 31 5% P L 58 Ⅲ区第2時間面覆土中
12	高台付环須恵器	B (3.0) E (0.9)	底部から全体にかけての破片。高台部欠損。 全体は下位に縫を有し外縫して立ち上がる。高台はわずかに「ハ」の字に開く。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	長石 砂粒 灰褐色 普通	P 32 5% P L 58 Ⅲ区第1時間面覆土中
13	長縁底須恵器	A [11.4] B (1.2)	口縁部片。口縁端部は上下に突出している。	口縁部内・外面ロクロナデ。外面に自然縫付着。	長石 砂粒 にぶい褐色 普通	P 36 5% P L 58 Ⅲ区第1時間面覆土中
14	蓋須恵器	B (2.1)	頂部から全体にかけての破片。頂部は平盤で、外周部はなだらかに下降する。	頂部は左回りの回転ヘラ削り。外周部ロクロナデ。	長石 雲母 砂粒 陶灰色 普通	P 6 10% P L 57 Ⅲ区第1時間面覆土中
15	夷土師器	A [21.0] B (5.7)	全体から口縁部にかけての破片。縫部で屈曲して口縁部は外反する。縫部は外上方へつまみ上げられている。	口縁部内・外面ロクロナデ。体部外面縫位のヘラナデ。内面横位のヘラナデ。	石英 雲母 砂粒 橙色 普通	P 28 5% P L 58 Ⅲ区第1時間面覆土中

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第176回 16	壺 須恵器	B〔1.7〕 C〔8.2〕	底部から体部にかけての破片。平底。 体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面クロナデ。体部下端 手持ちヘラ削り。底部回転糸切り。	長石 石英 サンド 黒灰色 普通	P 3 10% P L57 Ⅱ区第3時期面覆土中
17	高台付壺 須恵器	B〔2.1〕 D〔8.4〕 E 1.0	高台部から底部にかけての破片。	底部回転ヘラ削り後、高台貼り付け。	長石 サンド 灰黄褐色 普通	P 5 5% P L57 Ⅱ区第3時期面覆土中
18	長頸瓶 須恵器	B〔5.4〕	頸部。口縁部は外傾して立ち上がるるものとみられる。	内・外面クロナデ。内・外面に自然輪付着。	石英 サンド 灰黄褐色 良好	P 8 5% P L57 Ⅱ区第3時期面覆土中
19	壺 須恵器	A〔17.2〕 B〔4.7〕	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部内・外面クロナデ。外面に自然輪付着。	黑色粒子 サンド 黄灰色 普通	P 9 5% P L57 Ⅱ区第3時期面覆土中
20	長頸瓶 須恵器	A〔11.4〕 B〔1.2〕	口縁部片。口縁端部は上下に突出している。	口縁部内・外面クロナデ。外面に自然輪付着。	長石 サンド にぶい褐色 普通	P 37 5% P L58 Ⅱ区第3時期面覆土中
21	高台付壺 土師器	B〔2.5〕 D〔7.0〕 E 1.6	底部片。高台は「ハ」の字状に開き、端部は広がる。	クロロ整形。内面磨き。体部外面へ テラ削り。内面黒色処理。	長石 青母 サンド 灰黄褐色 普通	P 12 20% P L57 Ⅱ区第3時期面覆土中
22	壺 土師器	B〔1.6〕 C〔6.4〕	底部片。体部は外傾して立ち上がる。	クロロ整形。	石英 青母 サンド にぶい褐色 普通	P 16 5% P L57 Ⅱ区第3時期面覆土中
23	壺 須恵器	B〔2.2〕 C〔8.4〕	底部から体部にかけての破片。平底。 体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面クロナデ。底部ヘラ ナデ。	石英 青母 サンド 灰黄褐色 普通	P 17 10% P L57 Ⅱ区第3時期面覆土中
24	壺 須恵器	B〔2.6〕 C〔7.0〕	体部片。体部は外傾して立ち上がる。	体部内・外面クロナデ。	長石 青母 サンド 灰黄褐色 普通	P 18 5% P L57 Ⅱ区第3時期面覆土中
25	壺 須恵器	B〔2.8〕 D〔9.6〕 E 1.6	底部から体部にかけての破片。高台 はわずかに外方へふんばる。	体部内・外面クロナデ。底部は回 転ヘラ削り後、高台貼り付け。	石英 青母 サンド にぶい褐色 普通	P 19 20% P L57 Ⅱ区第3時期面覆土中
26	壺 須恵器	B〔2.7〕 F 3.1 G 1.2	天井部から体部へかけての破片。頂 部は平坦で、外周部はなだらかに下 降する。つまみは腰高のボタン状。	天井部は右斜りの回転ヘラ削り。	長石 青母 サンド 灰黄色 普通	P 20 20% P L57 Ⅱ区第3時期面覆土中
第177回 27	壺 須恵器	A〔38.6〕 B〔4.3〕	口縁部片。口縁部は外反する。口縁 端部は上下に突出し、中央にわずか に隙を持つ。	口縁部に自然輪付着。	砂粒 黒色粒子 灰白色 普通	P 21 5% P L57 Ⅱ区第3時期面覆土中
28	壺 土師器	B〔1.4〕 C〔10.0〕	底部片。平底。	クロロ整形。底部ナデ。	長石 石英 サンド にぶい褐色 普通	P 25 5% P L57 Ⅱ区第3時期面覆土中
29	壺 土師器	A〔21.0〕 B〔5.3〕	体部から口縁部にかけての破片。頂 部で屈曲して口縁部は外反する。端 部は外方につまみ上げられる。	口縁部内・外面クロナデ。	石英 青母 サンド にぶい褐色 普通	P 29 5% P L58 Ⅱ区第3時期面覆土中
30	壺 土師器	A〔16.2〕 B〔4.6〕	体部から口縁部にかけての破片。頂 部で屈曲して口縁部は外反する。端 部は上方につまみ上げられる。	口縁部内・外面クロナデ。	石英 青母 サンド にぶい褐色 普通	P 30 5% P L58 Ⅱ区第3時期面覆土中
31	高台付壺 須恵器	B〔1.4〕	底部片。高台部欠損。	底部は回転ヘラ削り後、高台貼り付 け。	長石 サンド 灰褐色 普通	P 33 5% P L58 Ⅱ区第3時期面覆土中
32	高台付壺 須恵器	B〔1.8〕 D〔6.0〕 E 1.0	底部片。高台はほぼ倒下する。	底部は回転ヘラ削り後、高台貼り付 け。	長石 サンド 灰褐色 普通	P 34 10% P L58 Ⅱ区第3時期面覆土中

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第177回38	鉄鑿	(10.6)	1.6	-	(13.7)	Ⅱ区第3時期面直上	M 2 P L60

(2) 第2号道路跡（第178図）

位置 調査区I区の北東部、A 6 a4区。

重複関係 本跡は、第1号道路跡の最北部の上面に造られており、第1号道路跡より新しい。

規模と形状 確認できた長さ7m、最大幅2.8mで、中央部に向かって窪む状態の路面を呈している。調査区北端部の中央部から北東方向に検出され、調査区域外に延びている。

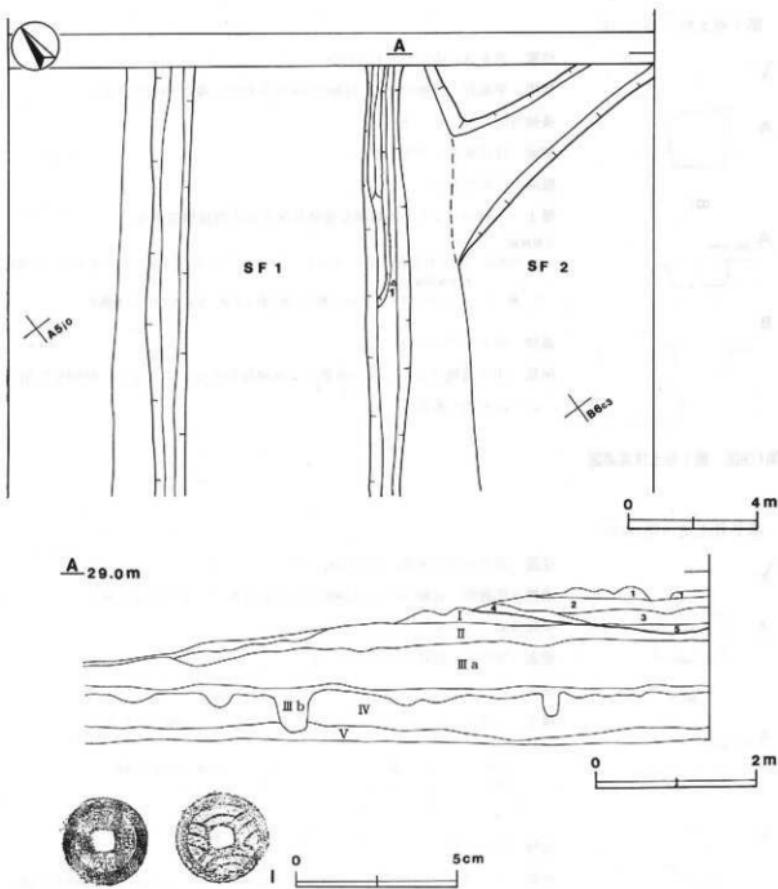
方向 N-90°-W

遺物 硬化面上より、万延元年（1860年）鋳造の寛永通寶四文銭1点が出土している。

所見 本跡の硬化面は、I区トレント土層断面の東側で確認することでき、第1号道路跡の第3時期面の覆土最上面にある。調査前のI区の中央部には、現況で幅約2mの道路が通っており、調査区域外まで延びていた。さらにI区トレントの北側で東へ向かう道と辻になっている。第1号道路跡の上面に当たる部分は、窪地になつていて、表土も浅く、道路整備等による搅乱がひどく未確認である。また、本跡の西への延長方向には、硬化面が確認されていないことから、調査区の中央部で東へと向かう辻になっていたものと思われる。本跡の時期は、出土遺物及び土層断面の観察から近世以降と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量



第178図 第2号道路跡・出土遺物実測図

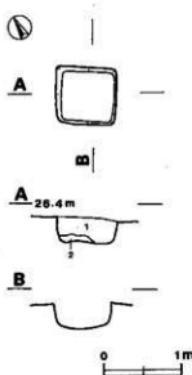
第2号道路跡出土遺物観察表

団版番号	銘種	計測値			出土地点	初鋲年(時代、年号)	備考
		径(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)			
第178図1	寛永通寶	2.8	0.6	0.1	6.0	硬化面直上	江戸深川 1869年(万延元年) M.1 P.L.60

2 土坑

今回の調査で、土坑3基が検出された。いずれも遺物は出土しておらず、時期や性格は不明である。以下、検出した土坑について記載する。

第1号土坑（第179図）



位置 調査区の中央部、D 4 el区。

規模と平面形 長軸0.57m、短軸0.53mの方形で、深さ40cmである。

長軸方向 N-35°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 2層からなる。不規則な堆積状況から人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中プロック・ローム小プロック少量、ローム大プロック・炭化粒子微量

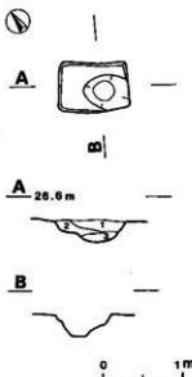
2 黄色 ローム小プロック・ローム粒子・焼土粒子少量、KP大プロック無微量

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第179図 第1号土坑実測図

第2号土坑（第180図）



位置 調査区の中央部、D 4 fl区。

規模と平面形 長軸0.87m、短軸0.63mの長方形で、深さ25cmである。

長軸方向 N-50°-E

壁面 緩やかに傾斜して立ち上がる。

底面 凹凸である。

覆土 3層からなる。明確に分層できることから人為堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム大・ローム小プロック少量、黒色粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム大プロック少量

3 黄色 ローム大プロック少量

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第180図 第2号土坑実測図

第3号土坑（第181図）

位置 調査区の中央部, D 4 区。

規模と平面形 長軸1.08m, 短軸0.68mの長方形で, 深さ35cmである。

長軸方向 N-52° E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

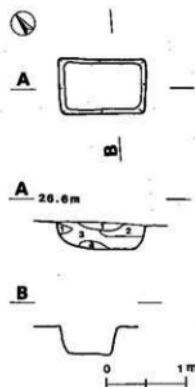
覆土 4層からなる。不規則な堆積状況から人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
- 2 喀褐色 ローム粒子中量, ローム大ブロック・ローム小ブロック少量
- 3 喀褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 4 棕色 ローム粒子中量

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく, 他の造構との重複関係もないことから, 時期や性格について不明である。



第181図 第3号土坑実測図

3 井戸跡

今回の調査で, 調査区中央部から井戸跡1基が確認された。以下, その特徴について記載する。

第1号井戸跡（第182図）

位置 調査区の中央部, D 3 j8区。

重複関係 本跡は, 第1号道路跡の西側溝①を掘り込んでいる。

規模と形状 平面形は円形, 断面形は確認面から0.98mの深さまで急傾斜を持った深めの椎体状をしており, そこから下は径0.67~0.68mの円筒形で, 底面は平坦である。規模は上面径1.37~1.29m, 底面径0.47~0.55m, 深さ1.50mである。

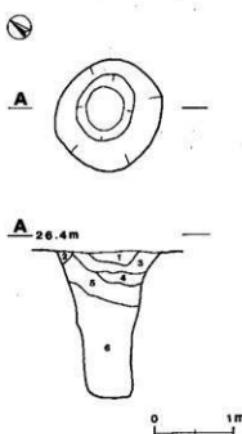
覆土 6層からなり, 不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 棕色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 喀褐色 ローム粒子少量
- 3 喀褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 4 喀褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子中量
- 5 棕色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量
- 6 棕色 ローム小ブロック・ローム粒子多量

遺物 出土していない。

所見 本跡は, 形状から井戸跡と考えられる。遺物はないが, 第1号道路跡の西側溝①を掘り込んでいるため, 第1号道路跡（第3時期面）が発見された後に構築されたものと思われる。



第182図 第1号井戸跡実測図

4 溝

今回の調査で、調査区の北部（I区南部）で第1号道路跡を東西に横切る3条の溝が確認された。3条の溝は、標高26.0～26.5mの低地部であり、調査区の西側からやや蛇行しながら第1号道路跡を掘り込み、東側へと延びている。確認できた長さは、第1号溝が約21m、第2号溝が約19m、第3号溝が約15mで、さらに調査区域外へ延びている。西側の調査区域外には、昭和23年発行の国土地理院の地形図に沼が記載されていたが、昭和45年以降になると沼の記載は見られない。しかし、現況でもかなりの量の雨が降ると湿地帯のようになり、東側へ水が染み出すことがある。第1号溝は、U字状に掘り込まれており、沼または湿地帯から水を流すために構築されたものと考えられる。第2・3号溝は、いずれも第1号溝に部分的に掘り込まれている。

確認された溝（付図2、第183図）の特徴については、一覧表で記載し、平面図、土層断面図及び土層解説を掲載する。

第1号溝土層解説（西側）

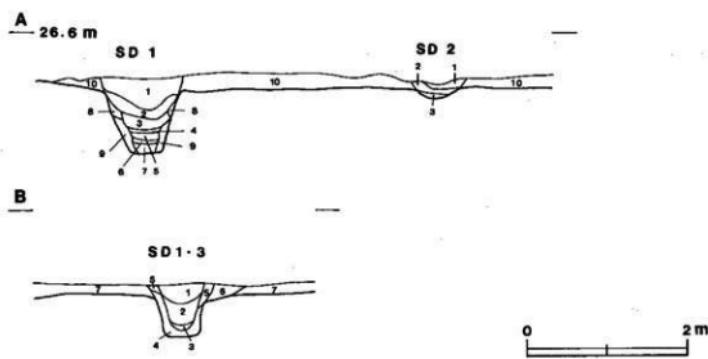
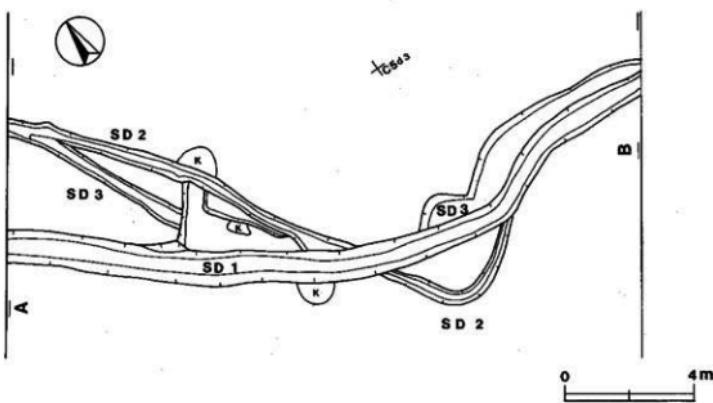
- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 黑褐色 ローム中ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 4 黑褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 黑褐色 ローム中ブロック中量、ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 6 黑褐色 ローム粒子微量
- 7 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 8 黑褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 9 黑褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 10 黑褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量

第1・3号溝土層解説（東側）

- 1 黑褐色 ローム粒子少量
- 2 黑褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 3 黑褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 4 黑褐色 ローム粒子微量
- 5 植物褐色 ローム粒子少量
- 6 黑褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 7 黑褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

第2号溝土層解説（西側）

- 1 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 黑褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子微量
- 3 墓褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量



第183図 第1～3号溝実測図

5 遺構外出土遺物

今回の調査で、遺構に伴わない縄文時代から近世までの土器片や鉄製品、石器等が出土している。ここでは、これらの出土遺物のうち特徴的なものについて掲載する。(第184~186図)

(1) 縄文土器

第184図2~18は、縄文土器片の拓影図である。2~5は、胎土に纖維が含まれる前期前葉黒浜式の土器である。2は口縁部片で、口縁は緩く外反し、口唇部直下から単節斜縄文RLが横方向に施文される。3は胴部片で、2種類の縄文原体による斜縄文が施されている。上部は単節RL、下部は多条RLの繩を横方向に施文している。4は胴部片で、2種類の縄文原体により羽状構成に施されている。5は、深鉢の底部片である。

6~12は半截竹管による平行線文や条線文が施され、前期後葉浮島式段階と思われる一群の土器である。6は口縁部片で、口唇部に3本の刻み目を有し、口唇直下に低い隆帯が貼付されている。

13~14は、半截竹管による条線文や変形爪形文が施されている中期中葉阿玉台式段階と思われる土器である。

15~17は、単節斜縄文や燃糸文が施されている一群の土器である。加曾利E式段階と思われる。18は太い沈線が施されている加曾利E式段階と思われる土器である。

(2) 弥生土器

第185図28~37は、弥生土器片の拓影図である。いずれも胴部片で、附加条一種(附加2条)の縄文が施されている。

(3) その他の遺物

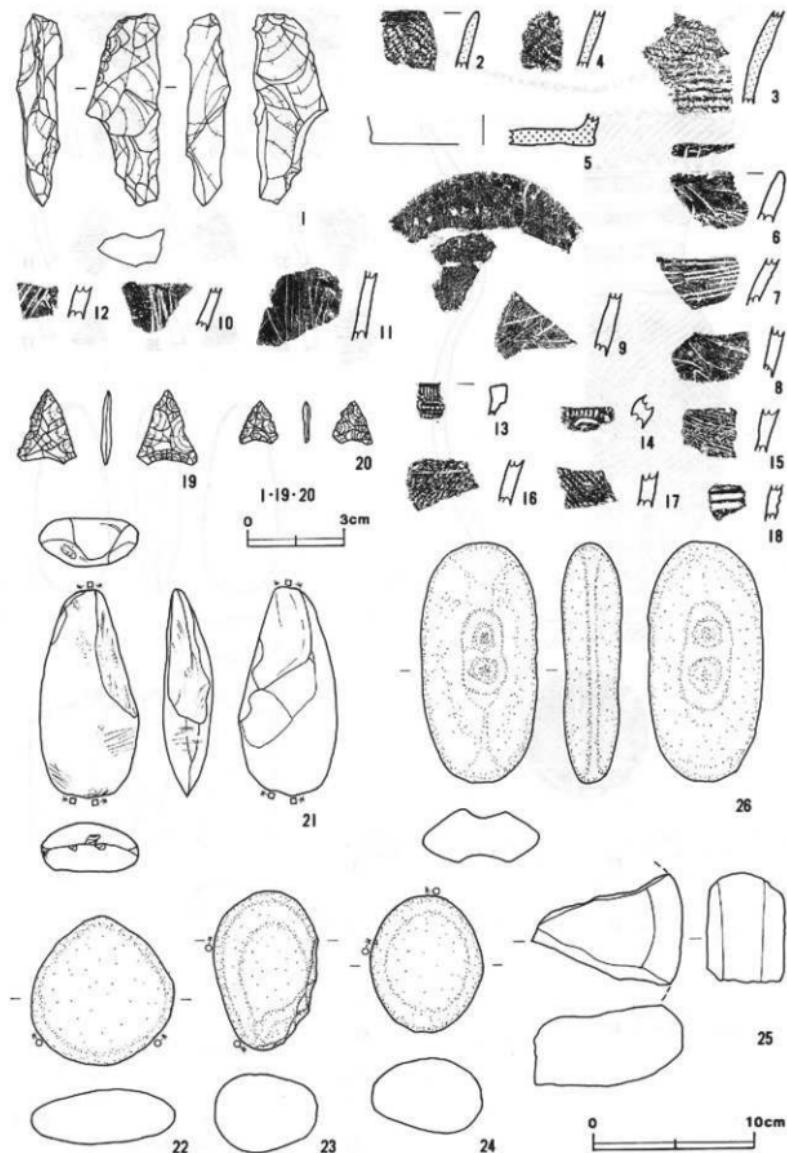
第186図57は、Ⅲ区を横切っている現道路の北側の擾乱から出土した、近・現代のコンクリート製の道標である。各面には、「東当字を（経て）…」「南長鬼路…」「西邊分…」「北柏井・鶴…」と刻まれている。本来は、調査区域を東西に横切る現道路と、当遺跡のほぼ同じラインにある現況の道路と交差している地点にあったものと思われる。当遺跡が廃棄された後も現代に至るまで「道」としての機能を果たしており、当遺跡が大字境になっていることを示す一つの資料と言える。

遺構外出土石器一覧表(旧石器時代)(第184図)

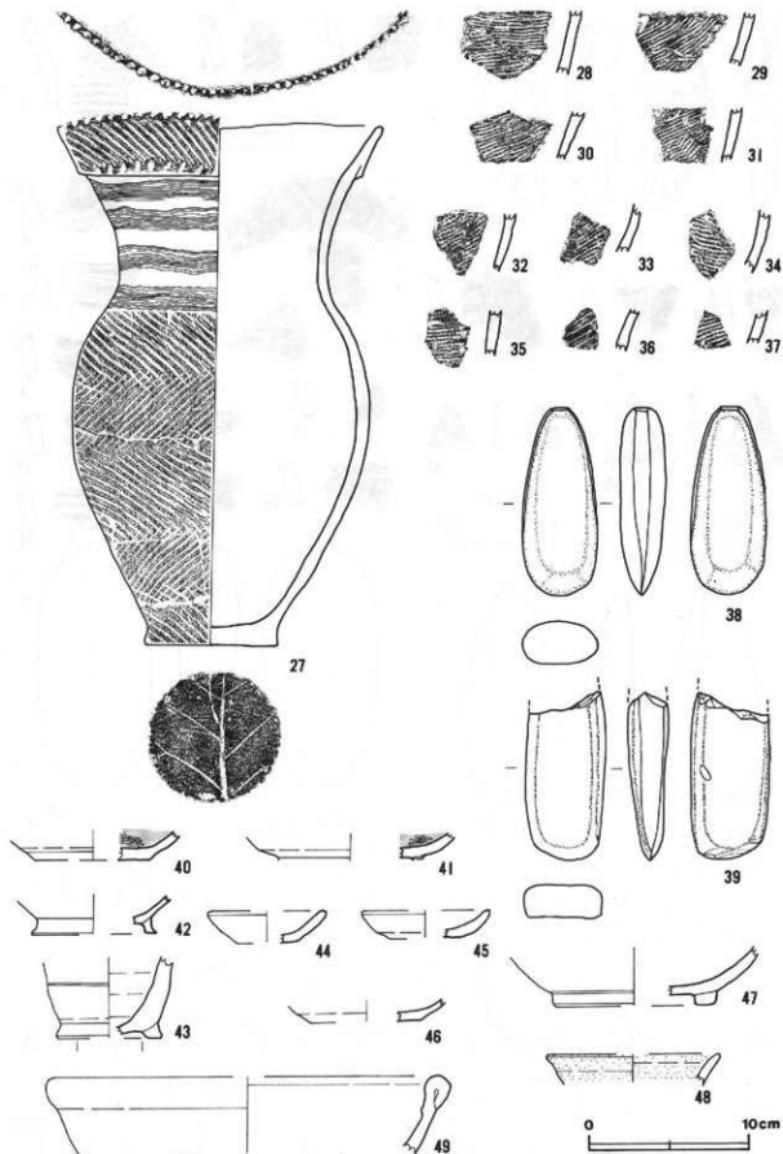
図版番号	種別	計測値			石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
1	鉄製鋸歯	5.9	2.0	1.4	15.7	チャート	Ⅲ区1トレンチ Q3 PL60

遺構外出土石器一覧表(縄文時代)(第184・185図)

図版番号	種別	計測値			石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
19	石 磨	2.3	1.8	0.3	1.0	チャート	Ⅲ区表土 Q4 PL59
20	石 磨	1.3	1.2	0.3	0.3	黒曜石	Ⅲ区表土 Q5 PL59
21	磨製石斧	12.8	6.1	3.0	339.3	流紋岩	Ⅲ区上層 Q6 PL60
22	磨 石	9.0	9.1	2.4	320.4	砂岩	I区上層 Q9 PL60



第184図 遺構外出土遺物実測図(1)



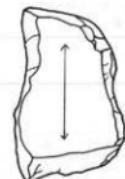
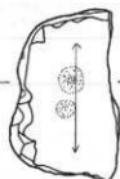
第185図 遺構外出土遺物実測図(2)



50



52



51



54



55



53



56

0 10cm

0 5cm



57

0 10cm

第186図 遺構外出土遺物実測図(3)

回収番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
黒184E23	磨石	(9.7)	(6.4)	(4.4)	(394.0)	砂岩	I区上層	Q10 P L60
24	磨石	8.3	6.9	4.6	363.4	砂岩	III区1トレンド	Q11 P L59
25	石皿	(9.4)	6.8	4.6	(305.3)		II区上層	Q8 P L60
26	四石	14.8	7.3	3.7	449.0	砂岩	III区上層	Q7 P L60

遺構出土遺物観察表（弥生時代）（第185図）

回収番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴				胎土・色調・焼成	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
27	広口壺 弥生土器	A 19.8 B 32.4 C 8.2	ほぼ完全形に近い広口壺。口縁部は複合口縁を呈し、縞文が施文される。複合口縁の口唇部には幾重車輪文の底による圧痕。下端には縞文断体による貫圧が施される。腹部は鋸齒状工具(10cm)による振刷の弱い横走波状文が4条通っている。肩部には附加条一樣(肩加2条)の縞文が施文され、羽状構成をとる。底部に木葉模が残る。体部から頸部にかけて擦付着。	長石 雲母 砂粒	にぶい赤褐色 普通	P45 90% P L58 II区1トレンド 弥生後期中葉 二軒屋式系		

遺構出土石器一覧表（弥生時代）（第185図）

回収番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
38	磨製石斧	11.6	4.7	2.7	223.0	砂岩	III区表土	Q12 P L60
39	磨製石斧	9.0	9.1	2.4	208.0	砂岩	III区表土	Q13 P L60

遺構出土遺物観察表（第185図）

回収番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴				手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
			A	B	C	D			
40	环土器	B [1.9] C [7.0]	底部から体部にかけての破片。平底。 体部は外傾して立ち上がる。	底部ナデ。体部下端へラ削り、外面 ロクロナデ。内面へラ磨き。内面黑色 處理。	石英 雲母 砂粒	にぶい黄褐色 やや不良	P23 10% P L58 III区表土		
41	高台付环 土器	B [1.7]	底部から体部。高台欠損。	高台粘り付け後、ナデ。体部外面ロ クロナデ。内面へラ磨き。内面黑色 處理。	石英 雲母 砂粒	にぶい橙 普通	P26 5% P L58 III区表土		
42	高台付环 須恵器	B [2.4] D [7.6] E 1.0	底部から体部にかけての破片。体部 は外傾して立ち上がる。高台は底部外 周にあり、外方にふんばる。接地面 は平ら。	体部内・外面ロクロナデ。底部ヘラ 削り後、高台粘り付け。	石英 石英 砂粒	褐色 普通	P35 5% P L58 III区表土		
43	椎鉢 須恵器	B [5.0] D [6.6] E 0.9	高台部から体部にかけての破片。高 台は短く「ハ」字状に開く。体部は 内側しながら立ち上がる。	体部内・外面ロクロナデ。底部回転 ヘラ削り後、高台粘り付け。	石英 砂粒	褐色 良好	P7 10% P L58 I区表土		

遺構出土遺物観察表（第186図）

回収番号	器形	器質	計測値				残存率	胎土	色調	器形・手法の特徴	備考
			A	B	C	D					
44	小皿	土師質	[7.4]	2.4	[6.6]	-	25%	長石 雲母 砂粒	にぶい橙色	平底。体部内・外面ロクロ ナデ。	P41 P L58
45	小皿	土師質	[7.8]	1.7	[4.4]	-	10%	長石 雲母 砂粒	にぶい橙色	平底。体部内・外面ロクロ ナデ。体部外面に擦を持つ。	P42 P L58
46	小皿	土師質	-	(1.2)	[7.0]	-	5%	長石 雲母 砂粒	橙色	平底。体部内・外面ロクロ ナデ。	P43 P L58
47	捏鉢	土師質	-	(4.6)	-	[10.2]	10%	長石 雲母 砂粒	橙色	体部内・外面ロクロナデ。 高台粘り付け。	P40 P L58
48	天目茶碗	陶器	[10.8]	(1.8)	-	-	5%	細砂	(駆)灰白色 (駆)灰褐色	口縁部は短く外反。	P22 P L58
49	捏鉢	陶器	[24.0]	(4.7)	-	-	5%	細砂	(駆)にぶい青褐色 (駆)明黄褐色	口縁部は折り返され、隙間 が残る。器面は粗緻。	P46 P L58

遺構外出土石製品一覧表（第186図）

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
50	浮子	8.1	6.0	4.2	32.4	軽石	灰土	Q14 PL60
51	砥石	(7.7)	(2.5)	(0.8)	(436.7)	粘板岩	試掘トレンチ	Q1 PL59
52	砥石	18.4	5.5	3.4	68.4	粘板岩	灰土	Q2 PL60

遺構外出土鉄製品一覧表（第186図）

図版番号	種別	計測値				出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
53	鐵錐	(3.6)	(1.3)	(1.1)	(6.0)	Ⅲ区灰土	基部 M5 PL60
54	角釘	3.8	1.4	0.6	3.6	Ⅱ区上層	先端一部欠損 M3 PL60

遺構外出土古錢一覧表（第186図）

図版番号	銭種	計測値				出土地点	初鑄年(時代、年号)	備考
		径(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
55	靖道元寶か	2.3	0.6	0.1	2.0	Ⅲ区1周面裏土中	中国1032年(北宋、明道)	M4 筆書 PL60
56	寛永通寶	2.2	0.6	0.1	1.8	Ⅲ区灰土	江戸 寛永13年(1636年)	M6 PL60

表11 土坑一覧表

土坑番号	位置	長軸方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)					
1	D4e1	N-35°-E	方形	0.57×0.53	40	垂直	平坦	人為		
2	D4f1	N-50°-W	長方形	0.87×0.63	25	緩斜	凹凸	人為		
3	D4f1	N-52°-E	長方形	1.08×0.68	35	垂直	平坦	人為		

表12 溝一覧表

溝番号	位 置	主 軸 方 向	形 状	規 模				壁面	断面	方 位	覆 土	出 土 遺 物	備 考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)						
1	C4d0~C5d4	N-13°-W	蛇行状	(21.50)	1.00~0.70	0.50~0.30	45	外傾	U字状	詰-傾	自然		S F 1 → 本跡
2	C4b0~C5c3	N-35°-W	蛇行状	(18.70)	0.60~0.30	0.28~0.14	10	緩斜	狭やかなU字状	詰-傾	自然		S F 1 → 本跡
3	C4b0~C5d4	N-22°-W	蛇行状	(14.80)	0.60~0.40	0.32~0.20	10	緩斜	狭やかなU字状	詰-傾	自然		S F 1 → 本跡

第4節 まとめ

今回の調査で、道路跡2条、土坑3基、井戸跡1基、溝3条が検出された。当遺跡の主体をなす時期は、奈良・平安時代であり、前記の道路跡2条のうち、第1号道路跡がこの時期にあたる。第2号道路跡は、近世以降の道路跡である。土坑3基、井戸跡1基、溝3条については、時期や性格等を明確にする資料が得られず、詳細は不明である。ここでは、検出された遺構と遺物について時代ごとに概要を述べ、まとめとしたい。

1 旧石器時代

旧石器の遺物は、チャートの切り出し状ナイフ形石器1点が、Ⅲ区1トレンチより出土している。今回の調査で、旧石器時代の明瞭な石器集中地点は検出されなかった。

2 繩文時代

今回の調査で、繩文時代前期から中期にかけての繩文土器片、石器が少量出土しているだけで、この時期に該当する遺構は確認できなかった。

出土した繩文土器はいずれも破片で、前期中葉黒浜式が4点、前期後葉浮島式が7点、中期中葉阿玉台式が2点、加曾利E式段階と思われるものが4点である。出土地点は、表土及び覆土上層である。

『友部町史』¹⁰によると、繩文遺跡の分布調査で、当遺跡の周囲には、駿遊堂遺跡、仁古田遺跡、西仁古田遺跡、長兎路遺跡が確認され、前期から晩期にかけての土器が採集されている。当遺跡の遺物は、覆土中から出土していることから、第1号道路跡の構築時に周辺から運ばれた土に混入した可能性も考えられる。

3 弥生時代

今回の調査で、Ⅲ区2トレンチの黒ばく土の堆積層から、後期中葉二軒屋式の影響を受けていると思われる広口壺がほぼ完形に近い状態で出土している。体部から頸部にかけて縫が付着し、煮炊きに使われた痕跡と思われるが、この時期の遺構は確認されていない。しかし、当遺跡から直線距離で西約500mに久保塚群があり、二軒屋式系の土器が出土している住居跡を確認している。当遺跡周辺は、弥生時代後期の生活圏内であったと考えられる。

4 奈良・平安時代

近年、古代の交通路に着いて文献史学や歴史地理学において積極的に研究が行われ、全国各地の発掘調査例も多く報告されている。その成果は、古代律令国家の絶対的な地方支配体制を実感されるものである。古代「東海道」の発掘調査例は、平成6年に静岡県静岡市の「曲金北遺跡」¹¹で初めて確認された。出土遺物の中に「常陸國鹿嶋郡…」と記された木簡があり、常陸国から都へのルートである古代「東海道」であることが確認されている。

また、常陸国内における駅路の研究も進められ、「常陸國風土記」「風土記逸文」「続日本紀」「日本後記」「延喜式」「和名類聚抄」等の史料をもとに駅家の所在地比定と、これらをつなぐ駅路の想定がなされている。『新編常陸國志』¹²の中山信名、宮本茶村らの近世の考証学者に始まり、多くの研究者によって様々な説が唱えられている。

近年、古代の幹線道路は、計画的につくられた直線的な大道であったとする説が、木下良氏をはじめとする考古地理学の研究者たちによって航空写真を使うなどして実証的に進められてきた。¹³そして、全国各地で発掘調査例が報告され、同一性が証明されつつある。そうした中で、当遺跡は、国府の推定地【石岡市】- 安侯駅家【岩間町】- 河内駅家【水戸市】をつなぐ想定ライン上に位置していることが、早くから指摘されてきた。

その想定ライン上での当遺跡の位置は、安侯駅家推定地から北東に約1km、河内駅家推定地から南西に約15kmの地点である。駅家と駅家の間の距離は、原則として30里（約16km）であるから、まさに計画的直線道路の想定ライン上に當てはまる。さらに、「野論裁許状」の絵地図には、当遺跡と合致する「五万堀」の記述がみられる。これは、県内各地に残る八幡太郎義家（源義家）伝説に由来するものであり、五万の兵が通って道が埋んだという「五万堀（窪）」という小字名または通称として、石岡市から水戸市の古代東海道の推定ライン上の美野里町・岩間町・友部町に残るものである。¹⁷当遺跡の時期は、源義家の時代と異なるが軍用道路として多くの軍團が利用してきたことを後世に伝えられてくるうちに源義家に置き換えられて伝承として残ったと思われる。

常陸国内の駅路については、「常陸國風土記」¹⁸の総記に常陸國の名の起りを始めとして駅家名と所在について、「続日本紀」「日本後記」「延喜式」「和名類聚抄」に駅家などについての記述がみられる。

資料①『常陸國風土記』

（總 記）往来ノ道路、江海ノ津済ヲ隔テズ、郡鄉ノ境界、山河ノ峯谷ニ相続ケレバ、直通ノ義ヲ取りテ、名稱ト為セリ。

（信太郡条）復ノ浦ノ津アリ。便チ、駅家ヲ置ケリ。東海ノ大道ニシテ、常陸路ノ頭ナリ。コノ所以ニ、伝駅使等、初メテ国ニ臨ラムニハ、先プロト手ヲ洗ヒ、東ニ面キテ香島ノ大神ヲ拝ミテ、然シテ後ニ入ルコトヲ得ルナリ。

（行方郡条）此ヨリ北ニ、曾尼村アリ。古ニ、佐伯アリ、名ヲ疏羅□古ト日ク。名ヲ取りテ、村ニ着クルナリ。今、駅家ヲ置ク。此ヲ、曾尼駅家ト謂フ。…（中略）…即、香島ニ向ヒテ陸ノ駅道ナリ。

此ヨリ往キテ南廿里、板來村アリ。近ク海浜ヲ臨ミテ、駅家ヲ安置ケリ。此ヲ板來駅家ト謂フ。

（那賀郡条）平津駅家ヨリ、西ニ一二里、岡有リ。名ヲ大樹ト日ク。…

郡ヨリ東北、栗河ヲ挟ミテ駅家ヲ置ク。（本、栗河ニ近クシテ河内駅家ト謂ヒキ、今、本ニ隨ヒテ名ヅク）其ノ南ニ当リテ、泉、坂ノ中ニ出ヅ。多ニ流レテ尤清ク、櫛井ト謂フ。…

（久慈郡条）此ヨリ良ノカタ十里ニ、助川駅家アリ。

（多賀郡条）郡ノ南廿里ニ、藻島駅家アリ。

資料②『続日本紀』 養老三年閏七月丁丑（廿一）条

磐城国、駅家一十處ヲ置ク。

資料③『日本後記』弘仁三十年十月癸丑条

常陸国安侯、河内、石橋、助川、藻島、棚崎六駅ヲ廢ス、更ニ小田、雄薩、田後等三駅ヲ建ル。

資料④『延喜式』卷二十八兵部省

常陸國駅馬（株谷五疋、安侯二疋、曾禰五疋、河内、田後、山田、雄薩各二疋）

資料⑤『和名類聚抄』高山寺本卷第十居處部道路具第百四十三駅の項

株谷（信太）安侯（茨城）曾祢（行方）河内（那賀）田後（那賀）山田（久慈）雄薩（久慈）以上常陸

ここで常陸国内の駅路の改廃について、文献資料等をもとにまとめておきたい。駅家の推定地については諸説あり、駅跡の発掘調査例はないが、関連遺跡またはその周辺遺跡と考えられる調査報告がされている。しかし、考古学的に確証を得るに至っていない。ここでは、駅家の推定地についての記述は省略する。

国府を境にして、国府以南の駅路は、「古東海道」と新「東海大道」の新旧二つのルートが考えられている。「古東海道」は、相模國から海を渡り、上総國・下総國を経て常陸国に入り、板來駅家から曾尼駅家へと霞ヶ浦の東岸の陸路を進み国府へ至る。板來駅家は、弘仁6年（815年）に廃止されている。新「東海大道」は、宝龜

2年（771年）に武藏国・東海道への配属によりできた新しい駅路で、相模国・武藏国・下総国を経て常陸国に入り、様谷駅家からほほ直線のルートをとて曾禰駅家に着き、ここからさらに直線のルートをとり国府へと向かう。国府以北の駅路は、以南の駅路と性格が異なり、蝦夷征討に関連して養老3年（719年）に設置された磐城国の海道十駅に連結するために同2年乃至3年に設置されたものである。そのルートは、国府を発して安侯駅家を経て河内駅家に至り、那珂川を渡って、石橋駅家、助川駅家、藻島駅家、棚橋駅家を経て、磐城国の海道十駅に連結していた。これら四駅は、弘仁2年（811年）4月の陸奥国・海道十駅の廃止に伴って、翌3年10月に廃止され、新たに田後、山田、雄羅の三駅が設置され、新しい駅路が開かれた。それに応じて、弘仁3年に安侯・河内の両駅家は廃止された。新しいルートは、国府を発して、一端廃止されたものの新設三駅との連絡の必要性から後に復活した安侯駅家、河内駅家を経て、田後駅家、山田駅家、雄羅駅家を経て陸奥国へ至る駅路である。³⁰⁾

国府の推定地とされる石岡市には、当財団が発掘調査した「鹿の子C遺跡」³¹⁾が所在する。鹿の子C遺跡は、国衙工房と考えられ、大規模な鍛冶工房群跡などが確認されている。8世紀末から9世紀代にわたって、日常的な鉄製品や工具、鉄鎌や小札などの武器・武具が生産されていた。当時の常陸国は、蝦夷征討に関連して、軍役の徵發、軍糧や武器の調達、補給物資の輸送など、重要な役割を果たしていたと考えられている。

以上のことから、当遺跡の該当するルートは、蝦夷征討に関連して、8世紀初頭に駅路として設置され、9世紀初頭に改編された後も、その役割を果たしていたことになる。

(1) 規模と構造について

今回の調査で確認された第1号道路跡は、第1時期から第3時期にわたって、両側に側溝を持ち、両側溝間の芯々距離6.2~10.2mの計画的に構築された直線道路である。台地状の高いところでは、オープンカット工法による切り通しにして路面を構築している。その痕跡は、調査区域外の北側と南側で確認することができ、現在でも道路として利用されている。低地の地盤の弱いところでは、盛り土をして、断面がカマボコ状を呈した路面を構築している。

側溝は、第1時期が断面U字形及び逆台形、第2時期が浅い断面U字形を呈している。第3時期の側溝は、掘り込みが浅く、断面が浅いU字形でわずかに庇む程度のものや側溝の確認できない部分もある。第3時期の構築時には、1・2時期にその基盤は十分に整い、構築時のような掘り込みの深い側溝の必要な部分もあつたと思われる。側溝の確認できない部分は、両脇に段差を設けて道路幅を区画していたと考えられる。

両側溝間の芯々距離は、第1時期が6.2m~6.8m（低地部では最大10.2m）、第2時期が8.0m（低地部では10.0m）、第3時期が9.7~10.0mである。道幅は、1時期から3時期にかけて徐々に広がっていると考えられる。道路幅は、全国の調査例を見ると奈良時代が12~15m、平安時代に入ると6mと狭くなる報告例が多い。Ⅲ区1トレンチにおいては、3時期に伴うそれぞれ対応する側溝と硬化面を比較的明瞭に確認することができた。東側の側溝は、道路中央より第1時期から順に第2時期、第3時期と外に向かって広がる。西側の側溝は、道路中央から第1時期、第3時期、第2時期となり、第3時期の側溝が第2時期の側溝を掘り込んでいる。この地点は、比較的平坦地で覆土の流入も他の調査区に比べ緩やかで、水による浸食等の影響も比較的少なかったと思われる。そのため、硬化面の状況も明確に観察することができた。

ここで計測した各時期の側溝間の芯々距離を当時の尺度に換算して検討を加えてみたい。当時の尺度は、大宝令制（701年）による高麗尺を基にするものと和銅の制（713年）による唐尺を基とするものがある。高麗尺の1大尺が約35.6cm、1小尺が約29.6cmである。和銅の制では、唐尺の大尺・小尺に統一され、1大尺が29.6cmであり、大宝令制の1小尺と同じである。大宝令制の高麗尺で、第1時期が約19尺、第2時期が約25尺、第3

時期が約27尺である。同様に和銅の制の唐大尺で1大尺を約29.6cmとして換算してみると、第1時期が6.88m²で約23尺、第2時期が9.0mで約30尺、第3時期が9.76mで約33尺となる。第2時期においては、唐大尺で約30尺と切りのよい数字である。資料②の『統日本紀』の記述の養老3年(719)磐城国に十駅が置かれ、磐城国府までの駅路が繁がった時期と重なってくる。第1時期の値は、高麗尺、唐大尺のいずれにしても半端な数である。どちらかといえば、高麗尺の規格に沿っているように思える。あくまでも想定でしかないが、第1時期面は、8世紀初頭に遡ることができる。

また、第3時期面から徐々に掘り下げていく過程で確認できた1・2時期に伴うとおもわれる側溝の痕跡は、非常に硬く締まった覆土で埋まっていた。覆土は、自然堆積か人為堆積か判断に迷ったが、ある程度自然に埋没したところに、さらに入為的に土・砂利等を加えて突き固め、路面として利用し、道幅を広げていったのではないかと考えられる。

(2) 路面に残る痕跡について

補修痕とした円形状及び不整橢円形状の痕跡については、地面にできる水たまりとよく似た形状をしており、路面にできた窪み等に砂利を混ぜた粘土質の土を充填し、突き固めたものと思われる。土層断面で同一と思われる層が明らかに分層できることが多く、入為的に補修土を入れながら突き固めた痕跡と思われる。補修及び波板状凹凸部に使われた土は、一定の基準に従って混合され、入為的に埋められたものと思われる。

補修痕の中で細い溝状のものについては、前記の通り平行したものの幅が1.21mと1.33~1.35mを検出することができた。尺度に換算すると、高麗尺で1.21mが約3尺4寸、1.33~1.35mが約3尺8寸、唐大尺で1.21mが約4尺、1.33~1.35mが約4尺5寸となる。唐大尺で換算した数値からは、規格化された可能性を感じさせる。

こうした轍と思われる検出例は少なく、京都府長岡市の神田古道跡、大阪府の余部遺跡等で報告されているのみである。神田古道跡では、長岡京条坊施行以前のものとを考える轍や牛の足跡がみつかっており、余部遺跡の轍は、6世紀後半から7世紀前半のものとされている。また、車ないしそれに関わる実物資料が検出された例もわずかしかない。兵庫県の吉田南遺跡でみつかった7世紀後半から8世紀のものとされるマツ材製の車輪、奈良県の平城宮および平城宮出土の8世紀から9世紀後半とされる車輪の断片が数個みつかっている。いずれも畿内及びその周辺であり、東国における調査報告例や資料等はほとんどないが、東国においても人または物資の輸送等のために車輪を備えた輸送具が使われていた可能性があると考えられる。

(3) 年代について

II区1トレントの火山灰分析では、Ⅳ層の軽石が、6世紀中葉に榛名山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)に由来する可能性が指摘できる。また、Ⅳ層と側溝の覆土上層等にみられる軽石は、A.D.1108年(天仁元年)に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B)に由来すると考えられる。火山灰による分析からは、6世紀中葉以降に構築され、12世紀前葉に側溝が完全に埋没したことを見出せる。

遺物は非常に少なく、ほとんどが破片で路面及び側溝の覆土中から出土している。出土遺物には、土師器、須恵器、灰釉陶器、鐵鎌などがある。7世紀の後半と考えられる須恵器の横瓶は、同一個体の破片が第2時期面の覆土中から出土している。第1号道路跡の構築年代より古いと思われ、伝世したものと考えられる。底部に木葉痕の残る土師器甕の底部が、第1時期面の覆土中から出土して、8世紀後半に遡ると考えられる。新しいものとしては、10世紀前葉と考えられる旗投窯折戸53号窯式併行の尾北窯縫岡4号式の灰釉陶器が、第3時期面の覆土中から出土している。須恵器の横瓶を除く、ほとんどの出土遺物は、8世紀後半から10世紀の前半と考えられる。遺物の出土地点から各時期の構築年代を判断することは困難である。第1号道路跡の全体を通しての使用年代を想定するのみである。

駅路として8世紀初頭から9世紀代まで機能しており、駅制が廃止された後も道路として使われてきたと考えられる。各時期の構築年代については、遺物の出土状況から判断することが困難であり、あくまでも想定の域を脱することはできない。文献資料との照合で、養老3年の磐城国の十駅に連結するために同2年乃至3年に設置された時期と、弘仁2年から3年にかけて海道から山道に改変された時期が重要である。この時期は、蝦夷征討の繰り返された奈良期と平安期に当たる。さらに3時期間に照合した場合、第1時期面が奈良期初頭、第2時期面が奈良期・平安初頭、第3時期面が平安期と想定できる。第1時期面を奈良期の初頭としたのは、道路幅が狭く、勿来の間以南までを東海道とし、国内の駅路がある程度整備されていたと思われるからである。しかし、各時期の設定については、史料を基にした推定でしかないことを付け加えておきたい。

5 近世

調査区I区北部で、第2号道路跡が確認された。硬化面は、第1号道路跡北端の第3時期面覆土最上面に確認した。第1号道路跡が官道として廃棄され、管理されなくなった道路は荒れるがままであったと思われる。しかし、人々の生活道路として利用するには十分であったかと思われ、廃棄後から現在までに至ったと考えられる。その間にI区北部で枝分かれして、本跡は東へと向かう道として機能していたと思われる。時期については、遺物1点のみの出土であるが、硬化面直上であることと土層断面の観察から近世以降とした。

以上、今回の調査で、確認された第1号道路跡は古代官道の東海道であり、律令期における常陸国様相の一端をうかがい知ることができた。しかし、調査範囲は限られた部分であり、常陸国内における古代官道の一端を垣間見たに過ぎなく、今後に残された問題は多く、周辺の関連遺跡の調査と相まって、さらに問題を深化させていく必要があろう。

註

- (1) 友部町史編纂委員会 「友部町史」1990年2月
 - (2) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 「曲金北遺跡」「静岡県埋蔵文化財研究所報告書 第68集」1996年3月
 - (3) 江戸後期に中山信名によって作られたが、存命中に完成せず、明治34年（1901年）に歴史家栗田寛によって完成した。
 - (4) 木下良 「常陸国古代駅路に関する一考察 -直線的計画古道跡の検出を中心として-」『國學院雑誌』85-1 1984年
 - (5) 白田清郎家所蔵 「野論裁許状及び絵地図」1686年（貞享3年）
 - (6) 長谷川武 「常陸国における古代駅制の研究（一）～（八）」『郷土文化』第30～36・39号 1989～1995・1998年3月
 - (7) 「常陽藝文」編集部「常陸国風土記」1992年4月
 - (8) 久信喜一 「古代常陸国駅路について」『茨城史林』第21号 1997年6月
 - (9) 茨城県教育財團 「鹿の子C遺跡」「茨城県教育財團文化財調査報告第20集」1983年3月
- 参考文献
- ・西国分寺地区遺跡調査会 「武藏国分寺北方地区 日影山遺跡・東山道武藏路」1999年3月
 - ・木下良 「計画的古代道の復元 -常陸国を事例に-」『第二回シンポジウム常陸の道』1991年3月
 - ・中山晋 「下野国と東山道」「古代文化」第49巻8号 1997年8月
 - ・高橋美久二 「律令制支配と交通体系の整備」「考古学による日本歴史9 交易と交通」1997年2月
 - ・大阪府立近つ飛鳥博物館 「修羅！その大いなる遺産 古墳・飛鳥を運ぶ」1999年4月
 - ・古代交通研究会 「古代交通研究 新刊号」1992年4月

第6章 向原遺跡・向原塚群

第1節 遺跡の概要

向原遺跡・向原塚群は、友部町の南東部にあり、南側に潤沼川の支流である枝折川の沖積低地を望む標高28~30.5mの台地上に位置している。また、当遺跡の東側の谷津を隔てた台地上には仲丸遺跡が立地している。調査区域は、東西約177m、南北約97m、面積11,344m²であり、現況は山林である。

今回の調査によって、堅穴住居跡17軒、堅穴状造構8基、塚2基、土坑187基、遺物包含層1か所を確認した。このうち縄文時代の遺構には、堅穴住居跡7軒と陥入穴1基などがあり、調査区の中央部から北側にかけて点在している。また、調査区南東部の遺物包含層は、早期から中期までの土器を包含している。弥生時代後期の遺構は、調査区の東部から堅穴住居跡3軒と堅穴状造構1基などが確認され、調査区の西側に分散している。中世になると、調査区の北西部で塚2基が確認され、塚下の埋納坑から源法寺焼の甕が出土している。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に50箱出土している。弥生時代後期の堅穴住居跡からは、小形高坏、壺、壺形土器などが出土している。古墳時代後期の堅穴住居跡からは、土師器坏、碗、甕などが出土している。その他の遺物としては、ナイフ形石器、剥片、石核、縄文土器、土製円板、尖頭器、石鐵、石錐、石製装飾品、打製石斧、磨石、凹石、片刃石斧、高坏、鉢、土師質土器甕、切子玉形土製品、寛永通寶などが出士している。

第2節 基本層序の検討

調査区南部(C 3j7~C 3j8区)にテストピットを設定し、深さ3.0mまで掘り下げ、第187図に示すような土層の堆積状況を確認した。

第1層は、14~43cmの厚さの耕作土層で、極暗褐色をしている。

第2層は、11~38cmの厚さで、褐色をしたソフトローム層である。

第3層は、6~30cmの厚さで、砂粒を少量含む、褐色をしたソフトローム層である。

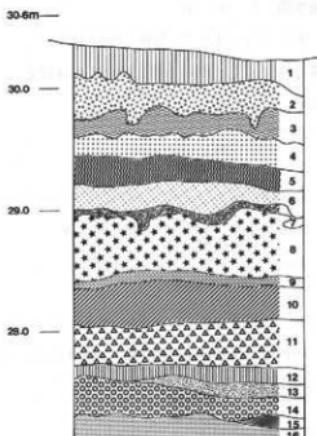
第4層は、13~29cmの厚さで、砂粒と赤色・白色微粒子を微量含む、褐色をしたハードローム層である。

第5層は、12~26cmの厚さで、黄色微粒子を少量、小砾を微量含む、褐色をしたハードローム層である。

第6層は、11~46cmの厚さで、黄色微粒子を少量、赤色・白色微粒子と小砾を微量含む、褐色をしたハードローム層である。

第7層は、1~19cmの厚さで、鹿沼バミス粒子を多量に含む、明褐色をしたハードロームと鹿沼バミスの混合土層である。

第8層は、32~62cmの厚さで、黄橙色をした鹿沼バミス



第187図 基本土層図

の純粹層である。

第9層は、1~10cmの厚さで、鹿沼バミス粒子を中量含む、褐色をしたハードローム層である。

第10層は、26~38cmの厚さで、白色微粒子と小礫を少量含む、褐色をしたハードローム層である。

第11層は、31~41cmの厚さで、小礫を中量含む、にぶい褐色をしたハードローム層である。

第12層は、6~15cmの厚さで、砂質を帯びた、褐色をしたハードローム層である。

第13層は、1~13cmの厚さで、鉄分を少量含む、砂質を帯びた橙色をした粘土層である。

第14層は、15~38cmの厚さで、鉄分を中量含む、砂質を帯びたにぶい黄橙色をした粘土層である。

第15層は、1~11cmの厚さで、黒色粒子を少量含む、砂質を帯びたにぶい黄橙色をした粘土層である。

第16層は、1~20cmの厚さで、黒色粒子を中量含む、黄橙色をした粘土層である。

住居跡などの遺構は、第2層上面で確認され、第2層から第3層にかけて掘り込まれている。

第3節 遺構と遺物

1 壁穴住居跡

今回の調査で、縄文時代の壁穴住居跡7軒、弥生時代の壁穴住居跡1軒、古墳時代の壁穴住居跡3軒、時期不明の壁穴住居跡6軒を検出した。壁穴住居跡は調査区域の全域に分散しており、住居跡間の重複は少ない。また、縄文時代の壁穴住居跡からの出土遺物は少なく、ほとんどが細片であった。以下、検出された壁穴住居跡の特徴や出土遺物について記載する。

第1号住居跡（第188図）

位置 調査区の西部、B 211区。

規模と平面形 長軸5.57m、短軸5.29mの方形である。

主軸方向 N-30°-W

壁 壁高は55cmほどで、外傾して立ち上がる。

壁溝 西コーナー部の一部を除いて、ほぼ巡っている。上幅15~45cm、下幅3~15cm、深さ7~11cmで、断面形はU字状である。

壁溝土層解説

1 褐色 ローム粒子少量
2 褐色 ローム粒子中量

3 褐色 ローム粒子少量
4 褐色 ローム粒子中量

床 全体的に平坦で、ロームブロックを混ぜた貼床であり、各コーナー部付近を除いて、広く踏み固められている。南コーナー部付近には粘土塊、西コーナー部付近には炭化材や炭化物の広がりが見られる。

貼床土層解説

12 褐色 ローム粒子中量

13 褐色 ローム粒子中量、ローム大ブロック少量

ピット 5か所（P 1~P 5）。P 1~P 4は径34~46cmの円形、深さ57~70cmでいずれも主柱穴である。P 5

は長径45cm、短径38cmの楕円形、深さ14cmで、出入り口施設に伴うピットである。

P 1土層解説

1 黒褐色 ローム粒子少量
2 黑色 ローム粒子中量

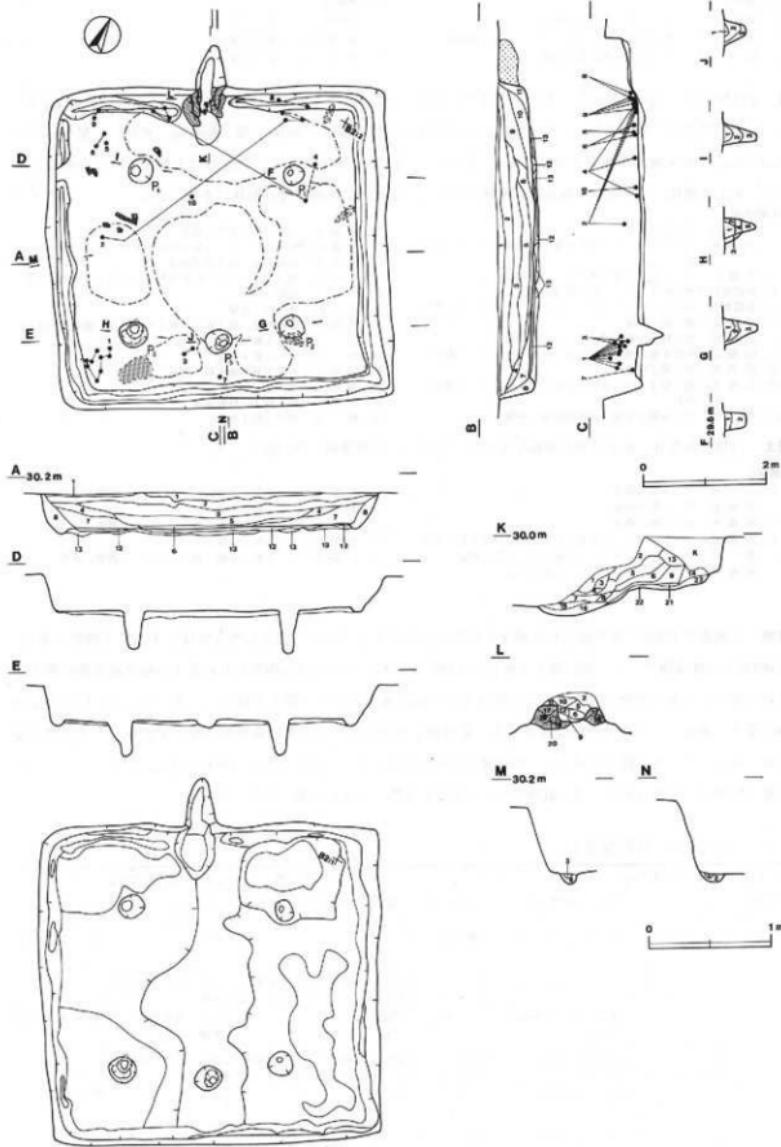
P 3土層解説

1 褐色 ローム粒子少量
2 褐色 ローム粒子少量、ローム大ブロック微量

P 2土層解説

1 褐色 ローム粒子少量
2 褐色 ローム粒子中量
3 褐色 ローム粒子中量

3 褐色 ローム粒子中量
4 褐色 ローム粒子中量
5 褐色 ローム粒子中量、鹿沼粒子少量



第188図 第1号住居跡実測図

P 4 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
 2 黄色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化物微量
 3 黄色 ローム粒子中量、鹿沼粒子少量

P 5 土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子少量
 2 黄色 ローム粒子中量
 3 黄色 ローム粒子中量

壁北西壁の中央部に付設されており、天井部は崩落しているが、両袖部が残存している。袖部は粘土と砂質、ローム粒子を混ぜて構築されている。規模は、煙道部から焚口部まで163cm、最大幅67cm、壁外への掘り込みは70cmである。火床面は床面を9cmほど掘りくぼめて、浅い皿状をしている。火床面は火熱を受けて赤変しているが、あまり硬化していない。煙道部は搅乱を受けているため、平面形及び形状は不明である。

壁層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量
 2 黑褐色 焙土中ブロック・砂粒少量、炭化物・ローム粒子微量
 3 黑褐色 ローム粒子少量、焙土粒子・炭化粒子微量
 4 黑褐色 焙土粒子・ローム粒子微量
 5 黑褐色 焙土中ブロック・ローム小ブロック・焙土粒子微量
 6 黑褐色 焙土粒子少量
 7 黑褐色 焙土粒子中量、焙土小ブロック微量
 8 黑褐色 砂粒多量、焙土粒子少量、ローム中ブロック微量
 9 黑褐色 焙土粒子中量
 10 黑褐色 焙土粒子・ローム粒子少量、焙土中ブロック微量、砂質
 11 黄色 ローム粒子少量、炭化物微量、砂質

- 12 黑褐色 ローム粒子微量、砂質
 13 黑褐色 焙土粒子・ローム粒子微量、砂質
 14 黑褐色 砂粒少量、焙土粒子微量
 15 ぶい赤褐色 焙土大ブロック・砂粒多量（火床面上の燃焼灰の堆積層）
 16 ぶい赤褐色 焙土粒子中量
 17 黑褐色 砂粒多量、焙土粒子・粘土粒子少量（廻転部の芯材の粘土層）
 18 黄色 ローム粒子中量
 19 黑褐色 砂粒少量、焙土粒子微量
 20 黑褐色 焙土粒子少量
 21 黑褐色 焙土粒子・砂粒少量
 22 黄色 ローム粒子少量

覆土 11層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子微量
 2 黑褐色 ローム粒子微量
 3 黑褐色 ローム粒子微量
 4 黑褐色 ローム中ブロック少量、ローム粒子・焙土粒子少量
 5 黑褐色 ローム中・小ブロック少量、ローム粒子微量
 6 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

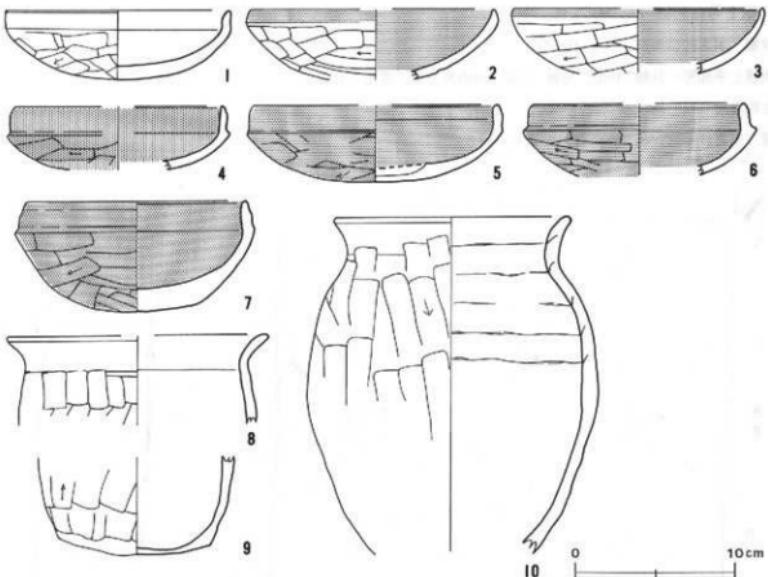
- 7 黑褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
 8 黄色 ローム粒子中量
 9 黑褐色 ローム粒子少量、焙土小ブロック微量
 10 黄色 ローム粒子少量
 11 黑褐色 ローム粒子少量、焙土小ブロック微量、砂質

遺物 土器片371点、及び混入した繩文土器片3点が出土している。図示したものは、すべて土器である。第189図1の壺は南コーナー部の覆土上層から中層にかけて、2の壺は南西壁寄りの覆土中層と窓東側の覆土下層から出土したものが接合している。3の壺と7の碗は南東壁寄りの覆土下層から、4の壺はP1付近と窓西側の覆土下層から、5と6の壺は西コーナー部の覆土下層から、8の甕は窓東側の覆土下層から、9の甕は窓西側と西コーナー部の覆土下層から、10の甕は中央部付近の覆土下層から、それぞれ出土している。

所見 時期は、遺構の形態や出土遺物から、古墳時代後期（6世紀後葉）と考えられる。

第1号住居跡出土遺物観察表

回収番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第189回 1	壺 土器	A 14.2 B 4.4	体部、口縁部一部欠損。丸底。体部は内側で立ち上がり、口縁部との境にわずかな稜をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナギ。体部外面ハラ削り、内面ナギ。	長石・雲母・砂粒 にぶい黄褐色 普通	P 1 90% P L 67 覆土上層 中層
	土器	A [15.2] B (4.4)	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内側で立ち上がり、口縁部に直立し、端部は尖る。	口縁部内・外面横ナギ。体部外面ハラ削り、内面ナギ。口縁部外・内面黒色処理。	長石・雲母・赤色粒子 砂粒 にぶい赤褐色 普通	P 2 60% P L 67 覆土中層 下層
2	壺 土器	A [15.6] B (4.1)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内側で立ち上がり、口縁部に直立し、端部は尖る。	口縁部内・外面横ナギ。体部外面ハラ削り、内面ナギ。口縁部外・内面黒色処理。	長石・雲母・砂粒 褐色 普通	P 4 25% P L 67 覆土下層
	土器	A [13.2] B (4.0)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内側で立ち上がり、口縁部との境に後をもつ。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナギ。体部外面ハラ削り、内面ナギ。内・外黒色処理。	長石・雲母・赤色粒子 砂粒 灰褐色 普通	P 3 20% P L 67 覆土下層



第189図 第1号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第189図 5	环 土 器	A [15.4] B 4.9	底部から口縁部にかけての破片。丸底。体部は内脣して立ち上がり、口縁部とその境に後をもつ。口縁部はわずかに内側する。	口縁部内・外表面横ナデ。体部外側へう削り、内面横ナデ。内・外側黒色処理。体部外側底部内面一部剥離。	長石 雪母 砂粒 にぶい黄褐色 普通	P 5 30% P L67 覆土下層
6	环 土 器	A [13.2] B (4.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内脣して立ち上がり、口縁部とその境に後をもつ。口縁部はわずかに内側する。	口縁部内・外表面横ナデ。体部外側へう削り、内面ナデ。内・外側黒色処理。	長石 砂粒 にぶい黄褐色 普通	P 6 30% P L67 覆土下層
7	楕 土 器	A 13.8 B 6.9	口縁部一部欠損。丸底。体部は器内を減じながら内側して立ち上がり、口縁部との境に後をもつ。口縁部は内傾する。	口縁部内・外表面横ナデ。体部外側へう削り、内面ナデ。内・外側黒色処理。	長石 雪母 片状粘物 砂粒 にぶい黄褐色 普通	P 7 95% P L67 覆土下層
8	壺 土 器	A [16.5] B (5.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内脣気味に立ち上がる。瓶部はゆるやかに屈曲し、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外表面横ナデ。体部外側紙のヘラ削り、内面ナデ。	長石 石英 雪母 砂粒 褐色 普通	P 8 10% P L67 外側煤化着 覆土下層
9	壺 土 器	B (6.1) C 9.5	底部から体部にかけての破片。丸底のある平底。体部は内脣気味に立ち上がる。	体部外側底位のヘラ削り、内面ナデ。底部ヘラ削り。	灰石 砂粒 褐色 普通	P 9 15% P L67 覆土下層
10	壺 上 器	A 15.0 B (21.2)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内脣して立ち上がり、中位に最大深さをもつ。口縁部は器内を増しながら外反し、端部は丸味を帯びる。	口縁部内・外表面横ナデ。体部外側紙のヘラ削り、内面ナデ。口縁部、体部内面に輪積み痕が残る。	長石 雪母 小織 砂粒 にぶい黄褐色 普通	P 10 60% P L67 覆土下層

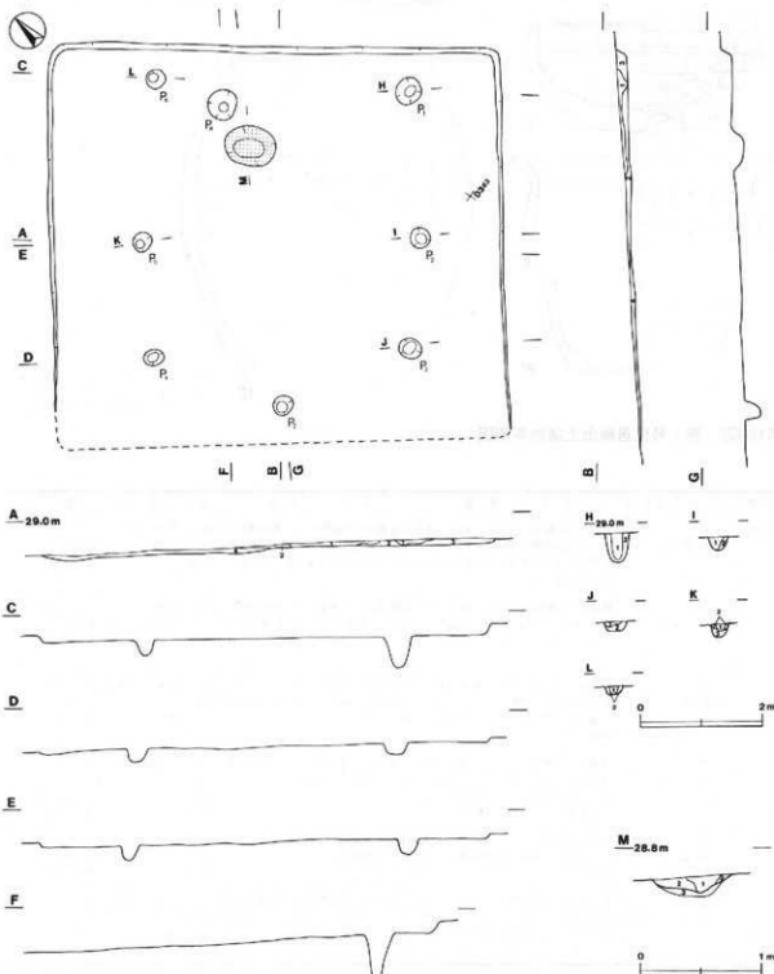
第2号住居跡（第190図）

位置 調査区の南部, D 3 cl区。

規模と平面形 長軸7.48m, 短軸 [6.57] mの長方形と推定される。

主軸方向 N -38° - W

壁 壁高は1~17cmで、外傾して立ち上がる。



第190図 第2号住居跡実測図

床 平坦で、特に踏み固められている部分はない。

ピット 8か所 (P 1～P 8)。P 1～P 3, P 5, P 6は径32～45cmの円形、P 4は長径36cm、短径28cmの楕円形、深さ20～52cmで、いずれも主柱穴である。P 7は径34cmの円形、深さ28cmで、出入り口施設に伴うピットである。P 8は径50cmの円形、深さ76cmで性格は不明である。

P 1 土層解説

- 1 墓褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 2 棕褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量

P 2 土層解説

- 1 墓褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 2 棕褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

P 3 土層解説

- 1 墓褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 棕褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック微量

炉 北東壁寄りに付設されており、平面形は長径86cm、短径66cmの楕円形で、床面を17cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状で、火熱を受けてわずかに赤変しているが、あまり硬化していない。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 2 墓褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量

P 5 土層解説

- 1 墓褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 2 墓褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
- 3 棕褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック微量

P 6 土層解説

- 1 墓褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 2 棕褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック微量

覆土 4層からなり、ロームブロックを多く含有し、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 墓褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 墓褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量

- 3 棕褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック微量
- 4 棕褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量

遺物 土師器片31点、及び混入した縄文土器片3点、須恵器片1点が出土している。

所見 本跡は、南側へ下る斜面部に構築され、覆土が薄く、南西壁は残存していない。炉の火床面や床面の状況から、本跡は短期間しか使用されなかった住居と思われる。遺物はほとんどが細片であるため、時期は明確ではないが、遺構の形態や出土土器から、古墳時代後期と考えられる。

第4号住居跡（第191図）

位置 調査区の北西部、A 1e0区。

重複関係 第1号塚と第29号土坑が、本跡の上部に構築されていることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸6.31m、短軸5.57mの隅丸長方形である。

長軸方向 N-12°-W

壁 壁高は8～25cmで、外傾して立ち上がる。

床 全体的に平坦で、特に踏み固められている部分はない。

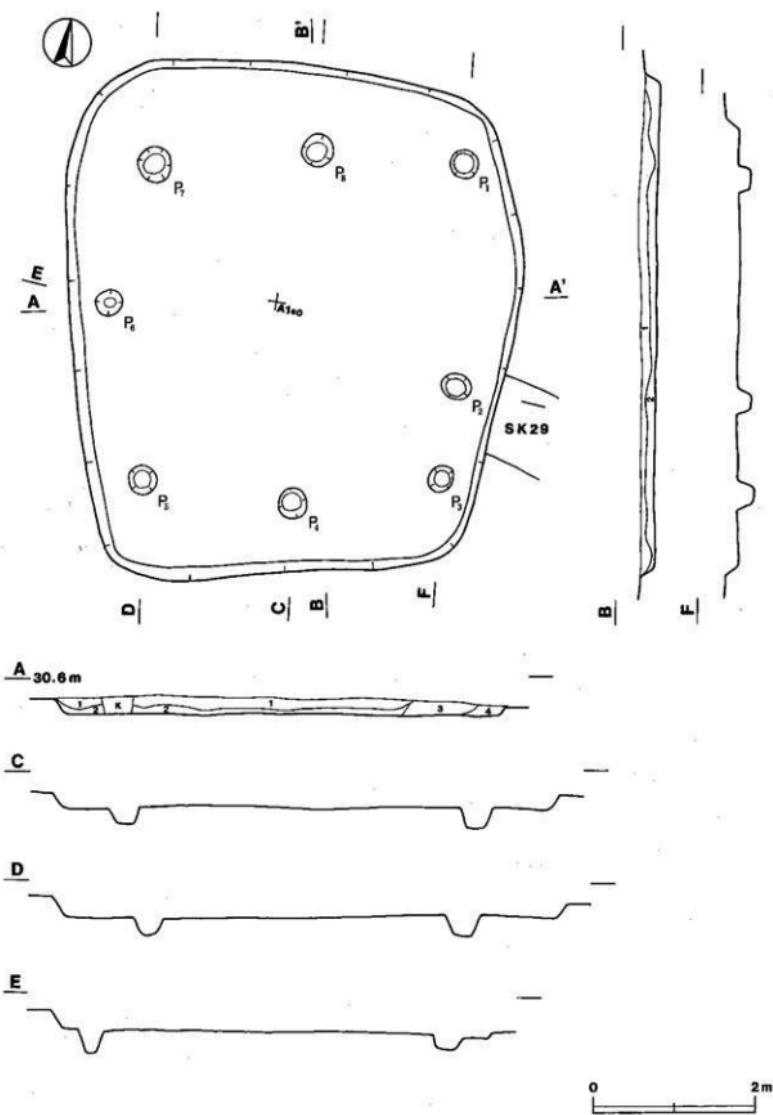
ピット 8か所 (P 1～P 8)。P 1～P 8は径32～44cmの円形、深さ17～30cmで、規模や配列から主柱穴と考えられる。

覆土 4層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 墓褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 墓褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量

- 3 棕褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック微量
- 4 墓褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量



第191図 第4号住居跡実測図

所見 本跡は、炉が付設されていないが、床面の広がり、壁の立ち上がりが確認できることや主柱穴の配列から、住居跡とした。遺物が出土していないので、時期は不明であるが、第1号塚が、本跡の上部に構築されていることから、中世以前と考えられる。

第5号住居跡（第192図）

位置 調査区の西部、B 1 g9区。

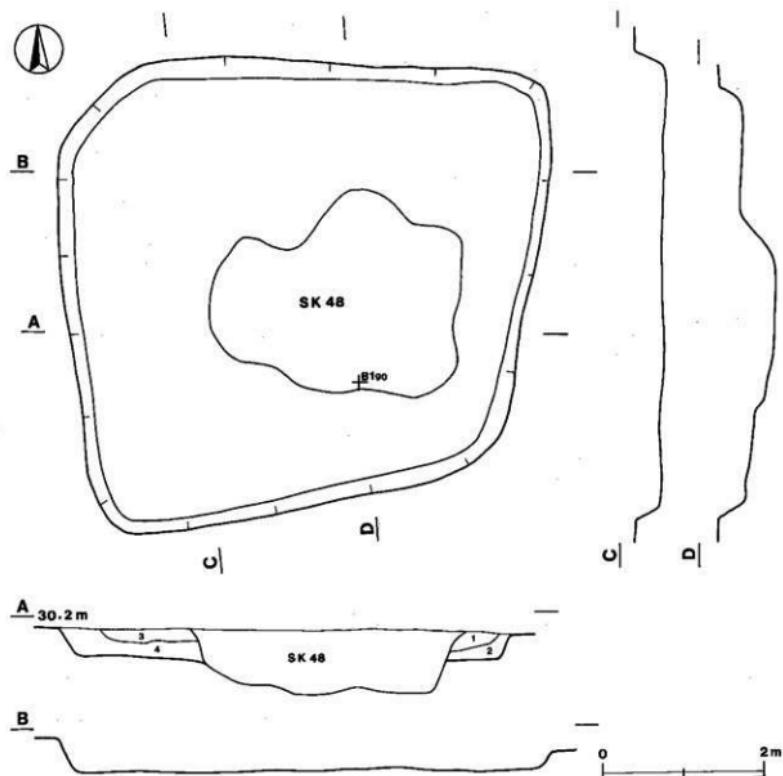
重複関係 第48号土坑が、本跡を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸5.92m、短軸5.55mの隅丸方形である。

長軸方向 N - 87° - E

壁 壁高は17~40cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、特に踏み固められている部分はない。中央部付近は、第48号土坑に大きく掘り込まれている。



第192図 第5号住居跡実測図

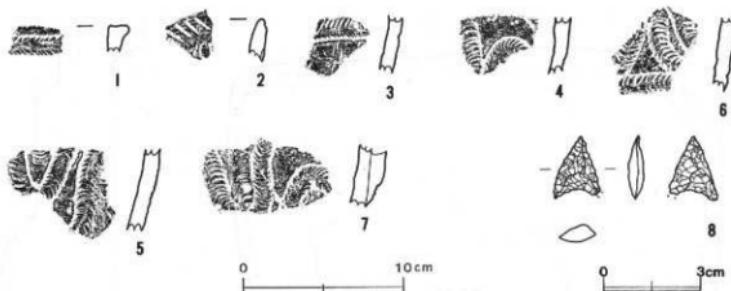
覆土 4層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

- | | |
|---|---|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量。ローム小ブロック微量 | 3 暗褐色 ローム粒子中量。ローム小ブロック少量。炭化粒子微量 |
| 2 褐色 ローム粒子多量。ローム小ブロック中量。ローム中ブロック少量、焼土粒子微量 | 4 褐色 ローム粒子多量。ローム小ブロック中量。ローム中ブロック少量、焼土粒子微量 |

遺物 繩文土器片28点。石礫1点、及び混入した土師器片1点が出土している。第193図1～7は、縩文土器片の拓影図である。1と2は口唇部片である。1の口唇部は平坦で、口唇部直下に変形爪形文が施文されている。2は口唇部外面に斜位のキザミが施され、その下部に深めの爪形文が施文されている。3～7は胴部片で、変形爪形文が施文されている。7には断面四角形の隆帯が貼付され、隆帯上にも変形爪形文が施文されている。また、8の石礫が覆土中から出土している。

所見 本跡は、炉が付設されていないが、床面の広がりや壁の立ち上がりが確認できることから、住居跡とした。本跡の時期は、出土土器から縩文時代前期後葉（浮島式期）と考えられる。



第193図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表

国版番号	種別	計測値			石質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				
第193図8	石礫	1.9	(1.5)	0.5	(1.0)	瑪瑙	覆土中	Q 1 PL74

第8号住居跡（第194図）

位置 調査区の東部、C 4 a4区。

規模と平面形 長軸5.88m、短軸4.55mの隅丸長方形である。

長軸方向 N - 60° - E

壁 壁高は12～25cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、特に踏み固められている部分はない。

ピット 8か所（P 1～P 8）。P 1、P 3～P 6は長径28～59cm、短径24～40cmの楕円形、P 2、P 7、P 8は径30～36cmの円形、深さ14～27cmで、規模や配列から柱穴と考えられる。

P 1 ~ P 8 土層解説
1 黒色 ローム粒子中量

2 褐褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
3 黄色 ローム小ブロック中量

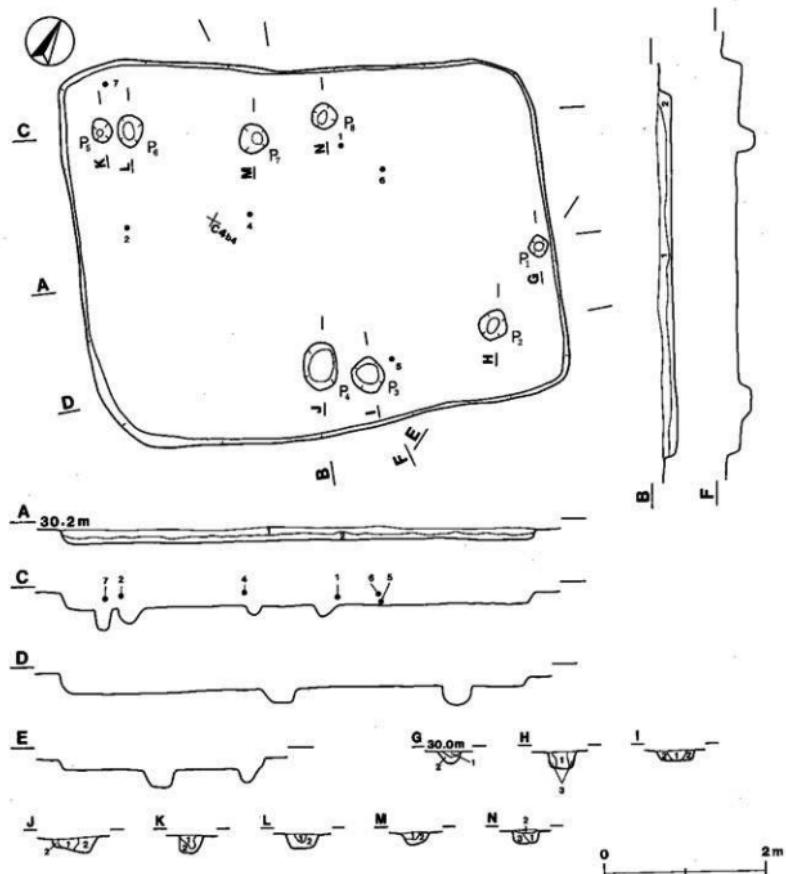
覆土 2層からなり, レンズ状に堆積していることから, 自然堆積と思われる。

土層解説

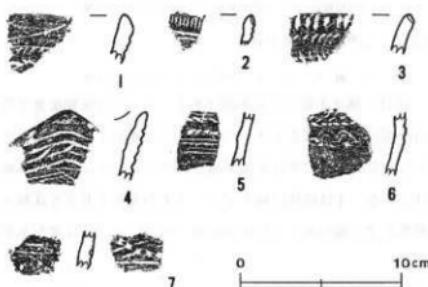
1 黒色 ローム粒子少量

2 黄色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量

遺物 繩文土器片29点が出土している。第195図1~7は、縩文土器片の拓影図である。1~6は前期後葉浮島式の土器である。1~4は口唇部片である。1は口唇部が外削ぎ状を呈し, 口唇部直下に変形爪形文が施されている。2は口唇部外面に縦位の密な条線帯をもち, その下部に平行沈線が施されている。3は口唇部外面に刺突が施され, その下部に変形爪形文が施されている。4は波状口線を呈し, 3条の変形爪形文と沈線文が施されている。5と6は胴部片である。5は変形爪形文と幅の狭い平行沈線が施されている。6は変形爪形



第194図 第8号住居跡実測図



第195図 第8号住居跡出土遺物実測図

文と波状文が施文されている。7は早期中葉
田戸上層式の土器である。肩部で、角押に
よる曲線文が施され、内・外面とも条痕文が
施文されている。

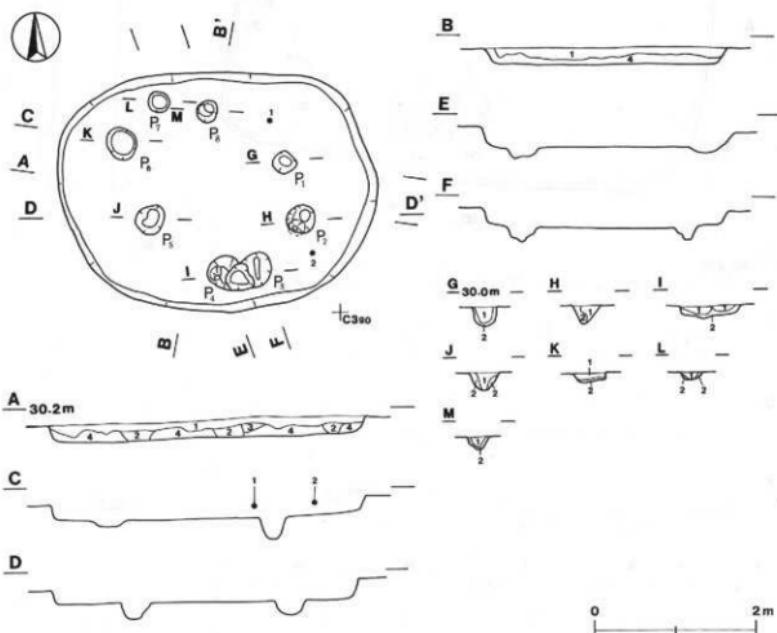
所見 本跡は、炉が付設されていないが、床
面の広がり、壁の立ち上がりが確認できること
と柱穴の配列から、住居跡とした。7の土
器片は古く、時期的な違いがあることから、
流れ込みと考えられる。本跡の時期は、出土
土器から縄文時代前期後葉（浮島式期）と考
えられる。

第9号住居跡（第196図）

位置 調査区の中央部、C 319区。

規模と平面形 長径3.97m、短径2.96mの楕円形である。

長径方向 N - 4° - E



第196図 第9号住居跡実測図

壁 壁高は16~24cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、特に踏み固められている部分はない。

ピット 8か所（P1~P8）。P1~P5, P7, P8は径27~39cmの円形、P6は長径43cm、短径37cmの橢円形、深さ9~24cmで、規模や配列から柱穴と考えられる。

P1~P8土層解説

1 暗褐色 ローム粘子中量、炭化粘子微量

2 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム大ブロック少量

3 暗褐色 ローム小ブロック中量

覆土 4層からなり、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

1 暗褐色 ローム粘子中量

4 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、炭化

2 暗褐色 ローム粘子少量、炭化粘子微量

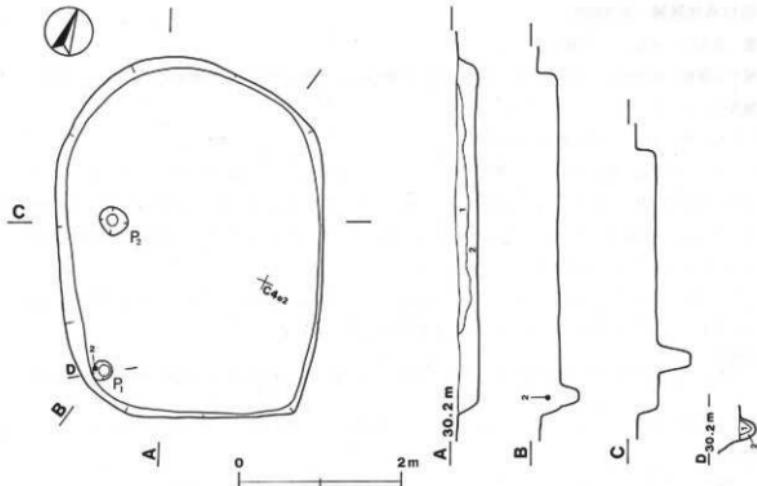
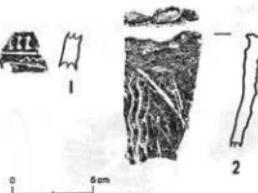
3 暗褐色 ローム粘子少量

粘子微量

遺物 繩文土器片6点が出土している。第197図1と2は、繩文土器片の拓影図である。1は早期中葉田戸下層式土器の胴部片である。刺突文と沈線間に貝殻腹線文が施されている。2は前期後葉興津式土器の口縁部片である。口唇部は削りが施され、一部指頭による圧痕が見られる。口縁部に3本の波状沈線を垂下させている。

所見 本跡は、炉が付設されていないが、床面の広がりや壁の立ち上がりが確認でき、柱穴が壁に沿って巡っていることから、住居跡とした。

第197図 第9号住居跡出土遺物実測図



第198図 第10号住居跡実測図

第10号住居跡（第198図）

位置 調査区の中央部，C 4 d1区。

規模と平面形 長径4.47m，短径3.27mの楕円形である。

長径方向 N - 27° - W

壁 壁高は23~26cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で，特に踏み固められている部分はない。

ピット 2か所（P 1・P 2）。P 1とP 2は径26・35cmの円形，深さ22・42cmで，いずれも性格は不明である。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量
2 暗褐色 ローム小ブロック中量，炭化粒子微量

覆土 2層からなり，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・炭化粒子微量
2 黒色 ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量



第199図 第10号住居跡出土遺物
実測図

遺物 縄文土器片19点が出土している。第199図1と2は，縄文土器片の拓影図である。1と2は口縁部片である。1は無文の小形土器と思われる。2は縹い波状口縁を呈し，口縁部に変形爪形文が施文されている。

所見 本跡は，炉が付設されていないが，床面の広がりや壁の立ち上がりが確認できることから，住居跡とした。本跡の時期は，遺構の形態や出土土器から，縄文時代前期後葉（浮島式期）と考えられる。

第11号住居跡（第200図）

位置 調査区の東部，C 4 e4区。

規模と平面形 北西壁の一部が擾乱を受けており，長軸4.44m，短軸[3.22]mの隅丸長方形と推定される。

主軸方向 N - 25° - E

壁 壁高は30~50cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で，炉周辺の中央部が，やや踏み固められている。北西壁付近の一部が擾乱を受けている。

ピット 6か所（P 1～P 6）。P 1は径25cmの円形，P 2～P 4は長径31~47cm，短径23~34cmの楕円形，深さ30~57cmで，いずれも主柱穴である。P 5は長径33cm，短径20cmの楕円形，P 6は径34cmの円形，深さ13~42cmで，いずれも出入り口施設に伴うピットである。

炉 中央部のやや北寄りに付設され，平面形は長径73cm，短径58cmの楕円形で，床面を7cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状で，火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子中量，ローム粒子少量，焼土中ブロック微量
2 暗褐色 ローム粒子中量，焼土粒子微量（炉床面下の火熱を受けた層）

覆土 5層からなり，ロームブロックや焼土ブロックの堆積している状況から，人为堆積と思われる。

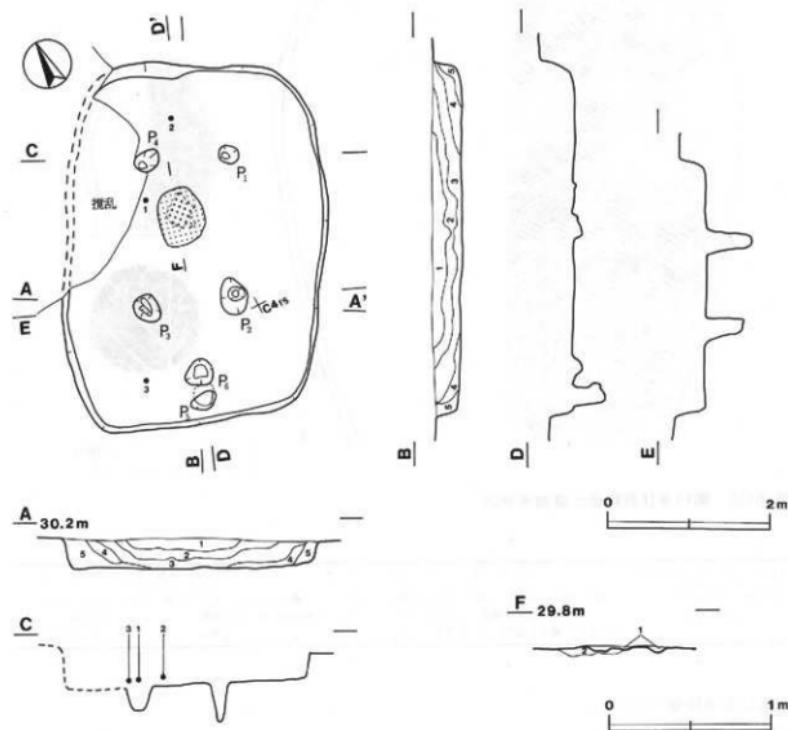
土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量
2 黒褐色 ローム小ブロック少量
3 黒褐色 ローム小ブロック中量，焼土小ブロック・ローム粒子，炭化粒子少量

- 4 暗褐色 ローム小ブロック中量，炭化粒子微量
5 暗褐色 ローム小ブロック少量

遺物 弥生土器片28点、及び混入した縄文土器片85点、磨石1点が出土している。図示したものは、すべて弥生土器である。第201図1の小形高杯は炉の西側の覆土下層から、2の壺形土器は北東壁寄りの覆土下層から横位の状態で、3の壺は西コーナー部付近の覆土下層からそれぞれ出土している。

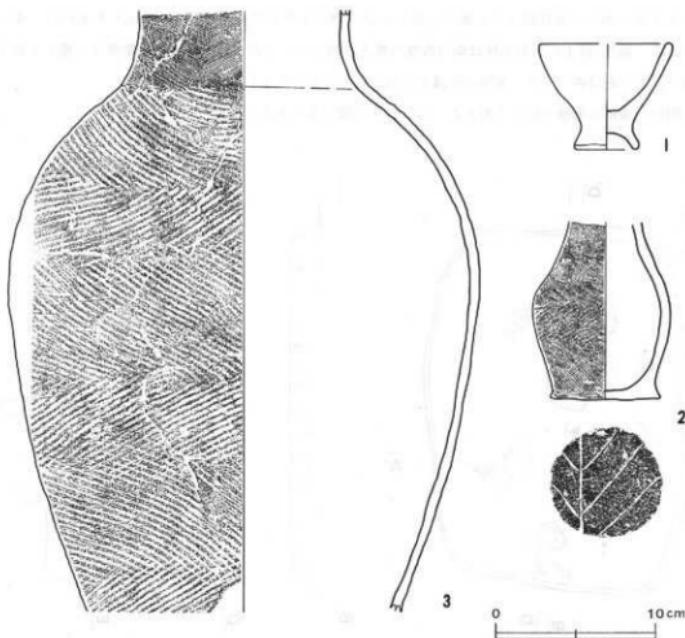
所見 時期は、遺構の形態や出土土器から、弥生時代後期中葉と考えられる。



第200図 第11号住居跡実測図

第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 標 の 特 徴	地土・色調・焼成	備 考
第201図 1	小形高杯 弥生土器	A [8.3] B 6.6 C 3.9 E 1.9	脚部から杯部にかけての破片。脚部はハの字状に開く。杯部は内壁気味に立ち上がり、口縁部に生る。杯部、脚部内・外側ナデ。	長石 黒母 砂粒 灰青褐色 普通	P11 30% P1 L67 覆土下層
	壺形土器 弥生土器	B [11.0] C 6.9	底部から胴部にかけての破片。平底で、張り出しきをもつ。胴部は内擣して立ち上がる。頭部は無文。胴部には附加条一種(附加2条)の縄文が施され、羽状構成をとる。底部木葉痕。	長石 石英 砂粒 にふい黄褐色 普通	P12 85% P1 L67 覆土下層



第201図 第11号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計画値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第201図 3	壺 弥生土器	B (37.2)	胴部から頸部にかけての破片。胴部は内厚して立ち上がり、頸部はほぼ直立する。頸部には8本櫛歯による山形文が残り、胴部には附加条一種(附加2条)の網文が施され、羽状構成をとる。	良石 小鹿 砂粒 橙色 普通	P 13 30% P L 68 覆上下層

第12号住居跡（第202図）

位置 調査区の東部, C 4 f6区。

規模と平面形 北東壁と南東壁の一部が搅乱を受けているが、長軸3.43m, 短軸 [3.27] mの隅丸方形と推定される。

長軸方向 N -53° - E。

壁 壁高は17~35cmで、外傾して立ち上がる。

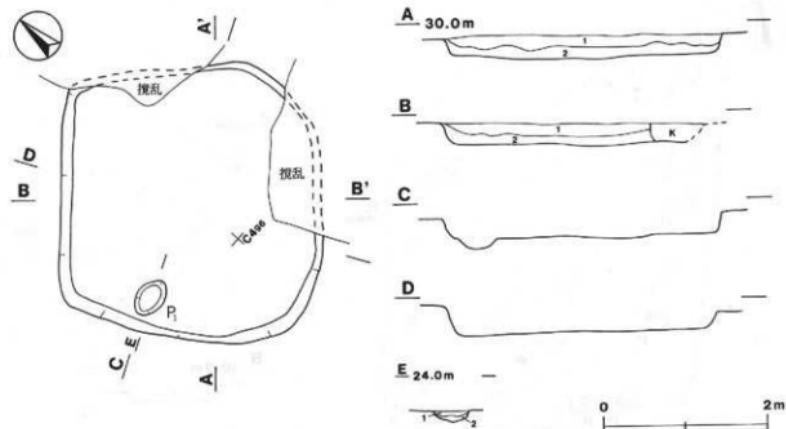
床 平坦で、特に踏み固められている部分はない。北東壁と南東壁付近の一部が搅乱を受けている。

ピット 1か所。P 1は長径49cm、短径36cmの楕円形、深さ13cmで性格は不明である。

P 1 土層解説

1 黄色 ローム較子少量

2 黄色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量



第202図 第12号住居跡出土遺物実測図

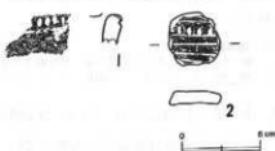
覆土 2層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

1 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化物微量
2 黄色 ローム小ブロック中量
遺物 縄文土器片7点、土製円板1点、土師器片1点が出土している。第203図1と2は、縄文土器片の拓影図である。1は中期中葉阿玉台式土器の口縁部片である。緩い波状口縁を呈し、口唇部にキザミが施され、直下に押引文が施文されている。胎土に雲母が含まれている。2の土製円板は覆土中から出土している。

所見 本跡は、炉が付設されていないが、床面の広がりや壁の立ち上がりが確認できることから、住居跡とした。遺物は少なく、ほとんどが細片であるため、本跡の時期については不明である。

第203図 第12号住居跡出土遺物
実測図



第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値			出土地點	備考
		径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第203図 2	土製円板	3.5	0.9	10.1	覆土中	利光文と平行流筋が認められ、田戸下溝式土器の裏盤片を使用している D P 2 PL 73

第15号住居跡（第204図）

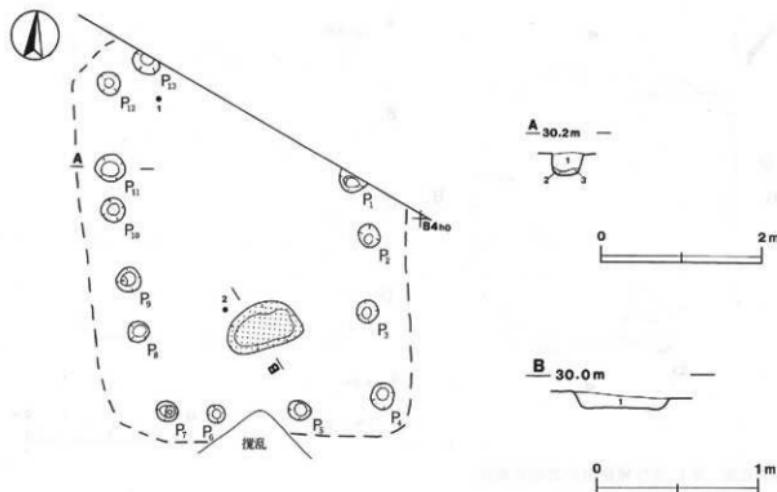
位置 調査区の東部、B 4 h9区。

規模と平面形 北壁が調査区域外であるが、長軸 [4.86] m、短軸 [4.00] mの長方形と推定される。

主軸方向 N - 8° - W

壁 覆土が浅く、床面が露出しており、壁は確認できなかった。

床 平坦で、特に踏み固められている部分はない。南壁付近の一部が搅乱を受けている。



第204図 第15号住居跡実測図

ピット 13か所 (P 1 ~ P 13)。P 1 ~ P 13は径24~36cmの円形、深さ28cmほどで、規模や配列から柱穴と考えられる。

P11土層解説

- 1 黄色 ローム小ブロック中量、炭化粒子少量
2 黄色 ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量

- 3 黄色 ローム中ブロック中量

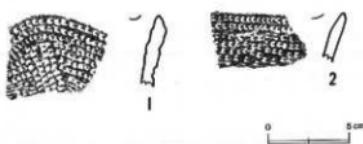
炉 南壁寄りに付設されており、平面形は長径73cm、短径58cmの楕円形で、床面を7cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は皿状で、火熱を受けてわずかに赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黄色 烧土小ブロック中量、ローム小ブロック・炭化物・焼土粒子少量、焼土中ブロック微量

遺物 繩文土器片 3点が出土している。第205図1と2は、縩文土器片の拓影図である。両者とも波状口縁を呈する口縁部片で、口唇部は外削ぎ状である。細竹管による刺突文が全面に施されており、同一個体と思われる。

所見 遺構のほとんどが削平され、床面が露出していた。遺物は少なく、ほとんどが細片であるため、時期は明確ではないが、遺構の形態や出土土器から、縩文時代前期後葉(興津式期)の可能性が考えられる。

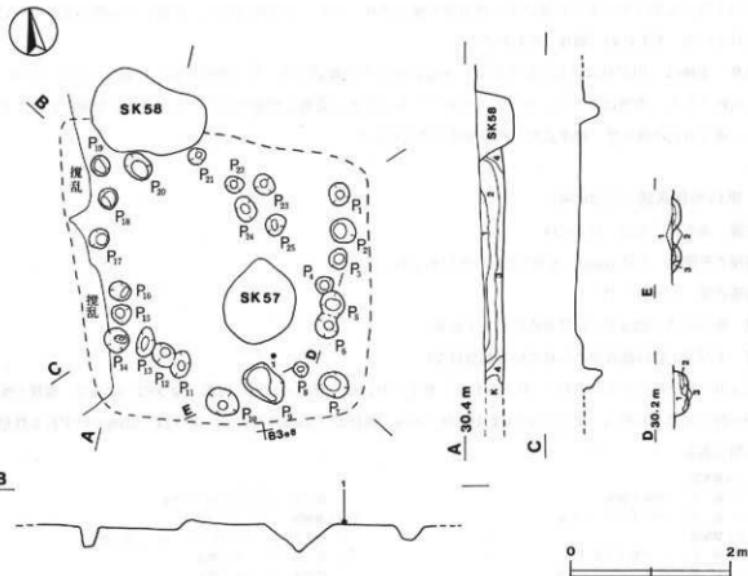


第205図 第15号住居跡出土遺物実測図

第16号住居跡 (第206図)

位置 調査区の北部、B 3 d7区。

重複関係 第57・58号土坑が、本跡を掘り込んでいることから、本跡が古い。



第206図 第16号住居跡実測図

規模と平面形 長軸 [3.74] m、短軸 [3.57] mの方形と推定される。

長軸方向 N-14°-E

壁 撤乱を受けているため、壁の立ち上がりは確認できなかった。

床 平坦で、特に踏み固められている部分はない。西壁付近が撤乱を受けている。

ピット 25か所 (P 1～P 25)。P 1～P 8, P 12, P 14～P 19, P 21～P 23は径19～36cmの円形、P 9～P 11, P 13, P 20は長径35～56cm、短径23～39cmの楕円形、深さ10～19cmで、規模や配列から柱穴と考えられる。P 24は長径31cm、短径25cmの楕円形、P 25は径25cmの円形で、いずれも性格は不明である。

P 5・P 6 土層解説

- 1 暗褐色 黒色粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 楊色 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

P 9 土層解説

- 1 暗褐色 黑色粒子微量

- 2 暗褐色 黑色小ブロック・ローム粒子・燒土粒子微量

P 10 土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子微量
- 2 楊色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 黑色粒子微量

覆土 4層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 楊色 ローム粒子中量

遺物 繩文土器片4点が出土している。第207図1と2は、縩文

土器片の拓影図である。1は口縁部片で、口唇部に条線帯をもち、



第207図 第16号住居跡出土遺物実測図

その下部に爪形文が3条と貝殻による押引文が施されている。2は脇部片で、貝殻による押引文が全面に施されている。ともに同一個体と思われる。

所見 本跡は、炉が付設されていないが、床面の広がりが確認でき、柱穴が壁に沿って巡っていることから、住居跡とした。遺物は少なく、ほとんどが繊片であるため、時期は明確ではないが、遺構の形態や出土土器から、縄文時代前期後葉（眞津式期）の可能性が考えられる。

第17号住居跡（第208図）

位置 調査区の北部、B 4 el区。

規模と平面形 長径3.68m、短径3.22mの橢円形である。

長径方向 N-24°W

壁 壁高は15~22cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、特に踏み固められている部分はない。

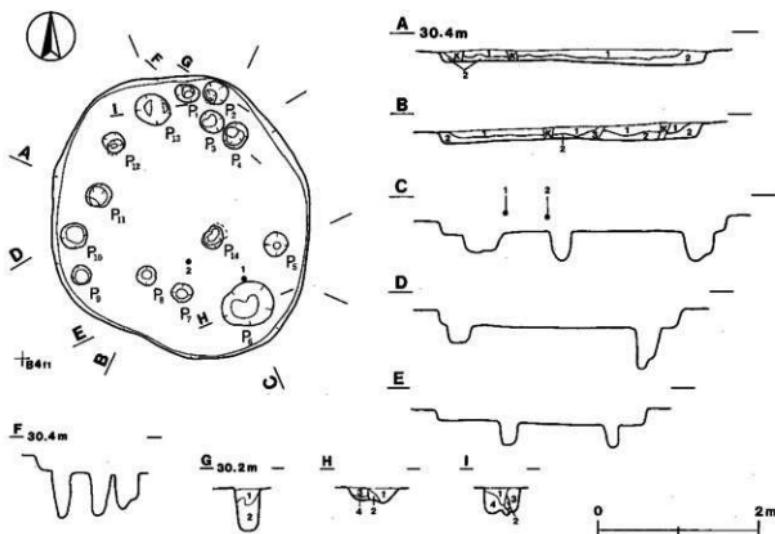
ピット 14か所（P 1～P 14）。P 1～P 5、P 7～P 13は、径24~43cmの円形、深さ23~57cmで、規模や配列から柱穴と考えられる。P 6とP 14は長径29·66cm、短径23·55cmの橢円形、深さ24·37cmでいずれも性格は不明である。

P 2 土層解説

- 1 黒色 黒色粘子微量
- 2 黒色 ローム中ブロック中量
- P 6 土層解説
- 1 黒色 ローム粘子中量
- 2 黒色 ローム中ブロック少量
- 3 黒色 ローム粘子中量

4 黒色 ローム中ブロック少量

- P 13 土層解説
- 1 黒色 ローム中ブロック・ローム粘子微量
- 2 黒色 ローム粘子微量
- 3 増黒色 ローム粘子微量
- 4 黒色 ローム中ブロック中量、ローム粘子少量



第208図 第17号住居跡実測図

覆土 3層からなり。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
2 暗褐色 ローム小ブロック少量

- 3 極色 ローム小ブロック中量

遺物 繩文土器片3点、及び混入した土師

器片1点が出土している。第209図1と2は、
繩文土器片の拓影図である。1は口縁部片
で、指頭による整形が見られる。2は胸部
片で、爪形文と平行沈線が施されている。

所見 本跡は、炉が付設されていないが、
床面の広がりや壁の立ち上がりが確認でき、
柱穴が壁に沿って巡っていることから、住
居跡とした。遺物は少なく、ほとんどが細
片であるため、時期は明確ではないが、遺
構の形態や出土土器から、繩文時代前期後
業（浮島式期）と考えられる。



第209図 第17号住居跡出土遺物実測図

第18号住居跡（第210図）

位置 調査区の北部、B 3 a5区。

重複関係 第56号土坑が、本跡を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長軸4.17m、短軸(3.50)mで、方形と推定される。

長軸方向 N-9°-E

壁 壁高は17-24cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、特に踏み固められている部分はない。

ピット 2か所（P 1・P 2）。P 1は径64cmの円形、P 2は長径45cm、短径39cmの橢円形、深さ25-30cmでい
ずれも性格は不明である。

P 1 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
2 黒褐色 ローム粒子少量
3 極色 ローム粒子中量
4 極色 ローム粒子中量

P 2 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
2 極色 ローム粒子中量

覆土 3層からなり、ロームブロックが堆積している状況から、人為堆積と思われる。

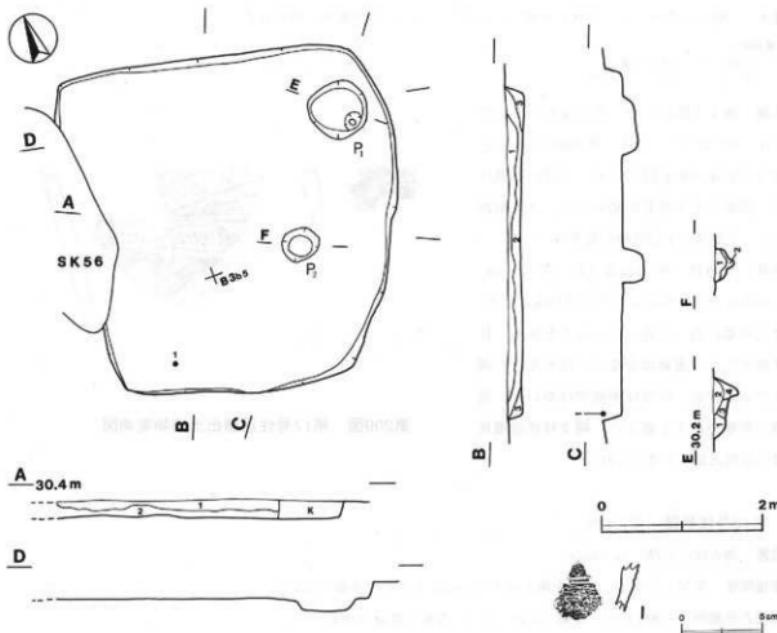
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
2 暗褐色 ローム小ブロック中量

- 3 極色 ローム小ブロック中量

遺物 繩文土器片1点が出土している。第210図1は、繩文土器片の拓影図である。胸部片で、細竹管による沈
線が施されている。

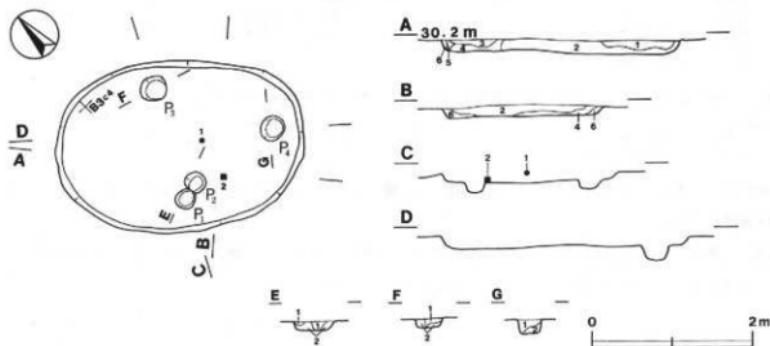
所見 本跡は、炉が付設されていないが、床面の広がりや壁の立ち上がりが確認できることから、住居跡とし
た。遺物は少なく、細片であるため、本跡の時期については不明である。



第210図 第18号住居跡・出土物実測図

第19号住居跡（第211図）

位置 調査区の北部、B 3 c4区。



第211図 第19号住居跡実測図

規模と平面形 長径3.09m、短径2.14mの椭円形である。

長径方向 N-46°-W

壁 壁高は8~12cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、特に踏み固められている部分はない。

ピット 4か所 (P 1~P 4)。P 1~P 4は径25~33cmの円形、深さ11~19cmでいずれも性格は不明である。

P 1~P 4 土層解説

- | | | |
|---|-----|------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 2 | 褐色 | ローム小ブロック中量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子少量 |

覆土 6層からなり、ロームブロックを含有し、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

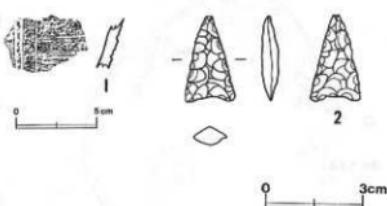
- | | | | |
|---|-----|------------|--------|
| 1 | 暗褐色 | ローム小ブロック少量 | 炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム小ブロック中量 | |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子少量 | |

- | | | |
|---|-----|--------------|
| 4 | 暗褐色 | ローム中・小ブロック少量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 6 | 暗褐色 | ローム小ブロック微量 |

遺物 純文土器片3点、石錐1点が出土している。

第212図1は、純文土器片の拓影図である。胴部片で、細竹管による沈線が縦位及び横位に施されている。2の石錐は、P 2の東側の覆土下層から出土している。

所見 本跡は、炉が付設されていないが、床面の広がりや壁の立ち上がりが確認できることから、住居跡とした。遺物が少なく、細片であるため、本跡の時期については不明である。



第212図 第19号住居跡出土遺物実測図

第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	種 別	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)			
第212図2	石 锐	2.8	1.6	0.5	1.3	瑪瑙	覆土下層	Q 2 P L74

第20号住居跡 (第213図)

位置 調査区の北部、B 3 16区。

重複関係 第54A・B号土坑が、本跡を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と平面形 長径3.62m、短径(2.98)mで、不整椭円形と推定される。

長径方向 N-55°-W

壁 壁高は17~33cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、特に踏み固められている部分はない。

ピット 9か所 (P 1~P 9)。P 1, P 2, P 4, P 5, P 7, P 8は径19~27cmの円形、P 6は長径27cm、短径13cmの不整椭円形、深さ7~15cmで、規模や配列から柱穴と考えられる。P 3は径50cmの円形、P 9は長径126cm、短径67cmの不整椭円形、深さ16~22cmでいずれも性格は不明である。

P 9 土層解説

- | | | |
|---|-----|-----------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム小ブロック・黒色粒子少量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子少量 |

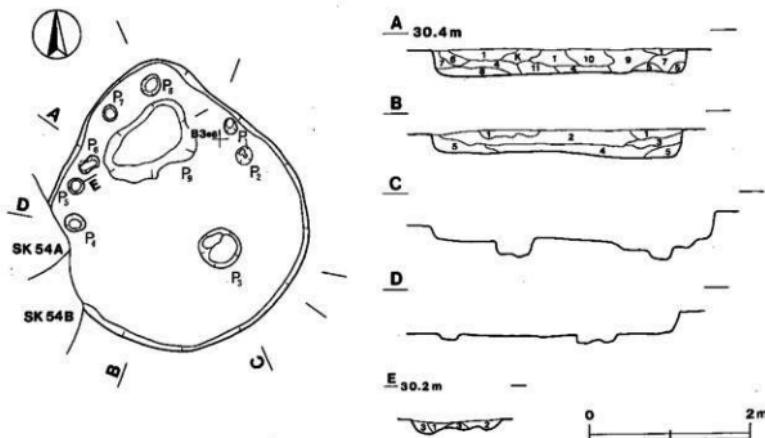
- | | | |
|---|----|------------|
| 3 | 褐色 | ローム小ブロック中量 |
|---|----|------------|

覆土 11層からなり、ロームブロックを多く含有し、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

1 短褐色	ローム小ブロック中量	7 灰褐色	ローム粒子少量
2 墓褐色	ローム粒子中量、炭化粒子微量	8 梅色	ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
3 梅色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量	9 梅色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、燒土粒子微量
4 灰褐色	ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子微量	10 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
5 梅色	ローム中ブロック多量	11 梅色	ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
6 短褐色	ローム粒子微量		

所見 本跡は、炉が付設されていないが、床面の広がりや壁の立ち上がりが確認でき、西側から東側の壁に沿って柱穴が巡っていることから、住居跡とした。出土遺物はなく、本跡の時期については不明である。



第213図 第20号住居跡実測図

第21号住居跡（第214図）

位置 調査区の中央部、B 3 f2区。

規模と平面形 一辺 4.3m ほどの方形である。

主軸方向 N - 9° - W

壁 壁高は49~52cmで、外傾して立ち上がる。

壁溝 全周している。上幅22~39cm、下幅6~15cm、深さ3~15cmで、断面形はU字状である。

壁溝土層解説

1 短褐色	黒色粒子少量、ローム粒子微量	3 暗褐色	黒色粒子少量、ローム粒子微量
2 墓褐色	ローム粒子少量	4 暗褐色	ローム粒子少量

床 平坦で、竈の手前と出入り口施設の東側が踏み固められている。竈の手前と出入り口施設の周辺が、擾乱を受けている。

貼床土層解説

6 梅色	ローム粒子中量	7 梅色	ローム粒子中量、ローム大ブロック少量
------	---------	------	--------------------

ピット 4か所（P 1～P 4）。P 1、P 2は径35cmほどの円形、P 3は長径43cm、短径33cmの円形、深さ13~15cmで、いずれも主柱穴である。P 4は径28cmの円形、深さ14cmで、出入り口施設に伴うピットである。

P 1 土層解説		
1	暗褐色	ローム粒子少量
2	暗褐色	ローム粒子中量
P 2 土層解説		
1	褐色	ローム粒子少量
2	褐色	ローム粒子中量

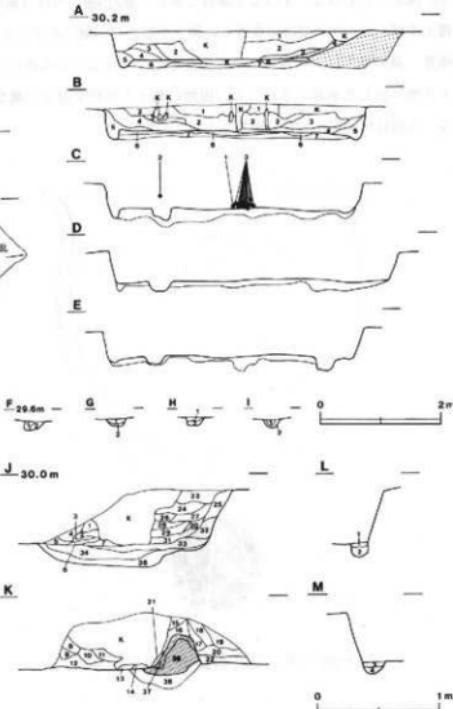
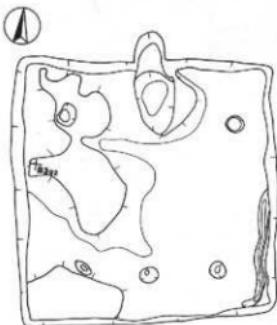
P 3 土層解説		
1	褐色	ローム粒子少量
2	褐色	ローム粒子中量
P 4 土層解説		
1	褐色	ローム粒子少量
2	暗褐色	ローム粒子中量

図 北壁の中央部に付設され、天井部は崩落している。西側袖部は搅乱を受けているが、東側袖部が残存している。袖部は地山のローム土を一部掘り残し、粘土と砂粒を混ぜて構築されている。規模は、煙道部から焚口部まで145cm、最大幅(59)cm、壁外への掘り込みは51cmである。火床面は床面を18cmほど掘りくぼめ、皿状を呈し、火熱を受けているが、あまり赤変硬化していない。煙道部の平面形は逆U字形で、外傾して急に立ち上がる。

竈土層解説

1	黒褐色	砂粒少量
2	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子少量、砂質
3	黒褐色	焼土小ブロック少量、砂質
4	褐色	焼土粒子少量、ローム粒子微量

5	板崎褐色	焼き土粒子・ローム粒子微量
6	暗褐色	焼土粒子微量
7	暗赤褐色	焼土小ブロック少量、砂質
8	黒褐色	焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量



第214図 第21号住居跡実測図

9 黒褐色	燒土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量	25 黒褐色	砂粒中量・燒土粒子・ローム粒子微量
10 暗褐色	燒土粒子・ローム粒子微量	26 暗赤褐色	砂粒多量・燒土粒子少量
11 黑褐色	砂粒中量・燒土粒子微量	27 暗褐色	砂粒中量・燒土粒子微量
12 黑褐色	ローム中ブロック多量	28 暗赤褐色	砂粒多量・燒土中ブロック微量
13 暗褐色	小礫・砂粒少量	29 暗赤褐色	砂粒多量・燒土粒子少量
14 暗赤褐色	砂粒少量・焼土中ブロック微量	30 暗褐色	砂粒多量
15 暗褐色	小礫・砂粒中量	31 暗赤褐色	燒土粒子・砂粒中量・燒土小ブロック・小礫少量
16 暗褐色	小礫少量・燒土小ブロック・砂粒微量	32 暗赤褐色	砂粒中量・燒土粒子少量・ローム粒子微量
17 暗褐色	砂粒多量・ローム小ブロック微量	33 暗赤褐色	燒土粒子中量
18 黑褐色	砂粒中量・ローム粒子微量	34 暗赤褐色	燒土粒子中量・焼土大ブロック・砂粒少量(火床面上の燃焼灰の堆積層)
19 板暗褐色	ローム粒子・砂粒少量	35 にい赤褐色	砂粒多量・燒土中ブロック・粘土粒子少量(鐵袖部の芯材の粘土層)
20 黑褐色	ローム小ブロック・ローム粒子微量	36 暗褐色	燒土粒子・ローム粒子少量(火床下面の火熱を受けた層)
21 暗赤褐色	燒土小ブロック・砂粒少量	37 褐色	砂粒多量・燒土粒子少量
22 暗褐色	ローム中ブロック微量		
23 黑褐色	砂粒多量・燒土粒子微量		
24 黑褐色	砂粒多量・燒土粒子微量		

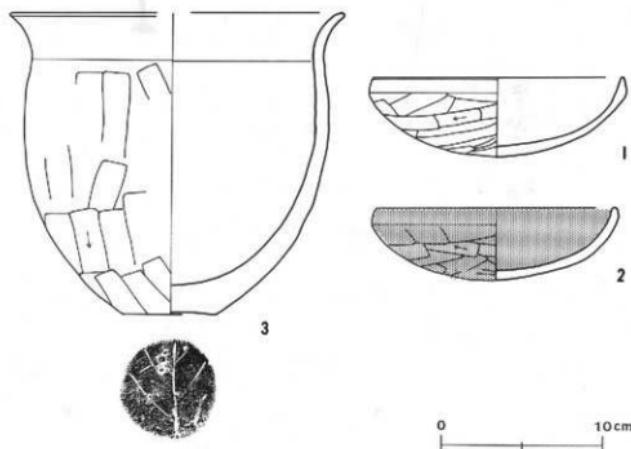
覆土 5層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

1 黒色	ローム粒子微量	4 褐色	ローム小ブロック微量
2 黒褐色	ローム粒子・燒土粒子微量	5 褐色	ローム中ブロック微量
3 黒褐色	ローム粒子微量		

遺物 土師器片71点、及び混入した縄文土器片9点が出土している。ほとんどの遺物は南壁寄りに集中している。図示したものは、すべて土師器である。第215図1の壺は南壁寄りの覆土下層から、2の壺はP2の上部の覆土中層から、3の壺は南壁寄りの覆土中層から下層にかけてそれぞれ出土している。

所見 壺の袖部は、西側の袖部は搅乱を受けているため明確ではないが、東側袖部は北壁付近の地山のローム土を削り出して袖部の芯材とし、周囲に粘土と砂粒を混ぜて構築している。時期は、遺構の形態や出土土器から、古墳時代後期（6世紀後葉）と考えられる。



第215図 第21号住居跡出土遺物実測図

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	直径(㎝)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第21号 1	壺 土器	A 15.4 B 4.8	体部、口縁部一部欠損。丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は短く直立し、端部は尖る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。	長石 赤色粒子 砂粒 橙色 普通	P14 80% P L68 覆土下層
	壺 土器	A 14.8 B 4.4	体部、口縁部一部欠損。丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面ナデ。内・外側黒色施理。	長石 砂粒 にぶい橙色 普通	P15 80% P L68 ピット2の上部
3	壺 土器	A [20.6] B 18.5 C 5.8	底部から口縁部にかけての破片。平底。体部は球形状で、最大径を中位にもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面中位以上継ぎ、下位斜位のヘラ削り。内面ナデ。底部木素痕。	長石 石英 砂粒 にぶい橙色 普通	P16 30% P L68 覆土中層・下層

第22号住居跡（第216図）

位置 調査区の北部，B 3 b3区。

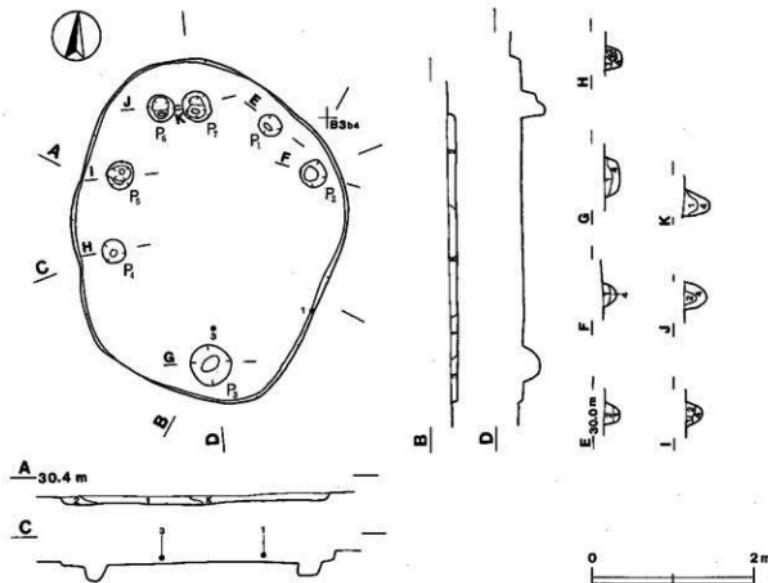
規模と平面形 長径4.26m, 短径3.43mの楕円形である。

長径方向 N - 11° - W

壁 壁高は6～12cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦で、特に踏み固められている部分はない。

ピット 7か所（P 1～P 7）。P 1～P 7は径27～49cmの円形、深さ16～30cmで、規模や配列から柱穴と考え



第216図 第22号住居跡実測図

られる。

P 1～P 7 土層解説

- | | |
|------------------|-----------------|
| 1 暗褐色 ローム中ブロック中量 | 3 褐色 ローム大ブロック少量 |
| 2 暗褐色 ローム小ブロック少量 | 4 褐色 ローム中ブロック中量 |

覆土 3層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

- | | |
|--------------------|---------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・黒色粒子少量 | 3 黒褐色 ローム粒子微量 |
| 2 褐色 ローム粒子中量 | |

遺物 繩文土器片20点が出土している。第217図1～3は、縩文土器片の拓影図である。1と2は東北南部系大洞C式土器浅鉢の口縁部片である。両者とも口唇部内側に沈線、頸部には平行沈線が施されている。1は内・外面ともに磨かれている。3は前浦式土器鉢の胴部から口縁部片である。波状口縁を呈し、口唇部に突起を有する。外面には入組磨削繩文が施されている。内面は磨かれ、口縁部には弧状の凹線が巡っている。

所見 本跡は、炉が付設されていないが、床面の広がりや壁の立ち上がりが確認でき、柱穴が壁に沿ってほぼ巡っていることから、住居跡とした。時期は、遺構の形態や出土土器から、縩文時代晚期中葉と考えられる。



第217図 第22号住居跡出土遺物実測図

2 堪穴状遺構

今回の調査で、調査区の東部から南部にかけて、堪穴状遺構8基を検出した。当初、第3・6・7・13・14・23・24・25号住居跡として調査した各遺構については、床面に踏み締められた硬化面が見られないこと、炉、竈、貯蔵穴及び柱穴等の内部施設が伴わない遺構がほとんどであること、そして、規模が一辺4m以下の小形である等のことから、居住を目的とした堪穴住居と区別できる。そのため、それらの遺構を第1～8号堪穴状遺構と改称した。以下、検出された堪穴状遺構の特徴や出土遺物について記載する。

第1号堪穴状遺構（第218図）

位置 調査区の南部、D 314区。

規模と形状 南北方向2.96m、東西方向(1.66)mで、南西壁が調査区域外のため、平面形は不明である。深さは31～37cm、底面は中央部にやや凹凸が見られ、壁は外傾して立ち上がる。

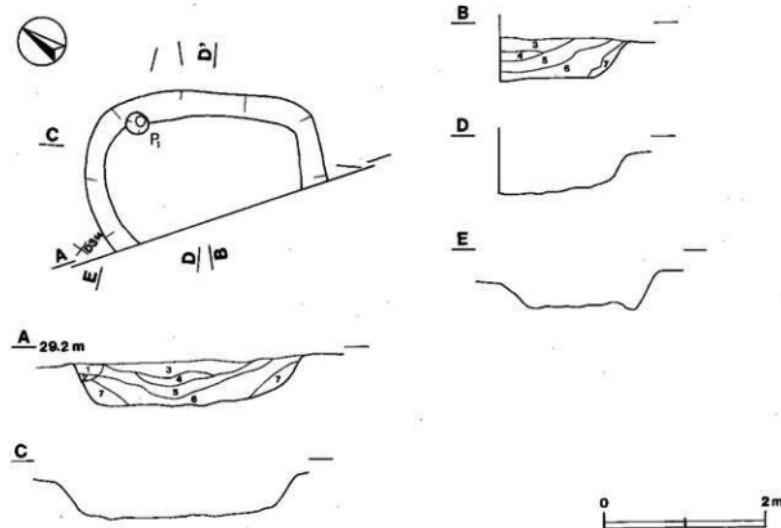
長軸方向 N-46°W

ピット 1か所。P1は径28cmの円形、深さ11cmで性格は不明である。

覆土 7層からなり、1・2層は不自然な堆積の状況が見られることから人為堆積、3～7層はレンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

1 黒褐色 炭化粒子中量、炭化物・ローム粒子少量	5 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量	6 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
3 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック微量
4 黒色 ローム粒子微量	



第218図 第1号堪穴状遺構実測図

遺物 覆土中から、土師器片36点、及び混入した縄文土器片16点、弥生土器片1点が出土している。

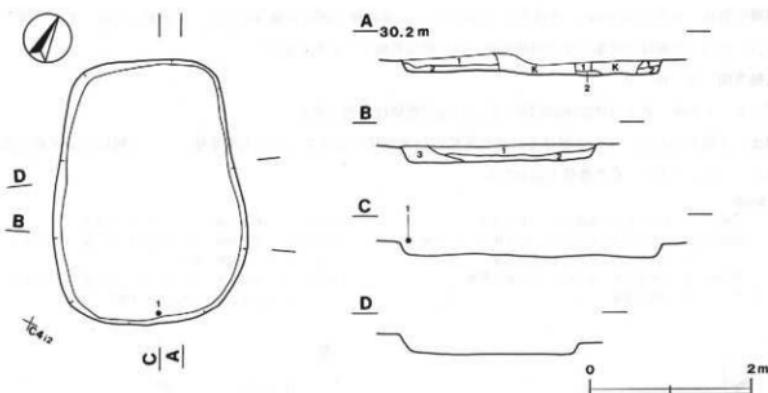
所見 遺物はほとんどが細片であるため、時期は明確ではないが、出土土器から、古墳時代後期と考えられる。

第2号竪穴状遺構（第219図）

位置 調査区の南東部、C 4 h2区。

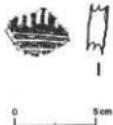
規模と形状 平面形は、長軸3.24m、短軸2.32mの隅丸長方形で、深さ12~22cmである。底面は平坦で、特に踏み固められている部分はない。壁は外傾して立ち上がる。

長軸方向 N-31°-W



第219図 第2号竪穴状遺構実測図

覆土 3層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。



土層解説	
1	褐色 ローム粒子・砂粒少量
2	褐色 ローム粒子少量
3	褐色 ローム粒子中量、炭化物微量

第220図 第2号竪穴

状遺構出土

遺物実測図

遺物 覆土中から、縄文土器片4点が出土している。第220図1は田戸下層式土器の拓影図である。胸部片で、横位の平行沈線と幅広の刺突文が施されている。

所見 遺物は少なく、ほとんどが細片であるため、本跡の性格や時期については不明である。

第3号竪穴状遺構（第221図）

位置 調査区の中央部、C 3 e0区。

重複関係 第152号土坑が、本跡を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と形状 東西方向2.74m、南北方向(2.74)mで、本跡の北壁が、第152号土坑に掘り込まれているため、平面形は不明である。深さは15~17cm、底面は平坦で、特に踏み固められている部分はない。壁は外傾して立

ち上がる。

長軸方向 N-15°-E

覆土 2層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

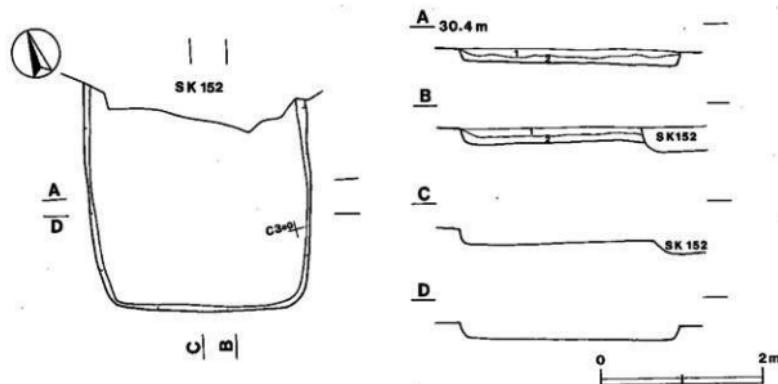
土壤解説

1 墓園色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

2 梅色 ローム小ブロック中量

遺物 覆土中から、縄文土器片2点が出土している。

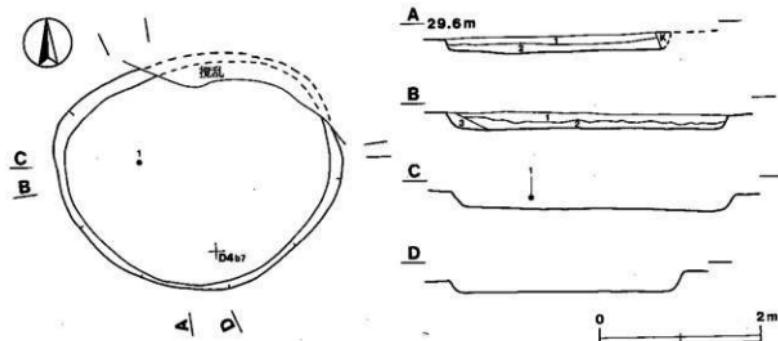
所見 遺物は少なく、細片であるため、本跡の性格や時期については不明である。



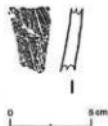
第221図 第3号竪穴状造構実測図

第4号竪穴状造構（第222図）

位置 調査区の南東部, D 4 a6区。



第222図 第4号竪穴状造構実測図



第223図 第4号竪穴
状遺構出土
遺物実測図

規模と形状 北東側が擾乱を受けており、平面形は、長径3.41m、短径 [3.03] mの楕円形と推定される。深さは12~25cm、底面は平坦で、特に踏み固められている部分はない。壁は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-67°-W

覆土 3層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 楊色 ローム中・小ブロック・炭化物少量、焼土小ブロック微量
- 2 楊色 ローム小ブロック・黒色粒子少量、ローム大ブロック微量
- 3 楊色 ローム粒子中量

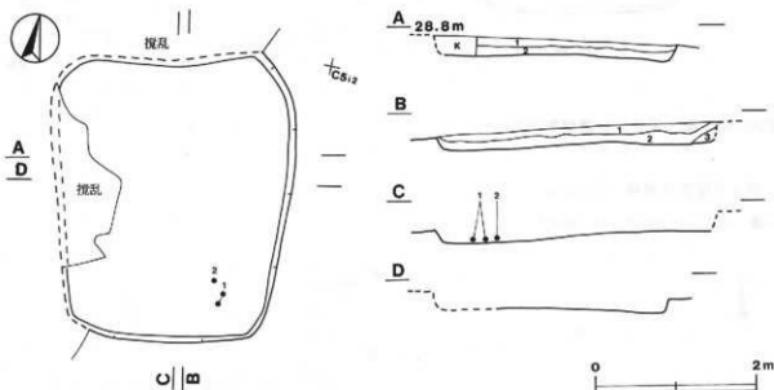
遺物 覆土中から、縄文土器片2点が出土している。第223図1は、縄文土器片の拓影図である。胴部片で、縦位の削痕が見られる。

所見 遺物は少なく、細片であるため、本跡の性格や時期については不明である。

第5号竪穴状遺構（第224図）

位置 調査区の南東部、C 511区。

規模と形状 北壁から西壁にかけて擾乱を受けしており、平面形は、長軸 [3.50] m、短軸 [2.87] mの隔丸長方形と推定される。深さは17~24cm、底面は平坦で、特に踏み固められている部分はない。壁は外傾して立ち上がる。



第224図 第5号竪穴状遺構実測図



第225図 第5号竪穴状遺構出土遺物実測図

長軸方向 N-10°-W

覆土 3層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 楊色 ローム中・小ブロック・炭化物少量、焼土小ブロック微量
- 2 楊色 炭化物・ローム粒子中量、ローム大ブロック微量
- 3 楊色 ローム粒子中量

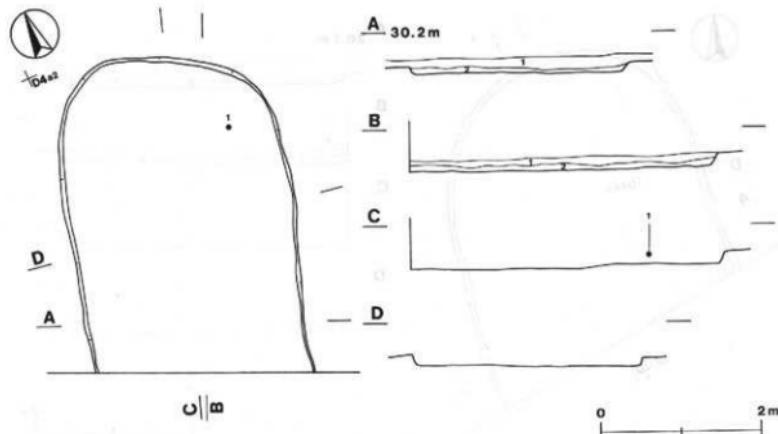
遺物 覆土中から、縄文土器片2点、土師器片3点が出土している。第225図1と2は、縄文土器片の拓影図である。両者とも前期前葉黒浜式土器の胴部片である。1は単節L Rの縄文を方向を異に回転させ、縦羽状構成をとっている。2は単節R Lの縄文が施されている。ともに、胎土に纖維を含み、内面に条痕文が施されている。

所見 遺物は少なく、細片であるため、本跡の性格や時期については不明である。

第6号竪穴状遺構（第226図）

位置 調査区の南部、D 4 a2区。

規模と形状 平面形は、長軸(3.92)m、短軸2.87mで、南壁が調査区域外のため、平面形は不明である。深さは10~15cm、底面は平坦で、特に踏み固められている部分はない。壁は外傾して立ち上がる。



第226図 第6号竪穴状遺構実測図

長軸方向 N-19° E

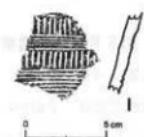
覆土 2層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 黄色 ローム粒子・黒色粒子少量
- 2 黄色 ローム小ブロック中量

遺物 覆土中から、縄文土器片3点が出土している。第227図1は、縄文土器片の拓影図である。早期中葉三戸式土器の胴部片で、幅広の刺突文が縦位に、細密沈線が横位に施されている。

所見 遺物は少なく、細片であるため、本跡の性格や時期については不明である。



第227図 第6号竪穴状遺構出土遺物実測図

第7号竪穴状遺構（第228図）

位置 調査区の南部, D 4 b3区。

規模と形状 平面形は、長径(3.78)m、短径3.35mで、南壁が調査区域外のため、平面形は不明である。深さは13~17cm、底面は平坦で、特に踏み固められている部分はない。壁は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-14°-E

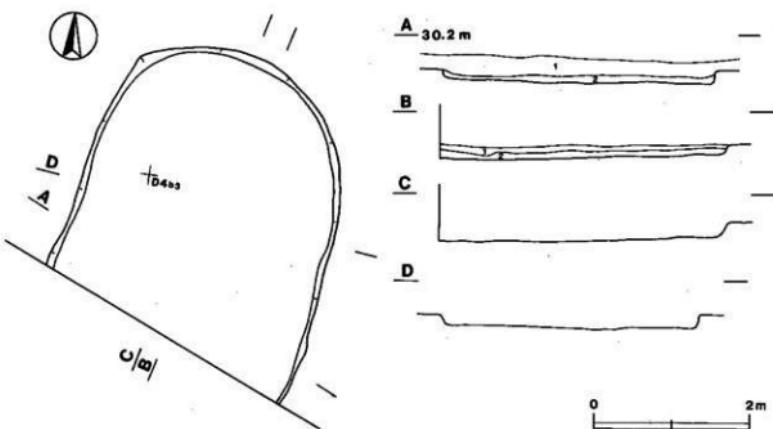
覆土 2層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|----------------|
| 1 | 褐 色 | ローム粒子中量、炭化粒子微量 |
| 2 | 褐 色 | ローム小ブロック中量 |

遺物 覆土中から、縄文土器片7点が出土している。

所見 遺物は少なく、ほとんどが細片であるため、本跡の性格や時期については不明である。



第228図 第7号竪穴状遺構実測図

第8号竪穴状遺構（第229図）

位置 調査区の南部, C 4 j1区。

規模と形状 平面形は、長径4.06m、短径2.85mの楕円形で、深さ15~23cmである。底面は平坦で、特に踏み固められている部分はない。壁は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-18°-E

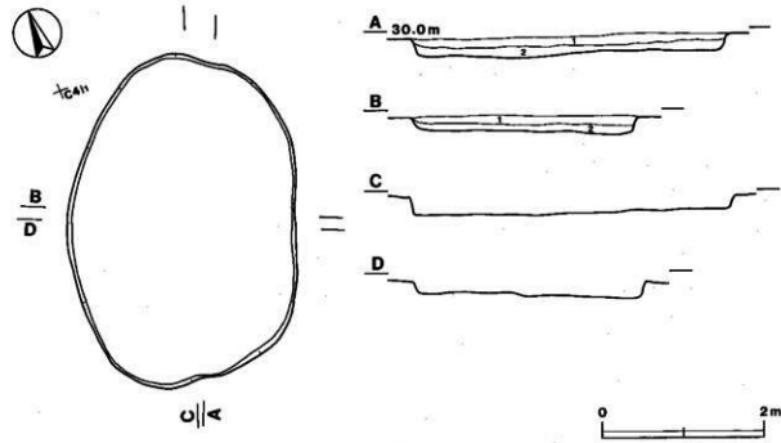
覆土 2層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|-------------------|
| 1 | 褐 色 | ローム粒子少量 |
| 2 | 褐 色 | ローム小ブロック中量、炭化粒子微量 |

遺物 覆土中から、縄文土器片5点が出土している。

所見 遺物は少なく、ほとんどが細片であるため、本跡の性格や時期については不明である。



第229図 第8号竪穴状遺構実測図

3 塚

今回の調査で、調査区北西部から中世の塚2基を検出した。第1号塚は、現存している盛土の中央部から北側にかけて、また、2基の塚周辺にも重機によると思われる大きな掘り込みがあった。以下、検出した塚の特徴と出土遺物について記載する。

第1号塚（第230・231図）

位置 調査区の北西部、A 1c0～A 1d1区。

重複関係 本跡が、第4号住居跡の上部に築造されていることから、本跡が新しい。

規模と形状 基底面は、長径7.95m、短径5.05mの梢円形を呈し、現地表面から塚頂部までの高さは1.15mである。塚下には埋納坑が付設されており、平面形は、径0.37mほどの円形で、深さ43cmである。底面は皿状を呈し、壁は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-65°-W

構築状況 旧地表面を基底部とし、ローム粒子、ロームブロックを微量から多量含んだ黒褐色土、暗褐色土を中心部から土鏡頭状に盛土している。盛土上は木根による搅乱が激しいため、層の境界が不明瞭な所が多い。また、塚の中央部から北側にかけて大きな掘り込みが認められた。全体的に粘性は弱く、しまりは普通であるが、13・15・16層は硬くしまっている。

土層解説

1 表 土	9 黒 梶 色	ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量
2 黒 梶 色	10 堀 堆 暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
3 黒 梶 色	11 黒 梶 色	ローム粒子少量
4 黒 梶 色	12 黒 梶 色	ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
5 黒 梶 色	13 寒 梶 色	ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロ
6 黒 梶 色	14 黒 梶 色	ック中量、ローム大ブロック少量
7 黒 梶 色	15 寒 梶 色	ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、炭化物・
8 堀 堆 暗褐色	16 寒 梶 色	炭化物少量、ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中 粒子微量

遺物 塚下の埋納坑から、土師質土器1点、縄3点が出土している。第232図1は真壁の源法寺焼の壺で、塚下の埋納坑のはば中央部から、正位の状態で出土している。体部下位から底部にかけて、焼成後穿孔されている。壺の内部からは、縄3点と縄下から炭化物が確認されている。縄は花崗岩と流紋岩の自然石である。骨片等は検出されていない。

所見 塚下の埋納坑から出土した源法寺焼の壺の内部から、縄と炭化物が検出されている。本来は壺の口縁部の上面に木片を蓋にしてのせ、その上部に縄が置かれていた状態であったと推測されることから、本跡は墳丘墓と考えられる。時期は、出土土器から、中世末（16世紀）と考えられる。

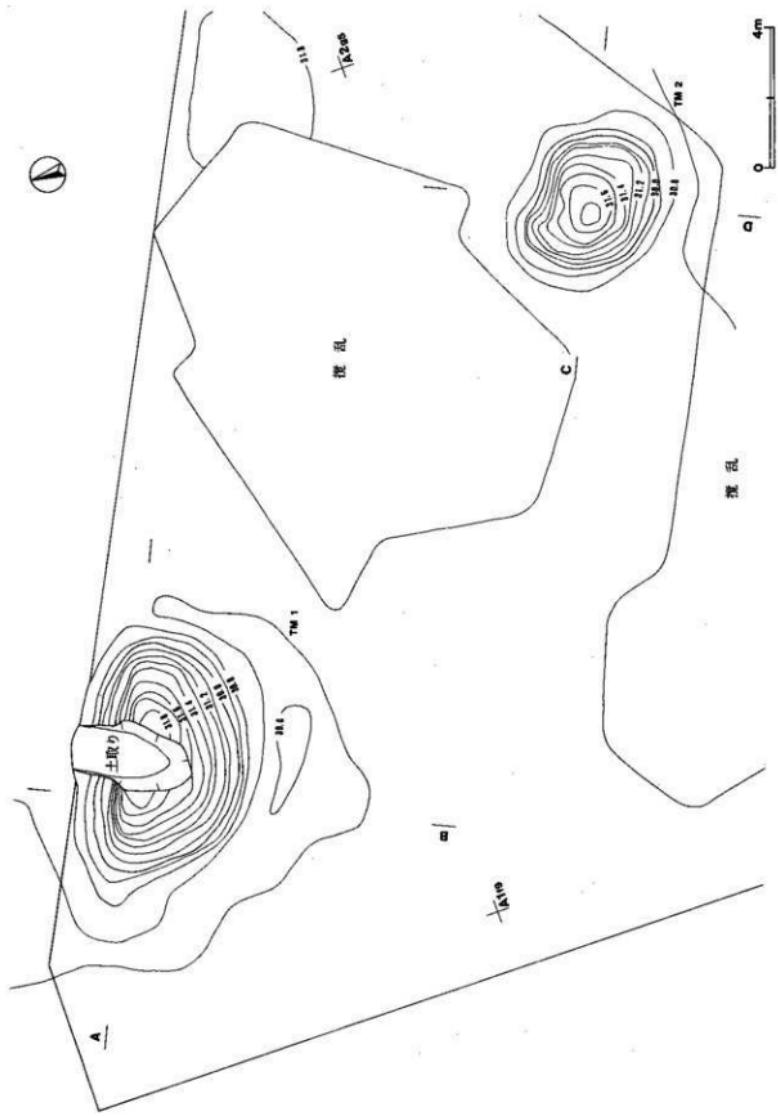
第2号塚（第230・231図）

位置 調査区の北西部、A 2h3区。

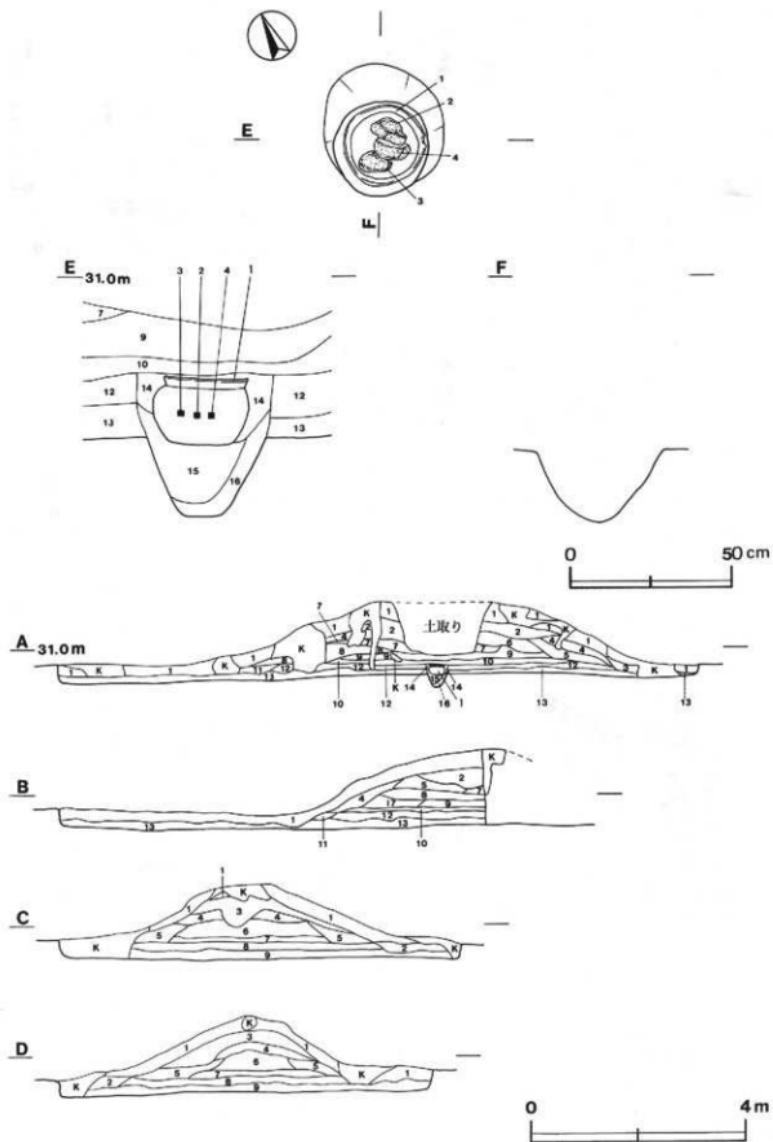
規模と形状 基底面は、長径5.55m、短径4.45mの梢円形を呈し、現地表面から塚頂部までの高さは1.05mである。

長径方向 N-28°-W

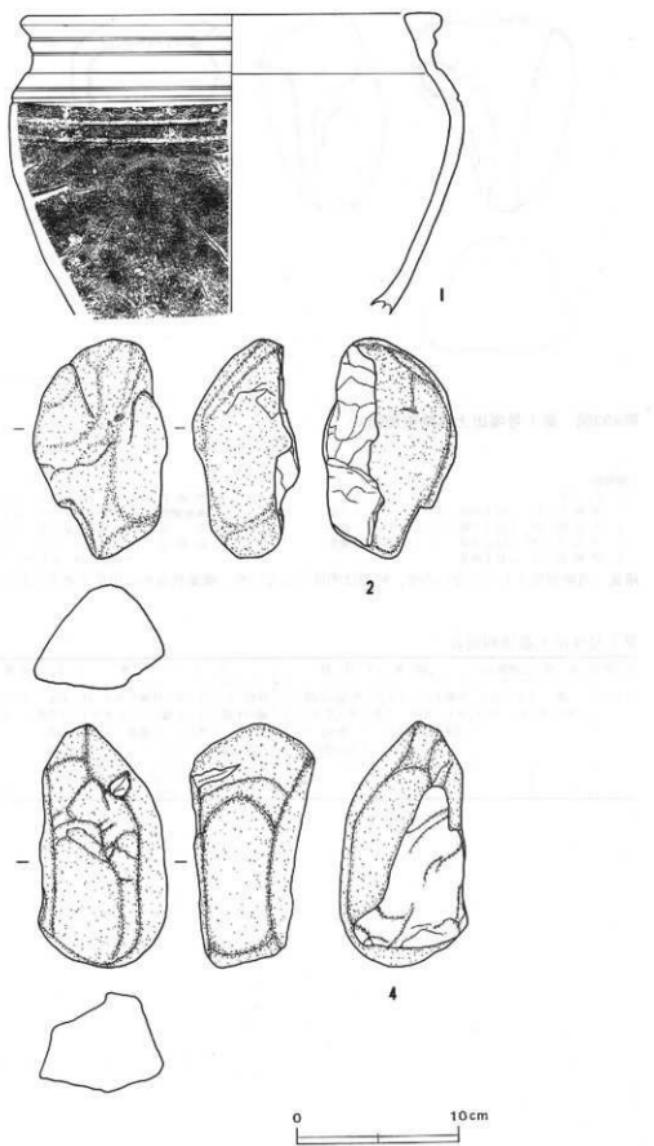
構築状況 旧地表面を基底部とし、ローム粒子、ロームブロックを微量から多量含んだ黒褐色土、暗褐色土を中心部から土鏡頭状に盛土している。木根による搅乱が認められ、全体的に粘性は弱く、しまりは普通であるが、8・9層は硬くしまっている。



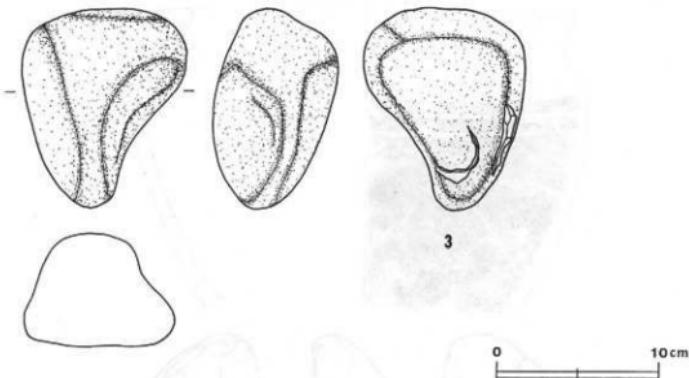
第230図 第1・2号塚地形測量図



第231図 第1号塚埋納坑、第1・2号塚土層断面図



第232図 第1号塚出土遺物実測図(1)



第233図 第1号塚出土遺物実測図(2)

土層解説

- | | |
|--------------------------|--|
| 1 表 土 | 6 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量 | 7 極暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 | 8 黒色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 |
| 4 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 | 9 噴褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロッ
ク中量、ローム大ブロック少量 |
| 5 黒褐色 ローム粒子微量 | |

所見 遺物が出土していないので、時期は明確ではないが、構築状況から中世と考えられる。

第1号塚出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第232図 1	甕 土質甕土器	A 25.7 B (18.5)	体部下位以下欠損。体部は内擇して立ち上がり、上位に最大径をもつ。口縁部はほぼ直立し、指壓による2列の段を有する。端部は肥厚化し、平坦面を作り出している。	体部上位には2条の沈線が温る。沈線の上部には3本滑歯による波状文が2列、下部には3本滑歯による上向き弦線文が2列施されている。底部はうちかかれており、周縁を窓いて丸味をもたせている。	長石 金雲母 小繊 赤色粒子 砂粒 橙色 普通	P 17 70% P L 68 甕土の遺伝寺燒 16C 塚下埋納坑

4 土坑

今回の調査で、187基の土坑を検出した。ここでは、土坑の形状、規模、覆土の状態及び出土遺物等に特徴があるものについて記述し、それ以外の土坑については一覧表に記載した。

第6号土坑（第234図）

位置 調査区の南部、C 2 g9区。

重複関係 第7号土坑が、本跡を掘り込んでいることから、本跡が古い。

規模と形状 東西方向3.32m、南北方向(2.77)mで、南側が第7号土坑に掘り込まれているため、平面形は不明である。深さは81cmほどで、底面は平坦である。壁は外傾して立ち上がる。

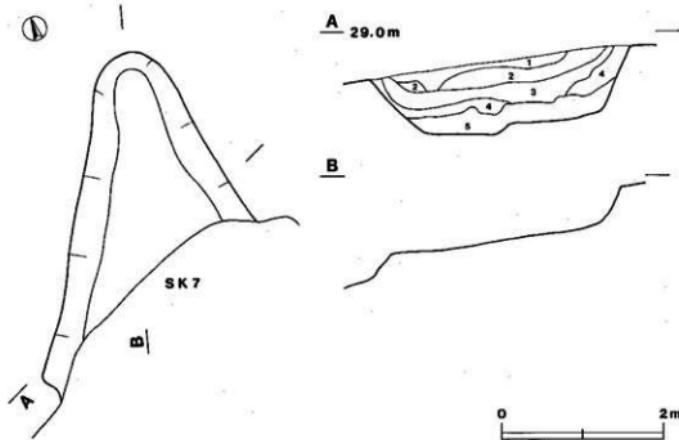
覆土 5層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

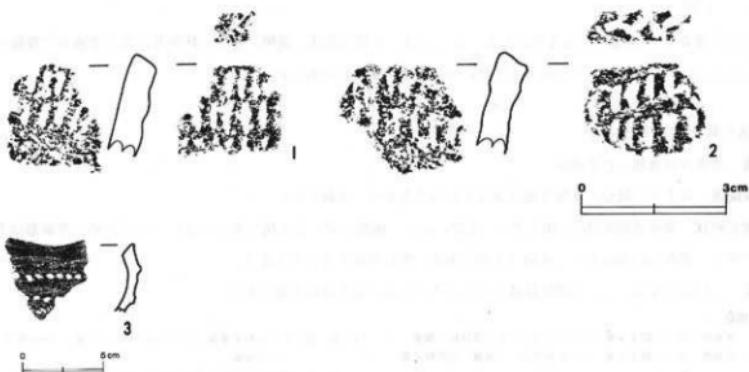
1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量	4 黄色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量	5 黄色 鹿沼バミス粒子多量、鹿沼バミス中ブロック・ローム粒子中量、鹿沼バミス中ブロック・ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量	

遺物 覆土中から、縄文土器片7点が出土している。第235図1～3は、縄文土器片の拓影図である。1と2は草創期の土器の口縁部片である。1は口唇部直下の内面に2段、外面に3段、格条体による圧痕が施されている。2の口唇部は外削ぎ状を呈し、わずかに外反する。口唇部直上に格条体による圧痕、口唇部直下の内・外面に格条体による2段の圧痕が見られる。3は加曾利E式土器の口縁部片である。波状口縁を呈し、口唇部は内削ぎ状である。口縁部に微隆起線をもち、円形の刺突が巡らされている。以下、単節LRの縄文が施されている。

所見 遺物は少なく、ほとんどが細片であるため、本跡の性格や時期については不明である。



第234図 第6号土坑実測図



第235図 第6号土坑出土遺物実測図

第19号土坑（第236図）

位置 調査区の南部, D 3 e5区。

重複関係 本跡が、第23号土坑を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

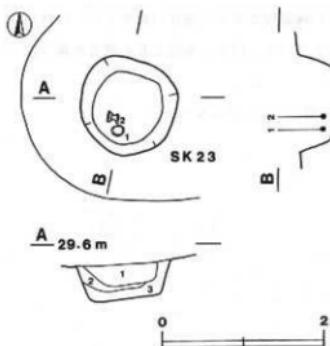
規模と形状 平面形は、長径1.28m、短径1.17mの円形で、深さ45cmである。底面は平坦で、円形を呈している。壁は外傾して立ち上がる。

覆土 3層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量

3 黄色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

遺物 土師器片4点、及び混入した繩文土器片3点が出土している。図示したものは、すべて土師器である。第237図1の壺は正位、2の高壺は横位の状態で、南寄りの覆土下層からそれぞれ出土している。

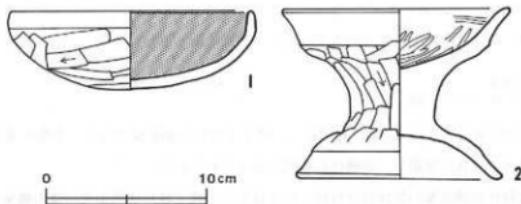


第236図 第19号土坑実測図

所見 本跡の時期は、出土土器から古墳時代後期（6世紀後葉）と考えられる。

第19号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計画図(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第237図 1	环 土 师 器	A 15.0 B 4.8	口縁部一部欠損。丸底。体部は内側して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ハラ削り、内面ナデ。内面黒色処理。	良石 磁母 砂粒 にぶい黄橙色 普通	P 18 95% P L 68 覆土下層



第237図 第19号土坑出土遺物実測図

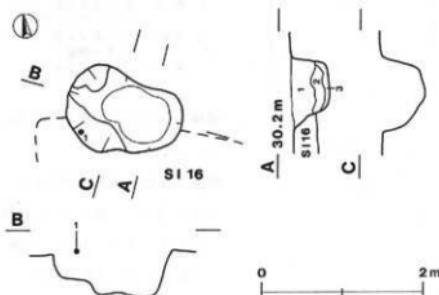
図版番号	器種	計測値(cm)	部形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
第237図 2	高環土器	A 14.1 B 10.6 D 12.9 E 6.1	完形。脚柱は円柱形で、脚部はハの字状に大きく開き、中位に棱をもつ。 環部は内側に立ち上がり、口縁部との間に棱をもつ。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外側から脚部中位にかけて、擬似のヘラ削り。体部内面ヘラ磨き。脚部中位以下横ナデ、内面横ナデ。	長石、雲母、針状結晶 砂粒 に混じる黄褐色 普通	P19. 100% P L 68 覆土下層	

第58号土坑（第238図）

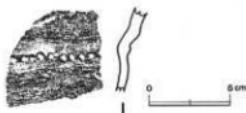
位置 調査区の北部、B 3 c7区。

重複関係 本跡が、第16号住居跡を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と形状 平面形は、長径1.46m、短径0.79mの不整椭円形で、深さ55cmである。底面には凹凸があり、西側はやや掘り込みが浅くなる。壁は外傾して立ち上がる。



第238図 第58号土坑出土遺物実測図



第239図 第58号土坑出土遺物実測図

長径方向 N-23°-E

覆土 3層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 塗褐色 ローム粒子微量
2 黄褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

- 3 黄色 ローム粒子少量

遺物 繩文土器片1点が出土している。第239図1は、縩文土器片の拓影図である。中期中葉阿玉台式土器の頸部片である。頸部はくの字状に屈曲し、屈曲部に刺突が加えられている。

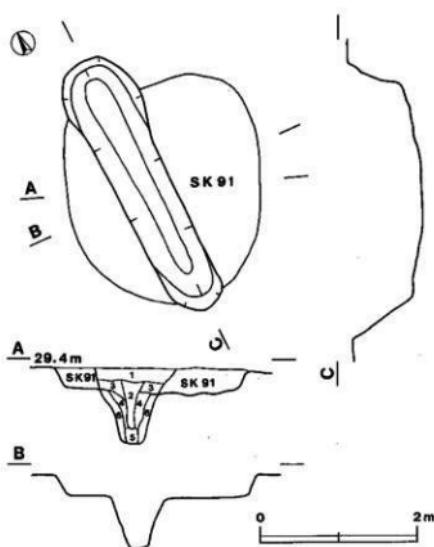
所見 時期は、縩文時代前期後葉の第16号住居跡との重複から、縩文時代前期後葉以降の構築と考えられる。

第90号土坑（第240図）

位置 調査区の西部、C 2 b8区。

重複関係 本跡が、第91号土坑を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と形状 平面形は、長径3.50m、短径0.70mの長楕円形で、深さ93cmである。底面は皿状で、断面形はU字状を呈している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、上位で外傾する。底面に近いほど長径方向に平行して狭くなる。



第240図 第90号土坑実測図

長径方向 N-1°-W

覆土 6層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

- 1 塗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 塗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 塗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 4 黄色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 5 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 6 黄色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

遺物 覆土中から、縩文土器片1点が出土している。

所見 本跡の南側は傾斜面で、傾斜に対し直交するように構築され、遺構の形態等から陥穴と考えられる。遺物は少なく、細片であるため、詳細な時期は不明であるが、縩文時代の構築と思われる。

第136号土坑（第241図）

位置 調査区の南東部、C 4 il区。

規模と形状 平面形は、長径2.66m、短径1.32mの楕円形で、深さ24cmである。底面は平坦で、楕円形を呈して

いる。壁は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-28°-W

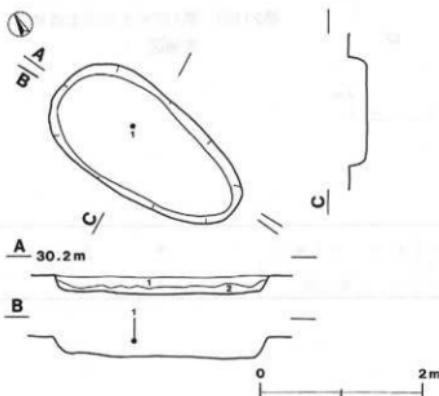
覆土 2層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土質解説

- 1 棕色 ローム粒子少量、炭化物微量
- 2 棕色 ローム小ブロック中量

遺物 繩文土器片 2点が出土している。第242図1は、繩文土器片の拓影図である。早期中葉田戸下層式土器の胴部片である。平行沈線と刺突文及び貝殻腹縫文が施文されている。

所見 遺物は少なく、細片であるため、本跡の性格や時期については不明である。



第241図 第136号土坑実測図



第242図 第136号土坑出土遺物実測図

第137号土坑 (第243図)

位置 調査区の南東部、C 4 i3区。

規模と形状 平面形は、長径2.75m、短径1.88mの楕円形で、深さ28cmである。底面は平坦で、楕円形を呈している。壁は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-7°-W

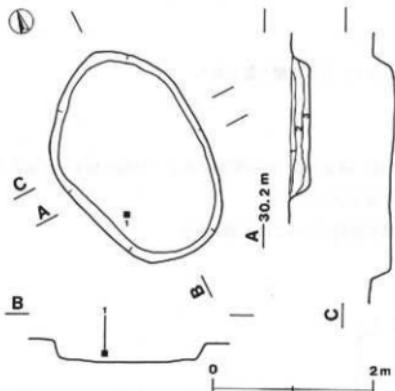
覆土 3層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土質解説

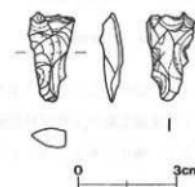
- 1 棕色 ローム粒子少量
- 2 棕色 ローム粒子少量、黒色粒子微量
- 3 棕色 ローム小ブロック中量、ローム大ブロック微量

遺物 繩文土器片 4点、石錐1点が出土している。第244図1の石錐は南西側の覆土中層から出土している。

所見 遺物は少なく、ほとんどが細片であるため、本跡の性格や時期については不明である。



第243図 第137号土坑実測図

第244図 第137号土坑出土遺物
実測図

第137号土坑出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			Q 4	P L74
第244図1	石器	2.8	1.5	0.7	2.5	チャート	覆土中層		

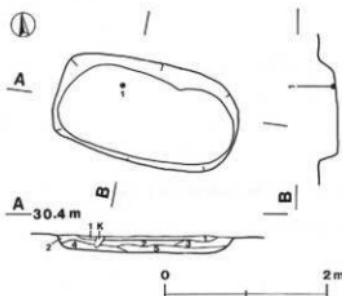
第141号土坑（第245図）

位置 調査区の中央部、C 4 d1区。

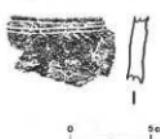
規模と形状 平面形は、長軸2.30m、短軸1.28mの隔丸長方形で、深さ25cmである。底面は平坦で、梢円形を呈している。壁は外傾して立ち上がる。

長軸方向 N-70°-W

覆土 5層からなり、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。



第245図 第141号土坑実測図

第246図 第141号土坑出土遺物
実測図

土質解説

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子少量 | 4 黒 色 炭化粒子多量、炭化物・焼土粒子中量 |
| 2 墓褐色 ローム粒子少量、炭化粒子中量 | 5 墓褐色 炭化物・炭化粒子・焼土粒子中量 |
| 3 墓褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量 | |

遺物 縄文土器片 6 点が出土している。第246図 1 は、縄文土器片の拓影図である。胴部片で、平行沈線が施されている。

所見 遺物は少なく、ほとんどが細片であるため、本跡の性格や時期については不明である。

第145号土坑（第247図）

位置 調査区の南部、C 3 g8区。

規模と形状 平面形は、長径1.09m、短径0.81mの楕円形で、深さ34cmである。底面はやや凹凸で、不整楕円形を呈している。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

長径方向 N - 12° - E

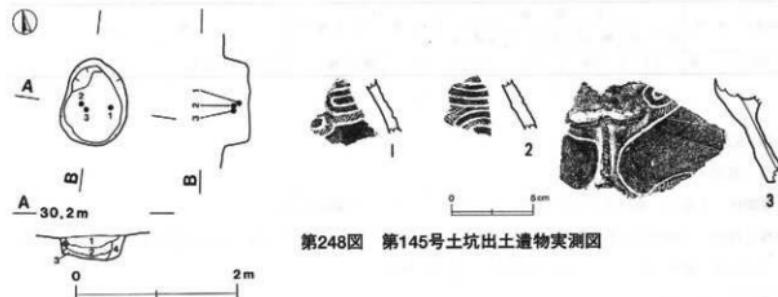
覆土 4 層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土質解説

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1 墓褐色 ローム中ブロック少量、炭化粒子微量 | 3 墓褐色 ローム小ブロック少量 |
| 2 墓褐色 ローム小ブロック少量、炭化粒子微量 | 4 暗褐色 ローム中ブロック少量、炭化粒子微量 |

遺物 縄文土器片18点、及び混入した土師器片2点が出土している。第248図 1 ~ 3 は、縄文土器片の拓影図である。1と2は胴部片である。器外面は丹念に磨かれ、棒状工具による幾何学文が施され、一部に単節LRの縄文帯が配されている。3は胴部片で、1・2と同一個体と思われる。橋状突起を有すると思われる。突起下から隆帯が垂下し、隆帯上に縄文が施されている。1~3は堀之内II式の注口土器と思われる。

所見 本跡の時期は、出土土器から縄文時代後期前葉（堀之内II式期）と考えられる。



第247図 第145号土坑実測図

第150号土坑（第249図）

位置 調査区の南東部、C 4 i1区。

規模と形状 平面形は、長径1.99m、短径1.34mの楕円形で、深さ15cmである。底面は平坦で、楕円形を呈している。壁は外傾して、緩やかに立ち上がる。

長径方向 N - 34° - W

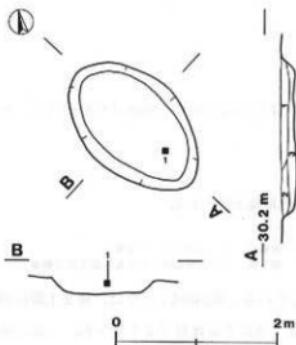
覆土 3 層からなり、ロームブロックを含有していることから、人為堆積と思われる。

土層解説

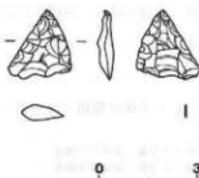
- 1 黄褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化物微量
 2 深褐色 ローム小ブロック少量
 3 浅褐色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

遺物 繩文土器片1点、石礫1点が出土している。第250図の石礫は南東側の覆土上層から出土している。

所見 遺物は少なく、細片であるため、本跡の性格や時期については不明である。



第249図 第150号土坑実測図



第250図 第136号土坑出土遺物実測図

第150号土坑出土遺物観察表

国版番号	種別	計測値			石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
第250回1	石礫	2.1	(2.0)	0.5	(1.6)	チャート	覆土上層 Q5 PL74

第153号土坑（第251図）

位置 調査区の南東部、C 3 g9区。

重複関係 本跡が、第143号土坑を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と形状 平面形は、長径1.99m、短径0.57mの不定形で、深さ48cmである。底面は凹凸で、中央部と南側はわずかに深く掘り込まれている。壁は外傾して立ち上がる。

長径方向 N-11°-E

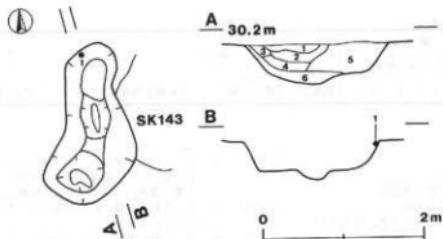
覆土 6層からなり、ロームブロックを含有し、不自然な堆積の状況が見られることから、人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 喜褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
 2 深褐色 ローム粒子少量
 3 浅褐色 ローム小ブロック少量
 4 暗褐色 ローム小ブロック微量、ローム中ブロック・炭化物微量
 5 深褐色 ローム小ブロック少量
 6 暗褐色 ローム中ブロック中量、ローム大ブロック微量

遺物 繩文土器片4点が出土している。第252図1は、繩文土器片の拓影図である。浅鉢の口縁部片で、口唇部内面に段をもっている。口縁部を細沈線で区画し、以下単節L Rの縦文が施されている。

所見 遺物は少なく、ほとんどが細片であるため、本跡の性格や時期については不明である。



第251図 第153号土坑実測図



第252図 第153号土坑
出土遺物実測図

第185号土坑 (253図)

位置 調査区の東部、C 4 15区。

規模と形状 平面形は、長径1.58m、短径0.96mの楕円形で、深さ33cmである。底面はやや凹凸で、楕円形を呈している。壁は外傾して立ち上がる。

長径方向 N - 36° - E

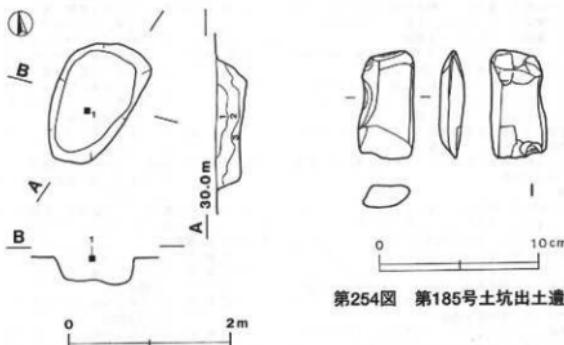
覆土 3層からなり、ロームブロックの堆積している状況から、人為堆積と思われる。

土層解説

- 1 極色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 2 極色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 3 極色 ローム小ブロック中量

遺物 繩文土器片2点、片刃石斧1点が出土している。第254図1の片刃石斧が中央部の覆土上層から出土している。

所見 本跡の西側には弥生時代後期中葉の第11号住居跡が存在し、1の片刃石斧は第11号住居跡からの流れ込みの可能性が考えられる。遺物は少なく、細片であるため、本跡の性格や時期については不明である。



第253図 第185号土坑実測図

第254図 第185号土坑出土遺物実測図

第185号土坑出土遺物観察表

図版番号	種別	計測値			石質	出土地点	備考		
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			重量(g)		
集254图1	挿入片石等	6.7	3.5	1.5	50.1	粘板岩	覆土上層	石剝を再加工	Q 6 P L73

第1号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
 2 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
 3 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
 4 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
 5 黑褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子微量
 6 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化物・炭化粒子微量
 7 黑褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、炭化粒子微量

第8号土坑土層解説

- 1 墓褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・鹿沼バニス粒子少量
 2 極褐色 ローム粒子中量、鹿沼バニス小ブロック・ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
 3 黄褐色 鹿沼バニス粒子多量、鹿沼バニス小ブロック中量、ローム粒子微量
 4 黄褐色 鹿沼バニス小ブロック・鹿沼バニス粒子・ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
 5 灰褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・鹿沼バニス粒子少量、灰白色粒子微量
 6 灰褐色 ローム粒子・鹿沼バニス粒子中量、ローム小ブロック・鹿沼バニス小ブロック・ローム中ブロック・炭化粒子微量
 7 灰褐色 ローム粒子・鹿沼バニス中量、ローム小ブロック・鹿沼バニス粒子微量
 8 極褐色 ローム粒子・鹿沼バニス中量、ローム小ブロック・鹿沼バニス粒子少量
 9 極褐色 ローム粒子・鹿沼バニス粒子中量、ローム小ブロック・鹿沼バニス小ブロック中量、鹿沼バニス中量、ローム中ブロック・鹿沼バニス中量、ローム小ブロック少量
 10 灰褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・鹿沼バニス粒子少量、ローム中ブロック・鹿沼バニス小ブロック微量
 11 極褐色 ローム粒子・鹿沼バニス中量、ローム小ブロック・鹿沼バニス中量、ローム中ブロック・鹿沼バニス中量、ローム小ブロック少量
 12 極褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、鹿沼バニス粒子微量
 13 黄褐色 ローム粒子・鹿沼バニス粒子中量、ローム小ブロック・鹿沼バニス小ブロック中量、ローム中ブロック・鹿沼バニス中量、鹿沼バニス中量
 14 明黄褐色 鹿沼バニス粒子多量、鹿沼バニス小ブロック中量、鹿沼バニス中量
 15 極褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

第17号土坑土層解説

- 1 墓褐色 ローム粒子・鹿沼バニス粒子少量、ローム小ブロック・鹿沼バニス小ブロック・炭化粒子微量
 2 極褐色 鹿沼バニス粒子中量、鹿沼バニス小ブロック・ローム粒子少量、鹿沼バニス中量、鹿沼バニス中量
 3 黄褐色 鹿沼バニス中量、鹿沼バニス小ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子微量
 4 黄褐色 鹿沼バニス中量、小ブロック・鹿沼バニス粒子中量、ローム小ブロック
 5 極褐色 ローム粒子・鹿沼バニス粒子中量、ローム小ブロック・鹿沼バニス小ブロック中量、鹿沼バニス中量、ローム中ブロック・鹿沼バニス中量
 6 極褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・鹿沼バニス粒子少量、ローム中ブロック
 7 灰褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・鹿沼バニス小ブロック微量
 子少量、ローム中ブロック微量

8 極褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・鹿沼バニス粒子中量、ローム中ブロック・鹿沼バニス小ブロック微量

9 極褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

10 極褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・鹿沼バニス粒子中量、鹿沼バニス小ブロック微量

11 黄褐色 鹿沼バニス粒子多量、鹿沼バニス小ブロック・ローム粒子中量、鹿沼バニス中量、鹿沼バニス中量、鹿沼バニス小ブロック微量

第23号土坑土層解説

- 1 墓褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック微量
 2 極褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
 3 極褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
 4 極褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム大・中ブロック少量
 5 極褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量(粘性弱)
 6 極褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・鹿沼バニス粒子少量、鹿沼バニス小ブロック微量
 7 極褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・鹿沼バニス粒子少量、ローム大ブロック・鹿沼バニス小ブロック微量
 8 極褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、ローム大ブロック・鹿沼バニス粒子微量
 9 明褐色 ローム粒子多量、鹿沼バニス粒子中量、ローム小ブロック・鹿沼バニス小ブロック少量、ローム中ブロック・鹿沼バニス中量

第26号土坑土層解説

- 1 墓褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、鹿沼バニス粒子少量、鹿沼バニス小ブロック微量
 2 明褐色 ローム粒子・鹿沼バニス粒子中量、ローム小ブロック・鹿沼バニス小ブロック少量、鹿沼バニス中量
 3 極褐色 鹿沼バニス粒子多量、鹿沼バニス小ブロック・ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
 4 墓褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量
 5 墓褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、鹿沼バニス粒子微量
 6 極褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・鹿沼バニス粒子中量、鹿沼バニス小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
 7 極褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
 8 黄褐色 鹿沼バニス粒子多量、鹿沼バニス小ブロック中量、ローム粒子少量、鹿沼バニス中量、ローム小ブロック微量
 9 明黄褐色 鹿沼バニス粒子多量、鹿沼バニス小ブロック中量、鹿沼バニス中量、ローム粒子微量

第31号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
 2 墓褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・ローム中ブロック微量
 3 墓褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック微量
 4 墓褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量
 5 極褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

第40号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子少量、燒土粒子・炭化粒子微量
 2 黑褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
 3 墓褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
 4 墓褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック微量

- 5 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
 6 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
 7 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
 8 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
 9 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
 10 褐色 ローム中・小ブロック・ローム粒子多量
- 第44号土壌土層解説
 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量 (粘性弱)
 4 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
 5 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量 (粘性弱)
 6 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量 (4層よりもややしまりがある)

- 第52号土壌土層解説
 1 黒褐色 ローム粒子少量、黒色粒子微量
 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
 3 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
 4 黑褐色 ローム粒子中量
 5 暗褐色 ローム粒子中量
 6 褐色 ローム中ブロック中量
 7 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック微量
 8 褐色 ローム中ブロック中量
- 第14号B母土土層解説
 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
 2 暗褐色 ローム小ブロック中量
 3 褐色 ローム大・小ブロック多量、ローム中ブロック中量
 4 暗褐色 ローム小ブロック中量
 5 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量、ローム中ブロック中量
 6 褐色 ローム小ブロック・鹿沼バミス粒子中量
 7 褐色 ローム小ブロック中量
 8 褐色 鹿沼バミス粒子多量、ローム粒子中量
 9 黄褐色 鹿沼バミス粒子多量、ローム中・小ブロック中量、鹿沼小ブロック少量
 10 褐色 ローム中・小ブロック中量、鹿沼バミス粒子少量
 11 黄褐色 ローム小ブロック・鹿沼バミス粒子中量
 12 褐色 ローム小ブロック・鹿沼バミス粒子多量、ローム中ブロック中量
 13 褐色 ローム中・小ブロック少量
 14 褐色 ローム小ブロック・鹿沼バミス粒子多量
 15 褐色 ローム中ブロック多量、ローム小ブロック・鹿沼バミス粒子中量
 16 褐色 鹿沼バミス小ブロック・鹿沼バミス粒子多量、ローム小ブロック中量
 17 暗褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量
 18 暗褐色 ローム小ブロック中量
 19 暗褐色 ローム小ブロック中量、炭化粒子少量
 20 明黄色 鹿沼バミス粒子多量、鹿沼バミス大ブロック中量
 21 褐色 ローム粒子・鹿沼バミス粒子多量

- 第56号土壌土層解説
 1 黑褐色 ローム小ブロック中量、炭化粒子微量
 2 褐色 ローム小ブロック中量 (しまり強い)
 3 褐色 ローム大ブロック多量
 4 褐色 ローム大ブロック多量 (3層よりもしまりが強い)
 5 褐色 ローム小ブロック少量
 6 黑褐色 ローム粒子多量、ローム大ブロック微量
 7 褐色 ローム大ブロック中量
 8 褐色 ローム中ブロック中量、ローム大ブロック微量
 9 褐色 ローム小ブロック中量 (しまり普通)
 10 褐色 ローム粒子中量

- 第62号土壌土層解説
 1 暗褐色 ローム小ブロック中量
 2 褐色 ローム小ブロック中量、白色粒子少量
 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
 4 褐色 ローム中ブロック中量 (しまり普通)
 5 にじ褐色 ローム中ブロック中量
 6 褐色 ローム中ブロック中量 (しまり強い)
 7 褐色 ローム中ブロック中量、炭化粒子微量

第79号土壌土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
 2 暗褐色 ローム粒子中量
 3 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・炭化粒子少量
 4 褐色 ローム粒子中量
 5 褐色 ローム中ブロック中量、ローム小ブロック少量
- 第120号土壌土層解説
 1 暗褐色 ローム粒子微量
 2 褐色 ローム小ブロック中量
 3 褐色 ローム粒子中量
 4 褐色 ローム粒子少量 (粘性強い)
 5 褐色 ローム小ブロック少量
 6 褐色 ローム粒子少量 (粘性弱)
 7 褐色 ローム中ブロック少量
 8 褐色 ローム中ブロック少量 (7層よりもしまりがある)

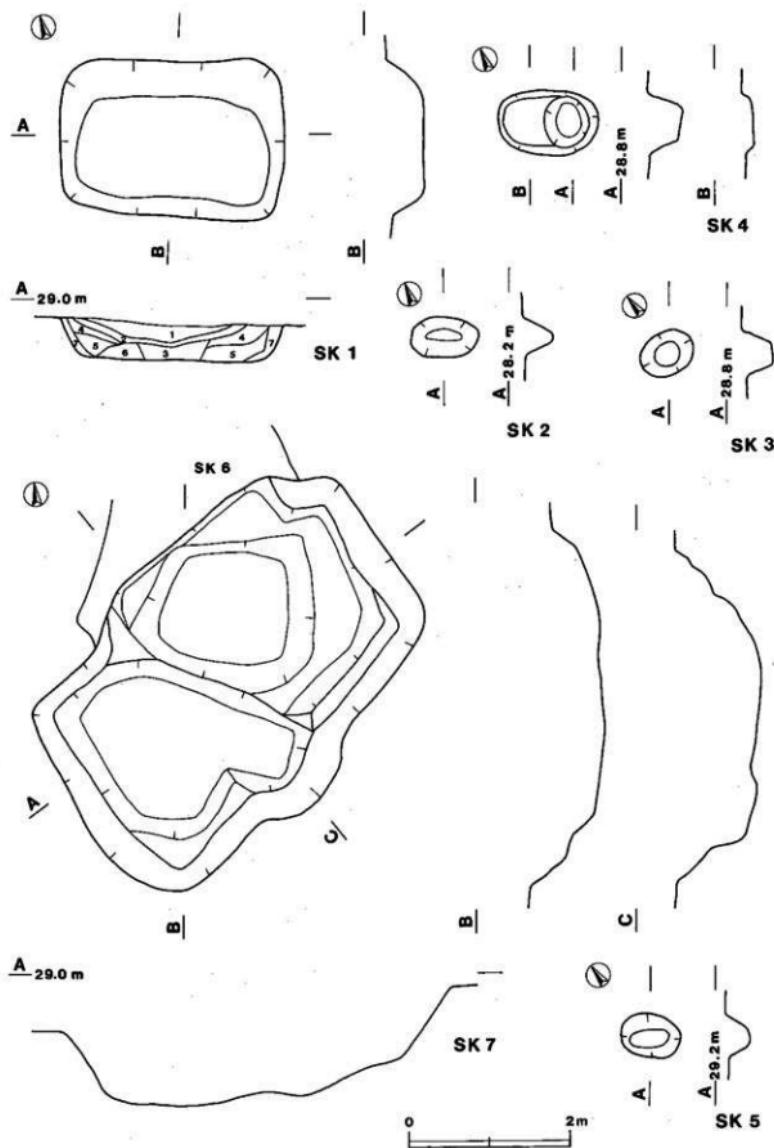
- 第128号土壌土層解説
 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・鹿沼バミス中・小ブロック・鹿沼バミス粒子微量
 2 黑褐色 ローム粒子・鹿沼バミス粒子少量、ローム中・小ブロック・鹿沼バミス粒子微量
 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・鹿沼バミス中・小ブロック・鹿沼バミス粒子微量
 5 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・鹿沼バミス小ブロック・鹿沼バミス粒子微量
 6 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック微量
 7 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、ローム大・中ブロック微量
 8 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
 9 明黄色 鹿沼バミス粒子多量、鹿沼バミス小ブロック中量、鹿沼バミス中ブロック・ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

第151号土壌土層解説

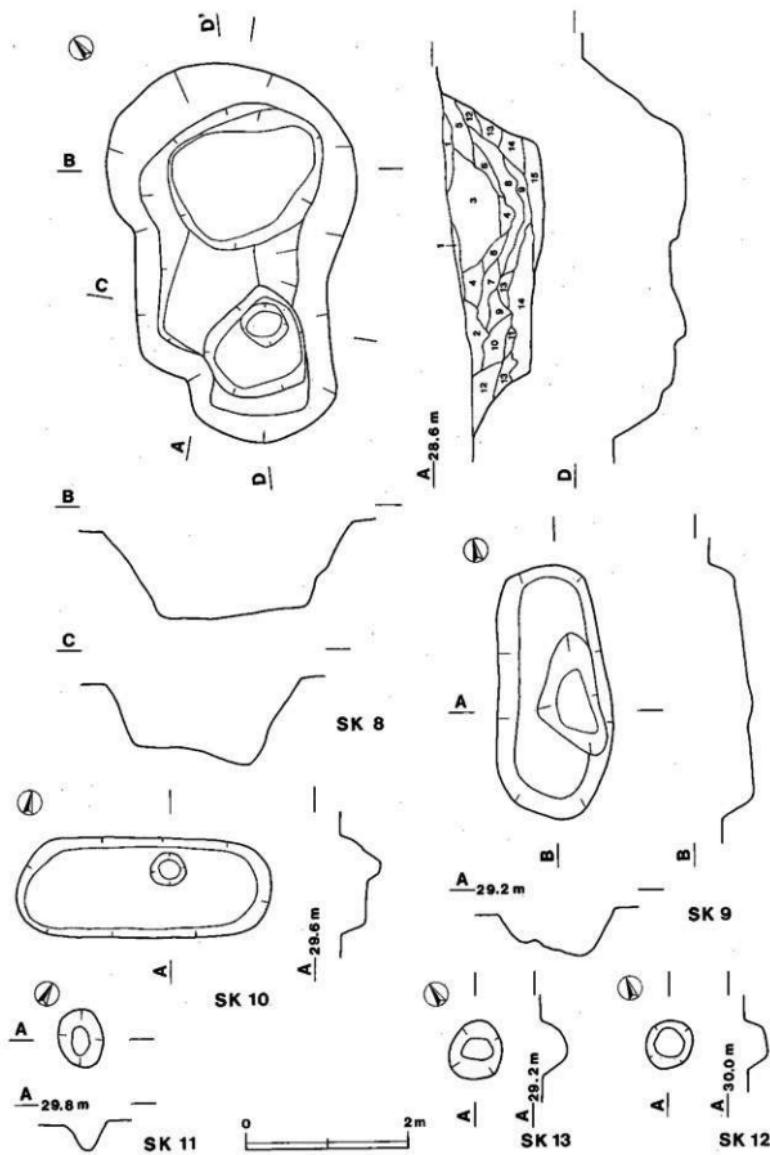
- 1 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
 2 褐色 ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
 3 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
 4 褐色 ローム小ブロック少量
 5 褐色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
 6 暗褐色 ローム中・小ブロック少量
 7 暗褐色 ローム中・小ブロック中量
 8 褐色 ローム大・中ブロック中量
 9 褐色 ローム大・中ブロック中量
- 第152号土壌土層解説
 1 褐色 炭化粒子・ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
 2 褐色 ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
 3 褐色 ローム中ブロック少量
 4 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム大・中ブロック微量
 5 褐色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
 6 褐色 ローム小ブロック中量、ローム大・中ブロック少量 (しまり強)
 7 褐色 ローム小ブロック中量、ローム大・中ブロック少量 (しまり普通)
 8 褐色 ローム大・中ブロック中量、鹿沼バミス粒子少量
 9 黄褐色 鹿沼バミス粒子多量、ローム粒子少量
 10 褐色 ローム中ブロック・鹿沼バミス粒子中量、ローム大ブロック少量

第156号土壌土層解説

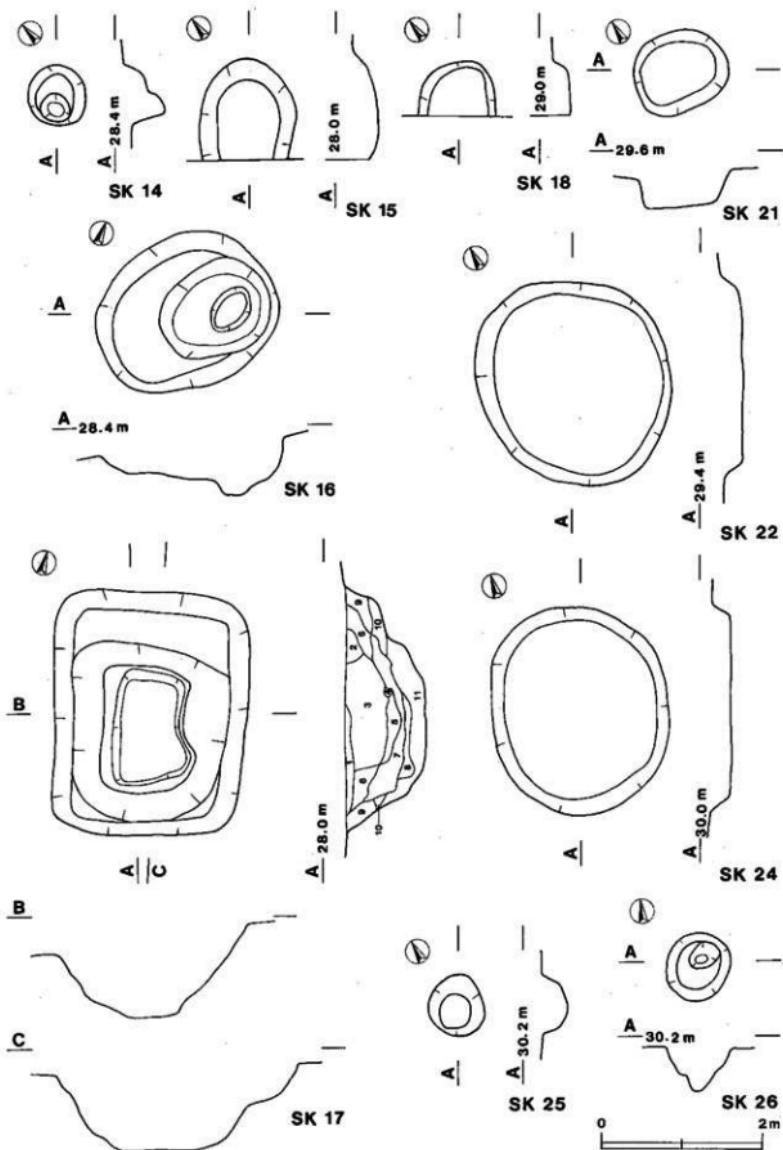
- 1 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
 2 褐色 ローム粒子少量、鹿沼バミス粒子微量
 3 褐色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・鹿沼バミス粒子少量
 4 褐色 ローム小ブロック・鹿沼バミス粒子中量
 5 明褐色 鹿沼バミス粒子多量、ローム中ブロック少量
 6 褐色 ローム大・中ブロック少量
 7 暗褐色 ローム中・大ブロック・ローム粒子少量
 8 褐色 ローム大・中ブロック中量、鹿沼バミス粒子少量
 9 褐色 ローム大・中ブロック・鹿沼バミス粒子少量
 10 褐色 ローム大・中ブロック中量、ローム中ブロック少量
 11 明褐色 鹿沼バミス粒子多量、ローム大・中ブロック微量
 12 暗褐色 ローム中・大ブロック少量、ローム大・中ブロック微量
 13 暗褐色 ローム大・中ブロック・鹿沼バミス粒子少量



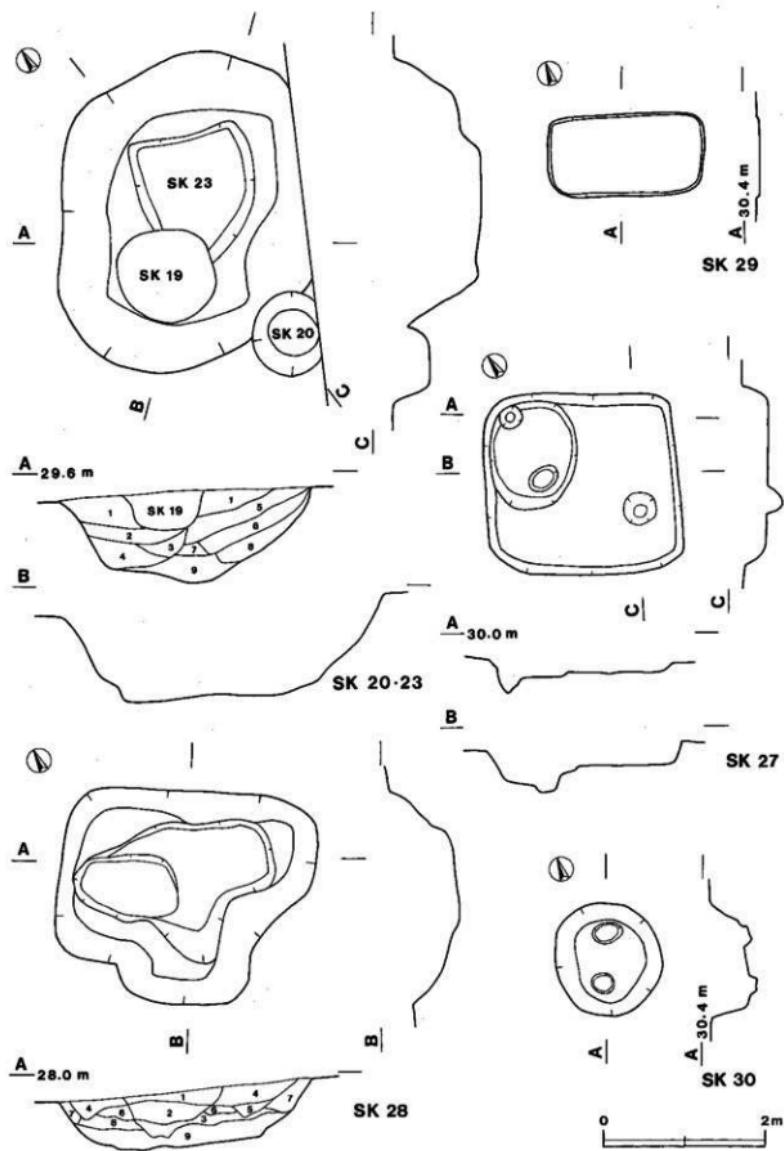
第255図 その他の土坑実測図(1)



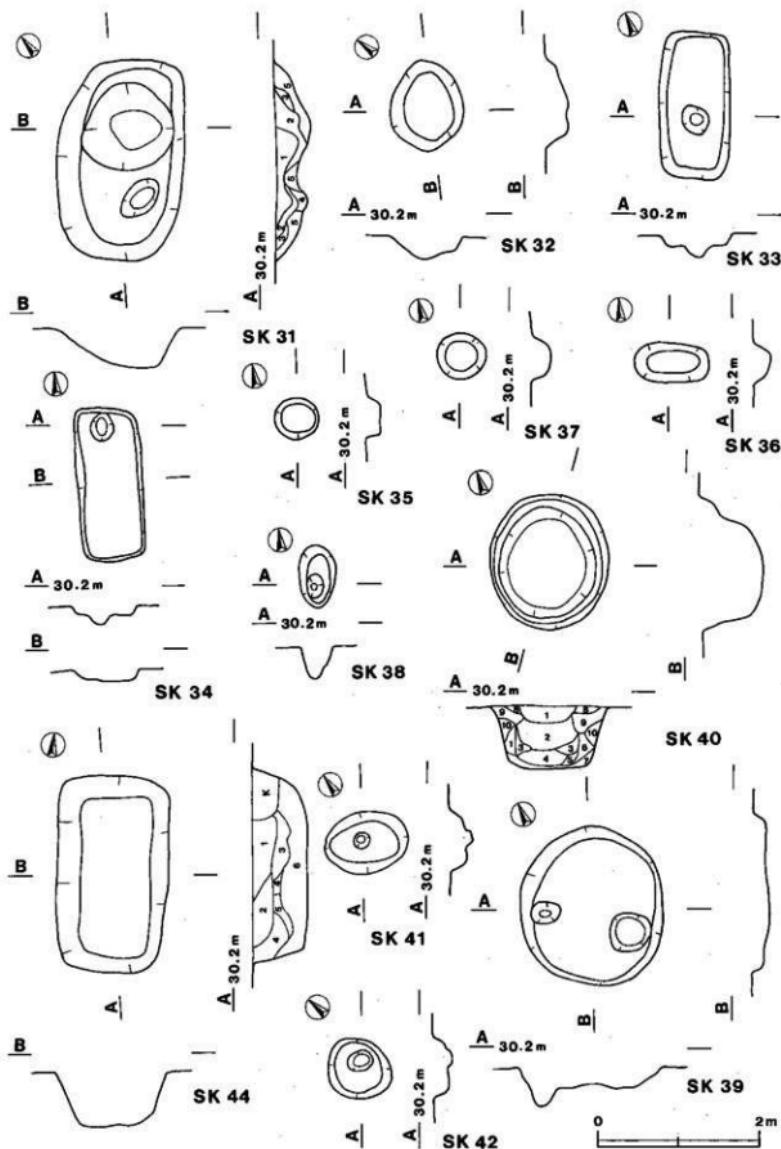
第256図 その他の土坑実測図(2)



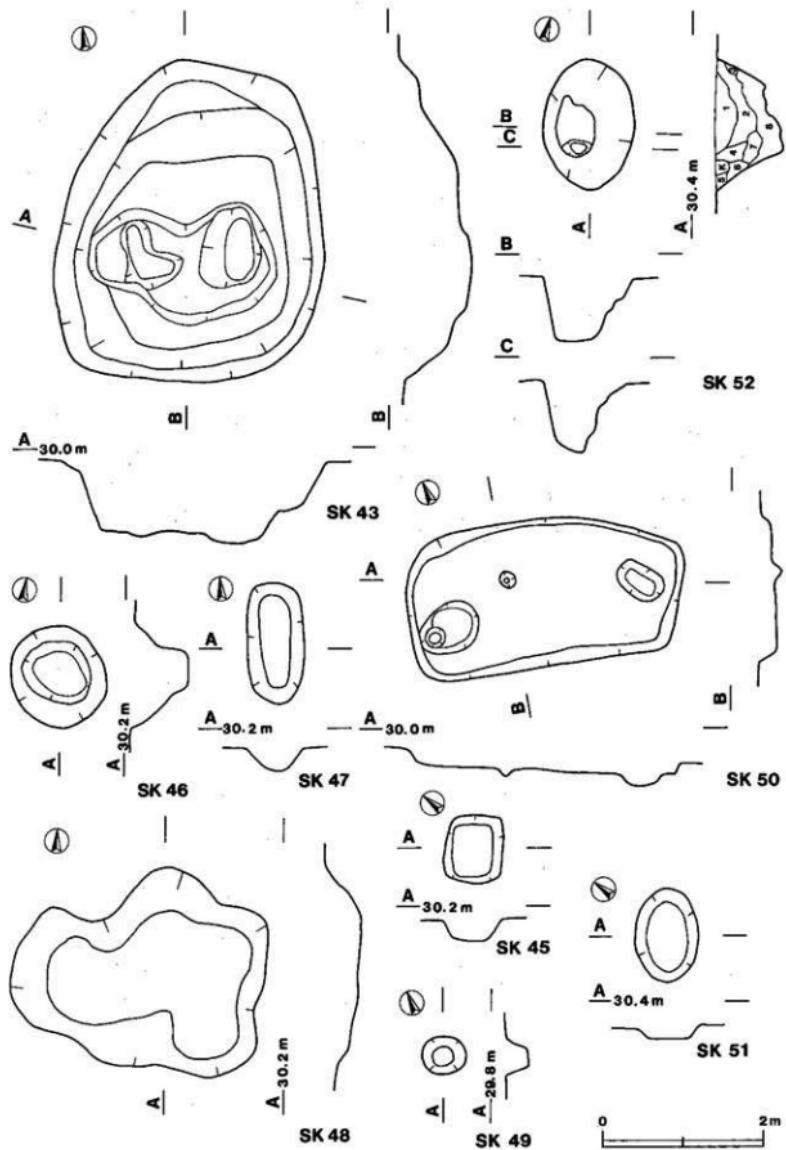
第257図 その他の土坑実測図(3)



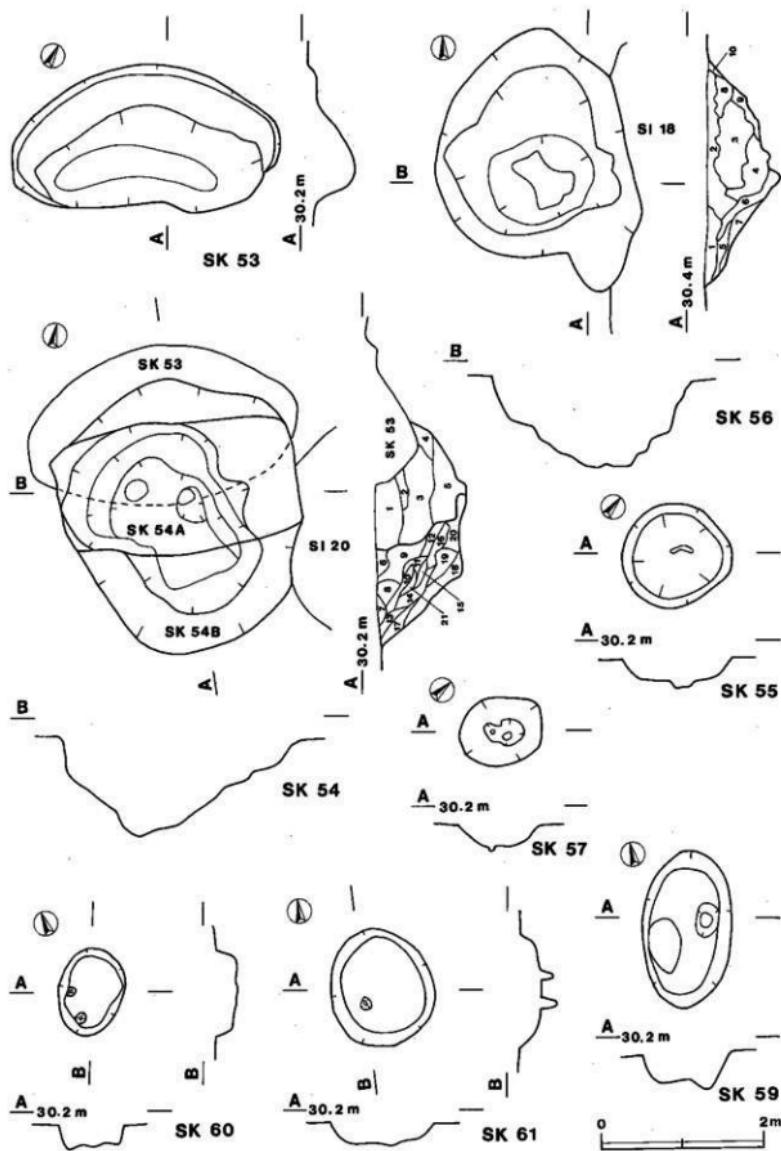
第258図 その他の土坑実測図(4)



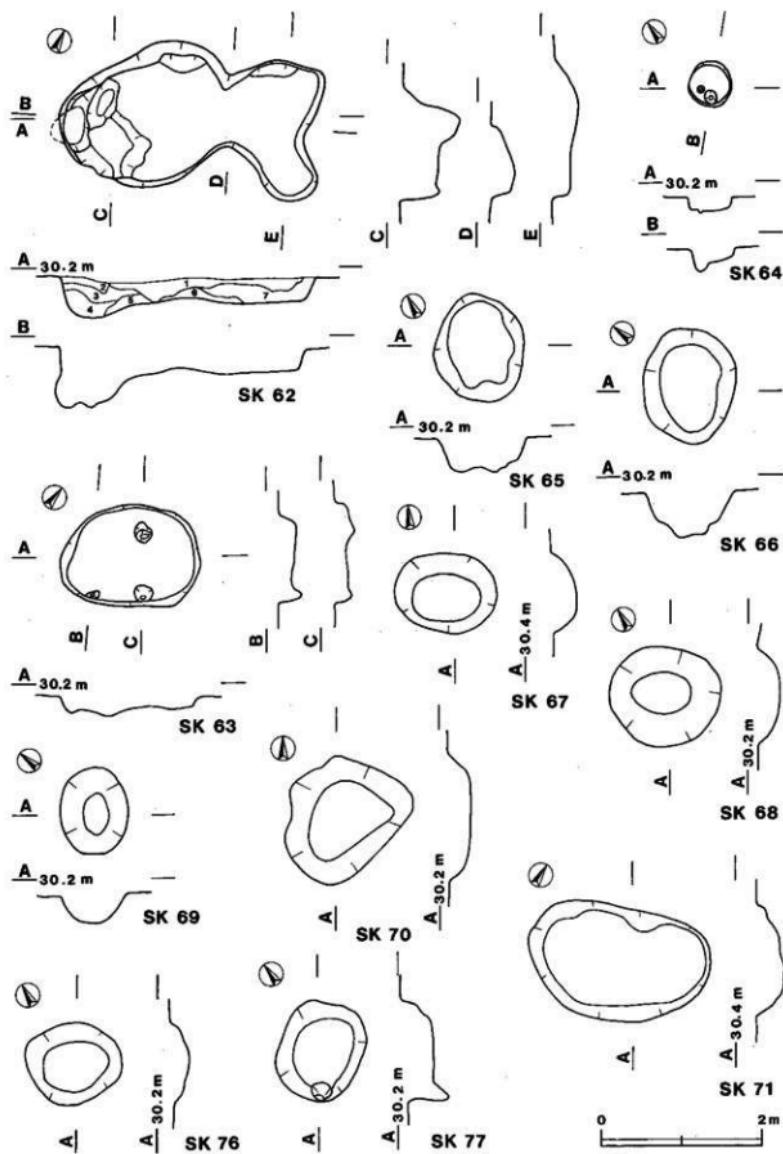
第259図 その他の土坑実測図(5)



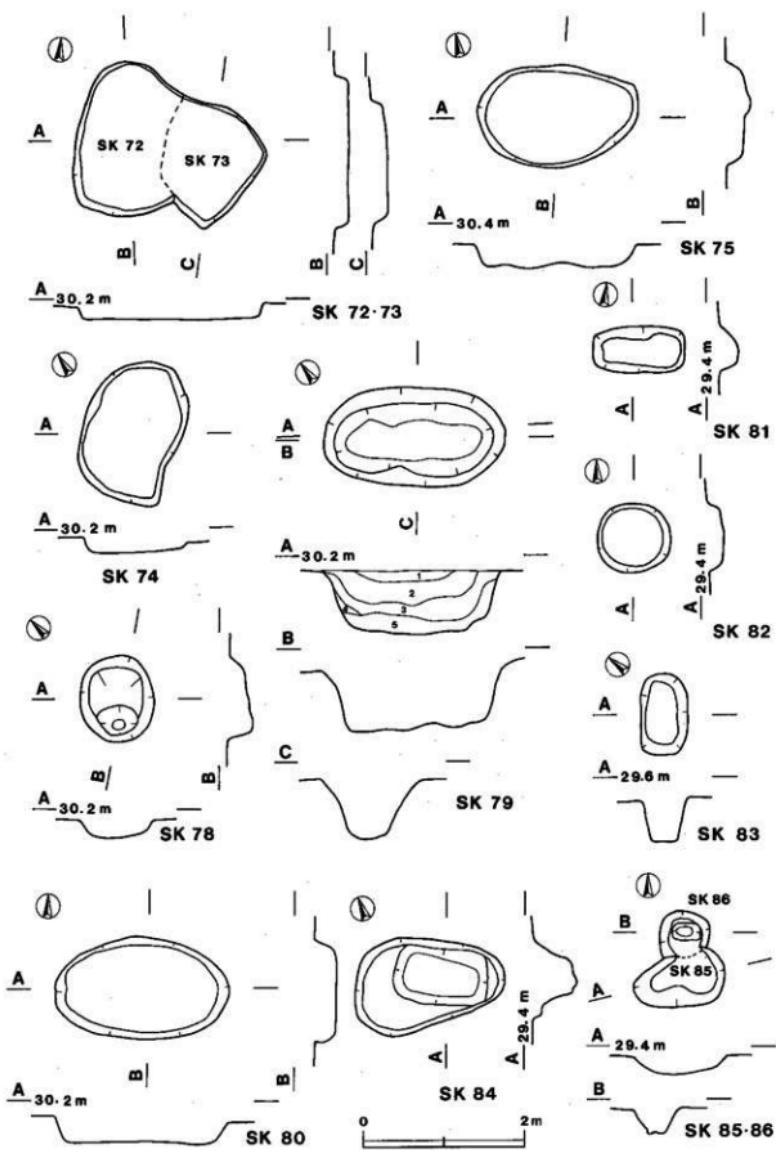
第260図 その他の土坑実測図(6)



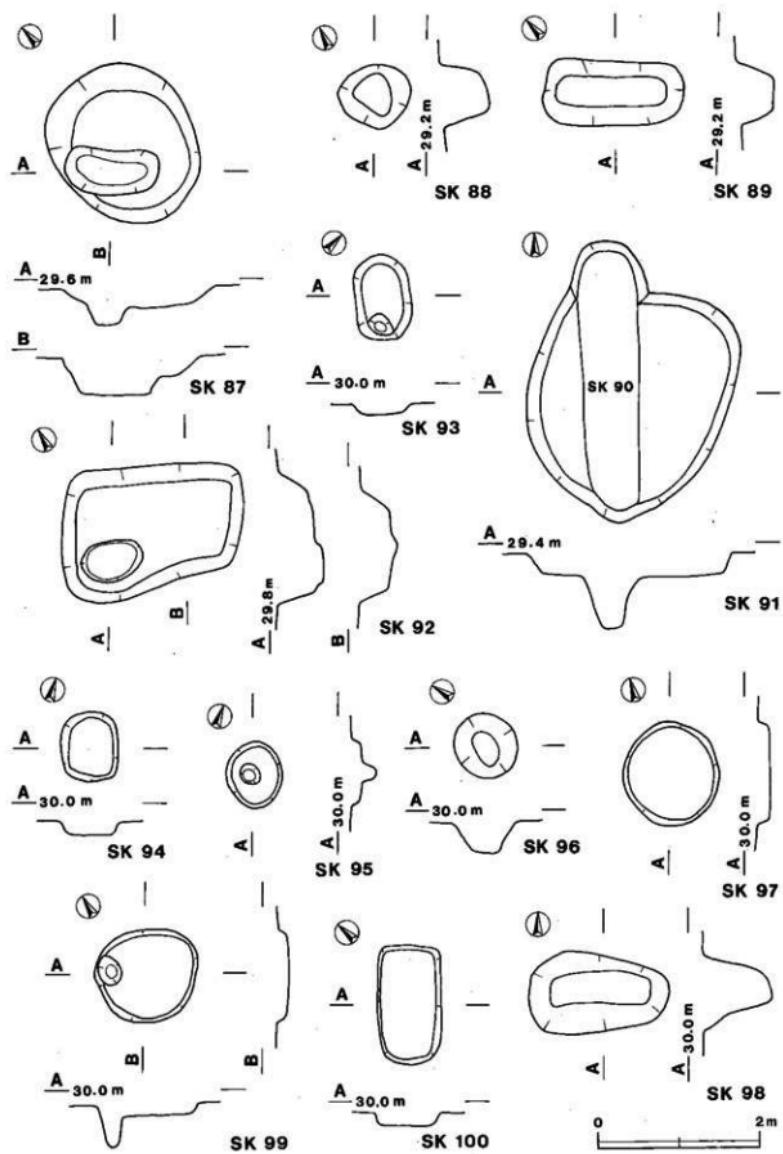
第261図 その他の土坑実測図(7)



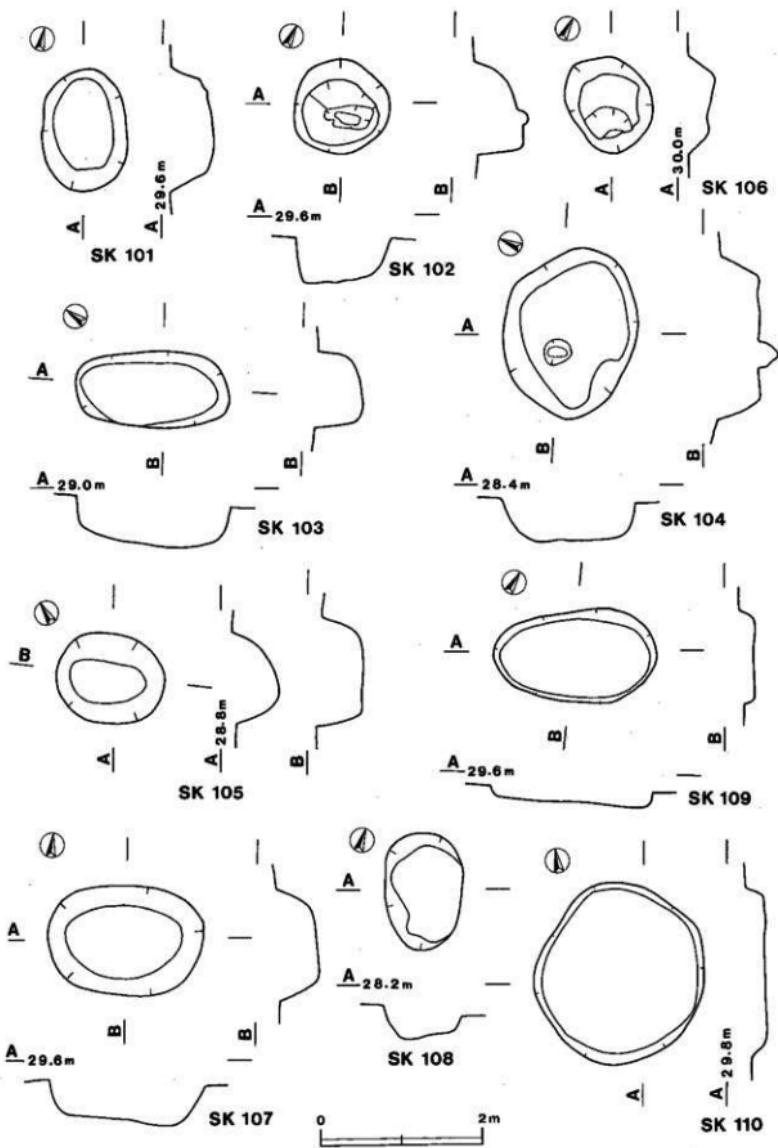
第262図 その他の土坑実測図(8)



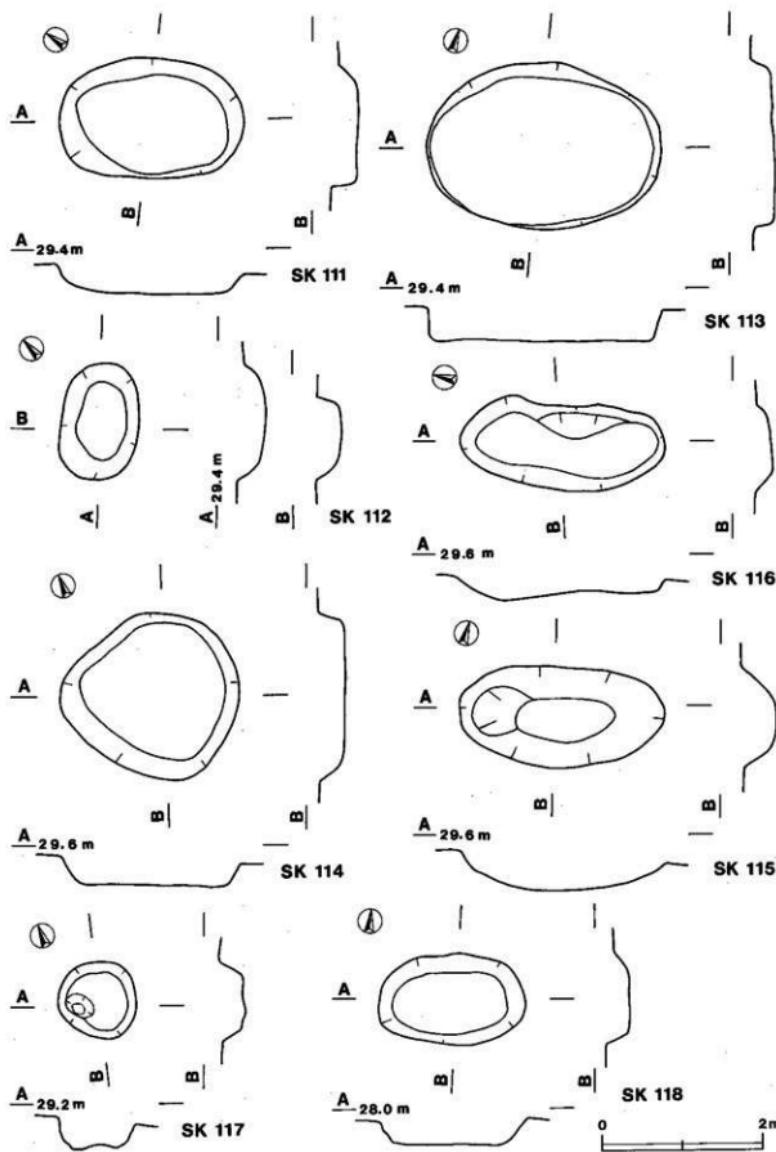
第263図 その他の土坑実測図(9)



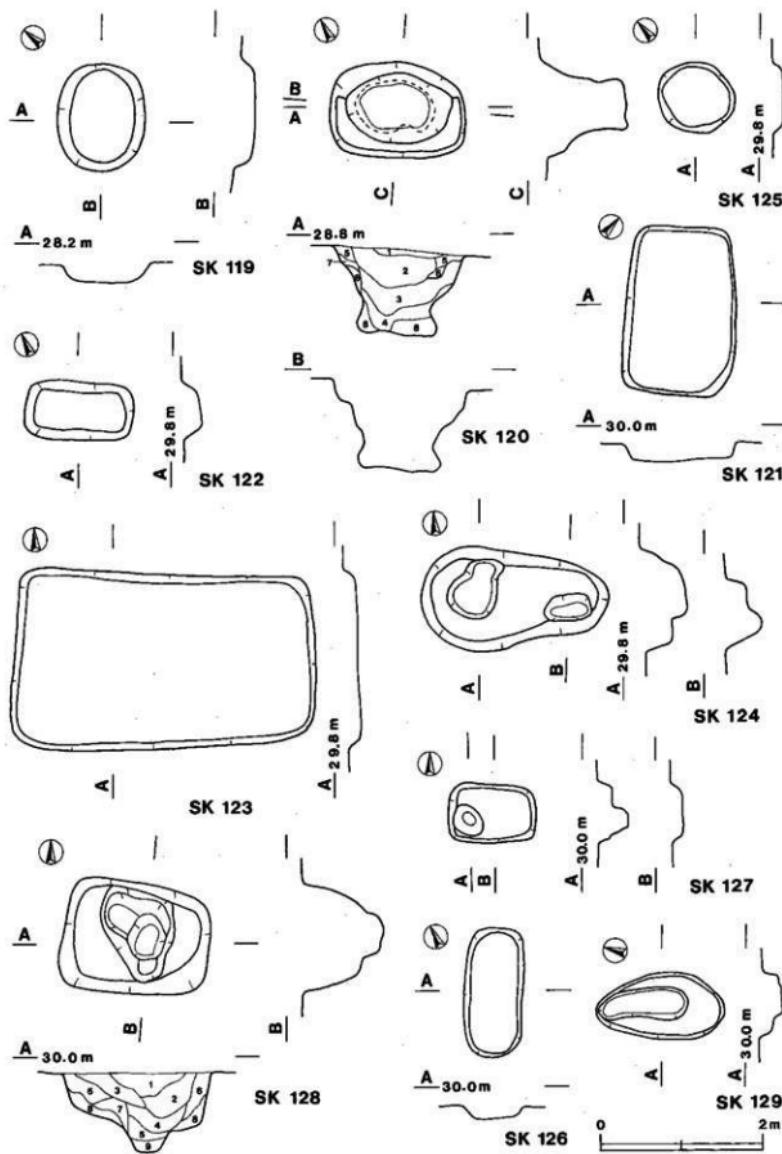
第264図 その他の土坑実測図(10)



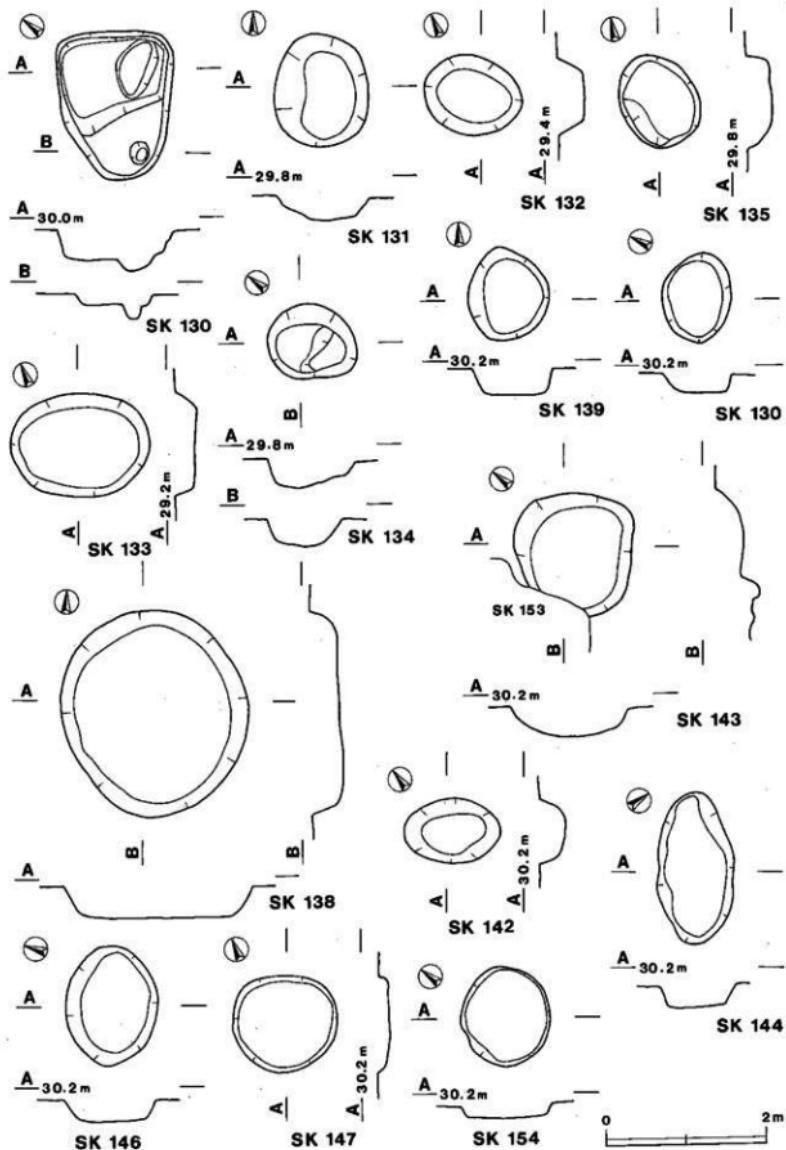
第265図 その他の土坑実測図(II)



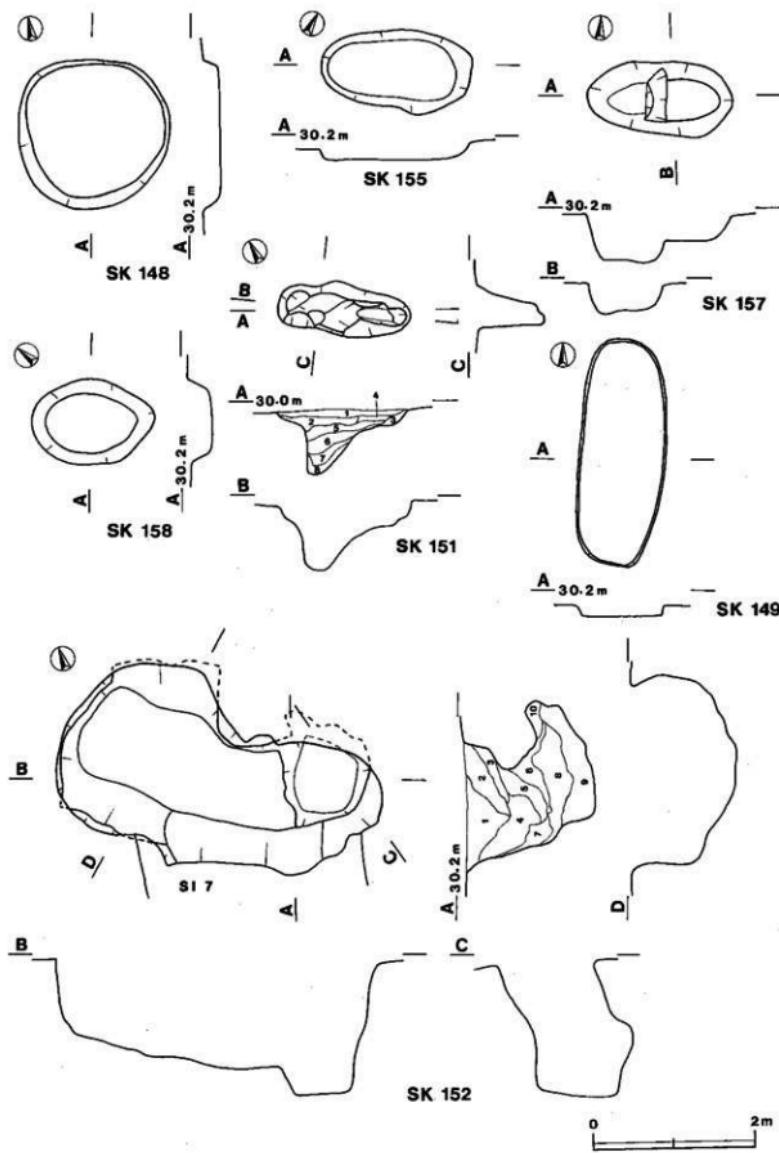
第266図 その他の土坑実測図(12)



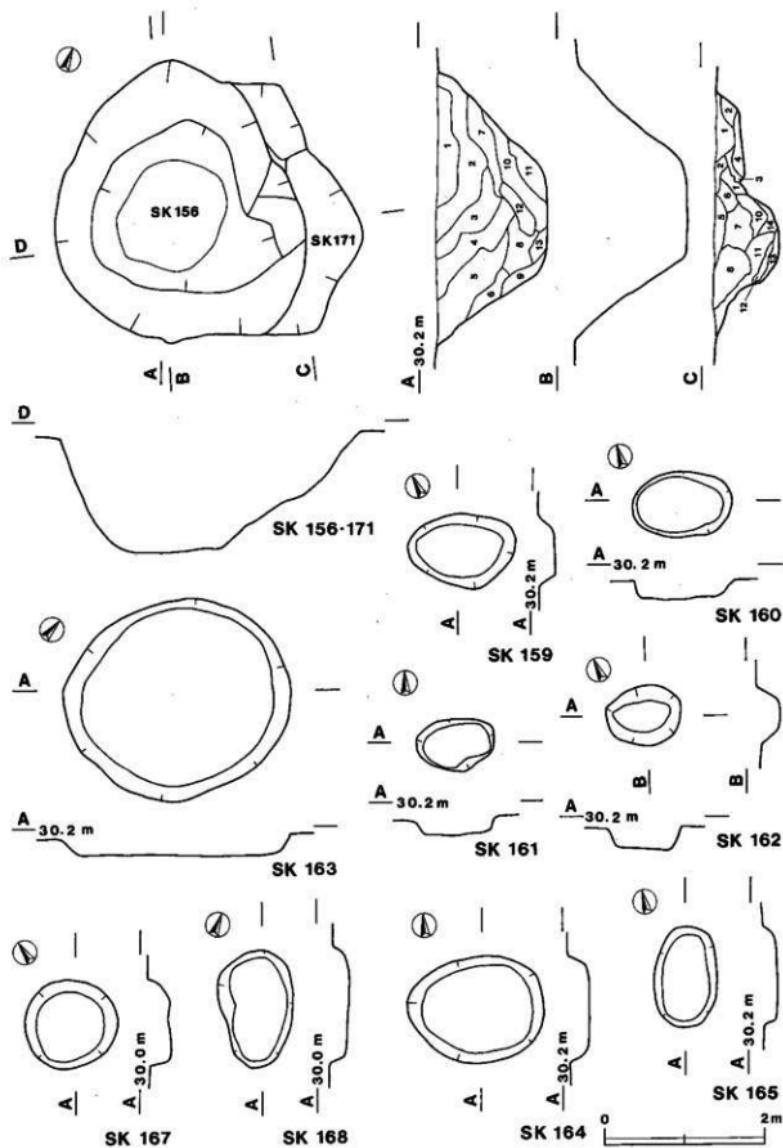
第267図 その他の土坑実測図(13)



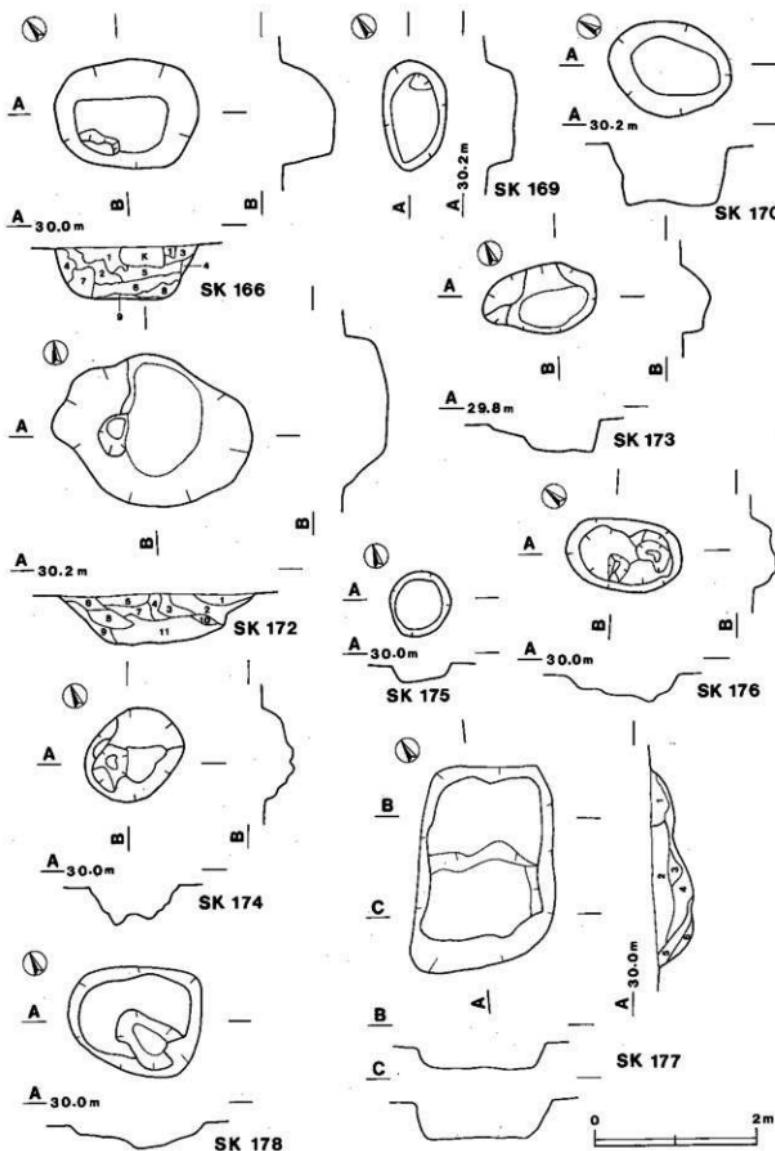
第268図 その他の土坑実測図(14)



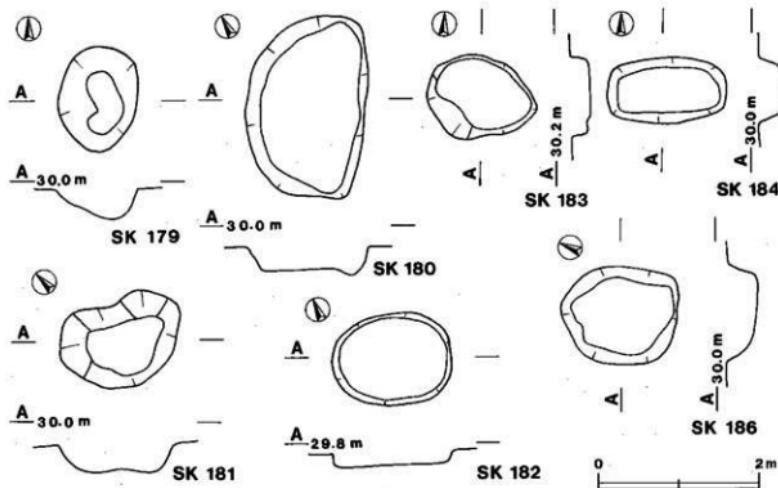
第269図 その他の土坑実測図(15)



第270図 その他の土坑実測図(16)



第271図 その他の土坑実測図(17)



第272図 その他の土坑実測図(18)

第166号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 3 茶褐色 ローム小ブロック少量
- 4 棕褐色 ローム小ブロック少量
- 5 黑褐色 ローム粒子少量
- 6 棕褐色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土粒子少量
- 7 棕褐色 ローム小ブロック中量
- 8 棕褐色 ローム小ブロック少量(3層よりも粘性がある)
- 9 棕褐色 ローム大ブロック少量

第171号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 棕褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 3 棕褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量
- 4 棕褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量(粘性普通)
- 5 棕褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量(粘性弱い)
- 6 棕褐色 ローム粒子中量
- 7 棕褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量
- 8 棕褐色 ローム小ブロック・露沼バニス粒子中量
- 9 暗褐色 ローム小ブロック中量
- 10 暗褐色 ローム粒子中量(しまり強い)
- 11 暗褐色 ローム大・中ブロック中量

第172号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック中量(しまり普通)
- 4 暗褐色 ローム中ブロック中量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック中量(しまり弱い)
- 6 暗褐色 ローム粒子中量(しまり普通)
- 7 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量
- 8 暗褐色 ローム粒子中量、ローム大ブロック微量
- 9 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム大ブロック・砂粒少量
- 10 暗褐色 ローム粒子中量(しまり強い)
- 11 暗褐色 ローム大・中ブロック中量

第177号土坑土層解説

- 1 塗褐色 ローム粒子中量、炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック中量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック中量(3層よりも粘性がある)
- 5 暗褐色 ローム粒子中量
- 6 暗褐色 ローム大ブロック少量

5 遺物包含層

今回の調査で、調査区南東部の谷部から遺物包含層を検出した。以下、その特徴と出土遺物について記載する。

遺物包含層（第273図）

位置 調査区の南東部、D 5 区付近。

規模と形状 調査区の南東部から調査区域外の東方向に向かって谷津が形成されている。この谷頭の南北約13m、東西約10mに土器片等の包含がみられる。

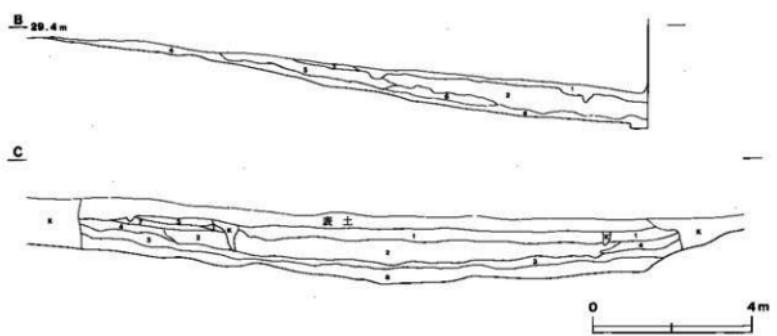
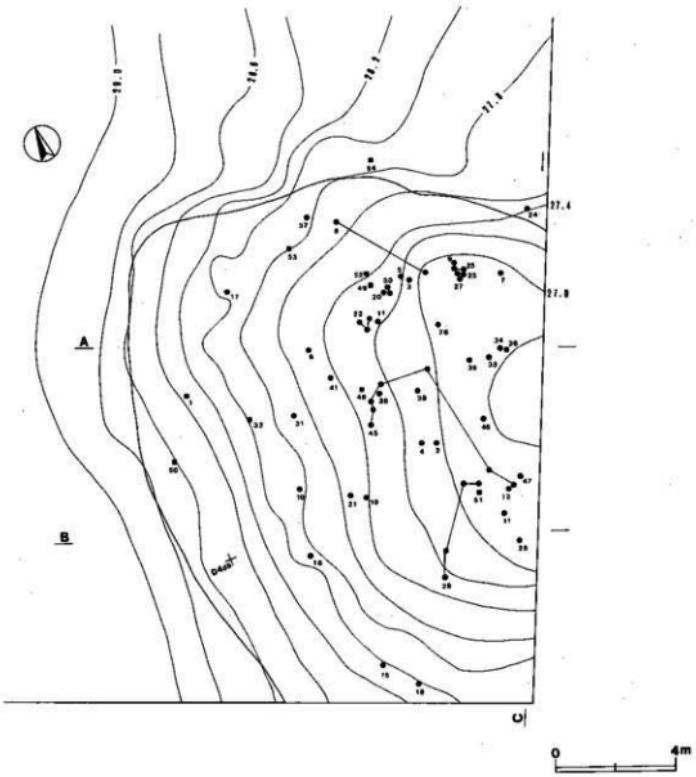
覆土 8層からなり、自然堆積と考えられる。傾斜地に向かって、自然に流れ込んだと思われる黒褐色土や暗褐色土の堆積が確認された。

土層解説

1 黄色	ローム粒子中量、炭化物微量	5 棕褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量
2 暗褐色	ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック ・炭化物微量	6 黑褐色	ローム小ブロック中量、焼土小ブロック微量
3 暗褐色	ローム小ブロック・炭化物微量	7 暗褐色	ローム小ブロック中量、ローム粒子少量
4 暗褐色	ローム粒子中量、粘土粒子少量、炭化粒子微量	8 棕褐色	ローム粒子・砂粒・粘土粒子中量、塵泥粒子少量

遺物 繩文土器片1237点、ナイフ形石器1点、石鏃2点、磨石3点、凹石1点、片刃石斧1点、土師器片11点が出土している。旧石器時代の遺物は1、繩文時代の遺物は2~53、弥生時代の遺物は54である。1はナイフ形石器で、旧石器時代の遺物である。2~9は、繩文時代早期のいわゆる天矢場タイプの無文土器を一括した。いずれも口縁部で、器外面には横位のナギが施され、器内面はよく磨かれている。胎土に長石と石英粒子が多く含まれている。口唇断面により、外削ぎ状を呈する6と9、ヘラ状を呈する2~4、7、8、やや肥厚する5などに分類できる。10~20は早期の沈線文系土器の一群である。10~12は早期中葉三戸式土器である。10と11は口縁部片、12は頸部片である。10の口唇部はやや外削ぎ状を呈し、横位の細線が配されている。11の口唇部は緩い起伏をもち、口唇断面はヘラ状を呈している。平行線文と格子目文が施されている。12は格子目文と刺突文が施されている。13~20は早期中葉田戸下層式土器である。13と14は口縁部片である。13の口縁部は緩く外反し、口唇部に刺突が施され、以下横位の沈線が配されている。14の口唇部はやや外削ぎ状で、口唇上に斜位の刺突文、口唇部直下から斜位の沈線、爪形文及び貝殻背压痕が施されている。15~19は胴部片である。15は刺突文、平行線文及び貝殻腹縁文が施されている。16は沈線で三角形を区画し、爪形文と貝殻背压痕が施されている。17と18は平行線による斜位の沈線が施されている。19は棒状工具による縦位の短沈線が配されている。20は尖底部片である。

21と22は胎土に纖維が含まれ、口縁部を断面三角の隆起帯で区画する土器である。21は口縁部片で、隆起帯をはさんで、円形管柱が施されている。22は頸部片で、隆起帯下にL R反の攢りが施されている。いずれも前期前葉花穂下層式の直前型式と思われる。23~27は前期前葉開山式土器を一括した。いずれも口縁部片で、同一個体と思われる。口縁部は内彎し、波状口縁を呈する。口唇部にキザミを有し、その直下に爪形文により格子目文が配されている。地文にR Lの異節の繩文が施されている。胎土に纖維が含まれている。28は前期前葉黒浜式土器である。L Rの無節繩文を2本一緒にし、単軸格条体の回転により文様が施されている。胎土に纖維が含まれている。29~31は前期後葉興津式土器である。29は口縁部片で、口唇部直下から貝殻波状文がランダムに配されている。30は胴部片で、平行線文と弧線文が施されている。31は底部片である。32~36は前期後葉東北南部系大木式土器の一組である。32は緩く内彎する口縁部片である。口唇部外面に貼り付けがなされ、地文にL Rの無節の繩文が施されている。33~36は胴部片である。地



第273図 遺物包含層平面図・土層断面図

文に単節斜縄文が施され、波状文が施文されている。34と36の波状文下には、結節沈線文が横位に施文されている。37~41は前期末栗島台式土器の一群である。37~40は口縁部片である。37は波状口縁を呈し、単節斜縄文が施文されている。38と39は内削ぎ状の口唇を呈し、単節斜縄文が施文されている。40の口縁部は貼り付けがなされ、単節斜縄文が施文されている。41は胴部片で、結節沈線文が横位に施文されている。その他、42~45も前期末に属する土器である。42~45は口縁部片である。42の口縁部は外反し、口唇部及び口唇部直下に刺突文が施されている。43と44の口唇部はわずかに外反し、口縁部に2列の刺突文が施文されている。

46と47は中期中葉阿玉台式土器である。46と47は胴部片である。46は腰帶が貼り付けられ、腰帶上にキザミ、腰帶に沿って2列の押引文が施されている。47は垂下する腰帶間に平行沈線文が施文されている。その他、縄文時代の遺物には、48と49の石錐、50~52の磨石、53の凹石などがある。

弥生時代の遺物には、54の片刃石斧などがある。

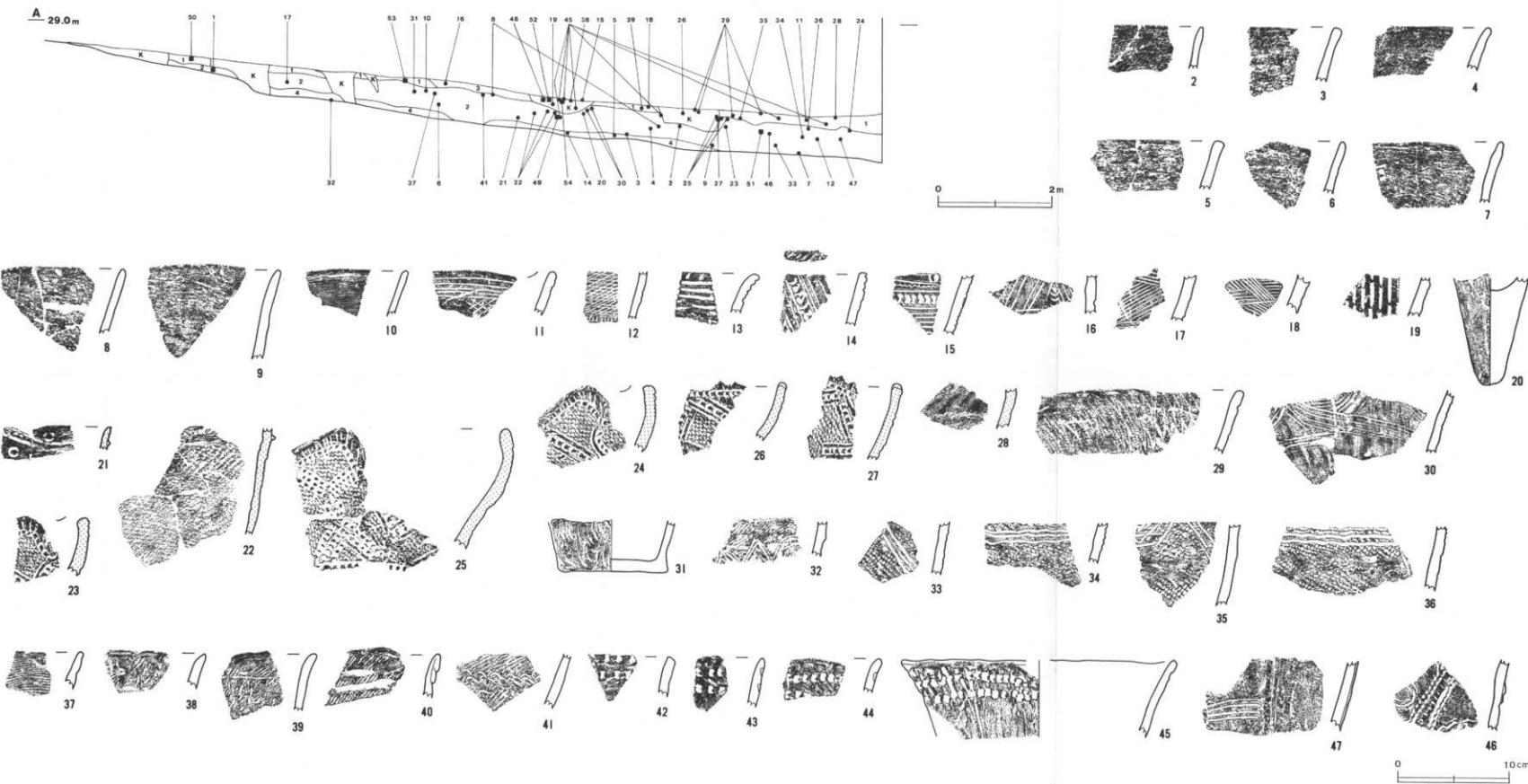
所見 本包含層は、縄文時代の遺物では早期中葉三戸式から中期中葉阿玉台式までの土器を含んでいるが、田戸下層式、関山式、興津式の土器の割合が多い。ほとんどの土器片は接合関係がなく、摩滅していることから自然流入したものと思われる。他の遺構との重複関係がないことから、埋没した詳細な時期は不明であるが、弥生時代にはほぼ埋まっていたものと考えられる。

遺物包含層出土遺物観察表

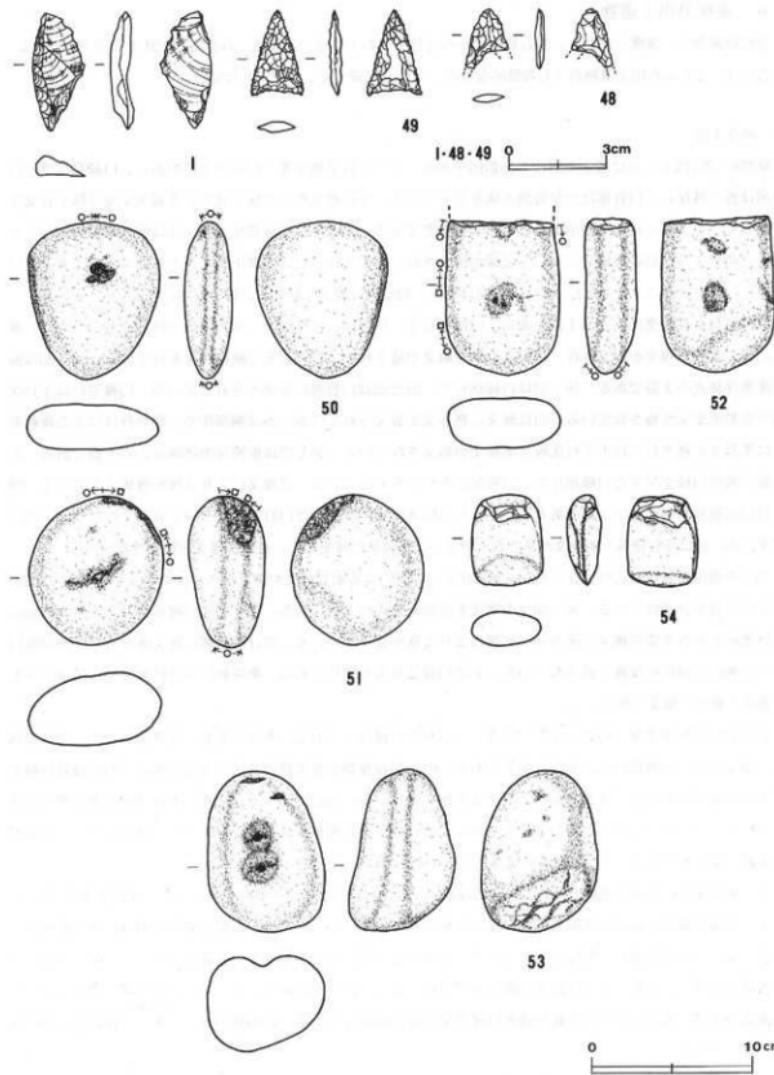
図版番号	種 別	計 測 値			石 質	出 土 地 点	備 考	
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)			重量 (g)	
第275図1	47形石器	3.6	1.6	0.8	2.5	黒 磨 石	覆土下層	Q10 PL74

図版番号	器種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴			胎土・色調・焼成	備 考
			長さ	幅	厚さ		
第274図 20	深 鉢 縄文土器	B (9.5)	底部部。尖底部は犬牙の鼻状を呈する。縦位の強いナメが施されている。	長石	雲母	砂粒	P22 5%
			にぶい橙色				P L69
			普通				覆土中層田戸下層式
31	深 鉢 縄文土器	B (4.6) C 9.4	底部から胴部にかけての破片。底部は横にわざかに突出する。底部直下まで貝殻波状文が施されている。	長石	赤色粒子	砂粒	P21 5%
			橙色				P L69
			普通				覆土中層興津式
45	深 鉢 縄文土器	A [24.5] B (6.8)	口縁部片。口縁部はわずかに外反する。口唇部直下から2列の刺突文が脇面を一巡する。	長石	石英	砂粒	P20 10%
			褐色				P L68
			普通				覆土上層前期末

図版番号	種 別	計 測 値			石 質	出 土 地 点	備 考	
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)			重量 (g)	
第275図6	石 锤	(1.8)	(1.3)	0.4	(0.4)	安山岩	覆土上層	Q7 PL74
49	石 锤	2.6	1.7	0.4	1.2	チャート	覆土中層	Q8 PL74
50	磨 石	9.7	8.2	3.0	316.5	砂 岩	覆土上層	Q13
51	磨 石	9.2	8.3	4.7	478.1	流紋岩	覆土中層	Q14
52	磨 石	(9.6)	7.1	3.2	(397.7)	安山岩	覆土上層	Q16
53	磨 石	9.9	7.2	6.2	516.6	義灰岩	覆土上層	Q15
54	片刃石斧	5.7	4.4	2.3	76.3	砂 岩	覆土上層	Q12 PL73



第274図 遺物包含層土層断面図・出土遺物実測図



第275図 遺物包含層出土遺物実測図

6 遺構外出土遺物

今回の調査で、遺構に伴わない旧石器時代から近世までの土器片、土製品、石器及び古錢等が出土している。ここでは、これらの出土遺物のうち特徴的なものについて掲載する。(第276~279図)

(1) 縄文土器

第276・277図3~50は縄文土器片の拓影図である。3~5は早期中葉三戸式の土器である。口縁部で、口縁部は緩く外反し、口唇部はやや外削ぎ状を呈している。平行線文やヘラ状工具による刺突文及び格子目文が施されている。6~10は早期中葉田戸下層式の土器である。6と7は口縁部片、8~10は胴部片である。平行線文、刺突文及び貝殻腹縁文によって文様が構成されている。11と12は早期中葉田戸上層式の土器である。口縁部片で、口唇部にキザミを有している。11は無文、12は平行線文と刺突文が施されている。

13~15は前期前葉関山式の土器である。口縁部で、口唇部にキザミや三角形の貼り付けを有している。地文にR L異節の縄文が施文され、爪形文や平行線文が施されている。胎土に纖維が含まれている。16~25は前期後葉浮島式の土器である。16~24は口縁部片で、21と22は口唇部にキザミを有している。口縁部には平行沈綫や変形爪形文が施されている。24は地文に撫文が施文されている。25は胴部片で、貼り付けによる隆起帶上に爪形文が施され、以下平行沈綫と条線文が施文されている。26と27は前期後葉諸磧b式の土器である。27は緩い波状口縁を呈する口縁部片で、口唇部にキザミを有している。浮線文により文様が構成されている。28~34は前期後葉興津式の土器である。いずれも口縁部片で、28~33は口唇部にキザミを有している。32と33は無文、28~31は平行沈綫や刺突文が施されている。34は波状口縁を呈し、貝殻腹縁文が施文されている。

35は中期中葉阿玉台式の土器である。胴部片で、陸帯による蛇行線文や押し引きによる円文が施されている。胎土に雲母が含まれている。36~40は中期後葉加曾利E式の土器である。36~39は口縁部片である。36と38は口唇部直下から単節斜縄文が施され、沈綫により文様が描かれている。37は口縁部に無文帯を有し、39は梢円形の区画内に斜綫の沈綫が施されている。40は口縁部付近の破片である。撒疊起により区画され、地文にR Lの縄文が縦位に施文されている。

41~43は後期前葉堀之内式の土器である。いずれも口縁部片である。キザミを有する隆線により、文様が構成されている。口縁部内面の裝飾も顯著である。44と45は後期中葉加曾利B式の土器である。44は波状口縁を呈する口縁部片である。波頭に沿って刺突文が施されている。45は胴部片で、沈綫による弧線文間に磨り消されている。いずれも器内・外面とも研磨されている。46は後期後葉安行式の土器である。底部片で、2列の刺突文間に穿孔が見られる。台付土器の底部と思われる。

47と48は晩期中葉前浦式の土器である。47は胴部から口縁部にかけての破片で、口唇部に突起を有している。2条の凹線が唇面を巡り、凹線間にの字文が配されている。の字文内と凹線による区画内に縄文が充填されている。口縁部内面にも凹線が巡っている。48は内削ぎ状の口唇を呈する口縁部片である。2条の凹線と入組弧線文が巡り、凹線による区画内に縄文を充填後、なぞりが加えられている。49と50は晩期中葉東北南部系大洞式の土器である。いずれも緩い波状口縁を呈する口縁部片である。口唇部上面に1条、口縁部に3条の沈綫が巡っている。

(2) 弥生土器

第279図71は弥生土器片の拓影図である。胴部片で、縦区画内にヘラ状工具による格子目文が充填されている。

(3) 須恵器

第279図73と74は須恵器片の拓影図である。73は大甕の頸部片で、外面にヘラ状工具による波状文が施されている。74は大甕の体部片で、外面に平行叩きが、内面に同心円の当て具痕が見られる。

遺構外出土石器一覧表（旧石器時代）（第276図）

図版番号	種別	計測値			石質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			重量(g)	
1	剥片	4.3	4.2	1.2	16.2	頁岩	表土	Q32 P L73
2	石核	4.5	3.9	1.9	33.3	頁岩	表土	Q33 P L73

遺構外出土遺物観察表（縄文時代）（第276図）

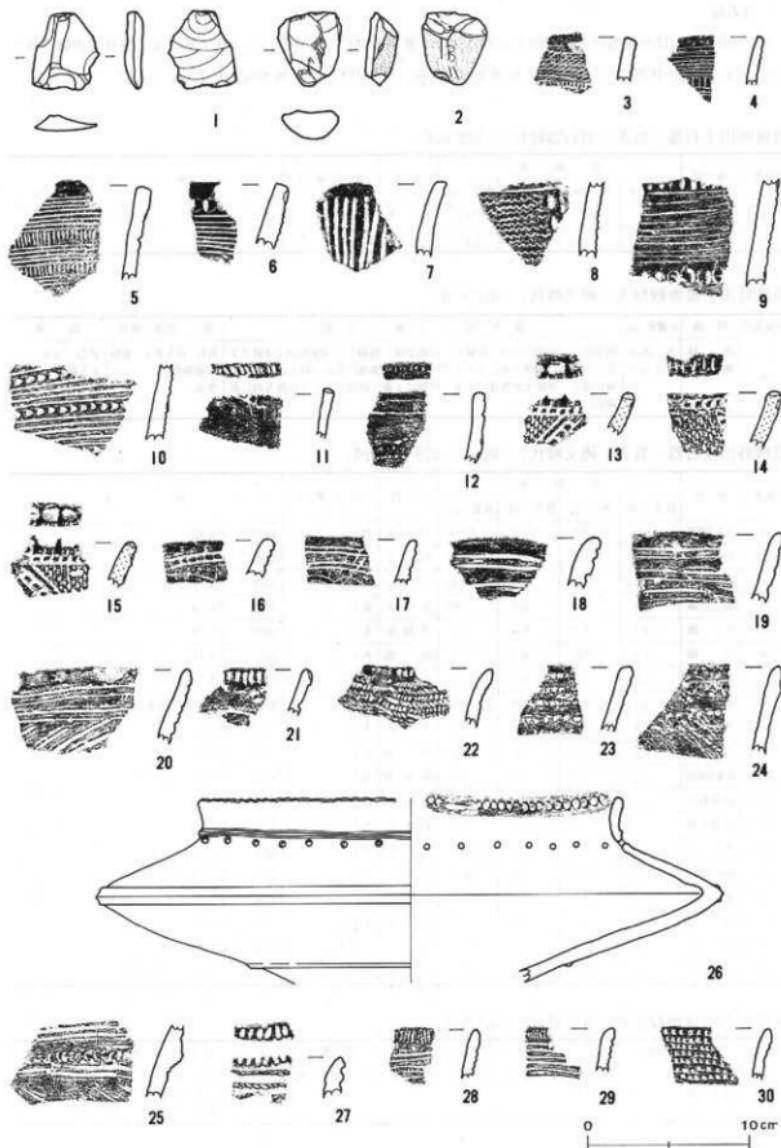
図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴			粘土・色調・焼成	備考
26	浅杯 縄文土器	A [26.3] B [11.5]	腹部から口縁部にかけての片断。肩部で強く屈曲し、口縁部はほぼ直立する。口唇部に棒状工具によるキザミを有し、頸部に孔が口縁に沿って等間隔に巡る。浮織文が頸部に1条、肩部に2条、底部直上に1条横方向に直線的に配される。	長石 赤色枚子 砂粒 明赤褐色 普通	砂粒 P 23 25% P L69 表土 鉛錆 b式	P 23 25% P L69 表土 鉛錆 b式	

遺構外出土石器一覧表（縄文時代）（第277・278・279図）

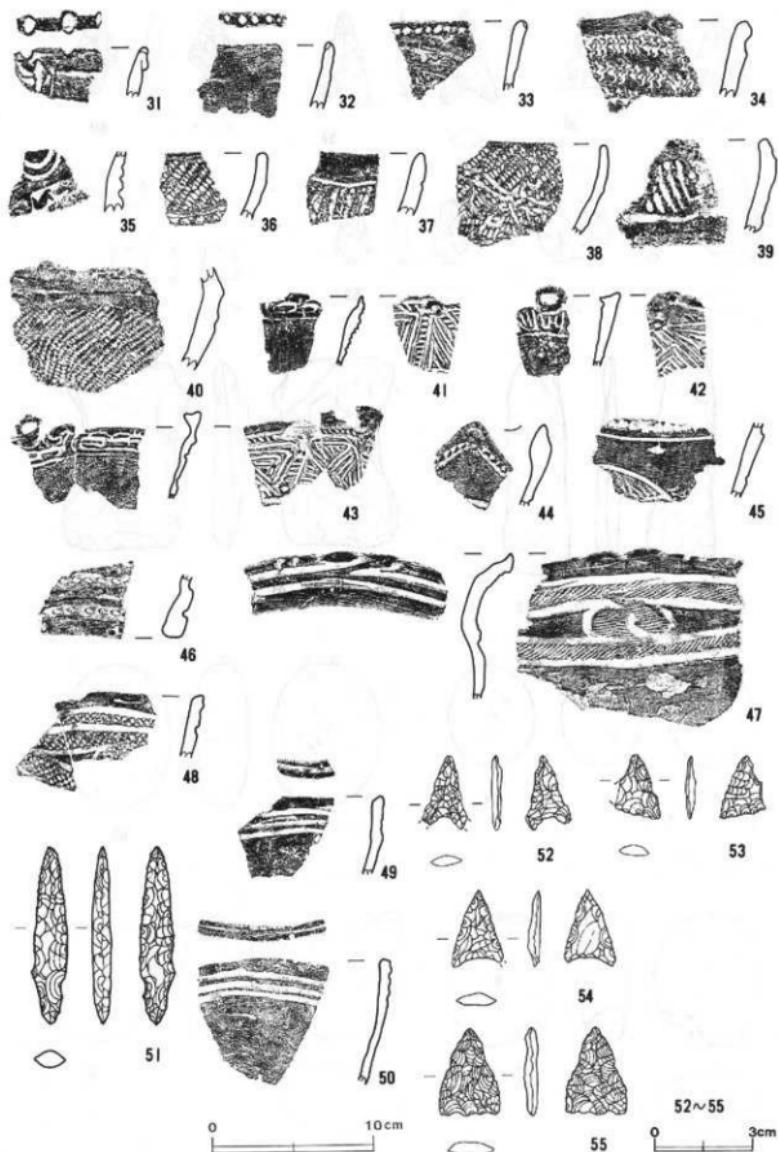
図版番号	種別	計測値			石質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			重量(g)	
51	有茎尖頭器	11.0	2.2	1.2	23.5	頁岩	表土	Q27 P L73
52	石頭	(2.3)	(1.3)	0.3	(0.7)	砂岩	表土	Q20 P L74
53	石頭	2.0	(1.4)	0.3	(0.5)	チャート	表土	Q21 P L74
54	石頭	2.4	(1.6)	0.5	(0.9)	安山岩	表土	Q25 P L74
55	石頭	3.7	1.9	0.4	1.7	黒曜石	表土	Q22 P L74
56	石頭	2.5	2.0	0.4	1.1	瑪瑙	表土	Q23 P L74
57	石頭	2.9	1.9	0.5	1.6	チャート	表土	Q18 P L74
58	石頭	3.1	2.3	0.9	4.6	チャート	表土	Q19 P L74 未製品
59	有茎石頭	2.1	1.1	0.4	0.6	チャート	表土	Q24 P L74
60	有茎石頭	(2.5)	1.5	0.6	(1.2)	瑪瑙	表土	Q26 P L74
61	石製装飾品	2.2	2.3	0.3	3.0	粘板岩	表土	Q31 P L74
62	打製石斧	13.4	4.2	1.5	111.6	粘板岩	表土	Q28 P L74
63	打製石斧	11.7	7.7	2.3	212.5	粘板岩	表土	Q30 P L74
64	磨石	6.3	5.4	5.1	222.0	安山岩	表土	Q34 P L74
65	磨石	8.8	6.7	3.1	270.0	安山岩	表土	Q35 P L74
66	磨石	(8.3)	6.3	3.1	(222.3)	砂岩	表土	Q36 P L74
67	磨石	(7.9)	8.8	4.4	(402.7)	砂岩	表土	Q37 P L74
68	磨石	7.6	6.1	4.6	286.5	砂岩	S I - 11	Q40 P L74
69	磨石	12.4	6.2	3.5	388.4	砂岩	表土	Q38 P L74 全面摩耗

遺構外出土遺物観察表（弥生時代）（第279図）

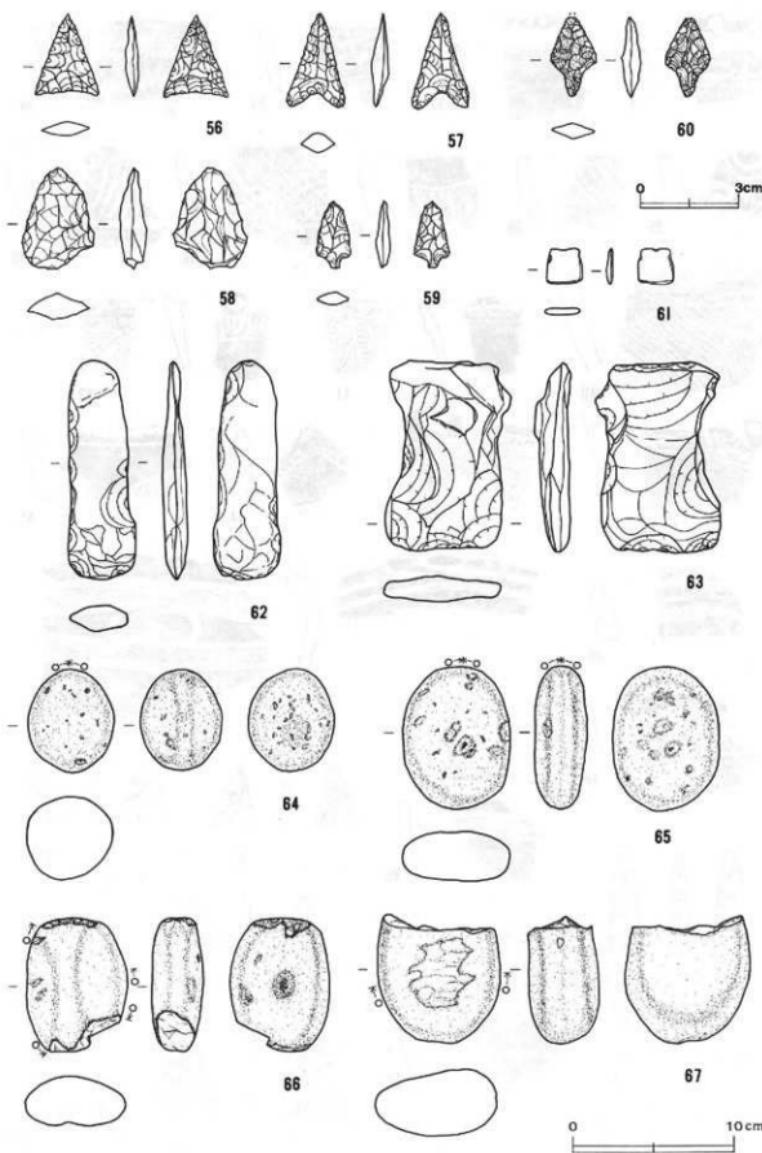
図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴			粘土・色調・焼成	備考
70	壺形土器 弥生土器	B [2.5] C [7.6]	底部平底。底部には附加二段（附加1条）の縄文が施されている。 底部木葉痕。	長石 砂粒 にぶい橙色 普通	P 25 5% 表土	P 25 5% 表土	



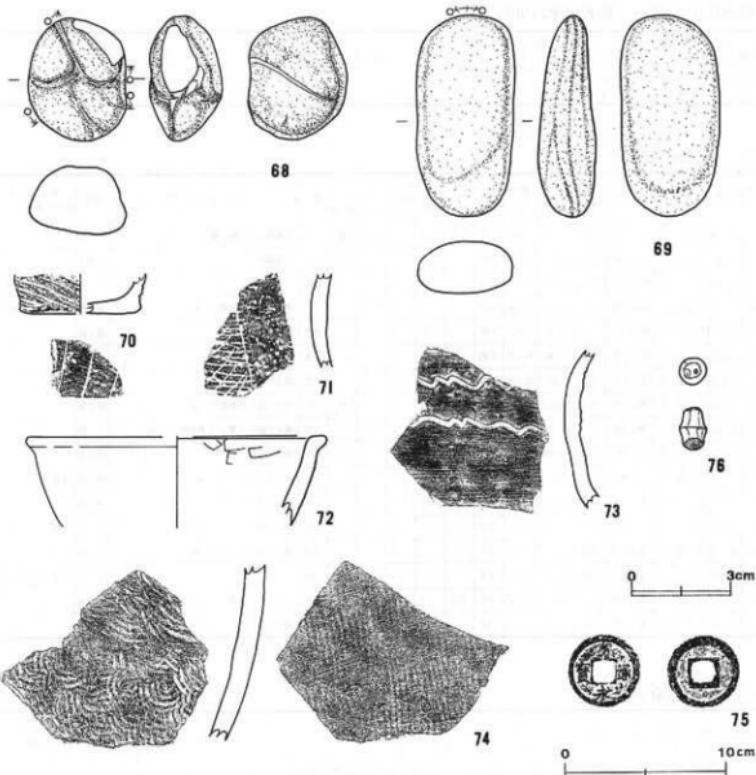
第276図 遺構外出土遺物実測図(1)



第277図 遺構外出土遺物実測図(2)



第278図 遺構外出土遺物実測図(3)



第279図 遺構外出土遺物実測図(4)

遺構外出土遺物観察表（古墳時代）（第279図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
72	鉢 土器	A [18.9] B (5.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内壁気泡に立ち上がる。口縁部は器肉を増しながら短く外側に、端部は平坦である。	口縁部内・外表面ナデ。体部外横ナデ。内面ヘラナデ。	灰石 雲母 砂粒 にぶい黄褐色 普通	P24 10% P L69 表土

遺構外出土古銭一覧表（近世）（第279図）

図版番号	種別	計 測 値				初鋳年（時代、年号）	備 考
		径(cm)	孔径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
75	寛永通寶	1.3	0.7	0.1	1.9	江戸 寛永13年(1636)	表土 M1 P L74

遺構外出土土製品一覧表（第279図）

調査番号	種別	計測値			出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)		D P I	P L 73
76	研磨土盤	2.6	1.7	0.2	6.1	表土	

表13 住居跡一覧表

住居 番 号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) 長さ(幅)×幅(高さ)	壁高 (cm)	床面 堅度	内部施設			覆土 自然	出土遺物	時期 6C後	備 新田開発(古→新)
							柱穴 主穴	柱穴 ビット	入口 手・量				
1	B 211	N-30°-W	方 形	5.57 × 5.28	55	平坦	全面	4	-	1 壓	自然	土器器(环、乳、茎)	
2	D 3 c1	N-38°-W	[長方形]	7.48 × [6.57]	1~17	平坦	-	6	1	1 乳	人為	土器器片	古墳後
4	A 1 e9	N-12°-W	圓角長方形	6.31 × 5.57	8~25	平坦	-	8	-	-	自然		不明
5	B 1 g9	N-87°-E	圓角方形	5.92 × 5.58	17~40	平坦	-	-	-	-	自然	陶文土器片、石器(石劍)	6C前 本跡→SK-46
8	C 4 a4	N-60°-E	圓角方形	5.88 × 4.55	12~25	平坦	-	8	-	-	自然	陶文土器片	陶文前
9	C 3 b6	N-4°-E	椭 圆 形	3.97 × 2.58	16~24	平坦	-	8	-	-	人為	陶文土器片	不明
10	C 4 d1	N-27°-W	椭 圆 形	4.47 × 3.27	23~36	平坦	-	-	2	-	自然	陶文土器片	陶文前
11	C 4 e4	N-25°-E	[長方形]	4.44 × [3.22]	30~50	平坦	-	4	-	2 乳	人為	灰生土器(小薪窯、徑)	6C後
12	C 4 f6	N-53°-E	[長方形]	3.43 × [3.27]	17~35	平坦	-	-	1	-	自然	陶文土器片、土製品(土製円錐)、土器器片	不明
15	B 4 b9	N-8°-W	[長方形]	[4.86] × [4.00]	不明	平坦	-	13	-	-	人為	陶文土器片	陶文前
16	B 3 d7	N-14°-E	[方 形]	[3.74] × [3.87]	不明	平坦	-	23	2	-	自然	陶文土器片	6C前 本跡→SK-57・58
17	B 4 e1	N-24°-W	椭 圆 形	3.68 × 3.22	15~22	平坦	-	12	2	-	自然	陶文土器片	陶文前
18	B 3 a5	N-9°-E	[方 形]	4.17 × [3.50]	17~24	平坦	-	-	2	-	人為	陶文土器片	不明
19	B 3 c4	N-46°-W	椭 圆 形	3.09 × 2.14	8~12	平坦	-	-	4	-	人為	陶文土器片、石器(石劍)	不明
20	B 2 f6	N-55°-W	[不規則形]	3.62 × [2.98]	17~20	平坦	-	7	2	-	人為		不明 本跡→SK-54A・B
21	B 3 c2	N-9°-W	方 形	4.32	40~50	平坦	全面	5	-	1 壓	自然	土器器(环、茎)	6C後
22	B 3 h3	N-11°-W	椭 圆 形	4.26 × 3.63	6~12	平坦	-	7	-	-	自然	陶文土器片	陶文前

表14 壁穴状遺構一覧表

壁 穴 番 号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模		壁洞 底面	覆土	出 土 遺 物	備 新田開発(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)				
1	D 3 f8	[N-46°-W]	不 明	2.95 × (1.66)	31~37	外傾	凸凹 人為・自然	土器器片	
2	C 4 b5	N-31°-W	兩丸長方形	3.24 × 2.32	13~22	外傾	平坦	陶文土器片	
3	C 3 e9	[N-15°-E]	不 明	(2.70) × 2.74	15~17	外傾	平坦	陶文土器片	本跡→SK-152
4	D 4 a6	N-67°-W	椭 圆 形	3.41 × [3.03]	12~25	外傾	平坦	陶文土器片	
5	C 5 h2	[N-10°-W]	兩丸長方形	[3.50] × [2.87]	17~24	外傾	平坦	陶文土器片、土器器片	
6	D 4 a2	N-19°-E	不 明	(3.92) × 2.87	10~15	外傾	平坦	陶文土器片	
7	D 4 b5	N-14°-E	不 明	(3.70) × 3.35	13~17	外傾	平坦	陶文土器片	
8	C 4 j1	N-18°-E	椭 圆 形	4.06 × 2.85	15~23	外傾	平坦	陶文土器片	

表15 塚一覧表

塚 番 号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模		出 土 遺 物	時 期	備 新田開発(古→新)
				長径×短径(m)	高さ(cm)			
1	A 1 c0	N-65°-W	椭 圆 形	7.95 × 5.05	115	土器質土器(茎), 繩	16C	SI-4→本跡
2	A 2 h3	N-28°-W	椭 圆 形	5.55 × 4.45	105		中世	

表16 土坑一覧表

◎印は本文中に記述

土 坑 番 号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模		層 面	底 面	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新)
				直径×高さ(m)	深さ(cm)				
1	C 2 e5	N-72°-W	圓丸長方形	2.79 × 1.92	43	縦斜	平底	人馬	土器片
2	C 2 g9	N-62°-W	椭円形	0.81 × 0.49	38	縦斜	圓状	自然	
3	C 2 h0	N-77°-W	椭円形	0.69 × 0.55	35	外傾	平底	自然	
4	D 1 j0	N-67°-W	椭円形	1.22 × 0.80	43	縦斜	平底	自然	
5	C 3 h1	N-48°-W	椭円形	0.74 × 0.52	29	縦斜	圓状	自然	
6	C 2 g9	不 明	不 明	3.32 × (2.77)	81	外傾	平底	純土器片	本跡→SK-7
7	C 2 g9	N-59°-E	不 定 形	5.10 × 3.16	110	縦斜	圓状	人馬	SK-6→本跡
8	C 2 g9	N-38°-E	不 定 形	4.75 × 3.17	106	縦斜	平底	人馬	
9	C 3 h1	N-12°-E	椭円形	3.09 × 1.42	55	縦斜	平底	人馬	
10	C 3 g1	N-11°-W	椭円形	3.16 × 1.23	31	外傾	平底	自然	
11	C 3 h3	N-49°-E	椭円形	0.70 × 0.56	33	縦斜	圓状	自然	
12	C 3 h4	-	円 形	0.62 × 0.60	36	外傾	圓状	自然	
13	C 3 j2	N-32°-E	椭円形	0.72 × 0.63	32	縦斜	圓状	自然	土器片
14	D 3 b1	-	円 形	0.75 × 0.74	46	外傾	凸 凹	人馬	土器片
15	D 2 c0	不 明	不 明	(1.26) × 1.16	27	縦斜	圓状	自然	
16	D 2 a0	N-39°-E	椭円形	2.26 × 1.91	67	外傾	圓状	自然	
17	D 2 b0	N-7°-W	長 方 形	3.03 × 2.39	98	縦斜	圓状	人馬	土器片
18	D 3 e3	不 明	不 明	0.94 × (0.67)	22	縦斜	圓状	自然	
19	D 3 e5	-	円 形	1.28 × 1.17	45	外傾	平底	自然	土器片(坏、窓跡)
20	D 3 e5	不 明	不 明	1.05 × (0.82)	48	外傾	圓状	自然	純土器片、土器片
21	D 3 e5	-	円 形	1.09 × 1.06	41	外傾	平底	人馬	土器片
22	C 2 g2	-	円 形	2.51 × 2.38	25	縦斜	圓状	自然	
23	D 3 d5	不 明	不 明	3.94 × (3.01)	111	縦斜	圓状	人馬	本跡→SK-19・20
24	C 1 e0	N-15°-E	椭円形	2.59 × 2.19	27	縦斜	平底	自然	
25	C 1 c9	N-32°-E	椭円形	0.76 × 0.67	32	外傾	圓状	自然	
26	C 1 b8	-	円 形	0.87	56	縦斜	凸 凹	自然	
27	C 1 d0	N-61°-W	長 方 形	2.40 × 2.24	31	外傾	凸 凹	自然	
28	C 2 j9	N-64°-W	不 定 形	3.17 × 2.66	70	縦斜	凸 凹	人馬	
29	A 2 e1	N-76°-W	長 方 形	1.95 × 1.01	5	直底	平底	自然	SI-4→本跡
30	A 2 d1	-	円 形	1.89 × 1.32	59	外傾	凸 凹	自然	
31	B 2 a2	N-38°-E	不 定 形	2.47 × 1.54	51	縦斜	圓状	人馬	
32	B 2 b3	N-55°-E	椭円形	1.15 × 0.91	29	縦斜	圓状	人馬	
33	B 2 b5	N-26°-E	圓丸長方形	1.84 × 0.90	12	縦斜	平底	自然	
34	B 2 c6	N-2°-W	椭丸長方形	1.91 × 0.80	12	外傾	平底	人馬	
35	B 2 c8	-	円 形	0.56 × 0.51	20	外傾	平底	自然	
36	B 2 c8	N-82°-W	椭円形	0.92 × 0.49	21	縦斜	圓状	人馬	
37	B 2 b0	-	円 形	0.61 × 0.58	26	縦斜	圓状	自然	
38	B 2 c9	N-5°-E	椭円形	0.79 × 0.44	40	外傾	圓状	人馬	
39	B 2 b8	-	円 形	1.97 × 1.80	50	縦斜	凸 凹	自然	
40	B 2 b9	N-16°-E	椭円形	1.68 × 1.47	78	外傾	圓状	人馬	
41	B 2 b8	N-55°-W	椭円形	1.02 × 0.77	30	縦斜	凸 凹	人馬	
42	B 2 e8	N-19°-W	椭円形	0.82 × 0.74	25	縦斜	凸 凹	自然	
43	B 2 e0	N-18°-E	不整椭円形	1.96 × 1.24	103	縦斜	凸 凹	不明	
44	B 2 e2	N-4°-W	圓丸長方形	2.43 × 1.38	66	外傾	平底	人馬	

土 壁 番 号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆 土	出 土 遺 物	備 考 新旧關係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
45	B 110	N-63°-E	長 方 形	0.84 × 0.72	26	縦斜	直状	自然		
46	B 115	-	円 形	1.29 × 1.20	70	縦斜	平坦	自然		
47	B 120	N-2°-E	椎 円 形	1.48 × 0.73	30	縦斜	直状	人為		
48	B 149	N-87°-E	不 定 形	3.13 × 2.48	72	縦斜	直状	人為	SI-5→本跡	
49	C 2 a5	N-63°-W	椎 円 形	0.54 × 0.47	30	外傾	直状	自然		
50	C 2 a6	N-87°-W	扇 扇長方形	3.65 × 1.82	24	外傾	平坦	自然		
51	C 3 j1	N-62°-E	椎 円 形	1.16 × 0.80	21	縦斜	平坦	人為		
52	C 3 j1	N-19°-W	椎 円 形	1.59 × 1.14	87	縦斜	平坦	人為		
53	B 3 b5	N-62°-E	椎 円 形	3.36 × 1.72	57	縦斜	直状	人為	SK-54B→SK-54A→本跡	
54A	B 3 b6	N-63°-E	【美 方 形】	2.95 × [1.05]	122	外傾	直状	人為	SI-20→SK-54B→本跡-SK-53	
54B	B 3 b6	N-27°-W	不 定 形	3.38 × 2.95	106	縦斜	直状	人為	SI-20→本跡-SK-54A→SK-53	
55	B 3 g5	-	円 形	1.35 × 1.27	36	縦斜	直状	人為		
56	B 3 a6	N-7°-E	不 定 形	2.82 × 2.47	110	外傾	凸凹	人為	SI-18→本跡	
57	B 3 d8	N-42°-E	椎 円 形	1.03 × 0.85	25	縦斜	直状	人為	SI-16→本跡	
58	B 3 c7	N-23°-E	不整椎円形	1.46 × 0.79	55	外傾	凸凹	自然	織文土器片	SI-16→本跡
59	B 4 g2	N-20°-E	椎 円 形	1.94 × 1.10	34	縦斜	凸凹	人為		
60	B 3 g7	N-36°-E	椎 円 形	1.06 × 0.82	28	外傾	凸凹	自然		
61	B 3 d7	N-3°-W	椎 円 形	1.43 × 1.28	29	縦斜	直状	人為		
62	B 3 d7	N-68°-E	不 定 形	3.10 × 1.79	76	外傾	凸凹	人為		
63	B 3 b7	N-49°-E	椎 円 形	1.75 × 1.26	30	縦斜	凸凹	人為	織文土器片	
64	B 3 g5	-	円 形	0.57 × 0.53	30	外傾	平坦	人為		
65	B 3 d9	N-30°-E	椎 円 形	1.31 × 1.11	42	外傾	凸凹	人為		
66	B 3 e9	N-53°-E	椎 円 形	1.41 × 1.14	57	外傾	凸凹	自然		
67	B 4 d1	N-29°-E	椎 円 形	1.20 × 0.99	32	縦斜	直状	自然	織文土器片	
68	B 4 f4	N-61°-W	椎 円 形	1.37 × 1.22	31	縦斜	直状	自然		
69	B 4 d3	N-59°-E	椎 円 形	1.05 × 0.83	34	縦斜	直状	自然		
70	B 4 g4	N-41°-E	不 定 形	1.58 × 1.33	27	縦斜	直状	自然		
71	B 4 h3	N-73°-E	椎 円 形	2.27 × 1.41	35	縦斜	直状	自然	織文土器片	
72	B 4 g1	不 明 不 明	椎 円 形	1.92 × (1.10)	17	垂直	平坦	自然	織文土器片	SK-73と重複
73	B 4 g1	不 明 不 明	椎 円 形	1.37 × (1.21)	19	垂直	平坦	自然		SK-72と重複
74	B 4 g1	N-49°-E	不 定 形	1.75 × 1.22	19	縦斜	平傾	自然	織文土器片	
75	B 4 h2	N-8°-E	椎 円 形	1.98 × 1.28	32	縦斜	凸凹	自然		
76	B 4 f4	N-30°-E	椎 円 形	1.19 × 1.00	22	縦斜	直状	人為		
77	B 4 g5	N-58°-E	椎 円 形	1.20 × 1.03	35	縦斜	凸凹	人為		
78	B 4 h6	N-51°-E	椎 円 形	1.05 × 0.90	24	縦斜	直状	人為		
79	B 4 g6	N-44°-E	椎 円 形	2.34 × 1.23	74	外傾	凸凹	自然	織文土器片	
80	B 4 h7	N-5°-W	椎 円 形	2.18 × 1.27	29	外傾	平傾	人為	織文土器片	
81	C 2 b6	N-85°-E	扇 扇長方形	1.17 × 0.58	22	縦斜	直状	自然		
82	C 2 b6	-	円 形	0.90	21	縦斜	直状	自然		
83	C 2 c6	N-49°-E	扇 扇長方形	1.01 × 0.57	53	外傾	平傾	自然		
84	C 2 b6	N-65°-W	不整椎円形	1.61 × 1.10	57	外傾	凸凹	人為		
85	C 2 b9	N-76°-E	【椎 円 形】	1.15 × (0.60)	24	縦斜	直状	自然		SK-86→本跡
86	C 2 b6	不 明 不 明	椎 円 形	0.62 × (0.59)	30	縦斜	凸凹	自然		本跡→SK-85
87	C 2 a9	N-10°-E	椎 円 形	2.03 × 1.74	47	縦斜	平傾	自然		
88	C 2 d7	N-66°-W	椎 円 形	0.92 × 0.80	58	外傾	平傾	自然	織文土器片	
89	C 2 d6	N-52°-W	扇 扇長方形	1.76 × 0.79	42	外傾	平傾	自然		
90	C 2 b6	N-1°-W	長 椎 円 形	3.50 × 0.70	93	外傾	直状	自然	織文土器片	端穴 SK-91→本跡
91	C 2 b6	N-36°-E	椎 円 形	2.82 × 2.47	26	外傾	平傾	自然		本跡→SK-90

土 壤 番 号	位 置	系 統 方 向	平 面 形	規 模		底 面	底 土	出 土 遺 物	備 考 新旧關係(古→新)	
				長 徑 (m)	闊 度 (m)					
92	C 135	N -65° - W	不 定 形	2.28	1.43	48	外傾	凸	自然	縄文土器片
93	B 215	N -44° - W	椭 圆 形	1.05	0.71	41	縱斜	圓狀	人為	
94	B 215	N -20° - W	椭 丸長方形	0.86	0.73	16	縱斜	平坦	自然	
95	B 214	N -17° - W	椭 圆 形	0.84	0.72	31	縱斜	平坦	自然	
96	B 214	-	円 形	0.80	0.78	38	縱斜	平坦	自然	
97	B 313	N -19° - E	椭 圆 形	1.30	1.18	13	外傾	平坦	自然	
98	B 2 g3	N -88° - W	不整椭圆形	1.75	0.93	86	外傾	凸	自然	
99	B 2 g3	N -57° - W	椭 圆 形	1.28	1.15	55	縱斜	平坦	自然	
100	B 2 g1	N -60° - E	美 方 形	1.49	0.81	15	外傾	平緩	自然	
101	C 5 a1	N -11° - W	椭 圆 形	1.50	1.05	52	縱斜	圓狀	人為	
102	C 5 a2	-	円 形	1.18	1.16	56	垂直	凸	人為	縄文土器片
103	C 5 a3	N -35° - W	椭 圆 形	1.91	0.96	57	垂直	圓狀	人為	縄文土器片
104	C 5 a3	N -22° - W	不要椭圆形	2.14	1.65	47	垂直	平坦	人為	
105	C 5 c4	N -24° - W	椭 圆 形	1.45	1.10	54	外傾	平坦	人為	縄文土器片
106	B 4 g9	N -41° - W	不整椭圆形	1.19	1.01	34	縱斜	凸	人為	
107	C 5 b1	N -1° - E	椭 圆 形	1.92	1.36	52	縱斜	平坦	人為	
108	C 5 g5	N -16° - W	椭 圆 形	1.45	0.95	37	縱斜	圓狀	人為	縄文土器片, 土器片
109	C 5 b0	N -71° - E	椭 圆 形	2.01	1.16	20	垂直	圓狀	人為	縄文土器片
110	C 4 b0	-	円 形	2.16	2.01	20	縱斜	平坦	自然	
111	C 5 e2	N -33° - W	椭 圆 形	2.29	1.49	32	縱斜	平坦	人為	縄文土器片
112	C 5 e2	N -47° - E	椭 圆 形	1.45	1.00	31	縱斜	圓狀	自然	
113	C 5 d2	N -69° - E	椭 圆 形	2.00	2.07	40	外傾	平坦	自然	
114	C 5 c1	-	円 形	2.25	2.05	35	縱斜	平坦	自然	
115	C 5 d1	N -26° - E	椭 圆 形	2.54	1.27	45	縱斜	圓狀	人為	縄文土器片
116	C 5 c1	N -10° - W	椭 圆 形	2.52	1.03	25	縱斜	圓狀	人為	縄文土器片
117	C 5 c2	-	円 形	1.00	0.96	40	外傾	凸	人為	
118	C 5 d5	N -85° - E	椭 圆 形	1.82	1.11	35	縱斜	圓狀	人為	
119	C 5 e5	N -51° - E	椭 圆 形	1.58	1.10	25	縱斜	平坦	人為	
120	C 5 b2	N -61° - W	長 方 形	1.66	1.21	112	垂直	凸	自然	
121	B 216	N -32° - W	長 方 形	2.09	1.59	24	外傾	平坦	自然	土器器片
122	B 216	N -64° - W	長 方 形	1.35	0.73	22	縱斜	圓狀	自然	
123	B 217	N -68° - E	長 方 形	3.77	2.05	15	縱斜	平坦	自然	縄文土器片
124	C 139	N -82° - W	不整椭圆形	2.33	0.88	52	外傾	平坦	人為	
125	B 219	-	円 形	0.95	0.88	13	縱斜	平坦	自然	
126	B 2 g9	N -27° - E	椭 丸長方形	1.62	0.73	15	縱斜	平坦	自然	
127	B 210	N -89° - E	椭 丸長方形	1.09	0.74	13	縱斜	平坦	自然	
128	B 219	N -80° - W	椭 丸長方形	1.82	1.35	100	外傾	圓狀	人為	縄文土器片
129	B 2 g8	N -13° - W	椭 圆 形	1.61	0.82	26	外傾	凸	人為	
130	B 2 g7	N -61° - E	不 定 形	1.84	0.97	47	外傾	凸	自然	
131	D 4 a6	N -8° - W	椭 圆 形	1.41	1.18	27	縱斜	圓狀	人為	
132	D 4 c7	N -50° - W	椭 圆 形	1.23	0.95	32	外傾	平坦	自然	
133	D 4 c8	N -69° - W	椭 圆 形	1.72	1.28	23	外傾	平坦	自然	
134	C 4 g4	N -40° - W	椭 圆 形	1.13	0.88	34	縱斜	凸	自然	縄文土器片
135	C 4 g8	N -27° - W	椭 圆 形	1.18	0.96	31	縱斜	平坦	人為	
○136	C 4 l1	N -28° - W	椭 圆 形	2.66	1.32	24	外傾	平坦	自然	縄文土器片
○137	C 4 g3	N -7° - W	椭 圆 形	2.75	1.68	28	外傾	平坦	自然	縄文土器片, 石器(石器)
138	C 4 h4	-	円 形	2.57	2.34	40	縱斜	平坦	自然	縄文土器片
139	C 4 e3	N -9° - W	椭 圆 形	1.15	1.00	33	外傾	平坦	自然	縄文土器片

土 坑 番 号	位 置	長径方向	平 面 形	観 慎		面	底面	覆 土	出 土 遺 物	備 考 新旧關係(古→新)
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
140	C 4 e1	N-72°-E	格 円 形	1.10 × 0.85	25	外傾	平坦	人為		
141	C 4 e1	N-70°-W	扇丸長方形	2.30 × 1.28	25	外傾	平坦	人為	縄文土器片	
142	C 3 b9	N-53°-W	格 円 形	1.21 × 0.79	34	縱斜	圓底	自然		
143	C 3 g9	N-9°-E	【格円形】	1.63 × (1.40)	35	縱斜	圓底	自然	縄文土器片	本跡→SK-153
144	C 3 g9	N-57°-W	格 円 形	1.88 × 0.94	28	外傾	平坦	人為		
145	C 3 g9	N-12°-E	格 円 形	1.09 × 0.81	34	垂直	凹凸	自然	縄文土器片	
146	C 3 h8	N-78°-E	格 円 形	1.45 × 1.14	28	外傾	平坦	自然		
147	C 3 h8	-	円 形	1.31 × 1.28	13	縱斜	平坦	自然	縄文土器片	
148	C 3 h9	-	円 形	1.93	21	外傾	平坦	自然	縄文土器片	
149	C 3 h9	N-9°-E	扇丸長方形	2.78 × 1.08	14	垂直	平坦	自然		
150	C 4 h1	N-34°-W	格 円 形	1.99 × 1.34	15	縱斜	平坦	人為	縄文土器片, 石器(石鏟)	
151	C 3 g9	N-53°-W	不要格円形	1.65 × 0.64	81	外傾	圓底	人為	縄文土器片	
152	C 3 e9	N-53°-W	不 定 形	4.00 × 1.82	161	垂直	凹凸	人為	縄文土器片, 土師器片	
153	C 3 g9	N-11°-E	不 定 形	1.99 × 0.97	48	外傾	凹凸	人為	縄文土器片	SK-143→本跡
154	C 3 d9	N-44°-E	格 円 形	1.24 × 1.11	16	垂直	平坦	自然		
155	C 3 d9	N-25°-E	格 円 形	1.87 × 0.96	19	外傾	平坦	自然		
156	C 3 e9	N-22°-W	格 円 形	3.48 × 3.03	143	縱斜	平坦	人為	縄文土器片	SK-171→本跡
157	C 3 a9	N-4°-E	格 円 形	1.83 × 0.93	60	外傾	平坦	人為		
158	C 3 c9	N-44°-E	格 円 形	1.51 × 1.05	29	縱斜	平坦	人為		
159	C 3 b9	N-19°-E	格 円 形	1.25 × 0.93	20	外傾	平坦	自然		
160	C 3 c7	N-15°-E	格 円 形	1.23 × 0.82	24	垂直	凹凸	自然		
161	C 3 d9	N-6°-E	不要格円形	0.96 × 0.65	20	垂直	平坦	自然	縄文土器片	
162	C 2 j7	N-21°-E	不要格円形	0.90 × 0.74	28	縱斜	圓底	自然		
163	C 3 a9	N-47°-E	格 円 形	2.05 × 2.50	26	縱斜	平坦	自然		
164	B 3 b9	N-4°-E	格 円 形	1.68 × 1.32	27	外傾	平坦	人為		
165	B 3 b9	N-18°-E	格 円 形	1.25 × 0.77	19	縱斜	平坦	人為		
166	B 3 h1	N-47°-W	格 円 形	1.78 × 1.31	67	縱斜	平坦	人為		
167	B 3 j9	-	円 形	1.15	29	縱斜	平坦	人為	縄文土器片	
168	B 3 g2	N-30°-W	格 円 形	1.40 × 0.85	23	縱斜	平坦	自然		
169	C 4 b1	N-35°-E	格 円 形	1.36 × 0.79	37	外傾	平坦	人為		
170	C 4 b6	N-6°-W	格 円 形	1.57 × 1.19	75	外傾	平坦	人為	縄文土器片	
171	C 3 e9	不 明 不 明	不 明	3.18 × (0.71)	105	縱斜	平坦	人為		本跡→SK-156
172	C 3 f9	N-69°-W	不 定 形	2.41 × 1.85	55	縱斜	平坦	人為	縄文土器片	
173	C 3 g9	N-72°-W	格 円 形	1.62 × 0.85	36	縱斜	凹凸	人為		
174	C 3 c9	N-54°-E	格 円 形	1.23 × 1.02	48	縱斜	凹凸	人為		
175	C 3 a9	-	円 形	0.80 × 0.74	21	縱斜	平坦	自然		
176	C 3 a9	N-29°-W	格 円 形	1.43 × 0.89	33	縱斜	凹凸	自然		
177	C 3 a9	N-30°-E	長 方 形	2.47 × 1.60	49	外傾	平坦	人為	縄文土器片	
178	B 3 j2	N-50°-W	格 円 形	1.67 × 1.34	27	縱斜	凹凸	自然		
179	B 3 h2	N-10°-E	格 円 形	1.28 × 0.98	38	縱斜	圓底	人為		
180	C 3 e9	N-36°-E	格 円 形	2.27 × 1.48	33	外傾	凹凸	自然		
181	C 3 e9	N-26°-E	不要格円形	1.48 × 1.08	34	外傾	平坦	自然		
182	C 3 c4	N-23°-E	格 円 形	1.43 × 1.15	17	垂直	平坦	自然		
183	B 3 h1	N-13°-E	不要格円形	1.37 × 1.06	24	垂直	平坦	自然		
184	C 4 e6	N-83°-E	扇丸長方形	1.48 × 0.82	24	外傾	平坦	自然		
185	C 4 h5	N-36°-E	格 円 形	1.58 × 0.96	33	外傾	凹凸	人為	縄文土器片, 石器(片刃石斧)	
186	C 4 h6	N-65°-E	不 定 形	1.38 × 1.21	36	縱斜	平坦	人為		

第4節 まとめ

今回の調査で旧石器時代から中世までの遺構や遺物が検出され、これまでの先人の生活の一端について少なからず解明することができた。ここでは、時代ごとに調査の結果を記述し、まとめとする。

1 旧石器時代

調査区域の南東部の遺物包含層からナイフ形石器1点が出土している。石質は黒曜石である。遺構外出土遺物として、剥片1点と石核1点を検出している。石質は、いずれも頁岩である。

2 縄文時代

調査区域の中央部から北部にかけて、当該期に属する堅穴住居跡7軒、土坑1基、陥し穴1基、調査区域の南東部から遺物包含層1か所を検出した。当遺跡は縄文時代から、当時の人々の生活と何らかのかかわりのあった場所であることがうかがえる。

第5・8・10・17号堅穴住居跡は、前期後葉（浮島式期）の構築、第15・16号堅穴住居跡は、前期後葉（興津式期）の構築と考えられ、調査区域の中央部から北部にかけて点在している。調査区北部の第22号堅穴住居跡は、晚期中葉の構築と考えられ、東北南部系大洞C式土器と前浦式土器が出土している。調査区南部の第145号土坑は、後期前葉（堀之内II式期）の構築と考えられ、注口土器片が出土している。また、調査区西部の第90号土坑は、傾斜に対し直交するように陥し穴が構築されていることから、当遺跡付近は縄文時代は狩猟の場としても利用されていたものとみられる。

遺物包含層は、早期中葉三戸式から中期中葉阿玉台式までの土器を包含するが、浮島式～興津式の土器群が主体を占めている。^①次いで田戸下層式、関山式の土器の割合が多くなる。土器片は自然流入したものと思われ、この谷津は弥生時代にはほぼ埋まっていたものと考えられる。

また、注目すべき遺物には、遺構外出土遺物の諸磯b式土器の浅鉢と第6号土坑から出土した草創期の土器の口縁部片がある。前者は浮線文が頸部、肩部、底部直上に横方向に配され、頸部に孔が口縁に沿って等間隔に通っている。後者は口唇部直下の内・外面に格条体による圧痕が施されている。いずれも類例が少なく、貴重な資料である。

3 弥生時代後期

調査区域東部の第11号堅穴住居跡の1軒が該当する。住居跡の主軸方向はN-25°-E、平面形は隅丸長方形で、規模は14m²の小形の住居跡である。^②当遺跡の南側には久保塚群が位置し、堅穴住居跡3軒が確認されている。構築時期はいずれも弥生時代後期後半と考えられる。

土器の構成は、小形高杯・壺・壺形土器などである。また、第11号堅穴住居跡の東側の第185号土坑と遺物包含層からは片刃石斧が出土している。壺の文様は、頸部に山形文が通り、胴部には附加条一種（附加2条）の縄文が施され、羽状構成をとるなどの特徴が見られることから、当遺跡も、久保塚群と同様に二軒屋式土器圏の影響を多く受けていると言える。

4 古墳時代後期

調査区域の西側から当該期に属する堅穴住居跡3軒、堅穴状遺構1基、土坑1基を検出した。第1・2・21

号堅穴住居跡、第1号堅穴状遺構、第19号土坑が該当する。当該期に属する住居跡は、調査区域の東側に分散している。主軸方向はN-9°-38°-Wの範囲で、西寄りの主軸を持っており、規則性が認められる。平面形は方形または長方形で、規模は大形の住居跡が1軒、中形の住居跡が1軒、小形の住居跡が1軒である。このうち、第21号堅穴住居跡の竪の袖部は、地山のローム土を削り出して袖部の芯材とし、周囲に粘土と砂粒を混ぜて構築されている。また、当遺跡の東側の谷津を隔てた台地上には仲丸遺跡が立地しており、古墳時代後期の堅穴住居跡22軒が検出されている。集落の中心は仲丸遺跡であるが、軒数は少ないものの、当遺跡にも集落の範囲が及んでいたことがうかがえる。

土器の構成は、土師器坏・碗・壺である。坏は、丸底で、体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至るものと、須恵器坏身模倣坏で、口縁部との境に明瞭な稜をもつものとに分かれる。やや大形化の傾向が見られ、須恵器坏身模倣坏は口縁部から器高の3分の1に明瞭な稜を有し、口縁部は直立するものと内傾するものとがある。また、内・外表面や口縁部外面・内面に黒色処理が施されている割合が高く、内面はヘラ磨きではなく、ナデが施されるものが多い。

5 中世

調査区域の北西部から当該期に属する塚2基を検出した。第1・2号塚が該当する。第1号塚は、塚下の埋納坑から源法寺焼の壺が出土しており、壺の内部から炭化物と疊3点が検出されている。骨片等は検出されていないものの、本来は壺の口縁部の上面に木片を蓋にしてのせ、その上部に疊が置かれていた状態であったと推測されることから、第1号塚は墳丘墓と考えられる。源法寺焼の壺は、底部はうちかかれており、周縁を磨って、丸味をもたせており、16世紀頃のものと思われる。

以上をまとめると、今回の調査で、向原遺跡・向原塚群においては、縄文時代から中世までの人々の生活の痕跡を確認することができた。当遺跡は縄文時代前期に集落が形成され始め、付近は居住や狩猟の場として利用され、その後、弥生時代、古墳時代とわずかに住居が繰り返し構築され続けたものの、7世紀には消滅していく傾向がうかがえる。それ以降、この地には住居も造られず、中世になり、塚群が構築されることになる。当遺跡は、縄文時代前期から弥生時代を経て、古墳時代後期に至る集落跡をはじめ、縄文時代の遺物包含層や中世の塚群などが確認できた複合遺跡であることが明らかになった。

註

- (1) 茨城県立歴史館の斎藤弘道氏の『茨城県の縄文土器』(1995年6月)の編年による。
- (2) 堅穴住居跡の大きさは、床面積が30m²以上を大形、30m²未満20m²以上を中形、20m²未満を小形とした。

参考文献

- ・樋村宣行「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート』2号 茨城県教育財團 1993年7月
- ・吹野富美夫「八幡前遺跡における古墳時代後期の土器様相」『研究ノート』4号 茨城県教育財團 1995年6月
- ・海老澤稔、小玉秀成「霞ヶ浦沿岸の弥生文化－土器からみた弥生社会－」霞ヶ浦町郷土資料館 1998年8月

第7章 前原塚

第1節 遺跡の概要

前原塚は、友部町の南東部にあり、南側に瀬沼川の沖積低地を望む標高26~28mの台地上に位置している。北には仲丸塚、南には久保塚群、南西には慈教堂古墳、芝沼古墳群が所在している。調査区域は、東西約20m、南北約20m、面積400m²であり、現況は山林である。

今回の調査によって、塚1基、土坑16基を確認した。塚は当遺跡の中央部に築造されている。当遺跡は、調査前まで古墳と周知されていたが、主体部や周溝を持たないことから塚であることが確認できた。塚および土坑からは出土遺物がなく、時期や性格等については不明である。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に1箱出土している。主な遺物は、縄文土器片、土師器片、須恵器片、打製石斧、剥片である。



第1号塚南北・東西土層断面

第2節 遺構と遺物

1 塚

今回の調査で、調査区中央部から塚1基が確認された。当初、古墳の可能性があるとして調査を開始したが、周溝や主体部の存在した形跡がないこと、遺物を伴わないことなどから塚と判断した。以下、確認された塚の形態や特徴等について記載する。

第1号塚（第280・281図）

位置 調査区の中央部、A 1j2～B 1a4区。

重複関係 本跡が、第6・14号土坑の上部に築造されていることから、本跡が新しい。

規模と形状 底面は長径5.95m、短径5.45mの不整梢円形を呈し、現地表面から塚頂部までの高さは1.28mである。

長径方向 N - 40° - E

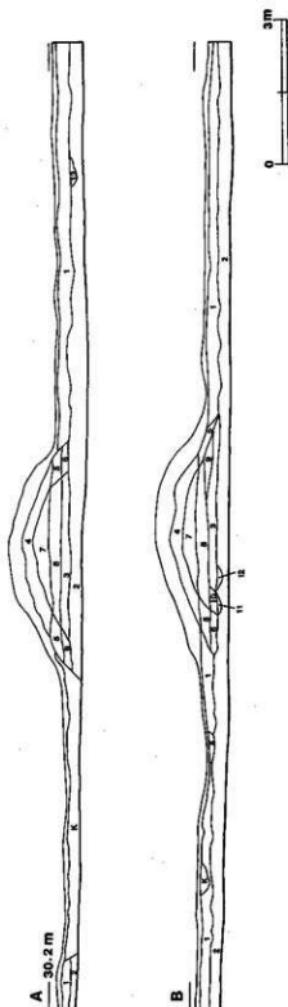
構築状況 旧地表面を基底部とし、ローム粒子、ロームブロックを微量から中量含んだ黒褐色土を中心部から盛土している。盛土は全体的に粘性・しまりともに弱い。

土層解説

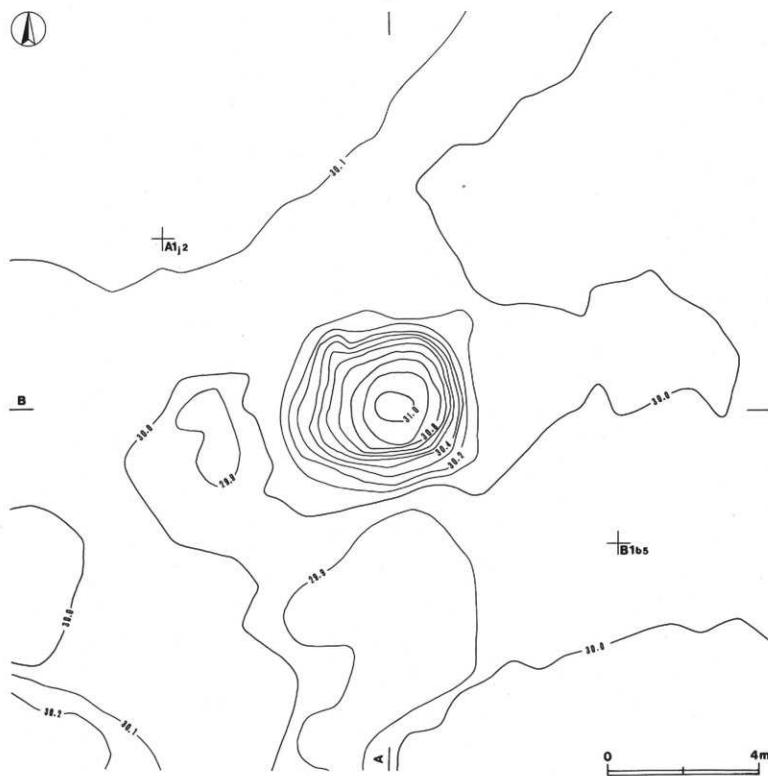
- 1 表 土
- 2 黄 色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 4 黑褐色 ローム粒子微量
- 5 黑褐色 ローム粒子微量
- 6 黑褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 7 黑褐色 ローム粒子微量
- 8 黑褐色 ローム粒子少量
- 9 黑褐色 ローム粒子少量
- 10 黑褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 11 黑褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 12 黑褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 13 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

遺物 出土していない。

所見 本跡は、出土遺物がなく時期や性格を明確にすることはできないが、盛土の状態から判断すると、中・近世以降に築造されたものと考えられる。



第280図 第1号塚土層断面図



第281図 第1号塚実測図

2 土坑

今回の調査で、土坑16基が検出された。いずれも遺物は出土しておらず、時期や性格は不明である。以下、検出した土坑の特徴について記載する。

第1号土坑（第282図）

位置 調査区の南東部、B 1 b5区。

規模と平面形 長径1.20m、短径1.01mの楕円形で、深さ20cmである。

長軸方向 N - 20° - E

壁面 細やかに傾斜して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 2層からなり、各層が明確に分層できることから人為堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第2号土坑（第282図）

位置 調査区の東部、B 1 a5区。

規模と平面形 長径1.30m、短径1.21mのほぼ円形で、深さ24cmである。

壁面 細やかに傾斜して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層からなり、各層が明確に分層できることと不自然な堆積状況から人為堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第3号土坑（第282図）

位置 調査区の中央部、B 1 b4区。

規模と平面形 長軸2.34m、短軸1.22mの長方形で、深さ32cmである。

長軸方向 N - 46° - E

壁面 傾斜して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 4層からなり、自然堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第4号土坑（第282図）

位置 調査区の南西部、B 1 c2区。

規模と平面形 長径1.12m、短径0.98mのほぼ円形で、深さ24cmである。

壁面 細やかに傾斜して立ち上がる。

底面 平坦である。北東部に径0.4m、深さ13cmのピット状の窪みを持つ。

覆土 2層からなり、各層が明確に分層できることから人為堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第5号土坑（第282図）

位置 調査区の南西部、B 1 b2区。

規模と平面形 長軸2.28m、短軸1.40mの長方形で、深さ30cmである。

長軸方向 N - 47° - E

壁面 細やかに傾斜して立ち上がる。

底面 平坦である。北コーナー部に径0.34m、深さ22cmのピット状の窪みを持つ。

覆土 3層からなり、レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第6号土坑（第282図）

位置 調査区の中央部、B 1 a3区。

規模と平面形 長径0.78m、短径0.71mのほぼ円形で、深さ34cmである。

重複関係 第1号塚の下部に確認され、本跡が古い。

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、重複関係にある第1号塚より古いが、詳細については不明である。

第7号土坑（第282図）

位置 調査区の西部、B 1 a2区。

規模と平面形 長径2.70m、短径2.11mの梢円形で、深さ35cmである。

長径方向 N - 41° - E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 中央部に径1.04m、深さ35cmの窪みを持ち、段を持つ。

覆土 3層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第8号土坑（第282図）

位置 調査区の中央部、A 1 j4区。

規模と平面形 長径0.82m、短径0.74mの円形で、深さ18cmである。

壁面 細やかに立ち上がる。

底面 目状である。

覆土 2層からなり、各層が明確に分層できることから人為堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第9号土坑（第283図）

位置 調査区の北東部、A 1 j4区。

規模と平面形 長軸1.72m、短軸1.56mの方形で、深さ48cmである。

長軸方向 N - 85° - W

壁面 細やかに立ち上がる。

底面 目状である。

覆土 4層からなり、レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第10号土坑（第283図）

位置 調査区の北東部、A 1 h5区。

規模と平面形 径0.81mの円形で、深さ35cmである。

壁面 傾斜して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層からなり、各層が明確に分層できることから人為堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第11号土坑（第283図）

位置 調査区の北東部、A 1 h4区。

規模と平面形 長径0.79m、短径0.72mのはば円形で、深さ42cmである。

壁面 細やかに傾斜して立ち上がる。

底面 四凸である。中央で段を持ち、東側に深さ25cmの窪みを持つ。

覆土 3層からなり、各層が明確に分層できることから人為堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第12号土坑（第283図）

位置 調査区の中央部、A 1 j2区。

規模と平面形 長軸1.05m、短軸0.97mの方形で、深さ20cmである。

長軸方向 N - 65° - W

壁面 傾斜して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 2層からなり、レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第13号土坑（第283図）

位置 調査区の西部、A 1j2区。

規模と平面形 長径1.15m、短径1.05mのはば円形で、深さ29cmである。

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 中央に径0.38m、深さ10cmのピット状の窪みを持つ。

覆土 3層からなり、レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第14号土坑（第283図）

位置 調査区の中央部、B 1 a3区。

規模と平面形 長径4.00m、短径3.33mの不整規円形で、深さ126cmである。

重複関係 第1号塚の下部に確認され、本跡が古い。

長径方向 N - 30° - E

壁面 細やかに傾斜して立ち上がる。

底面 凹状である。

覆土 19層からなり、不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、重複関係にある第1号塚より古いが、詳細については不明である。

第15号土坑（第283図）

位置 調査区の西部、A 1j1区。

規模と平面形 西壁が調査区域外のため、規模は、南北方向 (4.00) m、東西方向 (1.58) mで、平面形は不明である。深さは、110cmである。

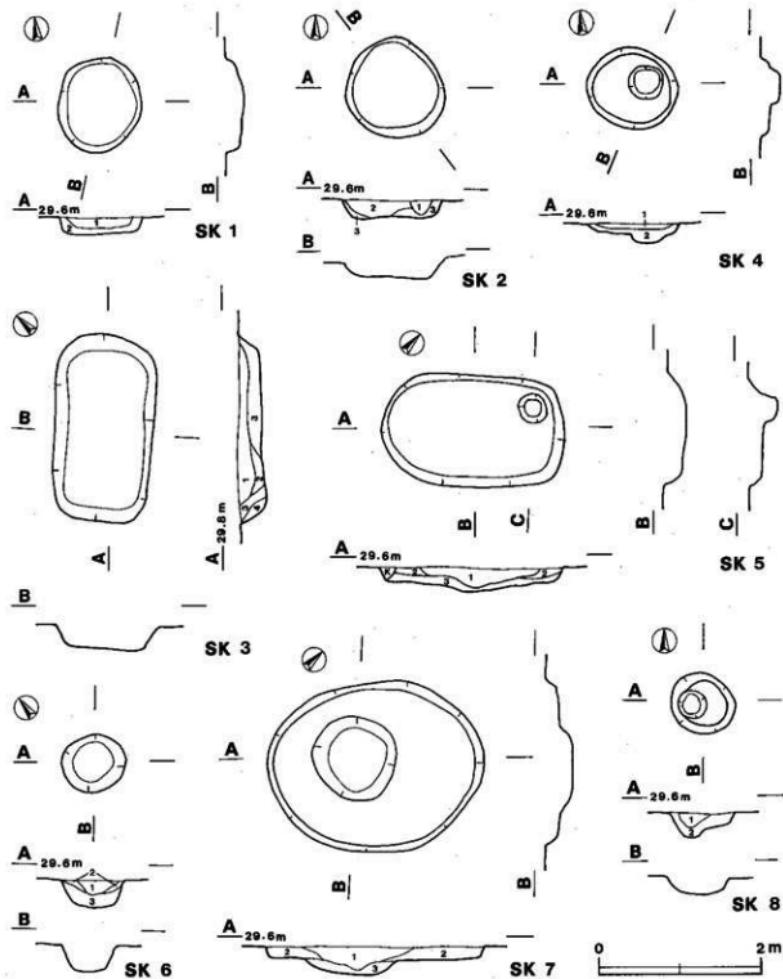
壁面 細やかに傾斜して立ち上がる。

底面 凹凸である。

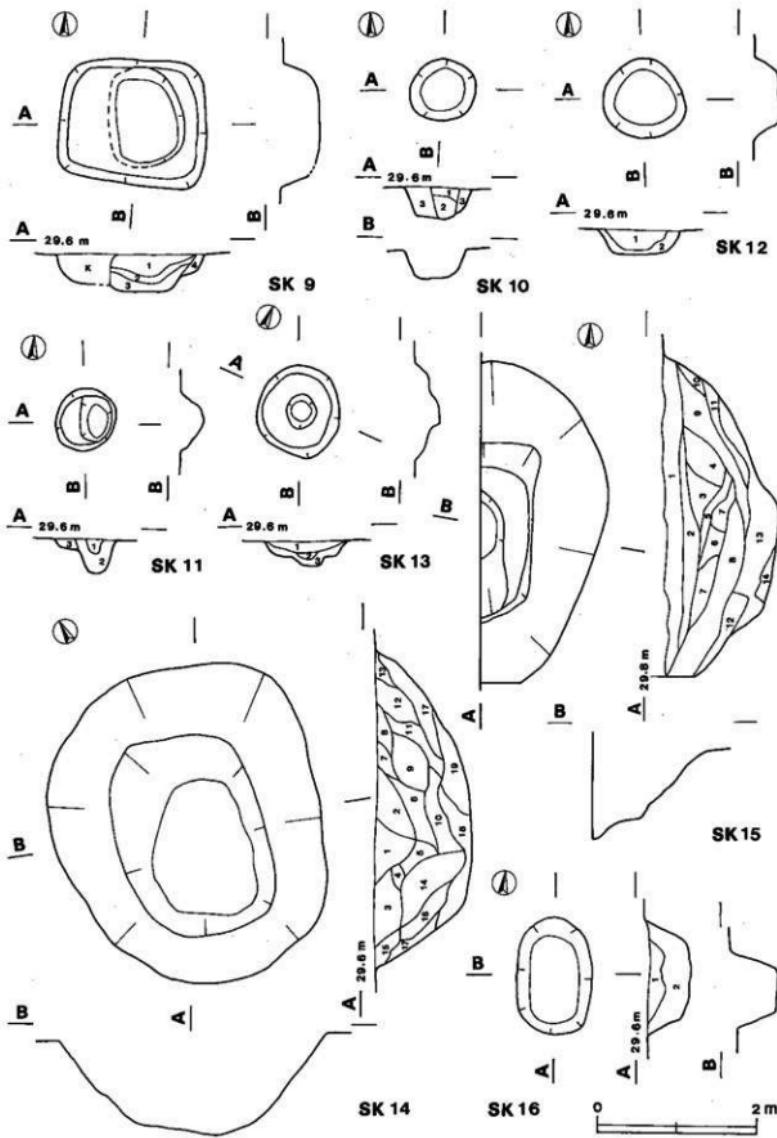
覆土 14層からなり、不規則な堆積状況から人為堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。



第282図 第1～8号土坑実測図



第283図 第9~16号土坑実測図

第16号土坑（第283図）

位置 調査区の南西部、B 1 c1区。

規模と平面形 長径1.45m、短径0.95mの楕円形で、深さ55cmである。

長径方向 N-8°-W

壁面 細斜して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 2層からなり、レンズ状の堆積をしていることから自然堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないとから、時期や性格については不明である。

第1号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量
- 2 楊色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

第2号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 楊色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

第3号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 3 楊色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
- 4 楊色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量

第4号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
- 2 楊色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

第5号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 3 楊色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

第6号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 3 楊色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

第7号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 3 楊色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

第8号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 楊色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

第9号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 3 楊色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
- 4 楊色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量

第10号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 3 楊色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

第11号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 3 楊色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

第12号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 2 楊色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

第13号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 3 黄褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

第14号土坑土層解説

- 1 黄褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黄褐色 ローム粒子中量、ローム中・小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量、焼土小ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子少量、炭化物・炭化粒子微量
- 6 黄褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 7 黄褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・KP粒子少量、KP小ブロック微量
- 8 にじみ黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・KP粒子少量、KP小ブロック微量
- 9 にじみ黒褐色 KP粒子多量、ローム粒子中量、ローム小ブロック・KP小ブロック微量
- 10 黄褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量、炭化粒子微量
- 11 黄褐色 KP粒子多量、ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 12 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック・炭化粒子少量
- 13 黄褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、KP粒子少量、ローム中ブロック・KP中・小ブロック微量
- 14 黄褐色 KP粒子多量、KP小ブロック中量、ローム粒子・KP中ブロック少量
- 15 黄褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 16 黑褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 17 黄褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・KP粒子少量
- 18 黄褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・KP粒子中量、ローム中ブロック・KP小ブロック少量、KP中ブロック微量
- 19 黄褐色 KP粒子多量、KP小ブロック中量、ローム粒子・KP中ブロック少量、ローム小ブロック微量

第15号土坑土層解説

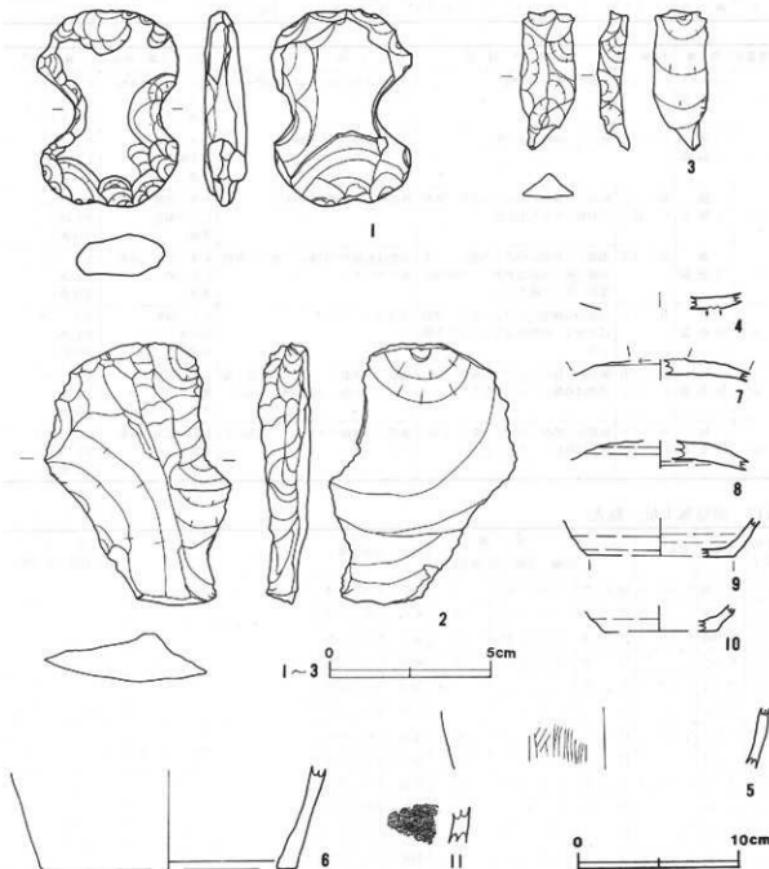
- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黑褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黑褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黑褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 6 黑褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 8 黑褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 9 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 10 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 11 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 12 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中・小ブロック・炭化粒子少量
- 13 黄褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、KP粒子少量、ローム中ブロック・KP中・小ブロック微量
- 14 黄褐色 KP粒子多量、KP小ブロック中量、ローム粒子・KP中ブロック少量

第16号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 2 黄褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量

3 遺構外出土遺物

今回の調査で、遺構に伴わない土器片、石器等が出土している。第284図11は、土師器片の拓影図である。ここでは、これらの出土遺物について、実測図(第284図)及び観察表、一覧表で一括して掲載する。



第284図 遺構外出土遺物実測図

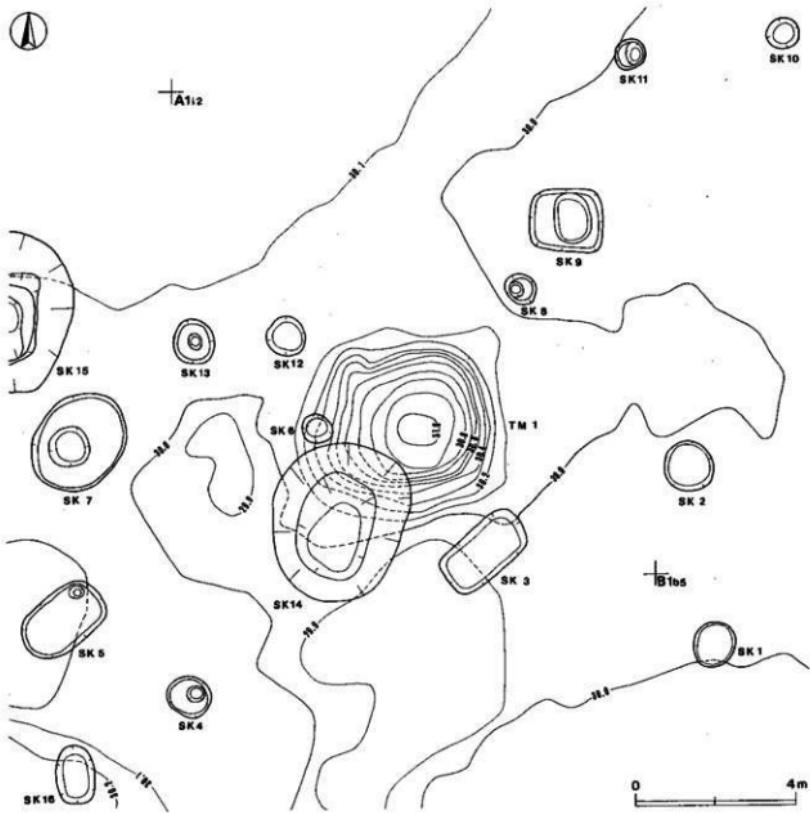
遺構外出土遺物観察表（第284図）

団版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
1	打製石斧	12.0	8.6	2.6	303.3	砂岩	2区	Q2 PL76
2	調片	8.0	5.8	1.6	61.2	安山岩	1区表土	Q1 PL76
3	刷片	4.3	1.7	1.0	5.0	瑪瑙	4区表土	Q3 PL76

団版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
4	高台付环土師器	B〔1.0〕	底部片。高台部欠損。	高台貼り付け後、ナデ。体部外面口クロナデ。	英石 青母 砂粒 にぶい褐色 普通	P2 5% PL76 2区表土
5	更土師器	B〔3.6〕	体部片。内縫気株である。	体部外面縫位のヘラ削き。	石英 砂粒 明赤褐色 普通	P3 5% PL76 2区表土
6	瓶土師器	B〔6.2〕 C〔15.5〕	底部から体部にかけての破片。体部は外縫して立ち上がる。	体部内・外面横方向のナデ。	石英 青母 砂粒 にぶい褐色 普通	P6 5% PL76 3区表土
7	蓋須恵器	B〔1.3〕	頂部から体部にかけての破片。つまみ部欠損。頂部は平坦で、外周部はなだらかに下降する。	頂部は右回りの回転ヘラ削り。外周部ロクナデ。	石英 青母 砂粒 にぶい褐色 普通	P5 5% PL76 3区表土
8	蓋須恵器	B〔1.7〕	頂部から体部にかけての破片。頂部は平坦で、外周部はなだらかに下降する。	外周部ロクナデ。	英石 砂粒 暗灰褐色 普通	P7 5% PL76 4区表土
9	环須恵器	B〔2.4〕 C〔9.0〕	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外縫して立ち上がる。	体部内・外縫ロクナデ。体部下端手持ちヘラ削り。底部回転ヘラ削り。	英石 砂粒 褐色 普通	P1 5% PL76 1区表土
10	坏須恵器	B〔1.5〕 C〔7.0〕	底部から体部にかけての破片。平底。体部は外縫して立ち上がる。	体部内・外縫ロクナデ。底部ヘラナデ。	英石 青母 砂粒 褐色 普通	P4 5% PL76 2区表土

表17 前原塚土坑一覧表

土坑番号	位置	長軸方向	平面形	直 横		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新)
				長軸×短軸(m)	深さ(cm)					
1	B 1b5	N-20°-E	椭円形	1.20×0.01	20	緩斜	平坦	人為		
2	B 1a5	-	円形	1.30×1.21	24	緩斜	平坦	人為		
3	B 1b4	N-46°-E	長方形	2.34×1.22	32	緩斜	平坦	自然		
4	B 1c2	-	円形	1.12×0.98	24	緩斜	凹凸	人為		
5	B 1b2	N-47°-E	長方形	2.28×1.40	30	緩斜	凹凸	自然		
6	B 1a3	-	円形	0.78×0.71	34	垂直	平坦	自然		本跡→TM-1
7	B 1a2	N-41°-E	椭円形	2.70×2.11	35	垂直	凹凸	自然		
8	A 1j4	-	円形	0.82×0.74	18	緩斜	圓状	人為		
9	A 1j4	N-85°-W	長方形	1.72×1.56	48	緩斜	圓状	自然		
10	A 1h5	-	円形	0.81	35	緩斜	平坦	人為		
11	A 1h4	-	円形	0.79×0.72	42	緩斜	凹凸	人為		
12	A 1j2	N-65°-W	方形	1.05×0.97	20	緩斜	平坦	自然		
13	A 1j2	-	円形	1.15×1.05	29	垂直	凹凸	自然		
14	B 1z3	N-30°-E	不要捲円形	4.00×3.33	126	緩斜	圓状	自然		本跡→TM-1
15	A 1j1	-	-	(4.00)×(1.58)	110	緩斜	凹凸	人為		
16	B 1c1	N-8°-W	椭円形	1.45×0.95	55	緩斜	平坦	自然		



第265図 前原塚遺構全体図

第3節 まとめ

今回の調査で、塚1基、土坑16基が検出された。塚から遺物は出土していない。また、土坑は、16基検出されているが、時期や性格等を明確にする資料が得られず、詳細は不明である。

旧石器の遺物は、安山岩の剥片1点が、表土中から出土しているが、今回の調査では旧石器時代の明瞭な石器集中地点は検出されなかった。

当遺跡の南西には、常磐自動車道の友部サービスエリアを挟んで、5基の古墳からなる芝沼古墳群⁽¹⁾が所在している。その南には、慈教堂古墳があり、慈教堂古墳発掘調査会によって調査・復元された。古墳は一辺10.5m、高さ1.225mの方墳で、主体部は粘板岩製の板石を組み合わせた箱式石棺で、南に墓道を有していることが確認されている。

また、貞享3年（1686年）に江戸幕府が下した「野論裁許状」⁽²⁾に地所争いの判決がある。その中に「一、長兎路村内野の十八カ所の塚の内、最初の塚を柏井村の者が掘り崩したと訴え、柏井村が之に応じた件。」「二、長兎路と仁古田の【細沼台】の野境について」「三、入会について」に関する記述がある。この古文書に見られる塚は、境界塚を意味している。

当遺跡は、遺跡名から推察できるように塚としてとらえられた時期と古墳としてとらえられた時期があったと思われる。しかし、今回の調査により周溝や主体部は検出されず、土層観察の結果から人為的に盛土された塚であることが判明した。重複関係にある第6・14号土坑からも出土遺物ではなく、塚の時期・性格について明確にできる資料は得られなかった。

以上、今回の調査により前原古墳は塚であり、時期や性格を明確にする資料はないが、土層観察から判断すると中・近世の塚であると思われる。また、「野論裁許状」の絵地図には、当遺跡と合致する塚は見られないが、境界塚としての可能性も考えられる。

註

- (1) 友部町史編纂委員会 「友部町史」1990年2月
- (2) 慈教堂古墳発掘調査会 「慈教堂古墳発掘調査報告書」1990年3月
- (3) 白田清郎家所蔵 「野論裁許状及び絵地図」1686年（貞享3年）

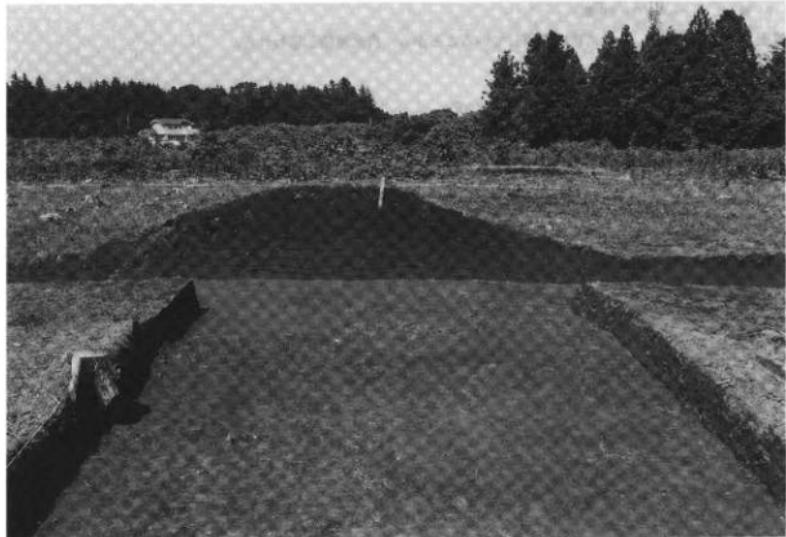
第8章 仲丸塚

第1節 遺跡の概要

仲丸塚は、友部町の南東部にあり、南側に沼沢川の沖積低地を望む標高28~30mの台地上に位置している。枝折川を挟んで南には前原塚、久保塚群、西には向原塚群、南西には芝沼古墳群、慈教堂古墳が所在している。調査区域は、東西約20m、南北約20m、面積400m²であり、現況は山林である。

今回の調査によって、竪穴住居跡1軒、塚1基、土坑10基、道路跡1条を確認した。このうち縄文時代の遺構は、調査区の北部で竪穴住居跡1軒が確認されている。塚は、当遺跡の中央部に築造されている。また、道路跡は覆土が薄く、出土遺物がほとんどないことから、時期は不明である。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に1箱出土している。縄文時代の竪穴住居跡からは、縄文土器が出土している。塚からは土師質土器、五輪塔の空風輪、永楽通寶等が出土している。その他の遺物としては、縄文土器片、弥生土器片、土師器片、陶器片、有舌尖頭器、石錐、磨石等が出土している。



第1号塚東西土層断面

第2節 遺構と遺物

1 堪穴住居跡

今回の調査で、縄文時代の堪穴住居跡1軒を検出した。他の遺構との重複はないが、本跡の半分は調査区域外にあり未調査である。以下、検出された堪穴住居跡の特徴や出土遺物について記載する。

第1号住居跡（第286図）

位置 調査区の北部、B7b5区

規模と平面形 南北方向（2.75）m、東西方向（1.60）mである。本跡の北・東壁が調査区域外のため、平面形は不明である。

方向 N-30°-W

壁 壁高は25cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦である。踏み固められた部分は見られない。

ピット 2か所（P1・P2）。P1は長径45cm、短径37cmの不整椭円形で、深さ15cmである。P2は長径40cm、短径32cmの楕円形で、深さ20cmである。これらの性格は不明である。

P1・2土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック微量
- 2 黄色 ローム中ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

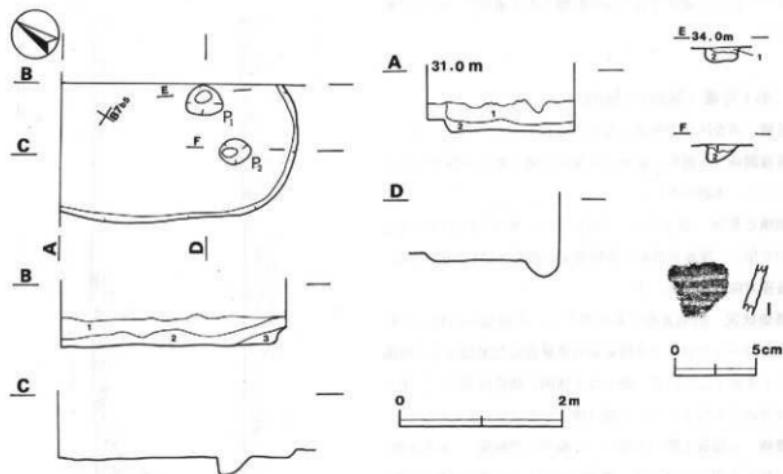
覆土 3層からなり、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と思われる。

土層解説

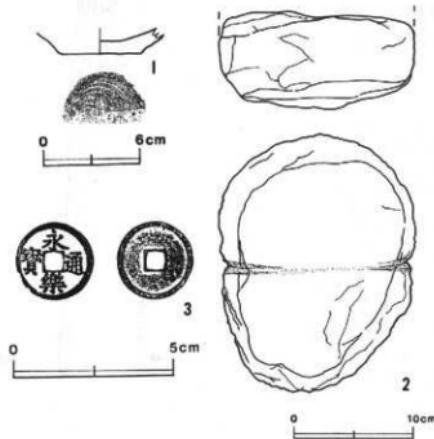
- 1 暗褐色 ローム小ブロック中量
- 2 黄色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

遺物 縄文土器が1片出土しただけである。第286図1の縄文土器の細片は、覆土上層より出土している。流れ込みと思われる。

所見 出土遺物は、流れ込みと思われる縄文土器片1点のみである。また、本跡は一部しか調査できず、時期や性格については不明である。



第286図 第1号住居跡・出土遺物実測図



第287図 第1号塚出土遺物実測図

2 塚

今回の調査で、調査区中央部から中世の塚1基が確認された。以下、確認された塚の特徴と出土遺物について記載する。

第1号塚（第288・289図）

位置 調査区の中央部、B 7e3～B 7f4区。

重複關係 本跡が、第9号土坑の上部に築造されていることから、本跡が新しい。

規模と形状 基底面は、長径6.38m、短径5.85mのほぼ円形を呈し、現地表面から塚頂部までの高さは1.10mである。

長程方向 N-55°-E

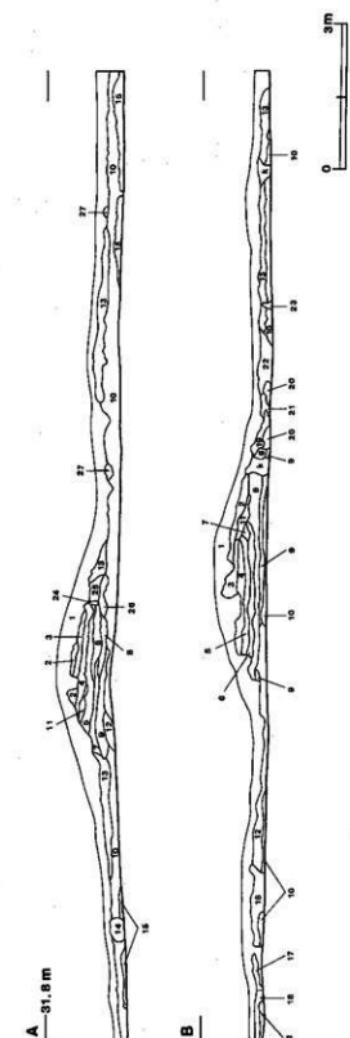
構築状況 旧地表面を基底部とし、中央部からローム粒子・ロームブロックを微量から多量含んだ黒褐色土・暗褐色土を盛土している。盛土は全体的に粘性は弱く、しまりは普通であるが、8・9層は硬くしまっている。

遺物 土師質土器の小皿片、五輪塔の空風輪、「永楽通寶」が各1点出土している。第287図1は、底部に回転糸切り痕を残し、盛土中から出土している。2は花崗岩の五輪塔の空風輪で、塚の裾部の盛土中から出土している。3は「永楽通寶」で盛土中から出土している。

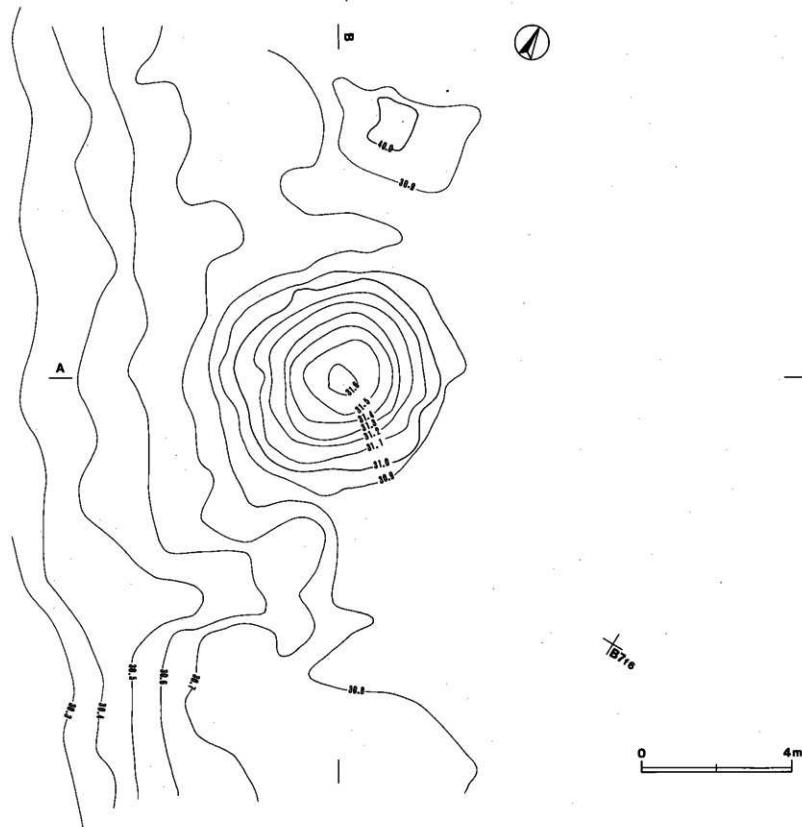
所見 五輪塔は供養のための性格を持つものであり、本跡は何らかの供養のために構築された可能性がある。時期は、出土遺物から中世の構築と考えられる。

土層解説

- 1 表 土
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・黒色土粒子中量
- 3 黒褐色 ローム粒子・黒色土粒子中量
- 4 黑褐色 黒色土粒子中量、ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、黒色土粒子少量
- 6 黑褐色 黒色土粒子中量、ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 7 黑褐色 ローム粒子中量、黒色土粒子微量
- 8 暗褐色 ローム粒子・黒色土粒子中量
- 9 黑褐色 黒色土粒子中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 10 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 11 暗褐色 黒色土粒子中量
- 12 黑褐色 ローム粒子・黒色土粒子少量
- 13 黑褐色 黒色土粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 14 黑褐色 ローム小ブロック中量
- 15 黑褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 16 黑褐色 白色酸化粒子中量、ローム小ブロック微量
- 17 暗褐色 ローム粒子少量
- 18 黑褐色 ローム粒子・黒色土粒子少量
- 19 暗褐色 黒色土粒子中量、ローム小ブロック微量
- 20 暗褐色 ローム小ブロック中量、黒色土粒子微量
- 21 黑褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量



第288図 第1号塚土層断面図



第289図 第1号塚実測図

- 22 黒褐色 ローム小ブロック中量
 23 喜褐色 ローム粒子中量
 24 板褐色 黒色土粒子中量、ローム粒子微量
 25 黒褐色 黒色土粒子中量、ローム粒子少量
 26 黒褐色 ローム粒子、黒色土粒子少量
 27 喜褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量

第1号塚出土遺物観察表

団版番号	器 形	器 質	計 測 値			残存率	胎 土	色 艶	器 形・手法の特徴	備 考
			B	C	E					
第287団1	小皿	土質質	(1.6)	5.0	-	10%	石灰岩質砂粒	にぶい橙色	平底。底部圓軸系切り。体部内・外側クロナダ。	TM-1盛土中 P5 PL80

第1号塚出土石器一覧表

団版番号	種 別	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考	
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)				
第287団2	玉飾(2個)	21.3	16.1	(8.0)	(3.12)	花崗岩	TM-1盛土中	16世紀 Q1	PL82

第1号塚出土古錢一覧表

団版番号	銭種	計 測 値				出 土 地 点	初鑄年(時代、年号)	備 考	
		径 (cm)	孔径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)				
第287団3	永樂通寶	2.4	0.6	0.1	2.7	TM-1盛土中	中國 1408年(明、永樂)	M1	PL82

3 土坑

今回の調査で、土坑が10基検出された。時期や性格は不明である。以下、掲出した土坑の特徴と出土遺物について記載する。

第1号土坑（第290図）

位置 調査区の北西部、B 7 d2区。

規模と平面形 長軸1.56m、短軸1.25mの長方形で、深さ87cmである。

長軸方向 N - 65° - E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 6層からなり、各層が明確に分層できることから人為堆積と思われる。

遺物 第291図1の縄文土器片1点が覆土中から出土している。

所見 縄文土器の細片が出土しているが、型式等については不明であり、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第2号土坑（第290図）

位置 調査区の東部、B 7 d2区。

規模と平面形 長径0.80m、短径0.75mのほぼ円形で、深さ25cmである。

壁面 傾斜して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層からなり、各層が明確に分層できることから人為堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第3号土坑（第290図）

位置 調査区の東部、B 7 e2区。

規模と平面形 長径1.28m、短径0.73mの楕円形で、深さ21cmである。

長径方向 N - 20° - E

壁面 細やかに立ち上がる。

底面 凹状である。

覆土 2層からなり、レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第4号土坑（第290図）

位置 調査区の東部、B 7 d2区。

規模と平面形 長径2.46m、短径1.34mの楕円形で、深さ26cmである。

長径方向 N - 55° - E

壁面 緩やかに立ち上がる。

底面 扁状である。

覆土 3層からなり、各層が明確に分層できることから人為堆積と思われる。

遺物 第291図2のチャートの石器未製品が覆土中から出土している。

所見 出土土器はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第5号土坑（第290図）

位置 調査区の中央部、B 7 d3区。

規模と平面形 長径0.87m、短径0.75mの円形で、深さ20cmである。

壁面 緩やかに立ち上がる。

底面 扁状である。

覆土 4層からなり、各層が明確に分層できることから人為堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第6号土坑（第290図）

位置 調査区の中央部、B 7 d3区。

規模と平面形 長径1.03m、短径0.75mの楕円形で、深さ18cmである。

長径方向 N - 35° - E

壁面 緩やかに立ち上がる。

底面 扁状である。

覆土 3層からなり、各層が明確に分層できることから人為堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第7号土坑（第290図）

位置 調査区の東部、B 7 d1区。

重複関係 本跡が、第1号道路跡を掘り込んで構築されており、本跡の方が新しい。

規模と平面形 長径0.88m、短径0.61mの不整楕円形で、深さ25cmである。

長径方向 N - 60° - W

壁面 緩やかに立ち上がる。

底面 扁状である。

覆土 4層からなり、レンズ状に堆積していることから自然堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、重複関係にある第1号道路跡より後に構築されているが、詳細については不明である。

第8号土坑（第290図）

位置 調査区の東部、B 7 d1区。

重複関係 本跡が、第1号道路跡を掘り込んで構築されており、本跡の方が新しい。

規模と平面形 長径0.70m、短径0.52mの楕円形で、深さ20cmである。

長径方向 N-55°-E

壁面 細やかに立ち上がる。

底面 凸状である。

覆土 2層からなり、各層が明確に分層できることから人為堆積と思われる。

遺物 第291図3の漆1点が、覆土上層から出土している。

所見 出土遺物は漆が1点のみで、出土状況から流れ込みと思われる。重複関係にある第1号道路跡より後に構築されているが、詳細については不明である。

第9号土坑（第290図）

位置 調査区の中央部、B7e4区。

規模と平面形 長径1.43m、短径1.00mの楕円形で、深さ17cmである。

長径方向 N-5°-E

壁面 細やかに傾斜して立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 5層からなり、各層が明確に分層できることから人為堆積と思われる。

遺物 第291図4の漆1点が覆土下層から出土している。

所見 出土遺物は覆土下層より漆1点が出土しているのみで、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第10号土坑（第290図）

位置 調査区の南部、B7h3区。

規模と平面形 長径1.16m、短径0.92mの楕円形で、深さ23cmである。

長径方向 N-75°-E

壁面 細やかに立ち上がる。

底面 凸状である。

覆土 4層からなり、各層が明確に分層できることから人為堆積と思われる。

遺物 出土していない。

所見 出土遺物はなく、他の遺構との重複関係もないことから、時期や性格については不明である。

第1号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック中量、ローム中ブロック微量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック

第2号土坑土層解説

- 1 梅色 ローム粒子中量
- 2 梅色 ローム小ブロック中量
- 3 梅色 ローム粒子多量、ローム小ブロック微量

第3号土坑土層解説

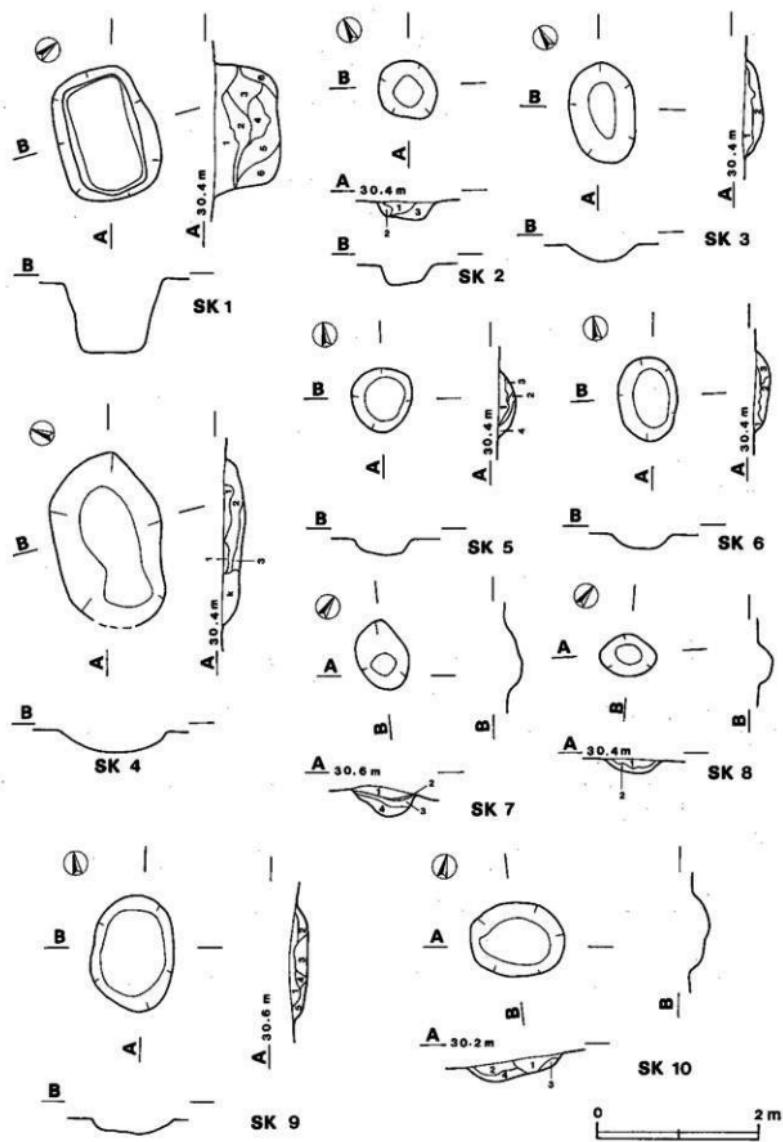
- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 梅色 ローム小ブロック中量
- 3 梅色 ローム粒子微量
- 4 梅色 ローム粒子多量

第4号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 梅色 ローム小ブロック微量
- 3 梅色 ローム粒子中量

第5号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 2 梅色 ローム小ブロック微量
- 3 梅色 ローム粒子中量
- 4 梅色 ローム粒子多量



第290図 第1～10号土坑実測図

第6号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック中量
- 2 黄褐色 ローム小ブロック中量
- 3 黑褐色 ローム粒子少量

第7号土坑土層解説

- 1 黒褐色 黒色土中ブロック多量、ローム粒子少量
- 2 黑褐色 ローム粒子多量
- 3 黑褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 4 黄褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量

第8号土坑土層解説

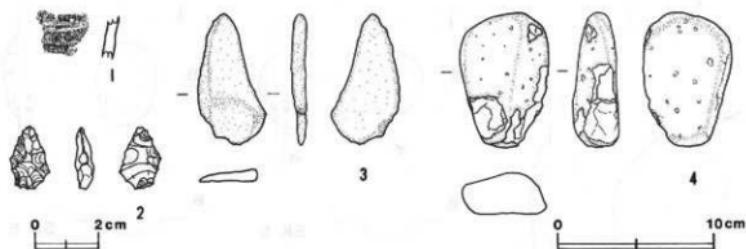
- 1 黑褐色 ローム粒子少量
- 2 黄褐色 ローム小ブロック中量

第9号土坑土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子中量、黒色土粒子微量
- 2 黑褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・黒色土粒子微量
- 3 黑褐色 ローム粒子少量
- 4 黄褐色 ローム小ブロック少量
- 5 黑褐色 ローム粒子中量

第10号土坑土層解説

- 1 黄褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量
- 2 黄褐色 ローム中ブロック中量
- 3 黑褐色 ローム小ブロック少量
- 4 黄褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量



第291図 第4・8・9号土坑出土遺物実測図

第4号土坑出土石器一覧表

国版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第291図2	石器未製品	1.9	1.3	0.5	1.1	チャート	覆土中	Q 2 P L81

第8号土坑出土石器一覧表

国版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第291図3	礫	(8.2)	(4.3)	(0.8)	(28.2)	砂岩	覆土上層	Q 3 P L81

第9号土坑出土石器一覧表

国版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第291図4	礫	8.5	5.5	2.9	159.0	石英斑岩	覆土下層	Q 4 P L81

4 道路跡

今回の調査で、道路跡1条が検出された。以下、検出された道路跡について記載する。

第1号道路跡（第292図）

位置 調査区の東部、B 7 d1～B 7 e1区。

重複関係 第7・8号土坑が本跡を掘り込んでいるので、本跡が古い。

規模と形状 調査できた範囲で長さ6.1m、幅0.58～1.95mである。調査区西部北から南方向に4.1m、そこでくの字に曲がり、西方向へ2.0m確認され、調査区域外へと延びている。

方向 N-30°-W, N-90°-W

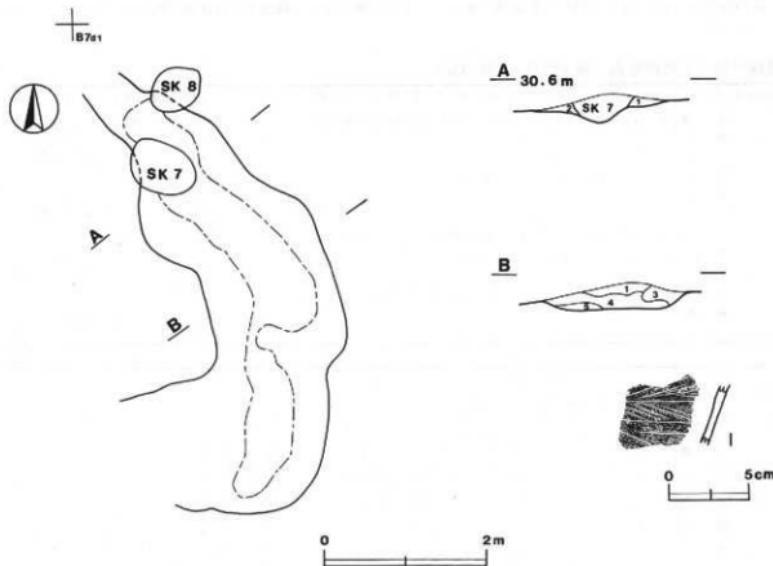
覆土 5層からなり、1・2層が極めて締まりが強い。自然堆積したところを踏み固められたと思われる。

遺物 第292図1の縄文土器の細片1点が覆土中から出土している。

所見 縄文土器の細片が出土しているが、型式等については不明である。本跡は、重複関係にある第7・8号土坑より古いが、時期や性格については不明である。

第1号道路跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量
- 3 棕色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 5 棕色 ローム粒子少量



第292図 第1号道路跡・出土遺物実測図

5 遺構外出土遺物

今回の調査で、遺構に伴わない縄文時代から近世までの土器片や陶器片、石器等が出土している。ここでは、これらの出土遺物のうち特徴的なものについて掲載する。(第293~294図)

(1) 縄文土器

第293・294図5~43は、縄文土器片の拓影図である。5~18は、いわゆる天矢場タイプの早期の無文土器である。5~8は口縁部片で、口唇部は断面円頭状を呈している。5は、口縁部直下に外面から内面向かって縱方向の擦り切りによる横円孔がみられる。10~11は口縁部片で、口唇上端にケズリ整形による平坦面を作り、断面角頭状を呈している。12~18は、胴部片である。

19~33は、前期田戸下層式の土器片の一群である。19~21は凹線文が施されている。19は口縁部片で、口唇部は平坦である。22~25は細沈線が施されている。22は口縁部片で、口縁部が外反し、口唇部は平坦である。26~30は胴部片で、格子目状の沈線文と刺突文が施されている。31~33は、貝殻腹線文と細沈線が施されている。31・32は口縁部片で、口唇部は平坦である。

34は胴部片で、断面三角の隆帯の上部に結節沈線文、下部に角押文が施されている。胎土に雲母を含む中期前半阿玉台式の土器である。

35~43は、櫛描条線文や単節斜縄文、撲糸文が施される一群の土器である。加曾利E式段階と思われる。

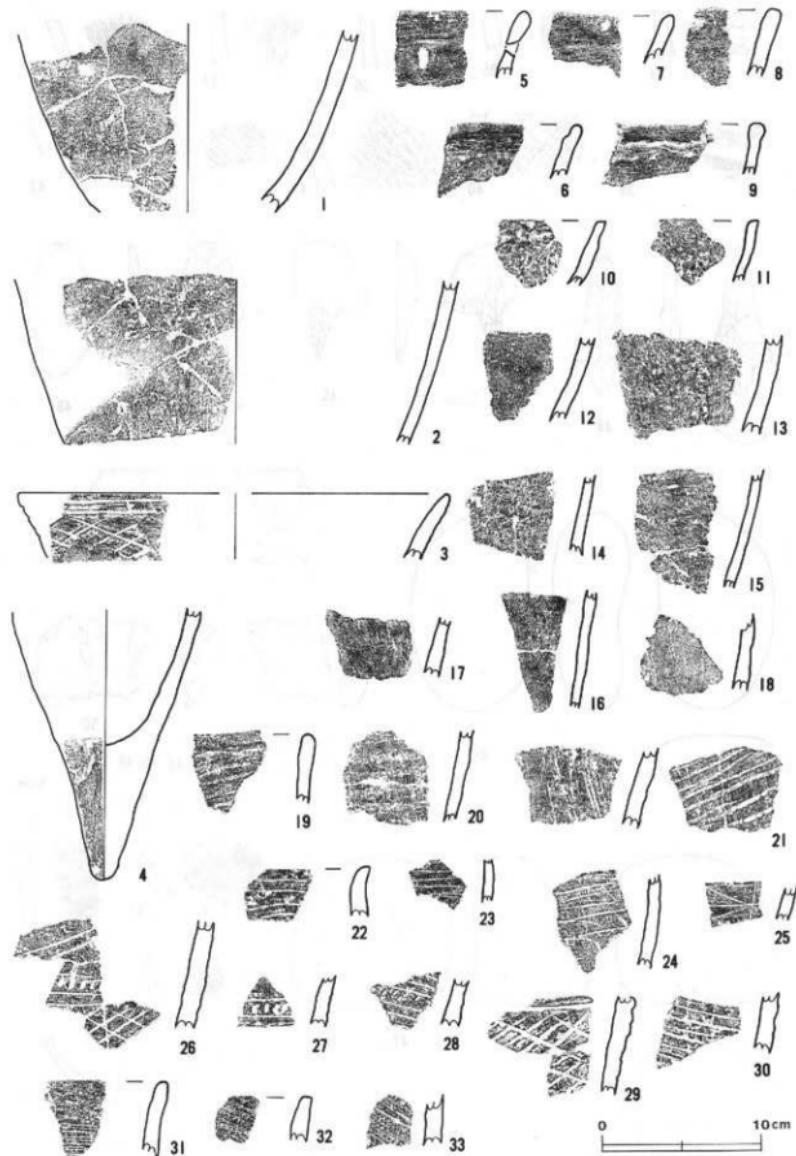
(2) 弥生土器

第294図51~53は、弥生土器片の拓影図である。いずれも胴部片で、縄文や平行沈線が施されている。

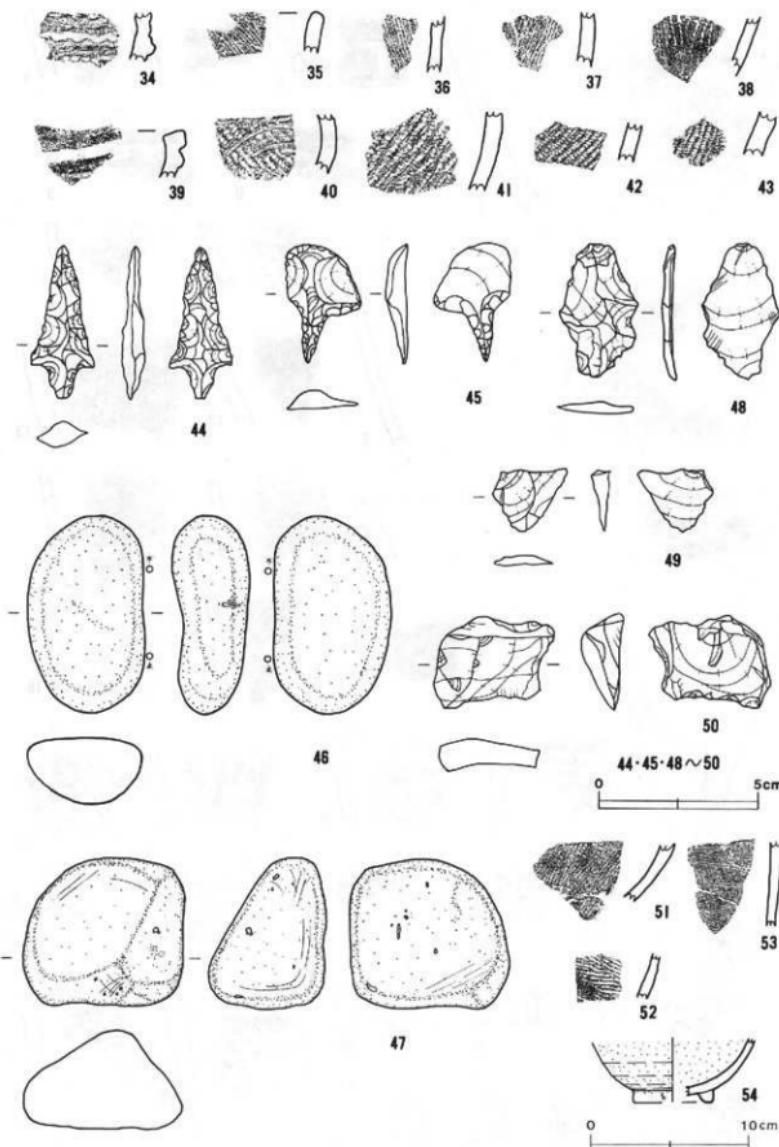
遺構外出土遺物観察表（縄文時代）（第293図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考	
					P	L
1	深鉢 縄文土器	B (11.1)	胴部片。底部は、丸底を呈するものと思われる。器面はざらつく。	長石 雲母 砂粒 橙色 普通	4 10%	P L 80 表土 早期
2	深鉢 縄文土器	B (10.0)	胴部片。縦位のナデが施されている。	石英 雲母 砂粒 にぶい褐色 普通	3 5%	P L 80 表土 早期
3	深鉢 縄文土器	A [27.0] B (4.0)	口縁部片。口唇部は、外側ぎ状を呈し、口唇部直下に横位の沈線文が2条通り、下部に格子目状文が施されている。	石英 雲母 砂粒 にぶい褐色 普通	1 5%	P L 80 表土 田戸下層式
4	深鉢 縄文土器	B (16.7)	底部片。尖底部は、天狗の鼻状を呈する。縦位の強いナデが施されている。	長石 石英 砂粒 にぶい橙色 普通	2 5%	P L 80 表土 田戸下層式

図版番号	種別	計測値				石質	出土地点	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
294図44	有舌尖頭器	4.7	2.0	0.7	3.4	安山岩	表土	Q11	P L 81
45	石錐	3.7	2.4	0.7	3.8	瑪瑙	表土	Q 8	P L 81
46	磨石	12.5	7.2	4.7	574.8	砂岩	表土	Q 9	P L 82
47	磨石	9.2	10.0	7.1	714.3	砂岩	表土	Q 12	P L 82
48	磨片	4.1	2.5	0.4	3.4	安山岩	表土	Q 5	P L 82
49	磨片	1.9	2.2	0.6	1.4	安山岩	表土	Q 10	P L 82
50	磨片	2.9	3.7	1.3	10.6	チャート	表土	Q 7	P L 82



第293図 遺構外出土遺物実測図(1)



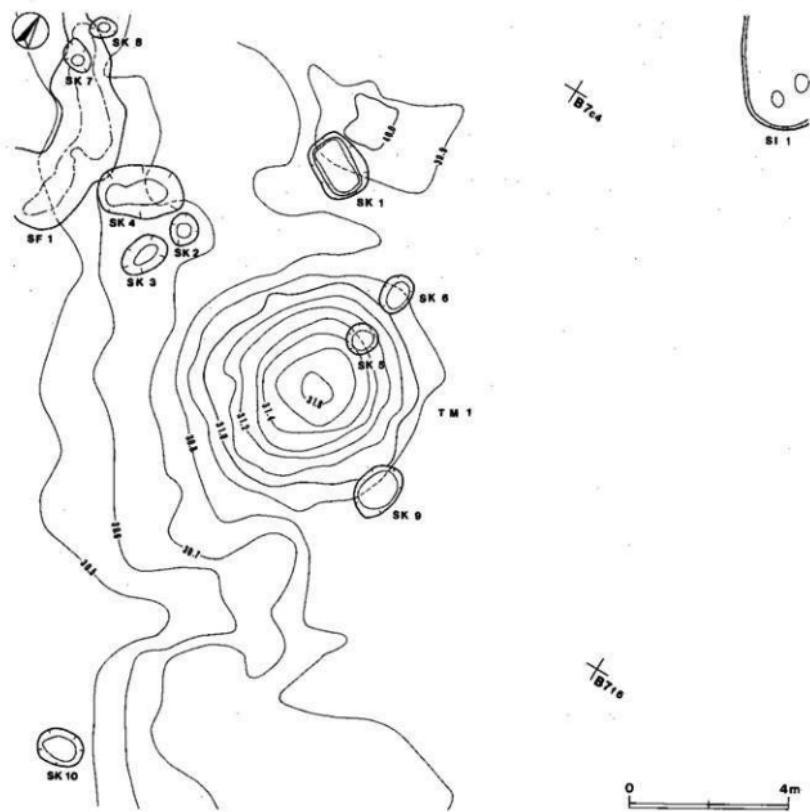
第294図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構出土遺物観察表（近世）（第294図）

図版番号	器 形	器 質	計 量 値			残存率	胎 土	色 調	器 形・手法の特徴	備 考
			B	D	E					
54	輪 周 器	(4.0)	[5.0]	0.8	15%	細砂	(①) に赤紫色 (②) 青紫色	削り出し輪高台。体部内・外面 ロクロナデ。	P 6 P 1.80 窓戸・美濃系	

表18 土坑一覧表

土坑番号	位置	長軸方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 新旧関係(古→新)
				長軸×逆軸(m)	深さ(cm)					
1	B 7 d2	N-65°-E	長 方 形	1.56×1.25	87	垂直	平坦	人為	繩文土器	
2	B 7 d2	-	円 形	0.80×0.75	25	傾斜	平坦	人為		
3	B 7 e2	N-20°-E	椭 圆 形	1.28×0.72	21	傾斜	圓状	自然		
4	B 7 d2	N-55°-E	椭 圆 形	2.46×1.34	26	傾斜	圓状	人為	石器未製品(チャート)	
5	B 7 d3	-	円 形	0.87×0.75	20	傾斜	圓状	人為		
6	B 7 d3	N-35°-E	椭 圆 形	1.03×0.75	18	傾斜	圓状	人為		
7	B 7 d1	N-60°-W	不整圓形	0.88×0.61	25	傾斜	圓状	自然		S F - 1 → 本落
8	B 7 d1	N-55°-E	椭 圆 形	0.70×0.52	20	傾斜	圓状	人為	礫(砂岩)	S F - 1 → 本落
9	B 7 e4	N-5°-E	椭 圆 形	1.43×1.00	17	傾斜	平坦	人為	礫(石英斑岩)	
10	B 7 h3	N-75°-E	椭 圆 形	1.16×0.92	23	傾斜	圓状	人為		



第295図 仲丸塚遺構全体図

第3節 まとめ

今回の調査で、住居跡1軒、塚1基、土坑10基、道路跡1条が検出された。塚からの出土遺物は、盛土中から土師質土器の小皿片、「永楽通寶」のそれぞれ1点ずつが出土している。また、塚の裾部からは、五輪塔の空風輪が出土している。五輪塔は、平安中期以降に供養塔または墓標として用いられるようになってきた。本跡からは、墓域と思われる痕跡及び資料は確認されておらず、五輪塔の空風輪のみの出土であるが、本跡が供養のための塚である可能性があると思われる。

住居跡は、1軒のみが検出された。しかし、その一部しか確認することはできず、半分以上が調査区域外にあると思われ、規模や形状については不明である。また、出土遺物は、流れ込みと思われる繩文土器の細片が1点のみで、時期は不明である。

土坑は、10基検出されている。第1号土坑から繩文土器片1点、第4号土坑からチャートの石錐未製品1点、第8・9号土坑から縁がそれぞれ1点ずつ覆土中から出土しているのみで、時期や性格については不明である。また、他の土坑についても遺物は皆無で、時期や性格については不明である。

道路跡は、1条検出された。調査区の東部にくの字に曲がるように旧表土で硬化面を確認することができた。出土遺物は、繩文土器の細片が1点出土しているが、型式等については不明である。本跡は、第7・8号土坑に掘り込まれているが、いずれの土坑も時期は不明である。

また、第7章第3節に記述した「野論裁許状」⁽¹⁾の絵地図には、当遺跡と合致する塚が見られなかった。今回の調査では、時期を明確にする資料は得られなかった。

旧石器の遺物は、安山岩の剥片1点が表土中から出土しているが、今回の調査では旧石器時代の明瞭な石器集中地点は検出されなかった。

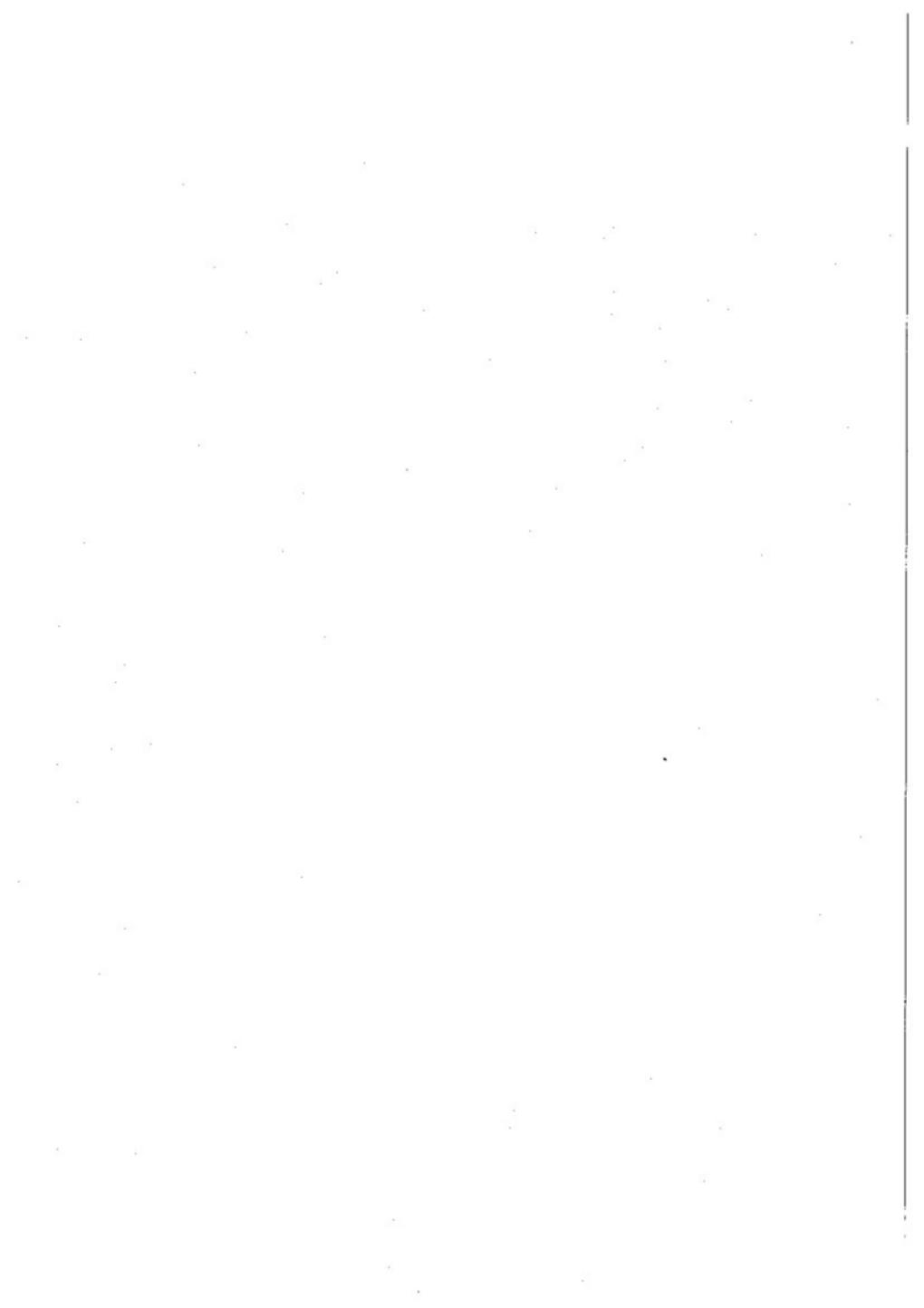
以上、今回の調査により仲丸塚は、時期や性格を明確にする資料は少ないが、中世の塚であると考えられる。

註

- (1) 白田清郎家所蔵『野論裁許状及び絵地図』1686年(貞享3年)

参考文献

- 友部町史編纂委員会『友部町史』1990年2月



付 章

五万堀古道の土壤の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

五万堀古道は律令期の古代の官道で、都から東国に抜ける「推定・東海道」の可能性が高いと考えられている。検出された古道は、幅約10m、長さ300mにわたって東北方向へ直線的にのびており、自然地形の高い部分は切り通し、低地は埋めて高低差を少なくするなど、計画的大規模工事が行われたことが判明している。また、道路面の補修が頻繁に行われており、当時の工法や技術が確認できる材料として注目されている。

今回の自然科学分析調査では、道路構造の構築年代を推定するためにテフラ分析、道路側溝内の水城の有無について調べるために珪藻分析、当時の道路周辺の古植生についての情報を得るために花粉分析および植物遺体分析、道路のわだち状凹部の補修に用いられた砂分および粘土分の多い土壤の由来を検討するために鉱物分析および珪藻分析、道路面構築以前に堆積している淡色の黒色火山灰土（いわゆる黒ボク土）の形成時期と成因に関する情報を得るために鉱物分析、土壤理化学分析を行う。土壤理化学分析では土壤の母材やその風化の状況を調べる粒度分析、土壤への植物遺体の供給について調べる腐植含量、腐植の質的判定を行うMI（Meranic Index）の測定を行う。

1. 遺跡周辺の地形

本遺跡は、那珂川と潤沼川の間に広がる東茨城台地南部の、枝折川と潤沼川の合流点の西方に位置する。東茨城台地については坂本ほか（1981）に詳しい。以下の文章は、特に引用しない限りこの文献より抜粋したものである。東茨城台地の大部分は、最終間氷期の下末吉海進に伴って形成された海成面であり、潤沼および潤沼川に沿う部分では、小規模な上下2段の河成段丘（潤沼段丘と低位段丘）が断続的に発達している。台地主部の構成層は、下末吉海進の進行に伴って堆積した海成砂層の見和層であり、その上位には茨城粘土層、風化火山灰層（ローム層）が整合して堆積している。

本遺跡は、東茨城台地の大部分を占める海成面上に立地している。この面は、武藏野台地の淀橋面および相模野台地の下末吉面に対比され、その形成年代は約12.5万年前とされている（町田・新井、1992）。その後乾燥化しローム層が堆積するが、ローム層中部には約3.2万年前に噴出したとされる赤城鹿沼軽石（Ag-KP；関東ローム研究グループ、1965）が狭在している。本遺跡周辺では、Ag-KP降下以前から、すでに人間が生活できる環境となっていたことがうかがえる。

2. 試料

II区1トレンチでは、古道とみられる道路面とその両脇に1条ずつ側溝が確認されており、数回にわたる掘り返しや埋め立てが確認される。トレンチ断面では、土層の色調や粘性、含有物などの違いから、1層から34層までの合計34層に分層されている。最下部には、褐色ローム層である地山の11層（V層）が全体を通して認められ、その上位に自然堆積と思われる黒ボク土層の10層（Ⅷ～Ⅸ層）・9層（X層）・18層・8層が堆積している。黒ボク土層の中では、9層の色調が淡い。

道路面左西側の側溝では、側溝中央部で最下底は10層を掘り込んでおり、古い方から20層・13層・22層・21層・16層・12層・14層・17層・3層・15層と最上位の搅乱層が認められる。この側溝の外側では18層を小規模に掘り込む23層が認められ、その上位に24層・25層・2層・1層が認められる。

側溝間の道路面では、自然堆積層である8層の直上に7層と、道路面の中央付近と東端付近で6層が認められる。また、6・7・8層を掘り込むように灰褐色の26層が認められ、これを覆うように4層が認められる。この上位には、1層が道路両脇の側溝を一部覆うように認められる。

道路面東側の側溝では、最下部の20層は10層を掘り込み、11層と接している。20層より上位には、33層・34層・13層・32層・28層・31層・30層・27層が認められる。この側溝の外側では、自然堆積層である18層の上位に25層が認められ、31層と1層に覆われている。

試料として、道路面西側の側溝では上位より、2層・17層・15層・3層・14層・21層・22層・13層・20層・23層・18層・9層・10層から各層一点ずつ合計13点採取し、この順に1～13までの試料番号を付した。側溝間の道路面では、上位より3層・6層・8層から1点ずつ合計3点採取し、この順に14～16の試料番号を付した。道路面東側の側溝では、上位より30層・31層・32層・13層・33層・20層から各層1点ずつ合計6点採取し、この順に17～22の試料番号を付した。この側溝の外側では、道路面構築以前の25層の下部から11層中部まで、厚さ5cmごとに連続して合計18点（上位より試料番号23～40）を採取した。この中から、テフラ分析には試料番号1～3・6・8・9・14・15・17～27・29・35の合計38点を選択する。珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析には、試料番号9・22の2点を、鉱物分析・土壤理化分析には、試料番号27・29・35の3点を選択した。また、Ⅲ区ピット内の補修土については、鉱物分析と珪藻分析を行う。

3. 分析方法

(1) テフラ分析

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、实体顕微鏡下にて観察する。テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象として観察し、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と軽石型の2つの型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

(2) 鉱物分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm・1/8mmの砂分をポリタングステート（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は、「その他」とする。

また、軽鉱物は重鉱物分析の処理により得られた軽鉱物分を、偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。火山ガラスは、便宜上軽鉱物に含め、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。変質などで同定の不可能な粒子は、「その他」とする。

(3) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に、200個体以上同定・計数する。種の同定は、K.Krammer and Lange-Bertalot (1986・1988・1991a・1991b), K.Krammer (1992)などを用いる。

同定結果は、海水～汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種については、その内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出した化石が現地性か異地性かを判断する目安として完形殻の出現率を求め、考察の際に考慮した。堆積環境の解析にあたって、淡水生種については安藤(1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性については、Asai, K. & Watanabe, T. (1995)、生活型などについてはVOS, P.C. & DE WOLF, H. (1993)の環境指標種を参考とする。

(4) 花粉分析

試料10~20gについて、水酸化カリウムによる泥化、箇別、重液(臭化亜鉛:比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による無機物の除去、アセトトリル処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、同定・計数する。

(5) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250kHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)、および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐藤(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集図を作成する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の種類毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

(6) 土壌理化分析

粒径組成はビベット法、腐植含量はチューリン法(土壤標準分析・測定法委員会、1986), MI(Melanic index)は腐植簡易分析法(本名・山本、1992)でそれぞれ行う。以下に、各項目の操作工程を示す。

1) 試料調製

試料を風乾後、重量を測定し、軽く粉碎して2.00mmφのふるいを通過させる(風乾細土)。風乾細土の一部を細かく粉碎し、0.5mmφのふるいを全通させる(粉碎土)。風乾細土の水分を、加熱減量法(105℃, 5時間)により測定する。

2) 粒径組成(ビベット法)

風乾細土10.0gに水と30%過酸化水素水を加え、熱板上で有機物を分解する。分解終了後、Mehra - Jackson法によって脱鉄処理を行い、遠心洗浄を2回行う。水約500mlを加え、攪拌しながら30分間音波処理を行う。この液を1L沈底瓶に移し、往復振とう機で1時間振とうした後、水で1Lに定容する。沈底瓶を1分間激しく振り、直ちに静置して所定の時間に5cmの深さから懸濁液10mlを採取する。採取懸濁液を蒸発乾固し、乾燥・秤量する(シルト・粘土の含量)。さらに所定の時間が経過した後、沈底瓶から懸濁液を5cmの深さから10ml採取し、蒸発乾固・乾燥・秤量する(粘土含量)。沈底瓶に残ったシルト・粘土をサイフォンを使ってすべて洗い流し、その残渣を乾燥・秤量する(砂含量)。これを0.2mmの箇であるい分け、箇上の残留物を秤量する(粗砂含量)。これら測定値をもとに、粗砂(2.0 - 0.2mm)・細砂(0.2 - 0.02mm)・シルト(0.02 - 0.002mm)・粘土(0.002mm以下)4成分の合計を100とする各成分の重量%を求める。求められた粒径組成の値から、国際法によって土性区分を行う。

3) 腐植含量

粉砂土0.100~0.500gを100ml三角フラスコに正確に秤とり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200°Cの砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に、0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりの有機炭素量(Org-C乾土%)を求める。これに1.724を乗じて、腐植含量(%)を算出する。

4) MI (Meranic Index)

風乾細土1.0gを50ml容遠心管に入れ、分注器で0.5%NaOH溶液約25mlを加える。遠心管に蓋をしてテープで密封し、室温で1時間振とうする。振とう終了後、0.1%高分子凝集剤溶液1~2滴を加え、よく振り混ぜた後、4,000rpm、15分間の遠心分離で抽出腐植溶液を得る。得られた抽出腐植溶液の約1mlを試験管にとり、0.1%NaOH溶液20mlを分注器で加える(NaOHの濃度は約0.1%となる)。この溶液について、分光光度計により450、520nmの吸光度を測定する。450nmの吸光度が1を越える場合には、さらに0.1%NaOH溶液で希釈して測定する(測定時間は抽出後、3時間以内)。結果の表示は、MI値=K450/K520で示す。

4. 結果

1) テフラ分析

結果を表1に示す。スコリアは、どの試料にも含まれていなかった。

火山ガラスは、試料番号1・2・9・18・20~25では少量、試料番号3・6・8・14・15・17・26・27・29・35では微量含まれ、試料番号19ではきわめて微量含まれている。これらの試料には、全て無色透明のバブル型火山ガラスが含まれている。この火山ガラスは、その形態と産出層位から鬼界-アカホヤ火山灰(K-Ah; 町田・新井, 1978)と、始良Tn火山灰(AT; 町田・新井, 1976)に由来するものと考えられる。K-Ahは、約6300年前に九州南方の鬼界カルデラから噴出した広域テフラである(町田・新井, 1992)。ATは南九州の始良カルデラを給源とし、約2.2~2.5万年前に噴出した広域テフラである(町田・新井, 1992)。また、試料番号8・15・24・25には、微量であるが無色透明の軽石型火山ガラスが含まれている。この火山ガラスは、形態と産出層位、遺跡の地理的位置を考慮すると、標名二ツ岳淡川テフラ(Hr-FA; 新井, 1979; 早田, 1989)に由来する可能性がある。Hr-FAは、6世紀初頭(古墳時代)に標名山から噴出したテフラであり、ほぼ真東の方向に分布軸を持っている(町田・新井, 1992)。

軽石は、試料番号1に中量、試料番号3・9・14・15・18・21・25~27に少量、試料番号2・6・8・17・20・

23・24・29に微量、試料番号22・35にきわめて微量含まれ、試料番号19には含まれていない。詳しくみると、以下のような特徴を持つ軽石が混在している。

- 1) 灰褐色を呈し、発泡はやや不良のもの（試料番号1～3・8・9・14・15・17・18）
- 2) 白色を呈し、発泡がやや良好のもの（試料番号6・8・9・14・15・17・18・20）
- 3) 褐色を呈し、発泡がやや不良のもの（試料番号1）

表1 テフラ分析結果

試料番号	火山ガラス			軽石		由来するテフラ	
	量	量	色調・形態	量	色調・発泡度		
1	-	++	cl・bw	+++	GBr・sbHr・sb	1.0	-
2	-	++	cl・bw	+	GBr・sb>W・b	0.8	ATK-Ah,As-B,Hr-FP (or FA)
3	-	+	cl・bw	++	GBr・sb>W・b	0.5	ATK-Ah,As-B,Hr-FP (or FA)
6	-	+	cl・bw	+	W・sg>W・b	0.7	ATK-Ah,As-B,Hr-FP (or FA)
8	-	+	cl・bw,cl・pm	+	GBr・sb,W・sg>W・b	0.8	ATK-Ah,As-B,Hr-FP (or FA)
9	-	++	cl・bw	++	GBr・sb,W・sg>W・b	1.0	ATK-Ah,As-B,Hr-FP (or FA)
14	-	+	cl・bw	++	W・b>GBr・sb,W・sg	1.0	ATK-Ah,As-B,Hr-FP (or FA)
15	-	+	cl・bw,cl・pm	++	W・b>GBr・sb,W・sg	0.5	ATK-Ah,As-B,Hr-FP (or FA)
17	-	+	cl・bw	+	GBr・sb,W・g~sg>W・b	0.8	ATK-Ah,As-B,Hr-FP (or FA)
18	-	+	cl・bw	++	GBr・sb,W・g~sg>W・b	1.0	ATK-Ah,As-B,Hr-FP (or FA)
19	-	(+)	cl・bw	-			ATK-Ah
20	-	++	cl・bw	+	W・g~sg>W・sb	1.0	ATK-Ah,As-B,As-C,Hr-FP (or FA)
21	-	++	cl・bw	++	GBr・sg,W・g~sg>W・b	0.8	ATK-Ah,As-B,Hr-FP (or FA)
22	-	++	cl・bw	(+)	W・b	-	ATK-Ah,Hr-FP (or FA)
23	-	++	cl・bw	+	W・b>W・sg	0.8	ATK-Ah,As-B,As-C,Hr-FP (or FA)
24	-	++	cl・bw,cl・pm	+	W・b>GBr・sg	0.7	ATK-Ah,As-B,As-C,Hr-FP (or FA)
25	-	++	cl・bw,cl・pm	++	W・b>GBr・sg,W・g~sg	1.0	ATK-Ah,As-B,As-C,Hr-FP (or FA)
26	-	+	cl・bw	++	W・b>GBr・sg,W・g~sg	1.2	ATK-Ah,As-B,As-C,Hr-FP (or FA)
27	-	+	cl・bw	++	GBr・sg,W・g~sg>W・b	1.2	ATK-Ah,As-B,Hr-FP (or FA)
29	-	+	cl・bw	+	GBr・sg,W・g~sg>W・b	1.0	ATK-Ah,As-B,Hr-FP (or FA)
35	-	-	cl・bw	(+)	W・b	-	ATK-Ah,Hr-FP (or FA)

凡例 - : 合まれない、(+) : きわめて微量、+ : 微量、++ : 少量、+++ : 中量、++++ : 多量。

Br : 極色 GBr : W : 白色

g : 良好 sg : やや良好 sb : やや不良

cl : 無色透明 bw : パブル型 pm : 軽石型

4) 白色を呈し、発泡の不良のもの（試料番号2・3・6・8・9・14・15・17・18・20～27・29・35）

5) 白色を呈し、発泡が良好のもの（試料番号20・21・23～27・29）

6) 灰褐色を呈し、発泡が良好～やや不良のもの（試料番号20・31・23～27・29）

1)～3)の軽石の中には、斜方輝石の斑晶を包有するものもある。これらの軽石は、その特徴と産出する層位より、A.D.1108年（天仁元年）に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As・B；新井，1979）に由来するものと考えられる。

4)の軽石は、角閃石の斑晶を包有するものもある。この軽石は、形態と産出する層位より、6世紀中葉（古墳時代）に榛名山から噴出した、榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr・FP；新井，1979）に由来する可能性がある。町田・新井（1992）が示したテフラ層の等厚線図では、Hr・FPは北東方向に分布主軸を持っており、完新世の浅間山・榛名山に由来する主要なテフラの中でも異なる特徴を持っている。この分布域に本遺跡は含まれていないが、Hr・FPを特徴づける軽石は、当社の分析により栃木県内においても確認しており、この分布域よりさらに南方においてもHr・FPの軽石が降下している可能性がある。ただし、早田（1989）によれば、前述したHr・FAも一連の活動の中で軽石を噴出した噴火があったことが確認されているが、ごく小規模な噴火であり、給源から約3km離れた地点でも降下軽石層の層厚は2cm程度であるとされている。このため、今回検出された軽石は、Hr・FPに由来するものである可能性が高い。

5) と 6) の軽石の中には、斜方輝石の斑晶を包有するものもある。これらの軽石は、その形態と产出する層位より、浅間C軽石(As-C; 荒巻, 1968)に由来するものと考えられる。As-Cは、4世紀中葉(弥生時代)に噴出したとされている(町田・新井, 1992)。

(2) 軽物分析

結果を表2・図1に示す。

1) 重鉱物

いずれの試料も、斜方輝石を主体とする。Ⅲ区ピット補修土は斜方輝石が最も多く、少量の不透明鉱物、單斜輝石、微量の角閃石、カンラン石を含む。また、Ⅱ区1トレンチの黒ボク土の重鉱物組成は3試料ともよく類似し、斜方輝石が最も多く、少量の单斜輝石と、不透明鉱物、微量のカンラン石、角閃石を含む。Ⅲ区ピット補修土に比べると、斜方輝石の量比がやや高く、カンラン石と角閃石および不透明鉱物の量比がやや低い。

2) 軽物

いずれの試料も長石が最も多く、火山ガラスを少量~微量、石英を微量含む。火山ガラスは、Ⅲ区ピット補修土で無色透明のバブル型および中間型火山ガラスが比較的多い。また、Ⅱ区1トレンチ試料番号27では、無色透明の軽石型火山ガラス、試料番号29では軽石型火山ガラス、試料番号35ではバブル型火山ガラスが最も多い。3点の中では、上位の試料ほど軽石型火山ガラスが多く、バブル型火山ガラスが少ない。

表2 重鉱物・火山ガラス比分析結果

試 料 名	カ ン ラ ン 石	斜 方 輝 石	单 斜 輝 石	角 閃 石	矽 化 角 閃 石	不 透 明 鉱 物	そ の 他	合 計	バ ブル 型 火 山 ガ ラ ス	中 間 型 火 山 ガ ラ ス	軽 石 型 火 山 ガ ラ ス	石 英	長 石	そ の 他	合 計	
II区1トレンチ	27	3	175	36	9	1	21	5	250	2	5	24	3	105	111	250
	29	1	172	35	5	0	33	4	250	7	7	12	3	145	76	250
	35	1	171	36	3	0	38	1	250	9	4	6	6	186	39	250
III区ピット補修土		9	138	29	11	0	61	2	250	6	10	0	10	180	44	250

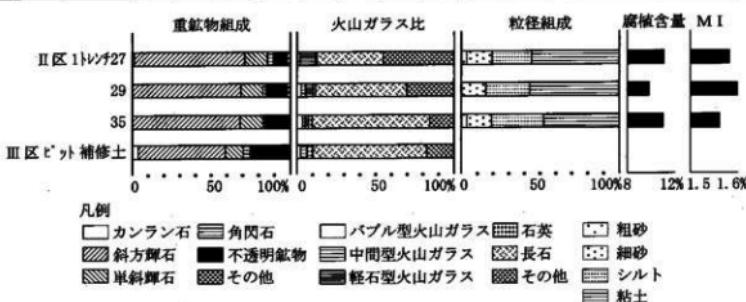


図1 遺構試料の重鉱物組成・火山ガラス比および土壤理化性

(3) 珪藻分析

1) III区ピット補修土

結果を表3に示す。1ブレバート中35個体と少ないが、水生珪藻と陸生珪藻とが混在する。主な産出種は、

水生珪藻では流水不定性で沼澤湿地付着生種群の一種の *Pinnularia viridis*, 陸性珪藻では A 群の *Pinnularia borealis*, *Navicula mutica* などが産出する。

表 3 硅藻分析結果

種類	生態性			環境指標種	II - I 区		III - IV ビット 砂土		
	塩分	pH	流水		1トレンチ				
					9	25			
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		2	-	2		
<i>Achnanthes hungarica</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	1		
<i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	-	-	1		
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	16	2	2		
<i>Gomphonema productum</i> (Grun.) Hange-B. & Reichardt	Ogh-ind	al-il	ind		2	-	-		
<i>Navicula planisiliis</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind		-	-	1		
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O	2	-	-		
<i>Pinnularia mesolepta</i> (Ehr.) W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	1	-	-		
<i>Pinnularia microstauron</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	2	-	1		
<i>Pinnularia similis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind		2	-	-		
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	2	-	3		
<i>Sellaphora pupula</i> (Kuetz.) Mereschowsky	Ogh-ind	ind	ind	S	-	-	1		
<i>Aulacoseira italica</i> (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	1	-	-		
<i>Cymbella subaequalis</i> Grunow	Ogh-ind	al-il	l-ph	O.T.	3	-	-		
<i>Eunotia bilunaria</i> (Ehr.) Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph		5	-	-		
<i>Eunotia exigua</i> (Breb.) Grunow	Ogh-hob	ac-bi	l-ph	P	1	-	-		
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O.U.	3	-	-		
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph		5	-	-		
<i>Pinnularia stomatophora</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph		7	-	-		
<i>Pinnularia substomatophora</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph		4	-	-		
<i>Tabellaria flocculosa</i> (Roth) Kuetzing	Ogh-hob	ac-il	l-ph	T	-	-	1		
<i>Eunotia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-		
<i>Gomphonema</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		5	-	-		
<i>Neidium</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	-		
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	-	1		
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		6	-	1		
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	-	1		
<i>Caloneis leptosoma</i> Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	-	-	1		
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RAU	6	7	1		
<i>Navicula ignota</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	1		
<i>Navicula ignota</i> var. <i>palustris</i> (Hust.) Lund	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-	1		
<i>Navicula kuetzingii</i>	Ogh-ind	al-il	ind	RAS	10	3	3		
<i>Navicula mutica</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	-	-		
<i>Navicula saxephila</i> Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-		
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	17	2	10		
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	2	-	-		
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RBS	2	-	1		
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	1		
<i>Stauroneis tenera</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	2	-	-		
海水生種合計					0	0	0		
淡水生種合計					0	0	0		
汽水生種合計					0	0	0		
淡水生種合計					2	0	2		
淡水生種合計					111	14	33		
珪藻化石数					113	14	33		

凡例

H.R. : 塩分濃度に対する適応性	pH : 水素イオン濃度に対する適応性	C.R. : 流水に対する適応性
Ogh - Meh : 淡水生種 - 汽水生種	al - bi : 真アルカリ性種	l - bi : 真止水性種
Ogh - ind : 黄泥不定性種	al - il : 良アルカリ性種	l - ph : 好止水性種
Ogh - hob : 黄泥難生性種	ind : pH不定性種	ind : 流水不定性種
Ogh - unk : 黄泥不明確	ac - il : 好酸性種	unk : 流水不明確
	unk : pH不明確	

環境指標種

- O : 沼澤湿地付着生種 P : 高層湿原指標種 (以上は安藤, 1990)
 S : 好汚濁性種 U : 適応性未定種 T : 好清水性種 (以上は Asai, K. & Watanabe, T. 1995)
 R : 陸生珪藻 (RA : A群, RB : B群, RI : 未区分陸生珪藻, 伊藤・堀内, 1991)

2) II区1トレント

結果を表3・図2に示す。試料番号9から少ないながらも100個体以上の珪藻化石が産出するが、試料番号22ではプレバラート1枚中14個体と少ない。また、化石が産出した試料の完形殻の出現率(以下、完形率)は20%で、化石の保存は悪い。産出種は、一般水域に生育する水生珪藻と、陸上のコケや土壤表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻とが、混在する。産出分類群数は、14属32種類で単調な組成を示す。

試料番号9は、水生珪藻では流水不定性(流水にも止水にも生育する種)の*Gomphonema parvulum*が約15%と多産し、好止水性種(止水域に生育する種)で沼澤湿地付着種群(安藤、1990)の*Cymbella subaequalis*, *Gomphonema gracile*、好酸性で好止水性種の*Eunotia bilinaris*, *Neidium ampliatum*, *Pinnularia stomatophora*, *P. sub-stomatophora*を伴う。陸生珪藻では、分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高いA群(伊藤・堀内、1991)の

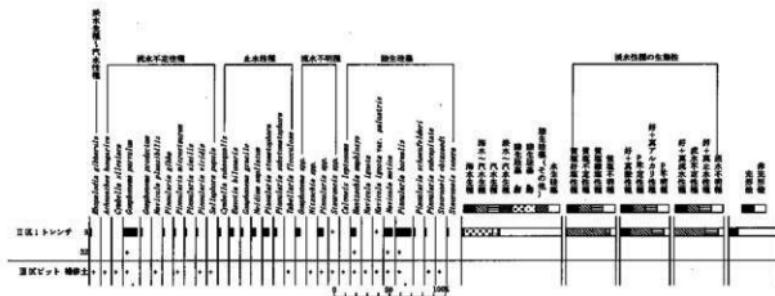


図2 遺構試料的主要珪藻化石群集

海水-汽水-淡水性種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基數、淡水性種の合計を基數として百分率で産出した。いずれも百個体以上に検出されて試料について示す。なお、●は1%未満、+は百個体以上の試料について検出した種類を示す。

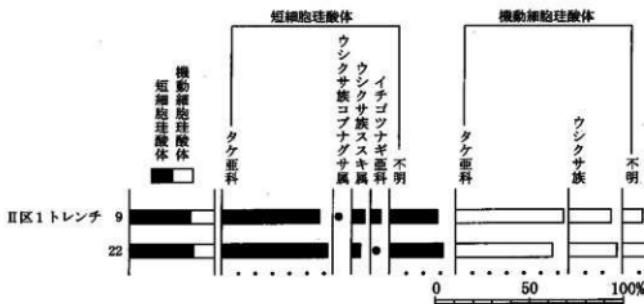


図3 遺構試料の植生珪酸体群集

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基數として百分率で産出した。なお、●は1%未満の種類を示す。

*Pinnularia borealis*が約15%と多産し、同じくA群の*Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*を伴う。

なお、珪藻化石の少なかった試料番号22は、陸生珪藻A群の *Pinnularia borealis*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica* などが産出する。

(4) 花粉分析

分析残渣は少なく、ほとんどが微細な炭化物からなり、花粉化石はまったく見られない。

(5) 植物珪酸体分析

結果を表4と図3に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されたものの、保存状態の悪いものが多く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。いずれの試料もタケア科の産出が目立ち、ウシクサ族（ススキ属などを含む）やイチゴツナギ亞科なども検出される。なお、イネ属などの栽培植物は、全く認められない。

(6) 土壤理化学分析

分析結果を、表5・図1に示す。

1) 粒径組成

粒径組成は、土壤の物理性および堆積物としての性質を判断するための重要な指標の一つである。今回の分析試料はいずれも粘土含量が45%以上と高く、土性はHC（重堆土）に区分され、粘土化の進行が顕著である。3点の試料間では、下位の試料ほど粘土含量が低く、ややシルト質である。

2) 腐植含量

土壤有機物、いわゆる腐植は土壤に供給された植物遺体が分解し、腐植物質といわれる高分子化合物として再合成されたものであるから、腐植含量は地表の植生環境の指標となりうる。また、累積土壤においては、過去の地表の確認に用いることができる（竹迫、1990）。

今回の分析試料は、いずれも10%前後の高い腐植含量であったが、淡色黒ボク土とされる試料番号29は上位・下位の試料番号27・35と比較して、腐植含量がやや低い傾向にある。

3) MI (Meranic index)

腐植にとって最も特徴的な波長域における、2波長の比である。本名・山本（1992）によれば、Pgによるス

表4 植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	II区1トレンド	
		9	22
イネ科葉部短細胞珪酸体			
タケア科		185	219
ウシクサ族コブナグサ属		3	-
ウシクサ族ススキ属		25	19
イチゴツナギ亞科		19	3
不明キビ属		66	87
不明ヒゲシバ属		4	3
不明ダンナク属		21	22
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
タケア科		79	66
ウシクサ族		31	33
不明		15	17
合計			
イネ科葉部短細胞珪酸体		323	353
イネ科葉身機動細胞珪酸体		125	116
総計		448	469

表5 土壤理化学分析結果

試料名	土色	腐植含量(%)	MI	粒径組成				
				粗砂(%)	細砂(%)	シルト(%)	粘土(%)	土性
II区1トレンド 27	10YRL7/1 黒	10.98	1.58	3.2	16.1	25.3	55.5	HC
29	10YRL7/1 黒	9.91	1.60	2.0	15.2	28.3	54.5	HC
35	10YRL7/1 黒	10.97	1.56	3.4	15.6	33.2	47.8	HC

注：(1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色板（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。

ロープが急峻に現れる450nmと520nmの吸光度比を用いて、A型腐植酸とP型腐植酸を明瞭に判別した。この値を、MIとして腐植の質的判定指標にしている。そこでは我国の火山灰を母材とした土壤の分析結果（ほとんどが表層土の結果）から、MI=1.70を境にそれ以下はすべてA型腐植酸で、それ以上はP型腐植酸に分類されている。また、数多くの分析結果から、MIが1.7~2.0の場合はほとんどがB型腐植酸であり、P型、Rp型のほとんどは2.0以上という区分が明瞭にできているとしている。

今回の分析試料は、いずれもMIが1.70以下であることから、A型腐植酸に区分され、腐植化度の高い腐植酸が生成している。3試料間では、淡色黒ボク土とされる試料番号29でややMIが高い傾向にあることから、他の試料と比較して腐植化の進行がやや低いと考えられる。ただし、MIは腐植の簡易分析法であることから、厳密な評価は難しい。

5. 考察

(1) 道路構築の構築年代

道路面西側の側溝では、舗装覆土の最下部にあたる20層（試料番号9）にHr-FPの軽石が認められる。後述のように、道路面構築以前の自然堆積層と思われる黒ボク土18層上～中部にHr-FPの降下層準があると考えられることから、側溝が構築される以前に軽石が降下し、側溝が構築された後に周囲の黒ボク土が流れ込んだか、乾燥などにより側溝壁が崩壊し側溝内に黒ボク土が混入したなどの可能性が想定される。いずれにしても、道路面西側の側溝は6世紀中葉以降に構築されたといえる。また、2層（試料番号1）に比較的粒径の大きいAs-Bの軽石が多く含まれていることから、As-Bは2層堆積時に降下したものと思われる。このことから、As-Bが降下した12世紀前葉には、この側溝の埋積はほぼ完了していたものと思われる。これより下位の試料に含まれるAs-Bの軽石は、植物の根や小動物により下方に拡散し、覆土中に混入したものであると考えられる。

側溝間の道路面では、3層・6層（試料番号14・15）のどちらにも微量のAs-B軽石と少量のHr-FPの軽石が認められたが、これより下位の黒ボク土層の8層に対比されると思われる18層中にHr-FPの軽石の降下層準が認められることから、3層および6層は再堆積あるいは人為的に搬入された黒ボク土である可能性がある。いずれにしても、Hr-FPが降下した6世紀中葉以降に、この道路面が構築されたといえる。

道路面東側の側溝では、最下部の20層（試料番号22）に微量のHr-FP軽石が認められ、その上位の33層（試料番号21）にはAs-C軽石とHr-FP軽石が認められる。後述のように、下位の18層の黒ボク土層中にそれぞれの軽石の降下層準があることから、側溝が構築された後に周囲の黒ボク土層から軽石が混入したと考えられ、その構築年代は6世紀中葉以降と考えられる。

(2) 道路側溝内の水域および周辺植生

側溝埋積物のうち、試料番号9では沼澤湿地付着生種群を含む止水性種が多産し、陸上の好気的環境に耐性のある陸生珪藻も約40%産出し、川などの流水域に生育する種類は全く産出しなかった。このことから、当時の道路面西側の側溝内は、灌水していた可能性がある。また、陸生珪藻も比較的多く産出したことから、側溝の周囲から風成の黒ボク土が流れ込んで埋積したと考えられる。このことは、好気的環境下では風化に弱い花粉化石が、まったく検出されなかったこととも調和する。

一方、道路面東側の側溝では、試料番号22で陸生珪藻が多い傾向が認められることから、西側の側溝ほど灌水はしておらず、側溝内は比較的乾いていた可能性がある。

また、当時の古植生については、植物珪酸体の産状から側溝の周囲にはタケ亜科をはじめとして、ウシクサ族（スキ属などを含む）やイチゴツナギ亜科などのイネ科植物が生育していたことがうかがえる。また、検

出された種類の多くが比較的乾いた場所に生育するものであることから、側溝や道路の周囲は基本的に乾いていたと思われる。

なお、イネ属などの栽培植物が検出されなかった点を考慮すれば、道路の周囲の台地上に稻作地が存在した可能性は低い。なお、当時の種作については今後、遺跡周辺の低地も含めて空間的に調査することが望まれる。

県内のこれまでの花粉分析結果をみると、完新世にはコナラ亜属が卓越することが多く（宇野沢ほか、1988など）、ナラ類が卓越する森林が推定されているが、事例は少ない。本遺跡周辺には常緑台地を開拓する谷も多く、これらの低地の調査が進めば、当時の古環境もしだいに明らかになってくるものと思われる。

(3) 道路の補修に使用された土壤の由来

本地域の台地上に形成されている黒ボク土層やローム層、および低地の堆積物のこれまでの分析例はそれほど多くない。これまでのローム層の分析例では、赤城鹿沼軽石（Ag - KP：新井、1962）以上のローム層では斜方輝石を主体とするが、今回の黒ボク土よりもカンラン石と角閃石の量比がやや多い傾向がある。また、当社の分析例によると、酒沼川や巴川のような台地を開拓する谷内の堆積物では、概ね斜方輝石を主体とし、少量～微量の単斜輝石や不透明鉱物、角閃石を含む重鉱物組成を示すが、層準によっては黒雲母が比較的多く認められる。したがって、今回の補修土がローム層に由来するとは考えにくいが、黒ボク土と低地堆積物のどちらに由来するかについて、今回の鉱物分析結果のみからは明瞭ではない。

粒度分析は本試料については行っていないが、分析の過程でも1/4mm以上の砂分が黒ボク土よりも非常に多いことが観察された。さらに、シルトおよび粘土分も比較的多いため、非常に淘汰が悪いといえる。

さらに、珪藻分析では、陸生珪藻が多く、沼澤湿地付着生種群の一種を含む流水不定性種や止水性種などの水生珪藻も産出する。

以上のことにより、この補修土には、台地上の風成の黒ボク土に沼澤～湿地などで水成堆積した粘土や砂が混ざっている可能性がある。

(4) 黒ボク土の形成時期と成因

テフラ分析結果から、道路面東側の側溝の外側にあたる黒ボク土層では、試料番号27付近にAs - C、試料番号25・26付近にHr - FPの軽石がそれぞれ比較的多く認められた。層位による変化が明瞭にみられること、また、これらが濃集する層準では比較的粒径が大きめの軽石が認められることから、18層最下部にAs - C、18層上～中部にHr - FPの降下層準があると考えられる。よってAs - Cが降下した4世紀中葉に18層が形成しはじめ、Hr - FPが降下した6世紀中葉に18層上～中部が形成したと考えられる。これより下方、上方にもこれらの軽石が含まれているが、上方には、一旦堆積した軽石が再堆積することが考えられ、下方には、植物の根やミミズ、モグラなどの小動物により拡散したことが考えられる。

K - AhあるいはATの火山ガラスは、全ての分析試料中に拡散して含まれていることから、両テフラとも18層・9層・10層の黒ボク土が形成する以前に降灰しており、18層・9層・10層が形成する過程で、周囲のローム層あるいはすでに形成していた黒ボク土から混入したものと思われる。したがって、9層および10層はK - Ah降灰以降すなわち約6300年前以降から、As - C降灰以前すなわち4世紀中葉以前に形成したものと考えられる。

色調の淡い9層の黒ボク土の成因について、母材や土壤の理化学性から検討すると、鉱物分析結果から微量認められた火山ガラスの組成でわずかな違いが認められたが、3試料の鉱物組成はよく類似する。したがって、3試料の黒ボク土の母材となった火山碎屑物の由来については、大きな違いはないと考えられる。

土壤理化学分析の腐植含量および腐植の質の判定では、淡色の黒ボク土とされる試料番号29で上下の試料と比較して腐植含量が低い傾向にあること、また腐植化度がやや低いことなどの特徴が認められた。腐植は土を

黒色に着色し、腐植化度が高いほど黒色を呈することから、本地点で確認された淡色の黒ボク土の色調は、腐植含量と腐植の発達度によるものと推察される。

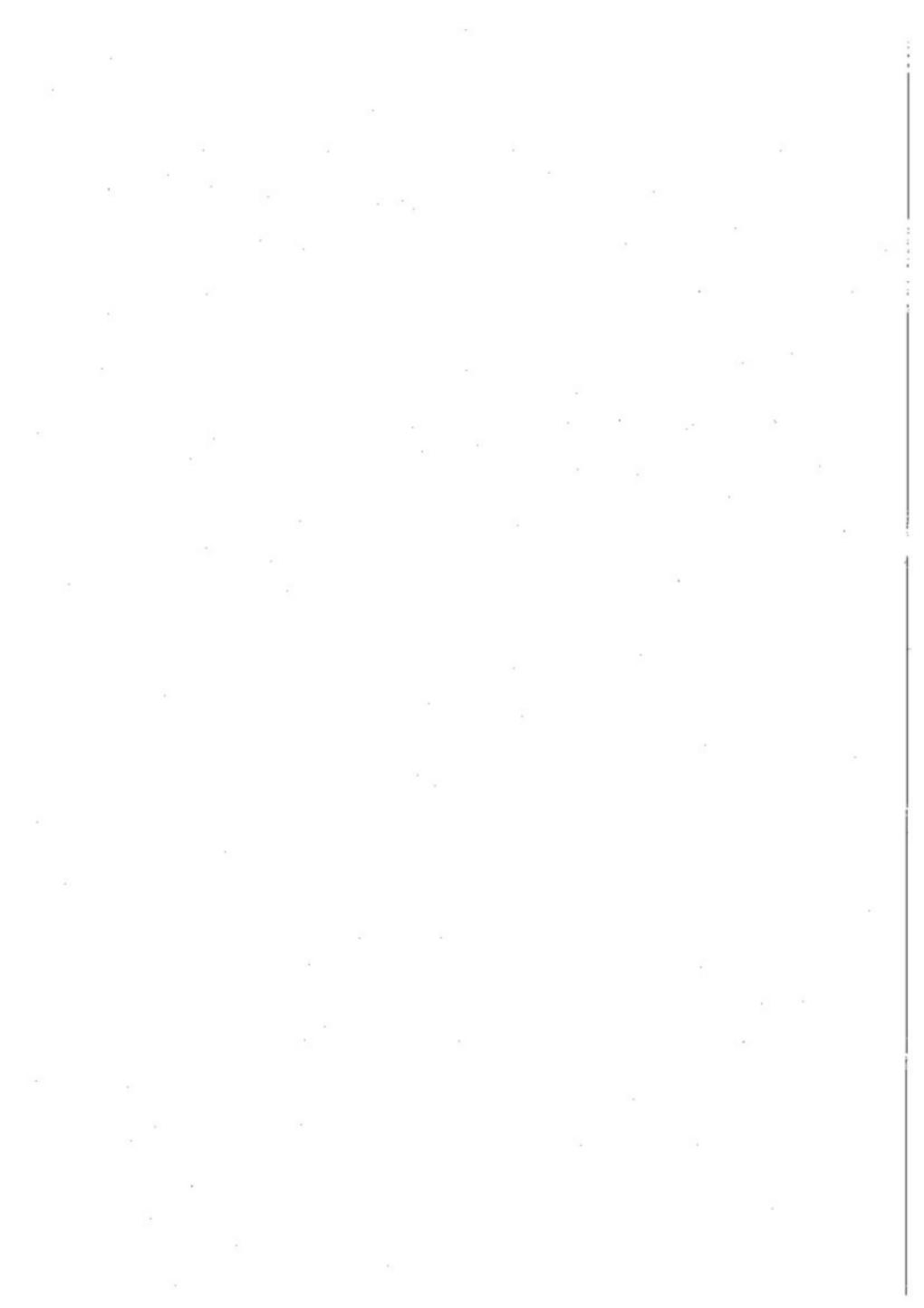
ここで、土壤の形成における腐植が集積する条件として、加藤（1983）や新井（1983）では主な要因として1) 植生、2) 気候（気温、降水量）、3) 母材の集積（特に堆積速度）と考えている。これらの要因に変化が起ることにより腐植の集積状況が変化し、土色が淡色化あるいは黒色化したりすると考えられる。この中で、母材の集積、特に堆積速度に関しては、粒径組成がひとつの目安となる。すなわち、粒径が大きい層準ほど碎屑物の供給速度、すなわち黒ボク土の形成速度は速いと考えられる。土壤の理化学分析結果では、粒径組成によりいずれの試料も粘土化の進行が顕著であることが判明した。これは、本遺跡が関東地方で完新世に活動した富士火山や浅間火山および榛名火山などから比較的遠いことや、テフラの分布主軸からやや外れていることなどにより、粒径が比較的大きいテフラの一次降下物が少なく、黒ボク土を形成した火山碎屑物が細粒であったためと考えられる。ただし、その中でも下位の試料ほど粘土含量が低く、ややシルト質な傾向が認められる。黒ボク土の母材と形成環境がほぼ同じであったと考えるならば、土壤化（風化）は一般に母材の粒度と形成後の時間経過によると考えられる。したがって、形成後の経過時間の長い下位の試料の方がややシルト質な傾向にあることは、3試料の中では下位の試料ほど供給された母材の粒径が大きかった可能性がある。すなわち、下位の試料ほど母材の供給速度が速いと考えれば、3試料の中で試料番号29の9層形成時に特に変化があったとは考えにくい。したがって、現時点では本地点の黒ボク土層における腐植含量の違いは、母材の集積よりも植生や気候によるところが大きいと考えられる。

今後は、植物珪酸体分析により黒ボク土形成時の台地上の植生を調べること、放射性炭素年代測定により黒ボク土の形成年代を調べることなどが望まれる。また、黒ボク土の堆積構造観察により、母材の集積、植生（例えば植物根の状況）、気候（例えば凍結融解の痕跡）などの情報が得られるかもしれない。

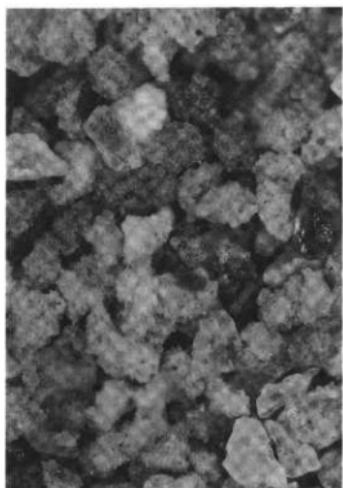
引用文献

- 安藤一男（1990）淡水底珪藻による環境指標群の設定と古環境復元への応用。東北地理、42, p.73-88。
- 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層。考古学ジャーナル、179, p.41-52。
- 荒巻重雄（1968）浅間火山の地質。地団研専報、14, p.1-45。
- Asai, K. and Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p. 35-47.
- 土壤標準分析・測定法委員会編（1986）『土壤標準分析・測定法』, 354p., 博友社。
- 本名俊正・山本定博（1992）腐植の簡易分析法。日本土壤肥料学会編『土壤構成成分解析法』, p. 7-35, 博友社。
- 伊藤良永・堀内誠司（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用。珪藻学会誌、6, p. 23-45。
- 関東ローム研究グループ（1966）関東ローム—その起源と性状—. 378p., 築地書館。
- 近藤錦三・佐瀬謙（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用。第四紀研究、25, p. 31-64。
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaeae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.

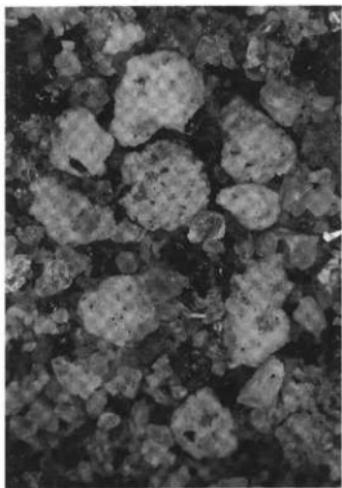
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Süßwasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26, p. 1–353., BERLIN-STUTTGART.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰－始良 Tn 火山灰の発見とその意義－. 科学, 46, p. 339–347.
- 町田 洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, p. 143–163.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス, 276p., 東京大学出版会.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色板.
- 大羽 格・本名俊正 (1984) 黒ボク土判定のための腐植の分析法. 土肥誌, 55, p. 55–61.
- ペドロジスト懇談会 (1984) 野外土性の判定. ペドロジスト懇談会編「土壤調査ハンドブック」, p. 39–40, 博友社.
- 坂本 亨・相原輝雄・野間泰二 (1981) 石岡地域の地質. 地域地質研究報告. (5万分の1図幅), 地質調査所, 50p.
- 早田 鮎 (1989) 6世紀における桜島火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p. 297–312.
- 宇野沢 昭・磯部一洋・遠藤秀典・田口操作・永井 茂・石井武政・相原輝雄・岡 重文 (1988) 特殊地質図 (23-2) 球磨研究園都市および周辺地域の環境地質図 139p., 地質調査所.
- Vos, P.C. & de Wolf, H. (1993) Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in costal wetlands; methodological aspects. Hydrobiologia, 269/270, p. 285–296.



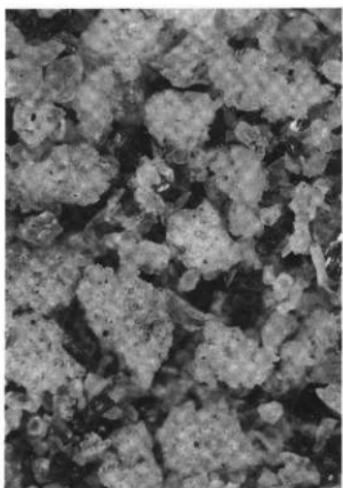
図版1 軽石・砂分の状況



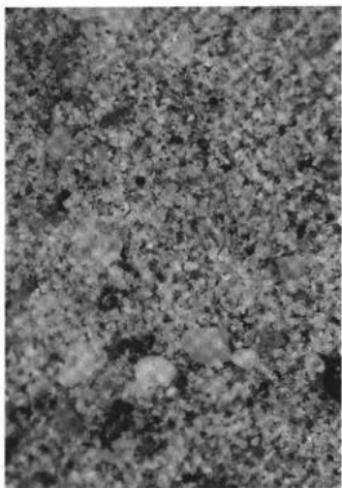
1. As-Bの軽石 (II区1トレンチ; 1)



2. Hr-FPの軽石 (II区1トレンチ; 15)



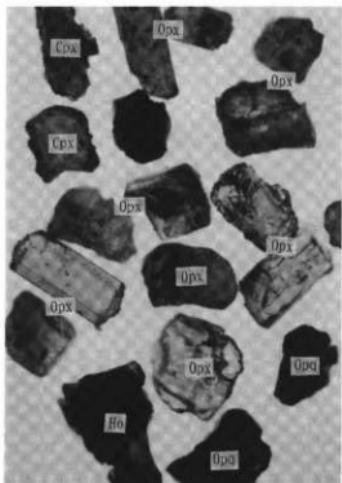
3. As-Cの軽石 (II区1トレンチ; 21)



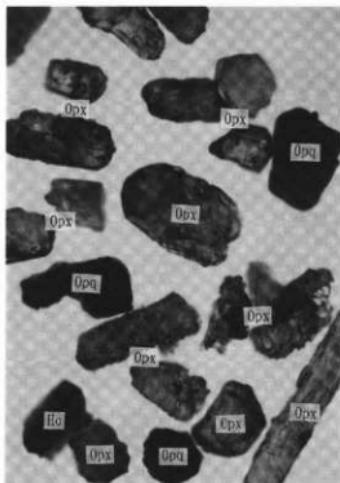
4. 砂分の状況 (II区1トレンチ; 19)

— 0.5mm — 1mm — 1mm —
(1) (2) (3, 4)

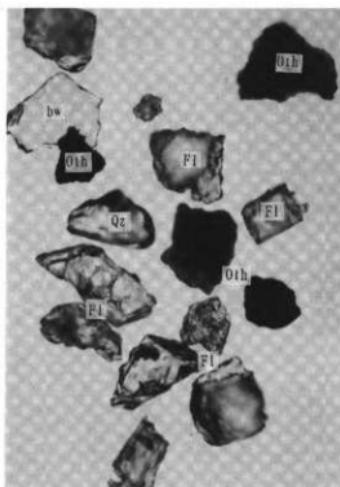
図版2 重鉱物・軽鉱物の状況



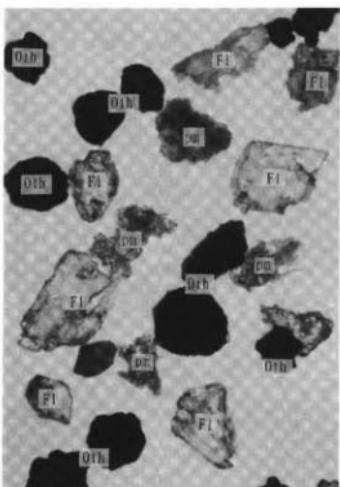
1. 重鉱物（III区ピット補修土）



2. 重鉱物（II区1トレンチ；27）



3. 軽鉱物（III区ピット補修土）



4. 軽鉱物（II区1トレンチ；27）

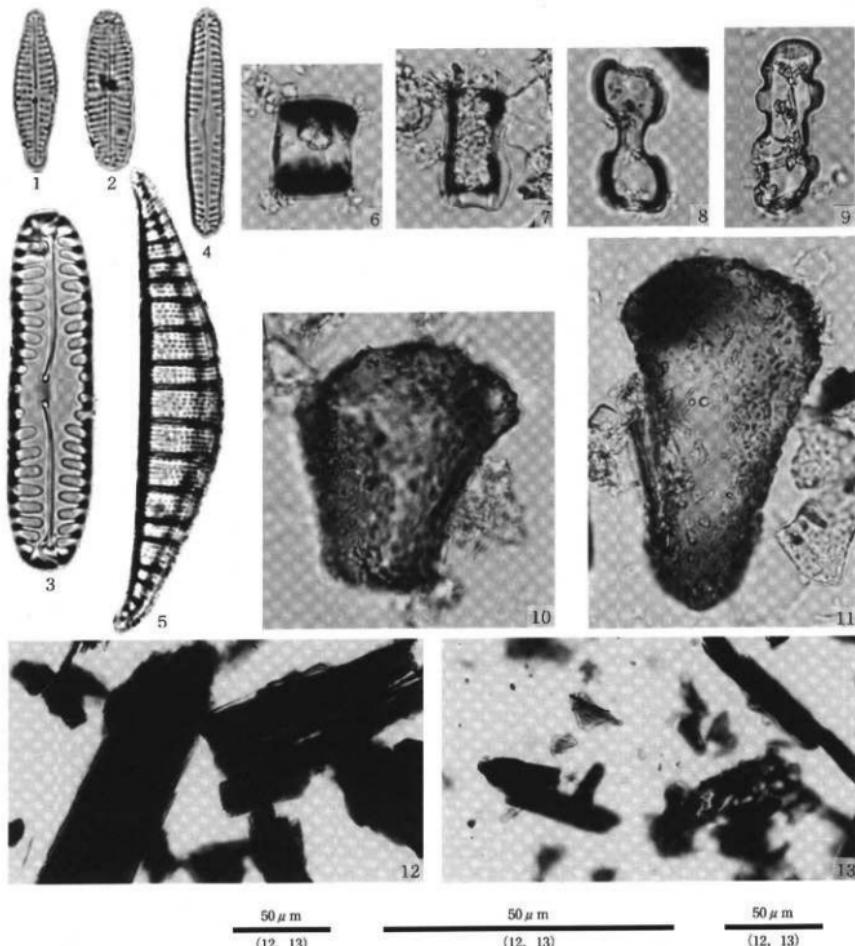
Opx : 斜方輝石。 Cpx : 単斜輝石。 Ho : 角閃石。 Opq : 不透明鉱物。

Qz : 石英。 Fl : 長石。 bw : パブル型火山ガラス。

pm : 軽石型火山ガラス。 Oth : その他。

0.5 mm

図版3 珪藻化石・植物珪酸体・花粉分析プレバラートの状況



1. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (III区ピット; 補修土)
3. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (II区1トレンチ; 9)
5. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O.Muller (II区1トレンチ; 9)
7. コブナグサ属短細胞珪酸体 (9)
9. イチゴツナギ亞科短細胞珪酸体 (9)
11. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (22)
13. 花粉分析プレバラート内の状況写真 (II区1トレンチ; 22)
2. *Navicula ignota* Krasske (III区ピット; 補修土)
4. *Pinnularia subcapitata* Gregory (II区1トレンチ; 9)
6. タケア科短細胞珪酸体 (22)
8. ススキ属短細胞珪酸体 (9)
10. タケア科機動細胞珪酸体 (9)
12. 花粉分析プレバラート内の状況写真 (II区1トレンチ; 9)